熊本県文化財調査報告　第172集

蔵城遺跡

— 錦町迫地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う埋蔵文化財調査 —

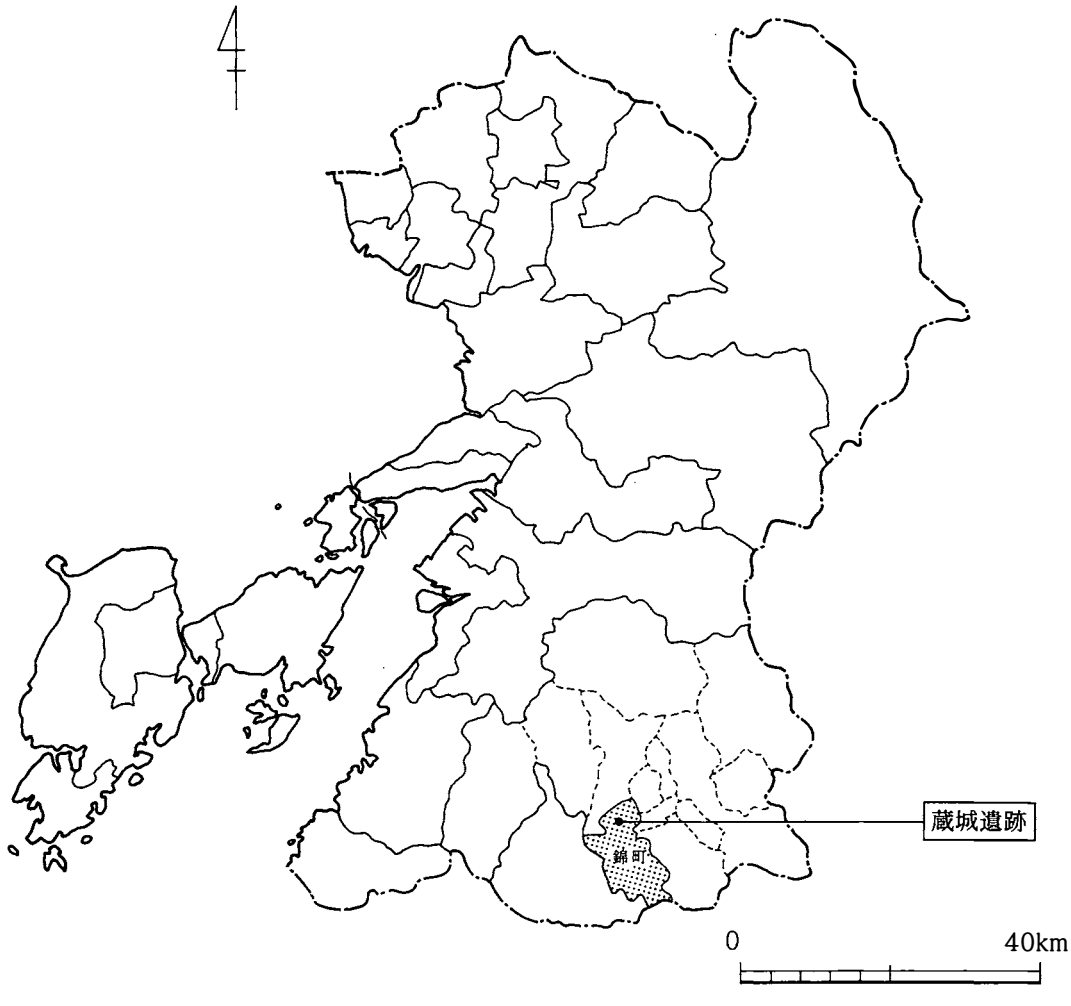
1999年3月

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第172集

蔵城遺跡（くらんじょう）

― 球磨郡錦町大字木上字蔵城所在の中世城跡及び近世墓群 ―



1999年3月
熊本県教育委員会

序　　文

熊本県は、阿蘇山、天草をはじめ豊かな自然が県下に数多く残されており、雄大な景観が各所で見られ、また、歴史的にも数多くの文化遺産が残されています。蔵城遺跡が所在する球磨盆地も日本三大急流の一つ球磨川の中流域に拡がる東西に長い盆地で四方を山で囲まれた美しい田園風景が拡がり、中世寺院、石塔群など歴史的景観も色濃く残す地域でもあります。これらを守り、後世に残していくためには、県民の方々の文化財に対する深い御理解と御協力をいただかなければなりません。

本書は、熊本県土木部による錦町迫地区急傾斜地崩壊対策事業に先行して行った蔵城遺跡の発掘調査報告書です。この蔵城遺跡は中世城跡として認識されていた遺跡ですが、調査の結果、中世の遺構のほか、縄文時代、古墳時代の遺物や近世墓群も確認され、多彩な様相をもつ遺跡であることがわかりました。

この報告書が、球磨盆地の各時代を語るうえで重要な資料となり、皆様方の文化財に対する御理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査の円滑な実施に、御理解と御協力をいただきました地元の方々、並びに関係諸機関に対して厚く御礼申し上げます。

平成１１年３月３１日

熊本県教育長　佐々木　正典

例　　言

1　本書は熊本県球磨郡錦町木上字蔵城に所在する蔵城遺跡の調査報告書である。

2　調査は錦町迫地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う事前調査として、熊本県土木部砂防課の依頼を受け、熊本県教育庁文化課が実施し、調査期間は平成８年２月～平成９年６月まで、平成９年１２月～平成１０年３月までの２期にわけて行った。整理・報告は平成１０年度に行った。

3　本書に使用した『周辺遺跡地図』は熊本県遺跡台帳を基に、『調査区配置図』は人吉土木事務所工務課から提供をうけたものを基に、『遺跡周辺地名図』は錦町文化財調査報告第１集「蔵城」を基に作成した。

4　現地調査に関する実測及び写真撮影並びに遺物の撮影は主に調査員で行った。ただし、遺跡地形測量並びに遺構断面図の一部は（有）埋蔵文化財サポートシステムに委託し、空中写真撮影は（有）東亜航空技研、（株）朝日航洋と（株）写測エンジニアリングに委託した。

5　遺物の実測は主として、矢野裕介、安達武敏、隈部香織、横山明代が行った。製図（トレース）は主に、隈部香織、児玉晶子、戸田紀美子、前川真由美、横山明代が行った。

6　本書の執筆は、主として矢野裕介がこれにあたり、一部（第２章第１節２遺物）は隈部香織が担当した。また、人骨の分析等（付論）は山口県豊浦郡豊北町立土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムに委託した。

7　本書の編集は熊本県教育庁文化課で行い、矢野裕介が担当した。

凡　　例

1　現地での実測図の縮尺は、地形測量図を２００分の１、集石を１０分の１、竪堀断面及び土塁断面を２０分の１、近世墓を１０分の１で行った。

2　遺構実測図及び遺構配置図、地形測量図の方位はすべて国土座標における座標北（G.N）を指す。

3　出土遺物の番号は遺物すべてに通し番号で付した。なお縮尺は、土器、石器、磁器を実寸トレース、３分の１縮尺、銅銭は実寸拓本を行った。

4　出土遺物の詳細な記述は、縄文土器を除き、『遺物観察表』として掲載した。

本文目次

第１章　調査の概要
第１節　調査に至る経緯及び調査組織　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
１　調査に至る経緯
２　調査組織
第２節　調査方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
１　調査区の設定
２　調査の方法
３　遺跡の基本層位
４　調査経過
第３節　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
１　遺跡の地理的環境
２　遺跡の歴史的環境
第２章　遺構と遺物
第１節　縄文時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
１　遺構
２　遺物
第２節　古墳時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
１　遺構
２　遺物
第３節　中世の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
１　遺構
２　遺物
第４節　近世の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
１　遺構
２　遺物
第３章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・93

（付論）熊本県球磨郡錦町蔵城遺跡出土の近世人骨・・・・・・・・・・・・・96
土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム　館長　松下孝幸

挿図目次

第１図　蔵城遺跡土層概念図・・・・・・・・・2
第２図　調査区配置図・・・・・・・・・・・・3
第３図　周辺遺跡地図・・・・・・・・・・・・8
第４図　遺跡周辺地名図・・・・・・・・・・10
第５図　集石（ＳＸ１０）位置図・・・・・・11
第６図　集石（ＳＸ１０）遺構実測図・・・・11
第７図　縄文土器実測図・・・・・・・・・・13
第８図　古墳時代土器包含層配置図・・・・・15
第９図　古墳時代土器実測図（１）・・・・・16
第10図　古墳時代土器実測図（２）・・・・・17
第11図　古墳時代土器実測図（３）・・・・・18
第12図　古墳時代土器実測図（４）・・・・・19
第13図　Ⅳ区ＳＤＯ６遺構断面図・・・・・・21
第14図　Ⅳ区出土遺物実測図（１）・・・・・22
第15図　Ⅳ区出土遺物実測図（２）・・・・・23
第16図　Ⅷ区ＳＤＯ１遺構断面図・・・・・・24
第17図　Ⅷ区ＳＤＯ２遺構断面図・・・・・・25
第18図　Ⅷ区ＳＤＯ３遺構断面図・・・・・・26
第19図　Ⅷ区出土遺物実測図・・・・・・・・27
第20図　南側土塁遺構断面図・・・・・・・・28
第21図　南側土塁出土遺物実測図・・・・・・28
第22図　中世遺構配置図（１）・・・・・・・29
第23図　Ⅶ区ＳＤＯ１遺構断面図・・・・・・31
第24図　Ⅶ区ＳＫＯ９遺構及び出土遺物実測図32
第25図　Ⅶ区出土遺物実測図（１）・・・・・32
第26図　Ⅶ区出土遺物実測図（２）・・・・・33
第27図　北側竪堀遺構断面図・・・・・・・・34
第28図　北側竪堀出土遺物実測図・・・・・・34
第29図　中世遺構配置図（２）・・・・・・・35
第30図　Ⅵ区ＳＤＯ１遺構断面図・・・・・・36
第31図　Ⅵ区出土遺物実測図（１）・・・・・37
第32図　Ⅵ区出土遺物実測図（２）・・・・・38
第33図　Ⅵ区ＳＸＯ３遺構実測図・・・・・・39
第34図　Ⅺ区ＳＤＯ１遺構断面図・・・・・・39
第35図　Ⅻ区ＳＤＯ１、Ｏ２遺構断面図・・・40
第36図　Ⅺ、Ⅻ区出土遺物実測図・・・・・・40
第37図　中世遺構配置図（３）・・・・・・・41
第38図　Ⅴ区ＳＢＯ１遺構実測図・・・・・・43
第39図　Ⅴ区ＳＢＯ２遺構実測図・・・・・・44
第40図　Ⅴ区ＳＫＯ５遺構実測図・・・・・・46
第41図　Ⅴ区出土遺物実測図・・・・・・・・46
第42図　Ⅴ区遺構配置図・・・・・・・・・・47
第43図　Ⅸ、Ⅹ区出土遺物実測図・・・・・・48
第44図　中世遺構全体図・・・・・・・・・・49
第45図　陶磁器（染付）実測図・・・・・・・53
第46図　銅銭拓影図・・・・・・・・・・・・54
第47図　Ⅹ区遺構配置図・・・・・・・・・・62
第48図　１、３号墓実測図・・・・・・・・・64
第49図　４、５号墓実測図・・・・・・・・・65
第50図　３、４号墓石実測図・・・・・・・・66
第51図　６、７、８号墓標実測図・・・・・・67
第52図　６、７、８号墓石及び台座実測図・・68
第53図　６号墓壙実測図・・・・・・・・・・69
第54図　１１、１６号台座実測図・・・・・・70
第55図　１３、１７号墓実測図・・・・・・・71
第56図　１９、２６号墓実測図・・・・・・・72
第57図　２１号墓実測図・・・・・・・・・・73
第58図　２０、２２号墓実測図・・・・・・・75
第59図　２１、２２、２３、２４、２５号・・76
墓石実測図
第60図　２７、２８号墓実測図・・・・・・・78
第61図　２９、３１号墓実測図・・・・・・・79
第62図　３０、３４号墓実測図・・・・・・・80
第63図　３２、３５号墓実測図・・・・・・・82
第64図　３３、３６号墓実測図・・・・・・・83
第65図　３７、３９号墓実測図・・・・・・・84
第66図　Ⅹ区出土遺物（近世）実測図（１）・86
第67図　Ⅹ区出土遺物（近世）実測図（２）・87
第68図　Ⅹ区出土遺物（近世）実測図（３）・88
第69図　Ⅹ区出土遺物（近世）実測図（４）・89

表目次

第１表　周辺遺跡地名表・・・・・・・・・・・9
第２表　古墳時代土器観察表・・・・・・・・・20
第３表　Ⅳ区ＳＤＯ６土層観察表・・・・・・21
第４表　Ⅷ区ＳＤＯ１土層観察表・・・・・・24
第５表　Ⅷ区ＳＤＯ２土層観察表・・・・・・25
第６表　Ⅷ区ＳＤＯ３土層観察表・・・・・・26
第７表　南側土塁土層観察表・・・・・・・・28
第８表　Ⅶ区ＳＤＯ１土層観察表・・・・・・31
第９表　Ⅵ区ＳＤＯ１土層観察表・・・・・・36
第10表　Ⅺ区ＳＤＯ１土層観察表・・・・・・39
第11表　Ⅴ区ＳＢＯ１ピット計測表・・・・・43
第12表　Ⅴ区ＳＢＯ２ピット計測表・・・・・44
第13表　Ⅴ区ＳＸＯ３ピット計測表・・・・・45
第14表　Ⅴ区ＳＸＯ４ピット計測表・・・・・45
第15表　土師質土器法量表・・・・・・・・・51
第16表　中世遺物観察表（1）・・・・・・・55
第17表　中世遺物観察表（2）・・・・・・・56
第18表　中世遺物観察表（3）・・・・・・・57
第19表　中世遺物観察表（4）・・・・・・・58
第20表　中世遺物観察表（5）・・・・・・・59
第21表　中世遺物観察表（6）・・・・・・・60
第22表　中国産染付一覧表・・・・・・・・・61
第23表　銅銭一覧表・・・・・・・・・・・・61
第24表　Ｘ区出土遺物観察表（1）・・・・・90
第25表　Ｘ区出土遺物観察表（2）・・・・・91
第26表　Ｘ区出土遺物観察表（3）・・・・・92

図版目次

図版１　遺跡遠景
図版２　丘陵全景
図版３　Ⅳ区ＳＤＯ６
図版４　Ⅳ区ＳＤＯ６底
図版５　Ⅴ区全景
図版６　Ⅴ区ＳＢＯ１
図版７　Ⅵ区ＳＤＯ１
図版８　Ⅵ区ＳＤＯ１遺物集中箇所
図版９　Ⅶ区ＳＤＯ１
図版10　Ⅷ区ＳＤＯ１
図版11　南側土塁
図版12　北側竪堀
図版13　Ｘ区全景
図版14　３号墓標
図版15　４号墓標
図版16　６、７、８号墓標
図版17　２２号墓標
図版18　３２号墓標
図版19　３７、３９号墓標
図版20　１号墓壙
図版21　５号墓壙
図版22　１３号墓壙
図版23　１９号墓壙
図版24　２９号墓壙
図版25　３２号墓壙
図版26　縄文時代の石器
図版27　古墳時代土器
図版28　Ｘ区出土陶磁器
図版29　Ｘ区　墓壙出土青銅製品
図版30　Ｘ区　墓壙出土角釘

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯及び調査組織

１　調査に至る経緯

蔵城丘陵の利用及び保全処置を目的とした「錦町迫地区特定利用斜面保全事業」により丘陵の削平並びに公園化及び防護壁の設置工事が錦町と県の共同事業として行われることとなった。この事業のうち防護壁の設置は、「錦町迫地区急傾斜地崩壊対策事業」のもと県土木部が担当することとなった。

この丘陵は「蔵城」という字が示すとおり中世の城跡があったという伝承を残す丘陵として地元でも知られていた。平成２年に錦町教育委員会が発掘調査を行っており、丘陵東側の高台において掘立柱建物跡３棟、土塁などの遺構並びに中世の遺物が確認されていた。このように丘陵全域が中世の城跡という周知の埋蔵文化財包蔵地であったため、県土木部の依頼を受け、県文化課が発掘調査を行う運びとなった。

今回の調査では、町教委が調査を行った東側高台を除く全域を対象として調査を行なった。

２　調査組織

（１）現地調査

（平成７年度）

調査主体　　熊本県教育委員会

調査責任者　桑山裕好（文化課長）

調査総括　　松本健郎（文化財調査第２係長）

調査担当　　矢野裕介（学芸員）　中村幸弘（学芸員）

（平成８年度）

調査主体　　熊本県教育委員会

調査責任者　桑山裕好（文化課長）

調査総括　　松本健郎（文化財調査第２係長）

調査担当　　矢野裕介（学芸員）　阿南亨（嘱託）　岩崎秀幸（嘱託）

（平成９年度）

調査主体　　熊本県教育委員会

調査責任者　豊田貞二（文化課長）

調査総括　　島津義昭（文化財調査第２係長）

調査担当　　矢野裕介（学芸員）　山城敏昭（文化財保護主事）　前川真由美（嘱託）　長尾彰心（嘱託）

（２）整理・報告書作成

（平成１０年度）

整理主体　　熊本県教育委員会

整理責任者　豊田貞二（文化課長）

整理総括　　島津義昭（課長補佐）

整理担当　　矢野裕介（学芸員）　隈部香織（嘱託）

なお、現地調査において御協力及び御指導、御助言をいただいた方々、並びに報告書作成において御協力、

御指導、御助言をいただいた方々に感謝の意を表し、御芳名を以下に記す。

（調査）　鶴嶋俊彦（人吉市教育委員会）　松舟博満（日本考古学協会員）　工藤敬一（熊本大学教授）
出合宏光（相良村教育委員会）　錦町文化財保護委員各位　蔵城遺跡発掘調査作業員各位

（整理）　和田好史（人吉市教育委員会）　大橋康二（佐賀県教育委員会）
県文化財収蔵庫蔵城遺跡整理作業員各位

（順不同・敬称略）

第２節　調査方法と経過

１　調査区の設定

本調査に先立つ平成３年の錦町教育委員会の調査により、土塁を伴う中世の山城であることが確認されたことを受け、本調査においても中世の山城の解明を重視する調査を行った。調査区の設定では、現状の平坦部が中世城跡の「曲輪」の可能性があることを考え、平坦部に主眼を置いた調査区を設定した。調査区の名称については、平成３年の調査に合わせて、平坦部についてはⅠ、Ⅱ、Ⅲ区に続くⅣ～Ⅻ区を設定し、それ以外に「南側土塁」、「北側竪掘」の調査区を設定した。

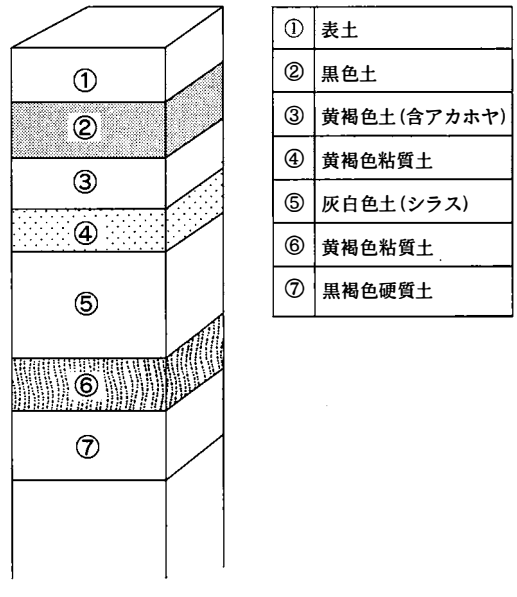
２　調査の方法

調査は調査区ごとに表土剥ぎから完掘までを順次仕上げていく方法を採用した。ただし、天候に左右されることが多く、２つ以上の調査区を同時並行で進行させることも多分にあった。

遺跡は後世の開削の影響を受け、調査区のほとんどの箇所で包含層が削られている状況が確認された。縄文時代の調査は、集石が１基確認されたものの遺物のほとんどが表採あるいは中世遺構埋土出土のものだったため、遺物採集に終わった。また、調査の過程で、古墳時代の包含層がⅣ、Ⅵ、Ⅶ区で削平を免れた箇所に一部残っていることが確認されたが、その箇所が谷地形であったため精緻な包含層調査は行わず、一括資料としての遺物の取り上げのみにとどまった。中世の包含層の大部分も削平を受けており、中世城跡の調査を進行していく上で極めて困難な状況にあった。表土を剥いだ時点で包含層が消失している調査区がほとんどで、遺構検出に主眼をおいた調査を行った。また、中世の調査では丘陵全体が工事対象になっていたため、中世の山城という遺跡の性格から全面調査が必要であったが、事業自体が砂防事業も兼ねており、緊急性を有していたこととシラス丘陵のため地盤が脆いうえに丘陵裾部に隣接して民家が存在していたことから、斜面部の調査は地形測量のみに終わった。近世墓の調査では残存状況が比較的良好であったため墓標、墓壙と綿密な調査を行った。

３　遺跡の基本層位

先述したように、調査地全域において開削あるいは崩落の影響により、基本層位が判別できる箇所が谷部を除き認められなかった。ここでは、各調査区で部分的に確認できた層をつなぐといった形で遺跡の基本層位としたい。



第1図　蔵城遺跡土層概念図

G.N
I区
II区
III区
IV区
V区
VI区
VII区
VIII区
IX区
X区
XI区
XII区
北側堅堀
南側土塁
県道33号線
(人吉～水上線)
50m
0
150
140
130

第2図　調査区配置図

表土直下に黒色土層が谷部において確認できた。上部からの何らかの圧力により締まってはいたが、一般的にはフカフカした土壌で「黒ボク土」といわれる火山灰層である。この黒色土は高原台地全体の表層を覆っている層で、当遺跡では主として古墳時代遺物の包含層であった。また、その上部に、シラス混じりの黒色土が一部確認されているが、これは中世遺物の包含層であった。次に「アカホヤ」と呼ばれる黄褐色土層が堆積していた。谷部のため比較的厚く堆積しており、その下層まで確認できなかった。しかし、Ⅳ区において土砂の切り落としによりその下層が確認されている。黄褐色粘質土の堆積が薄く見られ、その後、シラス土に移行していくようである。シラス土の下には明黄褐色の粘性の強い土が堆積し、その下に黒褐色の岩盤に近い硬質土が見える。これらは南側斜面で確認された。

全体的に、シラス丘陵であるが故の土砂の流出が多々あったと思われ、当遺跡独自の層位を展開しているようである。

４　調査経過

蔵城遺跡の発掘調査は平成８年２月６日から平成８年３月２８日まで（平成７年度）、平成８年５月９日から平成９年３月３０日まで（平成８年度）、平成９年４月１４日から平成９年６月１１日まで（平成９年度第１次）、平成９年１２月１日から平成１０年３月２７日まで（平成９年度第２次）の期間に行い、整理報告は平成１０年度に行った。

発掘調査の進行は、平成７年度にⅣ区、平成８年度にⅣ、Ⅴ、Ⅵ、「南側土塁」、Ⅶ、「北側竪堀」、Ⅷ区、平成９年度第１次にⅦ、Ⅷ区、平成９年度第２次にⅨ、Ⅹ、Ⅺ、Ⅻ区の調査を行った。平成８年８月まで民家が調査地内に所在していたことや廃土場の設定、危険防止への配慮などの問題から調査区の重複や調査の一時中断といった措置を講じざるを得なかった。また、丘陵が急傾斜のため重機による掘削が難しく、重機による表土剥ぎはⅦ、Ⅷ区の調査区においてのみ行われ、それ以外の調査区においては人力による表土剥ぎに多大の時間を要した。遺構の掘削においては、竪堀のような大型遺構や切岸の確認トレンチなど大掛かりな掘削が多く、それらの掘削に多大な時間と労力を要した。

これら各調査区の調査の進行状況を調査日誌妙録として以下に掲げる。

（調査日誌妙録）

（平成７年度）

平成８年２月６日　Ⅳ区調査開始（樹木伐採、表土剥ぎ）
３月28日　Ⅳ区調査中断（平成７年度調査終了）

（平成８年度）

平成８年５月９日　Ⅳ区調査再開（平成８年度調査開始）
５月31日　Ⅳ区ＳＤＯ６掘削開始（至８月21日）
６月10日　Ⅴ区樹木伐採・表土剥ぎ
８月20日　Ⅴ区調査開始
９月11日　Ⅴ区遺構検出開始
10月３日　Ⅴ区ＳＢＯ１検出
10月14日　Ⅴ区ＳＢＯ２検出
10月15日　Ⅴ区ＳＸＯ３、Ｏ４検出
10月16日　Ⅵ区表土剥ぎ
10月24日　南側土塁土層確認開始（至10月29日）
10月29日　Ⅵ区ＳＤＯ１掘削開始（至２月４日）
11月12日　Ⅵ区古墳時代包含層掘削開始（至11月22日）

12月２日　南側土塁調査開始（至１月27日）
12月13日　Ⅳ区古墳時代包含層調査開始（至12月26日）
平成９年１月７日　Ⅳ区ＳＤ０６ほか調査再開（至２月10日）
２月５日　北側竪堀トレンチ調査開始
２月17日　Ⅶ区ＳＤ０１調査開始（至３月26日）
３月４日　Ⅷ区ＳＤ０１、０２調査開始（至６月６日）
３月15日　現地説明会（一般公開）
３月17日　Ⅶ区ほか遺構調査開始
３月30日　Ⅷ区ＳＤ０１、０２調査中断（平成８年度調査終了）
（平成９年度）
平成９年４月14日　Ⅷ区ＳＤ０１、０２調査開始（平成９年度第１次調査開始）
６月６日　Ⅶ、Ⅷ区調査終了
６月７日　安全措置（至６月11日）（平成９年度第１次調査終了）
12月１日　Ⅸ、Ⅹ、Ⅺ、Ⅻ区樹木伐採（至１２月２日）（平成９年度第２次調査開始）
12月３日　トレンチ調査開始（至１月19日）
平成10年１月６日　Ⅺ区調査開始（至１月27日）
１月20日　Ⅹ区調査開始
１月28日　Ⅻ区調査開始
２月９日　Ⅹ区墓壙掘削開始
３月27日　蔵城遺跡発掘調査終了

第３節　遺跡の位置と環境

１　遺跡の地理的環境

１７００ｍ級の山々を有する九州山地の中程に位置する球磨盆地は、西流する球磨川中流域に拡がる東西に長い盆地である。日本三大急流に数えられる球磨川もこの球磨盆地では流れが緩やかになり、肥沃な土壌を形成している。地形的には球磨川を挟んだ北と南とではその様相を異にする。球磨川南岸には広大な低段丘が拡がるのに対して、北岸は「高原台地」という約７～８万年前の阿蘇山噴火の火砕流により形成された熔結凝灰岩と入戸火砕流による堆積物によって発達した小起伏を有する台地が拡がっている。

遺跡は球磨盆地のほぼ中央部、球磨川北岸の独立丘陵上に位置する。北に拡がる高原台地の小起伏のちょうど末端となる。そのため、丘陵最頂部から南への眺めは、球磨川一帯の平野部が一望できる。また、それから西には球磨川と川辺川の合流地点があり、冬期にはよく濃霧が発生する。

この丘陵は東西に長く、東西幅１８０ｍ程で、高さ３０ｍ程の低丘陵である。西側と東側に高台を有しており、中央部は窪地になっている。２万７千年前に堆積したとされるシラスが、丘陵全体を覆うため、地盤は比較的脆い。そのため斜面の傾斜は急勾配で、土砂の流失によりほとんどの箇所において表土直下にシラス土が見られる。

２　遺跡の歴史的環境

球磨盆地には古くは旧石器時代から新しくは相良氏統治下の江戸時代に至るまで数多くの遺跡・史跡が見

られる。また、開発の遅れにより古い景観を色濃く残す地域でもある。よって、新たに遺跡が発見される可能性が非常に高い地域とも言える。

ここでは現在までの成果を概観し、球磨盆地における各時代の様相を見ることにする。

（1）旧石器時代

現在、球磨盆地では表採資料も含め２０数カ所で旧石器が確認されている。九州縦貫道関連の発掘調査により層位的に遺物が捉えられ、旧石器文化を考えるうえで大きな成果が上がった。約２万２千年前の堆積とされる姶良Ｔｎ火山灰層を鍵層とし、その下層の石器群を有する人吉市血気ヶ峯遺跡、山江村狸谷遺跡、その上層の石器群としては、人吉市白鳥平遺跡、天道ヶ尾遺跡、山江村大丸・藤ノ迫遺跡などで確認されている。

最近では、湯前町潮山遺跡、クノ原遺跡の調査があり、球磨盆地における旧石器文化の様相が徐々にではあるが明らかにされつつある。残念ながら、当遺跡では旧石器は確認されなかった。

（2）縄文時代

土器の出現によって位置づけられる縄文時代の草創期の遺跡として、隆起線文土器が出土した多良木町里城遺跡、狸谷遺跡、爪形文土器が出土した白鳥平遺跡がある。狸谷遺跡では土器に細刃器（旧石器）が共伴していたのに対し、白鳥平遺跡では石鏃が伴っており、狩猟形態が変化していく様をよく示している。

次の早期になると、遺跡の数も若干増える。土器の様相も変わり、押型文土器、貝殻円筒形土器、塞ノ神式土器、手向山式土器などが盛行する。狸谷遺跡では押型文土器を伴う竪穴住居、石組炉、人吉市村山遺跡群では数種類の土器に伴い集石、炉跡などの遺構も見つかっている。また、大丸・藤ノ迫遺跡では塞ノ神式土器に伴い、鹿児島系統の土器も出土しており興味深い。また、球磨村大瀬洞穴、高沢洞穴遺跡では鹿、猪などの獣骨のほかアサリ、ハマグリの貝殻も出土しており、当時の人々の食性を知る上で貴重な遺跡もある。

前期の遺跡としては、人吉市鼓ヶ峰遺跡、八峰遺跡、湯前町米山遺跡がある。鼓ヶ峰遺跡では曽畑式土器、船元式土器が出土している。また八峰遺跡からは轟式土器に伴うとされる玦状耳飾りが採取されている。しかし、遺物の出土点数も少なく、その様相は明らかにされていない。

中期も前期と同様にその様相は明らかにされていない。人吉市射場ノ本遺跡からは並木式土器、鼓ヶ峰遺跡からは船元式土器や底部に鯨の脊椎骨の圧痕のついた土器、米山遺跡からは阿高系土器が出土しているが、主要遺跡とは言えない状況である。

後晩期の遺跡では、調査例も増え、まとまった資料も出土している。後期初頭には鼓ヶ峰遺跡、米山遺跡から南福寺式土器や出水式土器が多く出土した。また天道ヶ尾遺跡からは西平式土器が確認されている。後期から晩期にかけての遺跡としては、人吉市中堂遺跡がある。辛川式土器、三万田式土器、天城式土器に続いて、古閑式土器、黒川式土器の時期まで集落が営まれた遺跡である。打製石斧、十字形石器、円盤状石器の他、長崎翡翠製の玉類、佐賀県腰岳産の黒曜石といった興味深い資料も出土している。この他、黒川式土器単純期の人吉市アンモン山遺跡、七地遺跡、錦町大原天子遺跡がある。晩期末の遺跡の調査例はないが、相良村中学校校庭、多良木町思川で夜臼式土器の深鉢形土器が確認されている。

（3）弥生時代

前期の様相はその頃の遺跡が確認されていないことから明らかにされていない。

中期になると、人吉市荒毛遺跡や多良木町大久保台地で中期初頭の城ノ越式土器、免田町本目遺跡では亀ノ甲式土器がそれぞれ確認されている。しかし、これらの土器は採集されたもので中期初頭の様相を知ることは難しい。本格的な調査が行われた弥生時代中期の遺跡として人吉市赤池中通遺跡がある。中期後半に盛行する黒髪式土器に伴う竪穴住居跡が検出されている。

後期になると、遺跡の数も多くなる。免田町本目遺跡、市房隠遺跡、人吉市荒毛遺跡、大丸藤ノ迫遺跡、

錦町夏女遺跡がある。これらの遺跡は直弧文長頸壺で代表される免田式土器を伴うことを特徴としている。大丸藤ノ迫遺跡では竪穴住居１０基、荒毛遺跡ではＶ字溝が確認されている。また、夏女遺跡では古墳時代前期までの集落跡が検出されたが、銅鏡２面、銅釧といった青銅製品も出土している。

（４）古墳時代

前期には南九州特有の地下式板石積石室墓という墓制が採用される。人吉市荒毛遺跡、深田村新深田遺跡群、免田町求目遺跡で確認されている。

中期の古墳では、球磨盆地では唯一前方後円墳で構成される錦町亀塚古墳群がある。現在１、２号墳の２基が残っている。２号墳のほうはやや帆立貝式の様相を呈している。

後期に入ると、盆地中央の球磨川南岸の低段丘上に大型の円墳が造立される。錦町四塚古墳群、免田町鬼ノ釜古墳、才園古墳群、多良木町赤坂古墳がそれである。これに対し、球磨川北岸の台地上には「竪穴系横口式小石室」という石室形態をもった小墳丘の古墳群がある。山江村東浦古墳群、相良村瀬戸山古墳群などである。球磨盆地の東奥の山間には水上村千人塚古墳群といった群集墳も見られる。また、球磨川添いには多くの横穴墓が造られるが、なかでも人吉市大村横穴群、錦町京ヶ峰横穴群には菊池川流域の横穴墓に見られるような装飾が施されており、菊池川流域の文化との類似性が指摘される。人吉市天道ヶ尾遺跡では地下式横穴墓という南九州独自の墓制も見られ、後期の墓制は多種多様な様相を見せる。

集落跡としては、錦町夏女遺跡、人吉市赤池中通遺跡といった弥生時代後期から古墳時代初頭の集落跡や中期から後期にかけての相良村深水小園遺跡、須恵村沖松遺跡、後期の人吉市アンモン山遺跡などがある。

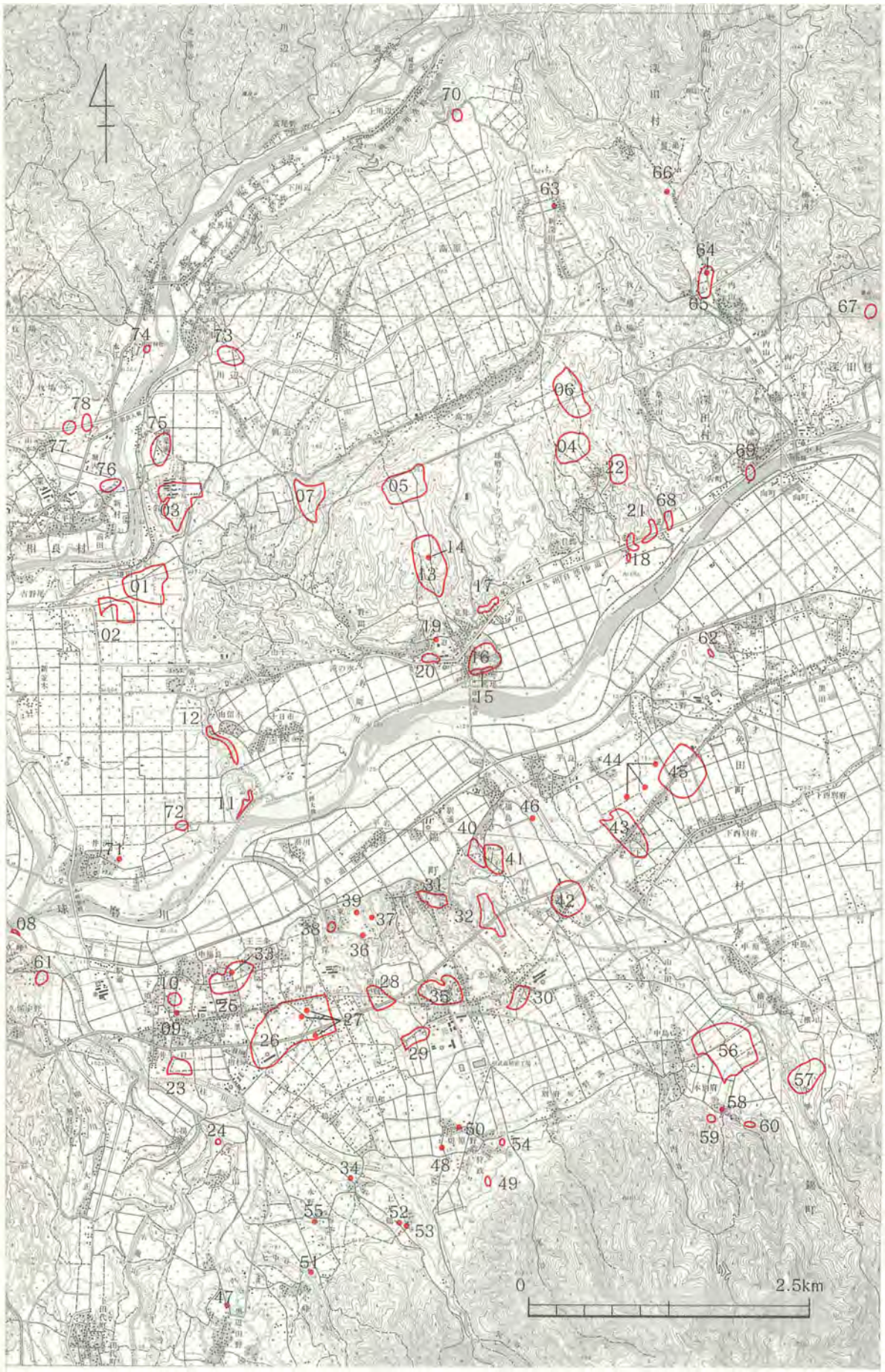
（５）歴史時代

奈良、平安時代になると、球磨川両岸の山沿いで須恵器の生産が開始される。そのうちの一つである錦町下り山窯跡群では９世紀の終わりから１１世紀まで須恵器生産が続く。これら須恵器窯という経済基盤の消長を理由に球磨郡衙の２度の移転が指摘されている。初めの郡衙は９世紀中頃の瓦や須恵器が出土した免田町前田遺跡周辺、続いて錦町下り山窯跡群を近くにもち、
１２世紀代の巨館跡が見つかった深田村灰塚遺跡に移行するというものである。今後の調査に期待したい。また、山江村大丸・藤ノ迫遺跡、須恵村沖松遺跡、人吉市天道ヶ尾遺跡で一般の集落跡が確認されている。

鎌倉時代には、『肥後国球磨郡図田帳』によれば球磨盆地は人吉庄・須恵庄・永吉庄に分かれており、この頃、相良氏が球磨へ下向してくる。深田村灰塚遺跡、多良木町蓮花寺跡、相良頼景館跡などの遺跡で発掘調査が行われている。

南北朝時代には球磨盆地では多良木町に本拠を置く上相良氏と人吉市に本拠を置く下相良氏による球磨支配をかけた抗争が激化する。その影響を受け、球磨川及びその支流に多くの中世城郭が出現する。これまでに山江村高城跡、山田城跡、人吉市矢黒城跡、荒狩倉城跡、錦町火操城跡、多良木町里の城跡が発掘調査されている。

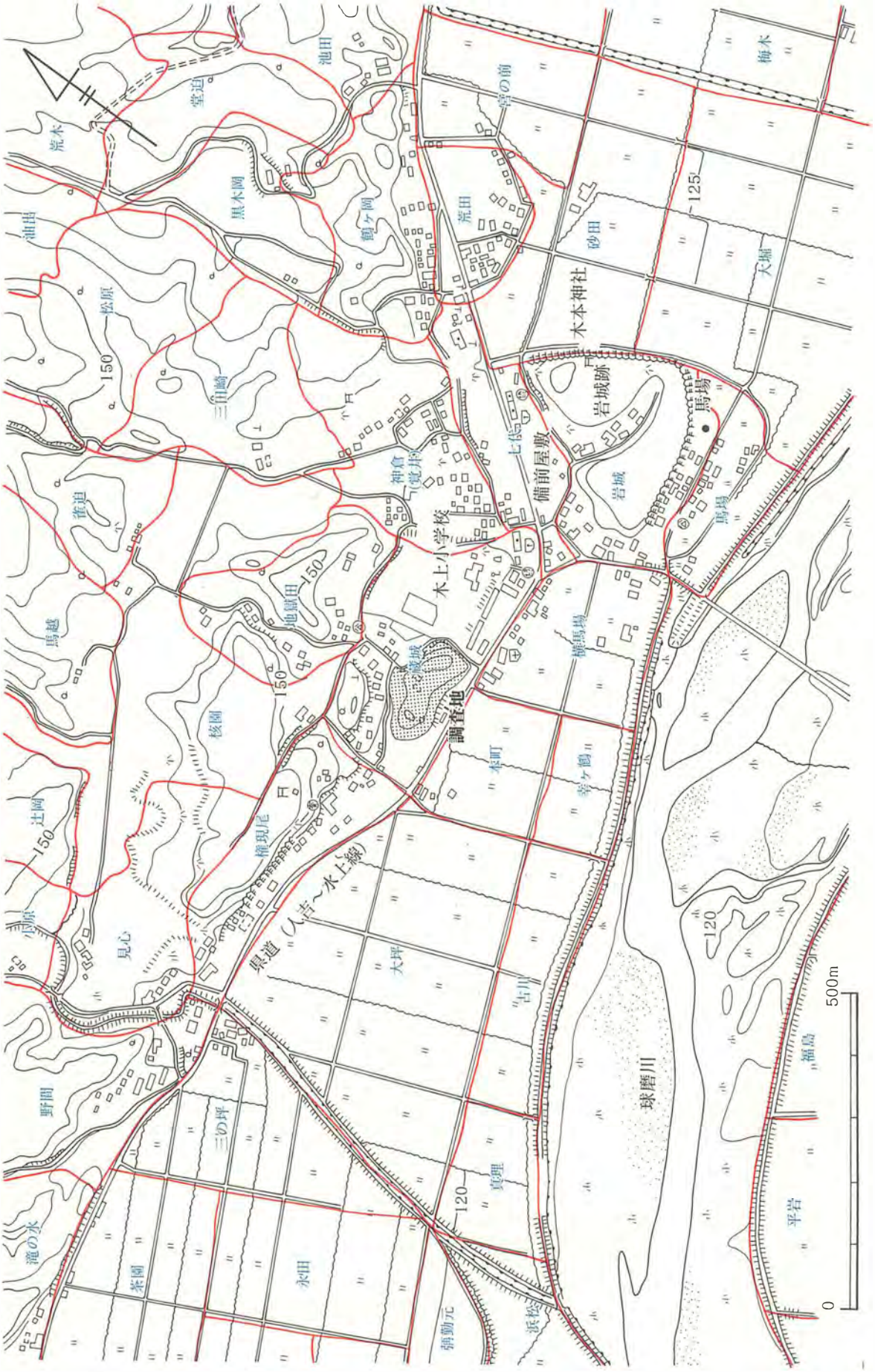
南北朝の動乱が終わると、小規模の反乱はあるものの相良氏の球磨支配が強まり、江戸時代末までその支配は続く。人吉市に相良氏の居城で、国指定史跡「人吉城」がある。



第3図　周辺遺跡地図

第1表　周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考	台帳番号
01	高原	錦町木上　台原	弥生	包蔵地		弥生土器	001
02	吉野尾古墳群	錦町平岩・平岡	古墳	古墳		数十基の小円墳	002
03	人吉農芸学院地下式古墳	錦町木上　平岩・平岡	古墳	古墳		地下式板石積石室墓	003
04	平川	錦町木上　平川	縄文	包蔵地		縄文晩期土器	004
05	叉女	錦町木上　高原	弥生・古墳	集落		古墳前期弥生後期、鏡・銅釧、県教委調査	005
06	木上益手	錦町木上　益手	縄文	包蔵地		縄文早期、塞ノ神式	006
07	村松	錦町木上　村松	縄文	包蔵地		縄文土器	007
08	京ヶ峰	錦町西　贄毛田	縄文～古代	包蔵地		石斧	011
09	尼ヶ土手の古塔	錦町西　下須	古代・中世	石造物			012
10	尼ヶ土手の屋敷跡	錦町西　下須	古代・中世	包蔵地			013
11	城ヶ峰横穴群	錦町木上　岩立	古墳	古墳			017
12	智源寺横穴群	錦町木上　由留木	古墳	古墳		別名十日市横穴群	018
13	高原入口	錦町木上（通称扇越）	弥生	包蔵地		弥生土器	019
14	立野	錦町木上　雀迫	弥生	包蔵地		弥生土器・石包丁	020
15	岩城横穴群	錦町木上　岩城	古墳	古墳			021
16	岩城	錦町木上　岩城	中世	包蔵地		石斧、中世城の岩城跡が含まれる	022
17	荒田横穴群	錦町木上　荒田	古墳	古墳			023
18	平川横穴群	錦町木上　平川	古墳	古墳			024
19	迫の庚申塔	錦町木上（通称迫）	中世	石造物	町		025
20	蔵城跡	錦町木上　蔵城	中世	城			026
21	竜口横穴群	錦町木上　龍口	古墳	古墳		５基確認	027
22	大原・天子	錦町木上　大原・天子	縄文～古代	包蔵地		縄文晩期、平安、土師・須恵・有肩打製石斧	028
23	井手口	錦町西　井手口	縄文	包蔵地		片刃磨製石斧	029
24	今山舟尾	錦町西　今山		祭祀			030
25	大王原	錦町西　大王原	縄文・弥生	包蔵地		縄文早・中期・弥生・石包丁	031
26	亀塚	錦町西　亀塚	弥生	包蔵地		弥生後期土器	032
27	亀塚古墳群	錦町西　亀塚	古墳	古墳	県	前方後円墳３基、１号墳が県指定、２号墳は町指定	033
28	福堂	錦町一武　福堂	縄文・弥生	包蔵地		石匙・石斧・石鏃・縄文・弥生	034
29	下原	錦町一武　下原	弥生	包蔵地		弥生後期土器、石斧	035
30	忠ヶ原	錦町一武　忠ヶ原	縄文	包蔵地		縄文土器	036
31	覚井	錦町一武　覚井	縄文	包蔵地		十字型石器	037
32	坊主屋敷	錦町一武　坊主屋敷	縄文	包蔵地		縄文早期土器・石包丁	038
33	弥勒堂古塔碑群	錦町西　大王	中世	石造物		大地蔵塔・庚申塔・五輪塔	039
34	上大鶴阿弥陀堂跡	錦町西　大鶴	古代・中世	寺社			040
35	清尾	錦町一武　清尾	縄文～古代	包蔵地			041
36	一の宮跡	錦町一武　東方	中世	寺社			042
37	一城寺跡	錦町一武（通称土屋）	中世	寺社			043
38	東方	錦町一武（通称土屋）	縄文～古代	包蔵地			044
39	土屋城跡（一武城跡）	錦町一武　城	中世	城			045
40	松尾	錦町一武　松尾	弥生	包蔵地		石斧・土錘・石包丁・弥生土器	046
41	内村	錦町一武　内村	古墳・古代	包蔵地		土師器	047
42	原村	錦町一武　原村	縄文	包蔵地		有肩打製石器	048
43	松木園	錦町木上　松木園	弥生	包蔵地		弥生土器・土師器	049
44	四塚古墳群	錦町木上　三ツ塚	古墳	古墳		円墳４基あり	050
45	四塚	錦町木上　三ツ塚	弥生	包蔵地		弥生土器・石包丁	051
46	土木園	錦町一武（通称内村）	弥生～古代	包蔵地			052
47	休園坊跡	錦町西　黒辺田野	中世	寺社			053
48	丸目蔵人の墓	錦町一武　切原野	近世	墓	町	迫品町指定	054
49	下り山窯跡群	錦町一武　下り山	古代	生産	町	９基	055
50	桑原家住宅	錦町一武　狩政	近世	建造物	国		056
51	山神社跡	錦町西　黒辺田野		寺社			057
52	上大鶴薬師堂跡	錦町西　大鶴	中世	寺社			058
53	上大鶴観音堂跡	錦町西　大鶴	中世	寺社			059
54	火口出	錦町一武　火口出	縄文・弥生	包蔵地			060
55	七中口窯跡	錦町西　七中口	古代	生産		須恵器	061
56	魚地	錦町一武　魚地	縄文・弥生	包蔵地		縄文土器・石斧・弥生土器	062
57	丸塚	錦町一武　丸塚	縄文・弥生	包蔵地		縄文土器・石斧・弥生土器	063
58	円鏡庵跡	錦町一武　寺村		寺社	町		064
59	寺村	錦町一武　寺村	縄文～中世	包蔵地			065
60	戸平山	錦町一武　戸平山		祭祀			066
61	火操城	錦町	中世	城			067
62	永池城跡	免田町浜殿	中世	城			005
63	新深田地下式板石積石室墳	深田村高原（通称新深田）	古墳	古墳	村	鉄剣・鉄鏃・土師器、9基	001
64	内山万福寺跡	深田村内山	中世	寺社	村	池跡、参道跡をとどめる、古塔碑群村指定	003
65	鹿児島神社境内	深田村内山	縄文～中世	包蔵地		土師器破片散布、庚申塔	006
66	鷺巣寺屋敷跡	深田村鷺巣田	中世	包蔵地			007
67	高山城跡	深田村高山	中世	城			005
68	辰口古塔群	深田村辰口	中世	石造物		層塔　五輪塔10基以上	012
69	深田城跡	深田村城	中世	城			017
70	川辺の城跡	相良村川辺　城の上	中世	城			009
71	井沢埋蔵銭発見地	相良村柳瀬　井沢	古代・中世	包蔵地		唐・宋貨銭　外982 個と土師器碗多数出土	023
72	柳瀬の城ヶ峯	相良村柳瀬　城ヶ峯	中世	城			025
73	上園	相良村川辺　上園	縄文～中世	包蔵地			026
74	雨宮鶴	相良村深水　雨宮鶴	縄文～中世	包蔵地			027
75	棚葉瀬	相良村深水　棚葉瀬	縄文～中世	包蔵地			028
76	堀内	相良村深水　堀内	縄文～中世	包蔵地			029
77	深水・谷川	相良村深水　谷川	縄文～中世	包蔵地		県教委調査	045
78	深水小園	相良村深水　小園	縄文～中世	包蔵地			046


調査地
木上小学校
備前屋敷
木本神社
岩城跡
馬場
岩城
城
城跡
神倉
鶴ヶ岡
黒木岡
池田
堂迫
荒木
油出
松原
三日崎
雀迫
馬越
池頭田
桜岡
桶現尾
見心
辻岡
野間
滝の水
茶園
永田
三の坪
大坪
古川
寺理
弾勧元
浜校
寺の前
荒田
砂田
大堀
梅木
七反
鶴馬場
寒町
鶴ヶ鶴
球磨川
福島
平岩
県道（人吉～水上線）
150
125
120
0
500m

第２章　遺構と遺物

第１節　縄文時代の遺構と遺物

１　遺構

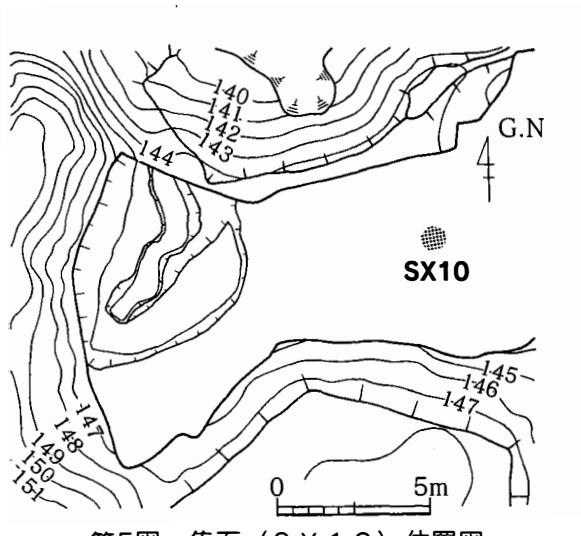
（１）集石（Ⅶ区ＳＸ１０）

丘陵主軸尾根上に位置し、丘陵西側高台（Ｖ区）の東隣で8.0ｍ程下の平坦部(Ⅶ区）に位置する。調査前には民家の小屋があった箇所でその上部は民家の整地に伴い

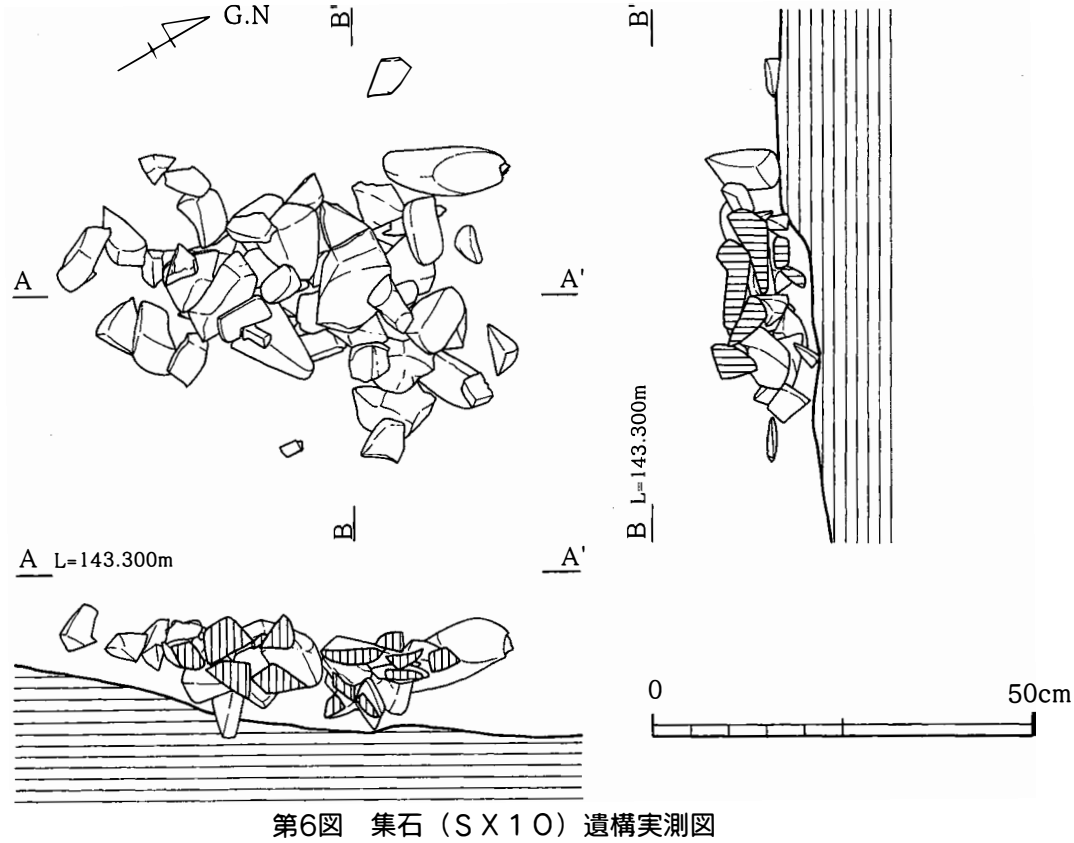
い。しかし、周囲の地形から西側高台からの急斜面から東側へのなだらかな斜面に移行するちょうど際から東に少し下ったところに位置するものと思われる。

民家の整地層を除去した際、集石の上端が露出した状況にあった。掘り込みは土の差異が不明瞭で検出面からは判断できなかったが、黄褐色土層（アカホヤ）上面までの掘り下げで一部残存しているのが確認できた。また、集石の断面形状からも掘り込みの存在が想定できる。

集石の形状は配石のような規則性はなく、無規則に置かれた感がある。検出状況での石の拡がりは、東西 55.8cm、南北 61.7cmの楕円形を呈する。石材は砂岩で部分的に赤変している石も見られたが、熱変を受けているとする積極的な根拠はない。



第5図　集石（ＳＸ１０）位置図



第6図　集石（ＳＸ１０）遺構実測図

縄文時代の遺物の検出は集石周辺からは見られなかったが、丘陵上からは僅かではあるが表採あるいは中近世遺構の埋土中から縄文早期から後期にかけての土器、石器等が確認されている。

２　遺物

蔵城遺跡の丘陵における縄文時代の遺物に土器片が検出された。総資料点数は71点である。その分布はⅤ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅹ・Ⅺ・Ⅻ区・「南側土塁」に渡る。土器片すべては、中近世遺構の埋土から出土したものか、或いは表採されたものであり、唯一縄文時代の遺構と考えられるⅦ区SX10（前掲）からは検出されなかった。

ここでは、土器片を文様と形態によりⅠ～Ⅷ類に分類した。但し、破片が小さいため形態が分からないもの、或いは施文様が摩滅し、確認できないため分類認定に含まれなかったものが１３点ある。残存部位が異なるため、土器片の形態より施文様を類別認定の基準として優先する。更に、施文具や口縁部の形態の差異により、細分化の必要な類ではアルファベットを付し、以下代表的資料に伴い説明する。

Ⅰ類(第7図１以下同図)：破片のため器形は不明だが、器厚が厚く、刺突文を施す。Ⅰ類は１点のみ出土している。1は胴部上位と思われ、器壁が円筒状に湾曲する。口縁部に向けて緩やかに外反する。外面に刺突文を施す。内外面はにぶい黄褐色で、焼成はやや悪い。器厚は11㎜と厚く、胎土は１～２㎜の砂粒を含む。

Ⅱ類(２～７)：口縁部の形態が直口或いは外反し、押型文を施す。うち、外反する口縁部で楕円文を施すもの(a)と、直口する口縁部で、山形文を施すもの(b)と、外反する口縁部で、山形文を施すもの(c)がある。

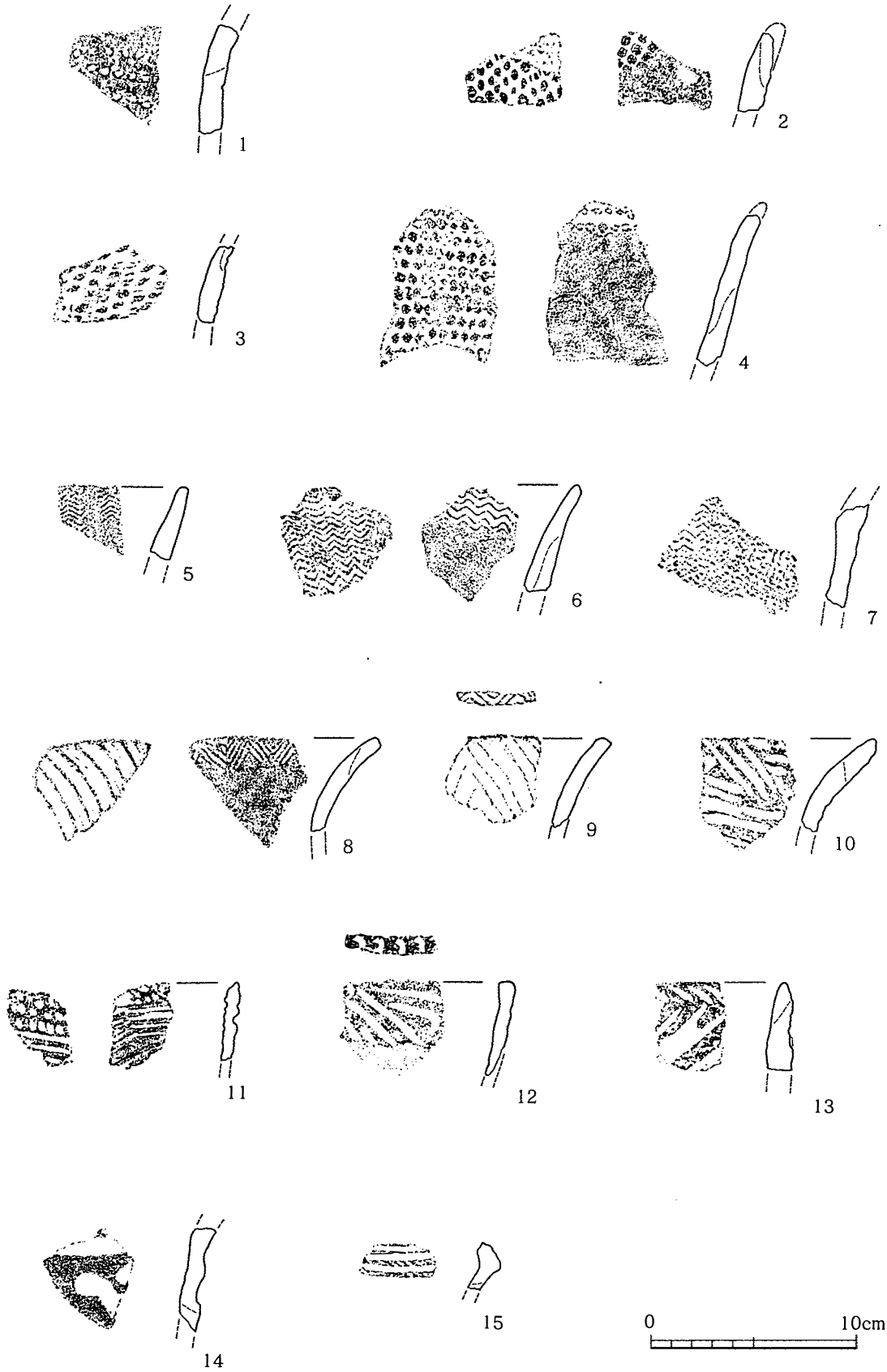
Ⅱａ類（２～４）　Ⅱａ類は３点出土している。他に同様の文様を施した胴部破片４点が検出された。２は胴部上位で、口縁部にかけて外傾する。４～５㎜大の楕円文を外面は斜位に、内面は横位に施し、さらに内面は施文後下位をナデ消す。内面施文部を幅20～25㎜と考え、剥落した口縁部を想定した。内外面は赤褐色を呈し、焼成はやや悪い。胎土は微細な砂粒を含む。３は胴部破片で、上位はわずかに外傾する。外面に８.５㎜大の楕円文を横位に施す。内外面はにぶい赤褐色を呈し、焼成は良好である。器厚は９㎜前後と薄いが、粗雑な作りで３～４㎜大の砂粒が混じる。４は胴部上位で、口縁部にかけて外傾する。内外面に５㎜大の楕円文を横位に施し、内面の施文は口縁部までである。内外面は灰黄褐色を呈し、焼成は良好。器厚は９㎜で、胎土には雲母が含まれる。

Ⅱｂ類　Ⅱｂ類は１点のみ出土している。５は口縁部が直口する。口唇部は丸みを帯び、外面に横位の山形文を施し、内面に施文は観察できない。内面は灰黄褐色、外面は黒灰褐色を呈す。焼成はやや悪く、器厚は10㎜。胎土は微細の砂粒が含まれる。

Ⅱｃ類(６・７)　Ⅱｃ類は２点出土している。他、同様の文様の胴部破片が各調査区より計20点が検出されている。６は口縁部で、外傾する。口唇部はやや尖る。内外面に横位の山形文を施し、内面施文部は口唇部より2.2㎝で以下をナデ消す。内面はにぶい黄橙色、外面は黒褐色を呈し、焼成は良好である。器厚は11㎜で、胎土は砂粒を含む。７は胴部上位で、口縁部に向けて肥厚し、外傾する。外面に斜位と横位の山形文を施す。内外面はにぶい灰黄褐色を呈し、焼成は良好である。器厚は１０㎜程で、３㎜大の砂粒と雲母が含まれる。

Ⅲ類(８～10)：口縁部の形態が外反し、押型文以外の文様を持つ。沈線文を施すもの(a)、ミミズばれ文を施すもの(b)がある。

Ⅲａ類(8・9)　Ⅲａ類は２点出土している。8は外反する口縁部で、口唇部は平らである。外面にミミズばれ文、内面には山形文を横位に施し、内面施文部以下は横位にナデている。口唇部は無文である。内外面は明赤褐色を呈し、焼成は良好。器厚は８㎜前後で、胎土は雲母と微細の石英を含む。９は口縁部で、外反し、口唇部は平ら。外面にミミズ文、口唇部に山形文を施す。内面は無文である。内外面はにぶい橙色を呈



第7図　縄文土器実測図

し、焼成は良好。器厚は8mmで、胎土は雲母を少量含む。

Ⅲｂ類　Ⅲｂ類は１点のみ出土している。10は口縁部で、強く外反し、口唇部は尖る。外面に斜位と横位の沈線を施す。内外面は明赤褐色を呈し、焼成は良好である。器厚は11mmで、胎土は雲母と1mm程の砂粒を含む。

Ⅳ類：小破片のため掲載しない。器形は不明だが、撚糸文を施す。器形が不明で、撚糸文のみを施すもの(a)、器形が不明で、撚糸施文部を沈線で区画するもの(b)がある。

Ⅴ類(11～13)：口縁部の形態が直口気味で、沈線文を施す。文様が細沈線と刺突文を施すもの(a)と、沈線と貝殻文を施すもの(b)と、沈線のみ施文したもの(c)がある。

Ｖａ類　Ｖａ類は１点のみ出土している。11は直口する口縁部で、口唇部は尖る。外面は口唇部より2cmまで刺突文を連続させ、その下に横位に細沈線を巡らす。内面は文様構成は外面と同じだが、外面に比べ刺突文施文部が狭い。内外面はにぶい橙色を呈し、焼成は良好。器厚は約6mmと薄く、胎土は微細の砂粒を少量含む。又、同様の胎土で細沈線を施した胴部破片８点が出土している。

Ｖｂ類　Ｖｂ類は１点のみ出土している。12は直口する口縁部で、口唇部は平ら。外面に沈線を角度を違えて斜位に施し、内面は横位のナデ調整痕が観察できる。口唇部に貝殻刺突文を連続させる。内外面は黄橙色を呈し、焼成は良好。器厚は7mmで、胎土は雲母と1mm程の砂粒を含む。

Ｖｃ類　Ｖｃ類は１点のみ出土している。13は口縁部で、直口し、口唇部は尖る。外面は斜位に繰り返し沈線を施し、内面は横位のナデ調整を施す。内面は明赤褐色、外面は黒褐色を呈し、焼成は良好。器厚は11mm前後で、胎土は石英の粒を多量に含む。この13と同様の形態で沈線を持つが、摩滅しているため貝殻刺突文が確認できない口縁部破片２点が表採されている。

Ⅵ類(14)：破片のため器形は不明だが、太い沈線文を施す。掲載資料14の他、同様の沈線を施した破片が２点検出された。14は器形は不明だが、外面に太い沈線を施す。内外面は明赤褐色を呈し、焼成は良好である。器厚は9mm前後で、胎土は砂粒を含む。

Ⅶ類(15)：磨消縄文土器。15は口縁部で、口唇部は平ら。断面は三角形である。外面に三本の沈線とその間に縄文が観察できる。内外面は灰黄褐色を呈し、焼成は良好。器厚は10mm程度で、胎土は雲母と砂粒を少量含む。

Ⅷ類：黒色磨研土器。破片が小さいため掲載していないが、内外面が黒色を呈す。研磨された口縁部が１点、胴部２点がⅦ区で表採されている。

以上のように、蔵城の丘陵から出土した土器は、縄文時代の早期から晩期に至るまでの幅広い時間の中に点在していることがわかる。Ⅰ～Ⅳ類が各々早期の貝殻文円筒形土器・押型文土器（押型文土器と手向山式土器、各Ⅱ・Ⅲ類)・塞ノ神式土器、Ⅴ類が前期の曽畑式土器、Ⅵ類が中期前葉～後期中葉の阿高式土器、Ⅶ類が後期の西平式土器、Ⅷ類が後期後半～晩期前半の黒色磨研土器にあたると考えられる。

第２節　古墳時代の遺構と遺物

１　遺構

蔵城丘陵は中世以降からの土地利用に伴う造成により大幅な地形の変更を余儀なくされた。そのためそれ以前の遺構・遺物については攪乱され、ほとんどが消失したと思われる。古墳時代の遺物包含層が確認された箇所は西側高台と東側高台の間の窪地の部分で、旧地形では南から北に延びる浅い谷地形であったため削平を免れたところである。Ⅳ、Ⅵ、Ⅶ区においてその包含層が確認されたが、いずれの調査区も平坦面に整地されていたため地形的に低い調査区の北側に部分的に残存している状況であった。

遺構は確認できなかったが、後述する遺物の出土量及び器種構成からその付近で生活していたことが推定される。小規模な集落があったものと思われる。

２　遺物

掲載した遺物の個体数はある程度復元が可能な３１個体であるが、検出された土器片の総数は細片を含めて３４６９点と比較的多い。それら遺物の包含層である黒色土は分層できなかったため、遺物を包含層一括として取り上げた。ただし、遺物に時期幅が見られるため純粋な一括資料とは言えない状況である。

以下に、それら遺物の記述を各調査区包含層ごとに行う。

（1）Ⅵ区包含層

調査区北側のⅦ区との斜面上に位置する。谷の起点に近いため勾配がきつく面積的にも小範囲であったため、形状を復元できる遺物は極めて少ない。

複合口縁の小型丸底壺（１６）は、頸部のくびれが大きく、胴部中位に最大径を有する。口縁部は直口気味に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。胴部外面に丁寧なミガキ調整が施されており、全体的に精緻な作りをしている。

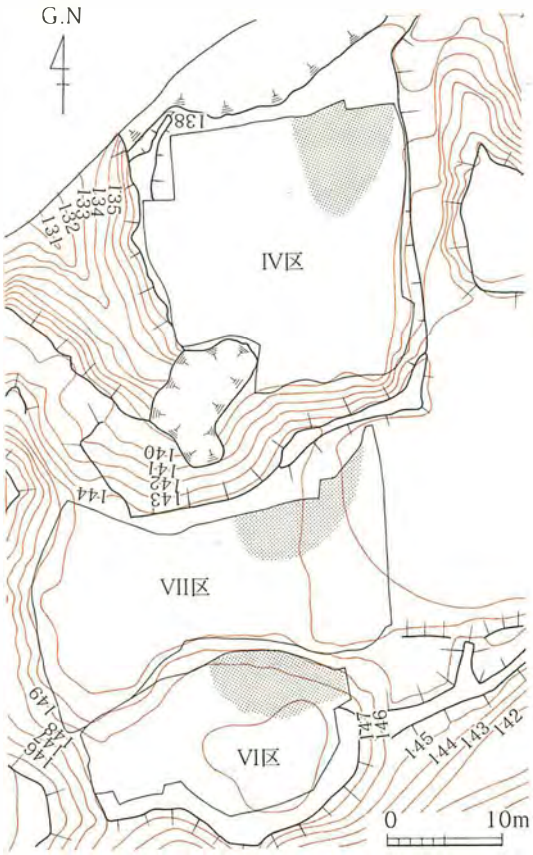
脚台付き壺（１７）は口縁部と胴部のくびれがあまりなく鉢状を呈す。口縁部は外傾しながら立ち上がり、端部は尖る。器壁は肥厚し、胴部外面に粗いナデ調整が施され、全体的に粗雑な作りをしている。

甕（１８）は口縁部が短く外傾気味に立ち上がり、端部を平たく仕上げる。

（2）Ⅶ区包含層

調査区南際中央付近から北際に向けて扇状に拡がる。比較的傾斜が緩やかで最も多くの土器片が検出された。旧地形においてこの近辺が最も平坦に近い場所と思われる。

壺は口縁部の特徴から３種に分類できる。１つ目は口縁部に複合口縁が形骸化したような段を有するもので、頸部が長く、外反気味に立ち上がり、口縁



第8図　古墳時代土器包含層配置図

端部を丸く仕上げるもの（21）がある。２つ目は口縁部が直口気味に比較的長く立ち上げるもので、小型のもの（22）と大型のもの（23）がある。両者とも口縁端部を丸く仕上げる。３つ目は口縁部が肥厚しているもので、口縁部が外反し、口唇部が角張るもの（24）と直立気味に立ち上げ、口縁端部を丸く仕上げるもの（25）とがある。両者とも丁寧なナデ調整が施されている。底部は、尖底気味のもの（26･28）と丸底（27）とに分かれる。尖底気味のものは胴部中位に最大径を有する。

甕は形態的特徴から大別して２種に分類できる。１つ目は頸部のくびれの明瞭な一般的に見られる甕である。口縁部が短く口縁端部を平たく仕上げるもの（19）と口縁部を内湾気味に立ち上げ、端部を丸く仕上げるもの（20）とがある。２つ目は、頸部のくびれがほとんどなく、緩やかに外反し、口縁端部を丸く仕上げる甕（33）である。頸部付近あるいは胴部最大径付近に突帯を巡らすもので、その突帯もへら状工具で連続刺突を施すもの（34）、Ｘ字状に連続して沈線を施すもの（35）とがある。底部は尖底気味の平底（36･37）である。

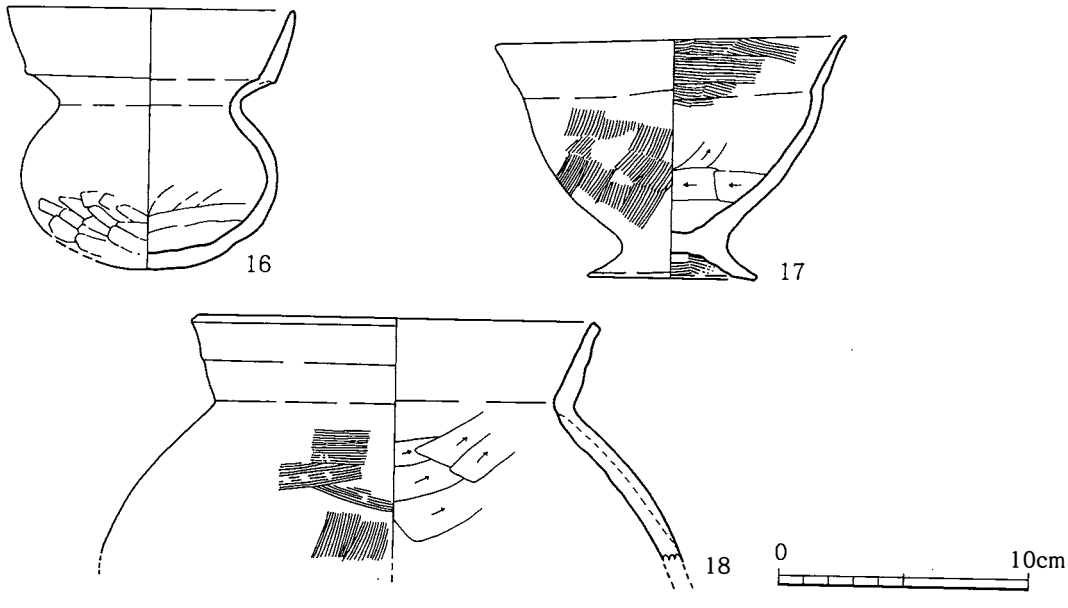
高杯は、杯部（31）と脚部（32）が検出された。前者は内湾気味に立ち上がるものと思われ、器壁は薄い。赤褐色を呈し、内外面にケズリ後丁寧なナデ調整が施されている。後者は器壁は肥厚しており、脚部端に向かって明瞭に屈曲するもので、比較的精緻な作りで外面に丁寧なミガキ調整が施されている。

その他の器種として、小型丸底壺（30）と脚台付き小型甕（29）がある。前者は、頸部のくびれが比較的明瞭に残り、口縁端部を尖り気味に仕上げている。胴部上位に最大径を有する。器壁が比較的薄く、胴部外面にハケ目調整を施した丁寧な作りをしている。後者は、胴部の膨らみがほとんど無く、胴部上位に最大径を有する。口縁部は外傾し、口縁端部を尖り気味に仕上げる。底部は肥厚した脚台を有する。内面にタタキ調整を施すことを特徴としており、全体的に粗雑な作りをしている。

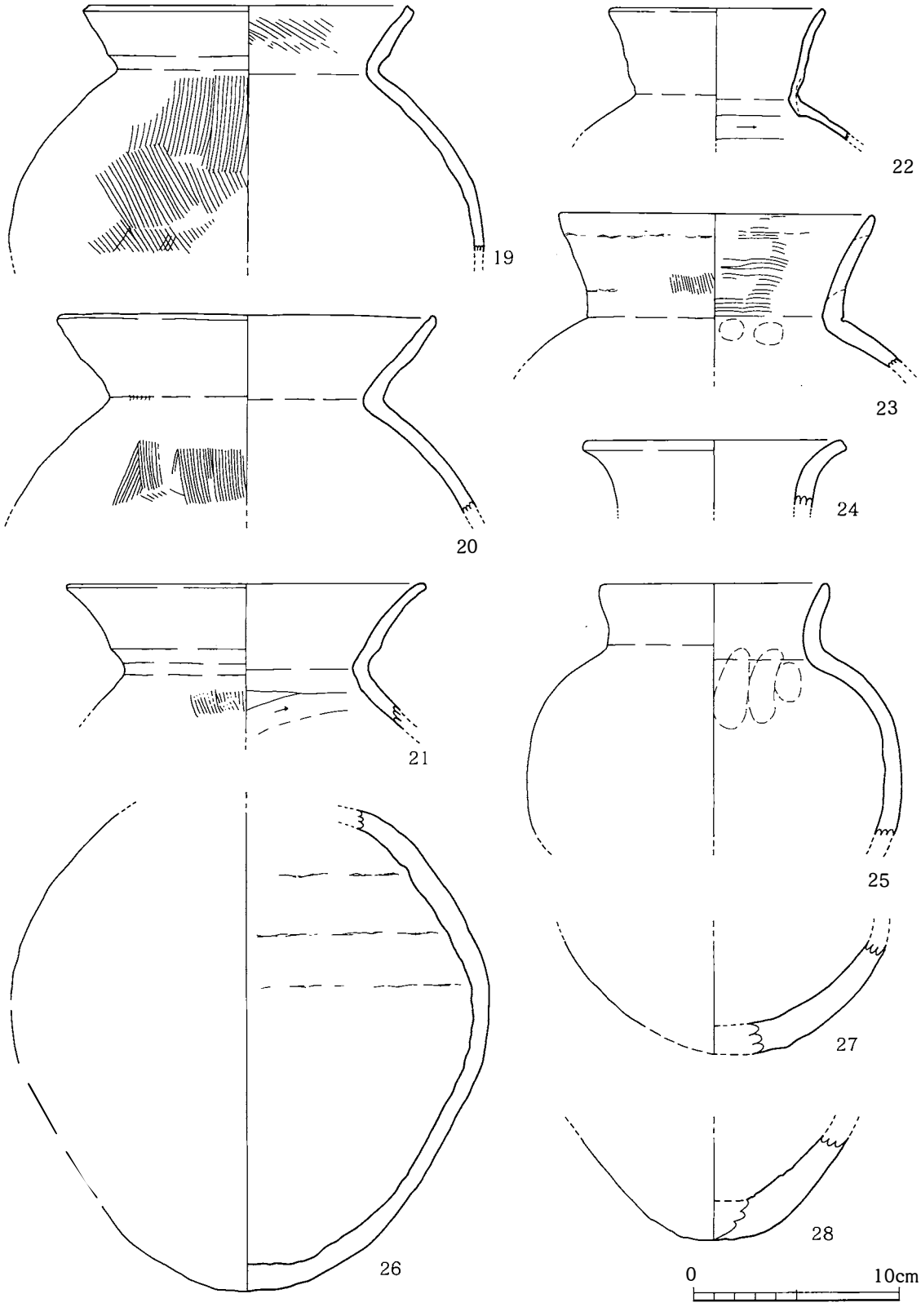
（３）Ⅳ区包含層

調査区中央付近から北東隅に向かって細長く扇状に拡がる。旧地形の勾配は比較的きつい。これより北側は削平されており丘陵上部から続いてきた古墳時代包含層もここで終わる。

壺は複合口縁を有するもの（41）が検出された。明瞭に段を有し、外反しながら立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げている。小型丸底壺は、２種に分類できる。１つ目は頸部のくびれを明瞭に残したもの（38）で、



第9図　古墳時代土器実測図（1）



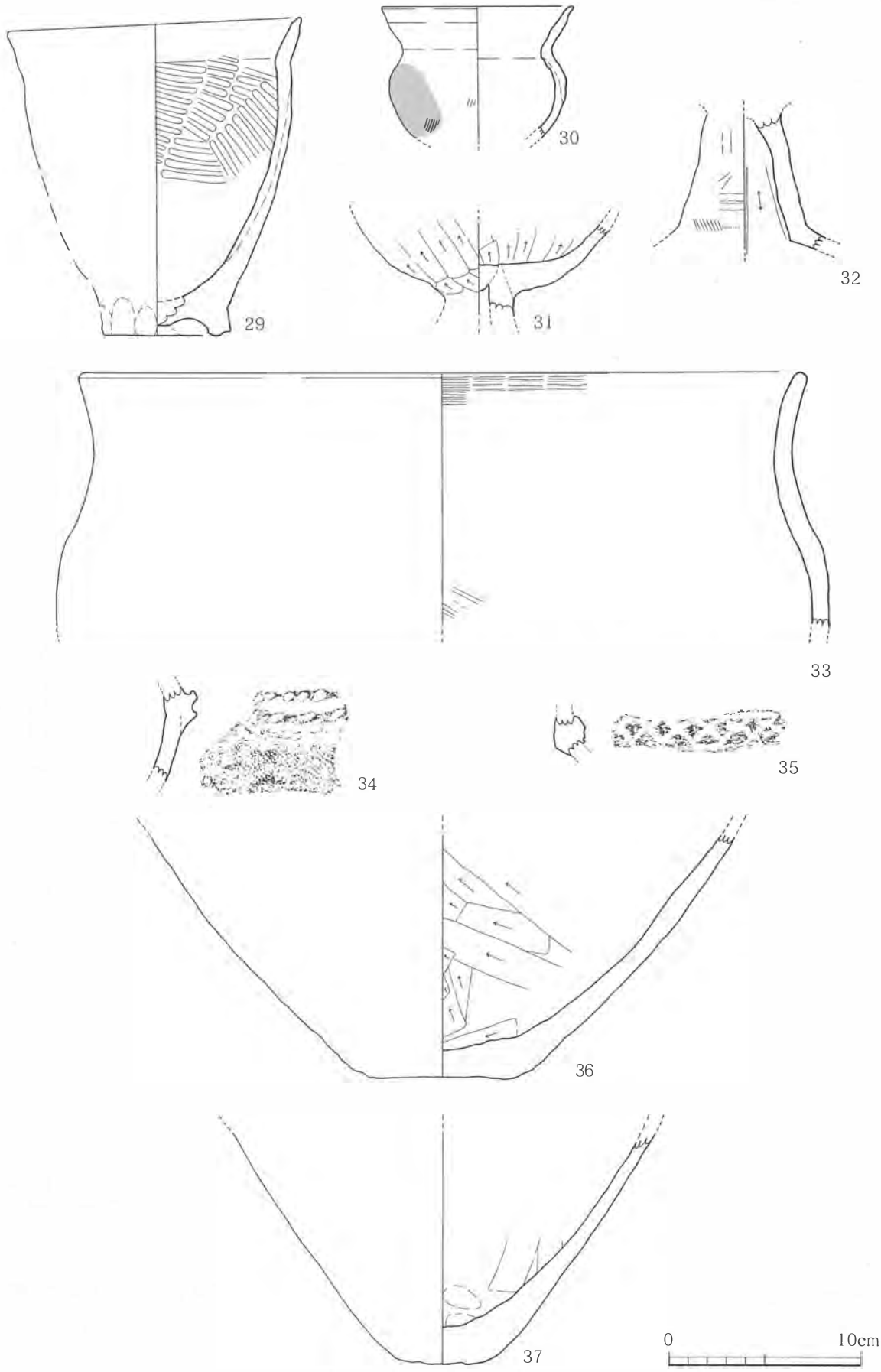
第10図　古墳時代土器実測図（2）

口縁端部を上方につまみ上げている。器高が比較的低い。胴部外面に丁寧なハケ調整を施し、

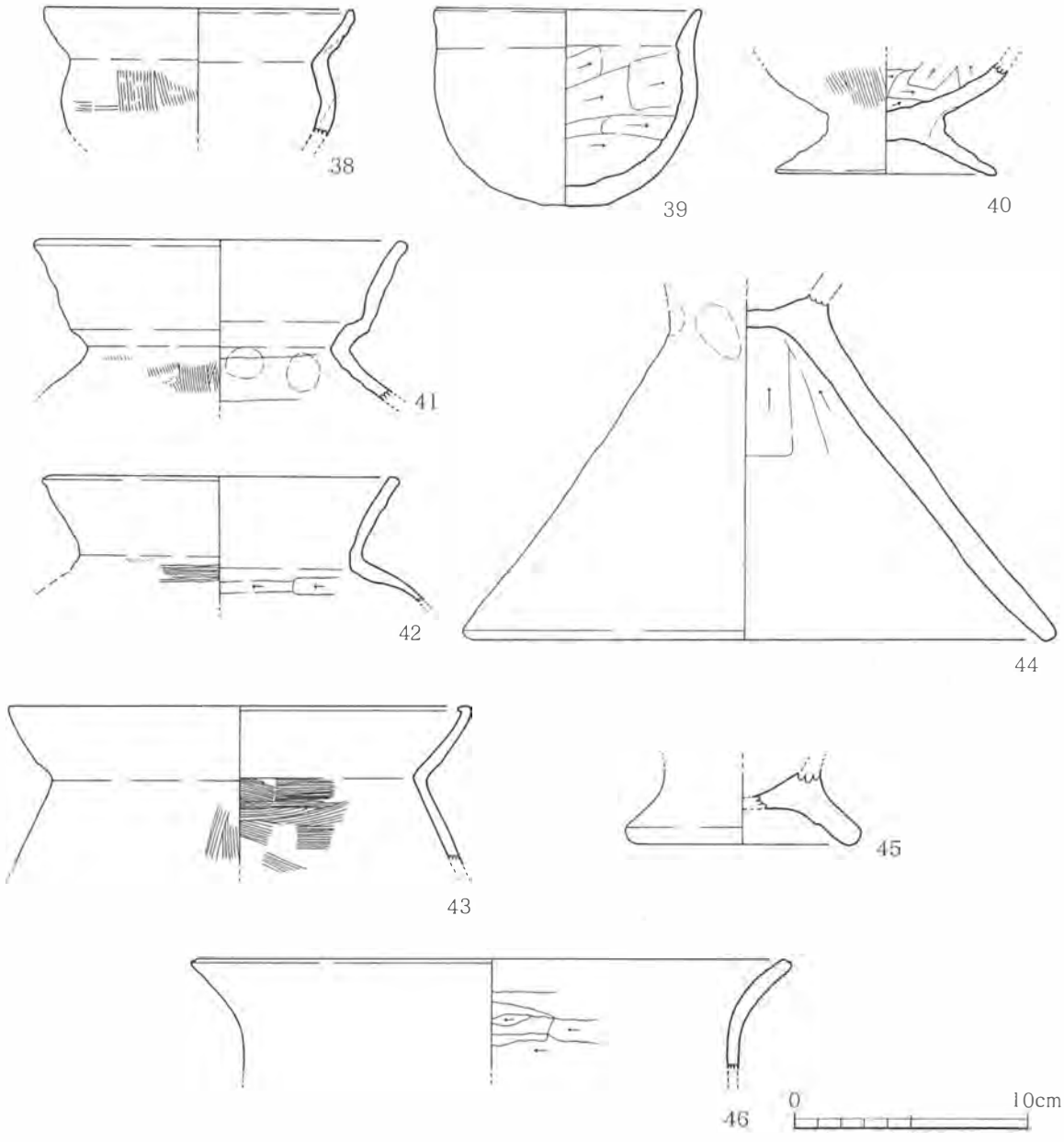
な作りをしている。２つ目は、　　（３９）がある。口縁

端部は丸く仕上げている。全体的に肥厚しており、

甕は大別して２種に分類できる。１つ目は頸部のくびれが明瞭な甕で、口縁部の特徴から２種に細分でき



第11図　古墳時代土器実測図（3）



第12図　古墳時代土器実測図（4）

る。外反気味に直立するもの（４２）と口縁部に僅かに段を有し、内湾気味に立ち上がるもの（４３）とがある。前者は、口縁端部を平らに仕上げ、胴部外面肩部に横方向のハケ調整を施している。後者は、口縁端部を内側につまみ上げ、胴部の張りは比較的弱い。器壁は薄く作られている。２つ目は、口縁部のみの検出となったが、頸部のくびれが明瞭でない口縁部が鋭く外反する甕（４６）である。口縁端部を平らにナデているのを特徴とする。Ⅶ区出土の甕より小型である。

その他の器種として、脚台付き小型壺の胴部下位から脚部にかけてのもの（４０）がある。胴部は丸く立ち上がっている。脚部は外にむけて直線的に延び、脚端部を丸く仕上げる。器壁が薄く、Ⅵ区出土のものに比べ精緻な作りをしている。次に、大型の蓋（４４）がある。ほぼ完形で検出された。脚部は外反気味に真っ直ぐ延び、脚端部は平たく仕上げられている。器壁は肥厚しており外面は丁寧なナデ調整が施されている。また、甕の脚部（４５）も検出されている。脚端部は丸く仕上げられている。全体に丁寧なナデ調整が施されている。

第2表　古墳時代土器観察表

No.	調査区	器種	法量（cｍ）	胎土・焼成	形態の特徴	技法の特徴（外面）	技法の特徴（内面）	備考
16	Ⅵ区	小型壺	口径ー11.4 器高ー10.	胎　ー 焼	複合口縁の小型丸底壺である。頸部の 最大径を	口縁部から頸部にかけて横ナデ。胴部上位ナデ、下位ケズリ。	口縁部は横ナデ。頸部から胴部上位までナデ。胴部下位はケズリ。	
17	Ⅵ区	脚付壺	口径ー14.2 底径 器高　9.7	胎 焼　ーや 色調ー	頸部のくびれ を 径は上　　脚部は　反。	粗　ナデ。脚　外面ナデ。	口縁部ハケ。胴部は多方向のケズリ。脚部内面ハケ。	ー6.7 ー
18	Ⅵ区	壺	口径ー16.0	胎　　・ 焼 色調	口縁部は短く直 る。口縁端部　平らに仕上げる。 内外面に２次焼成	口縁部は横ナデ。胴部上位は横ハケ後ナデ。中 縦方向のハケ。	胴部はケズリ後ナデ。	
19	Ⅶ区	甕	口径ー16.2	胎 焼 色調ー　　面橙色	口縁部下位に段を 部は平らに仕上　　。　面に２ 焼成	口縁部は横ナデ。胴部ハケ。	口縁部ハケ後ナデ。胴部ケズリ後ナデ。	
20	Ⅶ区	甕	口径ー16.6	胎土 焼成 色調ー	口 中　　ら　　は丸く仕 上　　。	口縁部横ナデ。胴部上位はハケ後ナデ。下位はハケ。	口縁部は横ナデ。胴部は粗いナデ。	
21	Ⅶ区	壺	口径ー17.6	胎土ー含 焼成　良 色調	口縁 わず　に段を	口縁部は横ナデ。胴部はハケ後ナデ。	口縁部は横ナデ。頸部は指押さえ後ナデ。胴部はケズリ。	
22	Ⅶ区	壺	口径ー10.6 頸径ー7.9	胎土ー含長石・砂粒多 焼 色調ー	口縁部は直口気味に立ち上がり、 口縁端部近くで外反 薄　　焼　痕あり。	口縁部横ナデ。胴部ナデ。	口縁部上位は横ナデ。下位は縦ナデ。頸部は指押さえ。胴部ケズリ後ナデ	
23	Ⅶ区	壺	口径ー15.4	胎土ー含長石・砂粒多 焼成ー 色調ー	口縁部 端部を	口縁部上位は横ナデ。下位は縦ハケ。頸部から胴部は横ナデ。	口縁部は横ハケ。胴部は斜めナデ。頸部内面指押さえ。	
24	Ⅶ区	壺	口径ー12.8	胎土 焼成ー 色調	口縁部は外反し、端部を 上げる。器壁は厚い。内　面に２ 次焼成	口縁部横ナデ。	口縁部横ナデ。	
25	Ⅶ区	壺	口径ー11.0	胎 焼 色調ー	全 端　を　　げる。胴　は　み を　びる。	口縁部は横ナデ。胴部はハケ後ナデ。	口縁部は横ナ え。胴部は粗いナデ。	
26	Ⅶ区	壺 胴部	胴部最大径 ー23.5	胎土ー 焼成　良 色調	胴部中位 部を り。	胴部多方向の粗いナデ。	胴部 帯　　れる。	
27	Ⅶ区	壺 底部		胎土ー含角閃石・長石・砂粒 焼 色調	丸底気味	ナデ。	ナデ。	
28	Ⅶ区	壺 底部		胎土ー含長石少・砂粒少 焼成　　色調 にぶい黄橙	尖り気	ナデ。	ナデ。	
29	Ⅶ区	小型壺	口径ー15.5 底径 器高ー16.5	胎土ー含角閃石多・長石・砂粒 焼成 　調ー	口縁部は外反する。胴部は内湾気味に立ち上がる。脚部は直立。歪みあり。内外面に２次焼成	口縁部から胴部までナデ。脚部は内外面に指押さえ。底部外面ナデ。	口縁部はナデ。胴部上位はタタキ。下位はナデ。	ー6.7
30	Ⅶ区	小型壺	口径ー10.2	胎土ー含長石多・砂粒 焼成ー 色調	小型丸底壺である。口縁部は外反気 る。　面に黒班あり。	口縁部から胴部上位まで横ナデ。下位はハケ後ナデ。	口縁部は横ナデ。頸部指押さえ後ナデ。胴部ケズリ後ナデ。	
31	Ⅶ区	高		胎 焼成ー良 色調	杯部は内湾気	杯部は上方向の縦ケズリ後ナデ。頸部はナデ。	杯部は上方向ケズリ後ナデ。杯　　杯部	
32	Ⅶ区	高杯 脚部		胎土ー含長石・金雲母・砂粒 焼 色調	脚部はやや 近で屈曲を伴い	脚部上位は縦方向ミガキ。下位は横方向ミガキ。屈曲部にハケ目を	ケズリ後横ナデ。屈曲部からは横ナデ。	
33	Ⅶ区	壺	口径ー38.2	胎 焼成ー良 色調	頸部のくびれ な 肥厚。　　あり。	横ナデ。	口縁部から胴部最大径部 ケ後ナデ。口縁端部付近横ハケ。	
34	Ⅶ区	壺		胎土ー含角閃石・長石・砂粒多 焼成ー 色調ー	胴部最大径部 す。凸帯部にハケ状工具による 連続刺突を施	ナデ。	ナデ。	
35	Ⅶ区	壺		胎土ー含角閃石・長石・金雲母 ・砂粒　　焼 色調	凸帯に×印に沈線文を施	ナデ。	ナデ。	
36	Ⅶ区	壺 底部		胎 焼成ー良 色調	径は小さいが、平 厚。外面に２次焼　　あり。	多方向のケズリ後ナデ。	多方向のケズリ後ナデ。	
37	Ⅶ区	壺 底部		胎土ー含角閃石・長石・砂粒多 焼成ー　　色調 にぶい黄橙	底部は尖底気	ナデ。	底部中 ズリ後ナデ。	
38	Ⅳ区	小型壺	口径ー13.4	胎土ー含砂粒多 焼成ー 橙色　　面にぶい黄橙	小型丸底壺である。口縁部は内湾気 　　最大径	口縁部横ナデ。胴部上位はハケ後ナデ。胴部下位はナデ。	口縁部は横ナデ。胴部は横ケズリ。	
39	Ⅳ区	小型壺	口径ー11.6 器高ー8.4	胎 焼 色調　　黄橙色	頸部くびれ す。胴部最大径　　。	口縁部は横ナデ。胴部は多方向ナデ。	口縁部は横ナデ。胴部は横ケズリ。	
40	Ⅳ区	脚付壺	底径ー9.6	胎土ー含長石・砂粒少 焼成ー 色調	脚端部は丸い。胴部は内湾しながら立ち上がる。底部は比較的肥している。	胴部は粗いハケ。脚部粗いナデ。	多方向のケズリ。脚部内面はケズリ後ナデ。	
41	Ⅳ区	壺	口径ー16.2	胎土ー含砂粒少 焼成ー 色調	口縁部は複合口縁を 縁 薄い。	口縁部横ナデ。胴部はハケ後ナデ。	口縁部横ナデ。接合部は指押さえ後ナデ。胴部はケズリ。	
42	Ⅳ区	壺	口径ー15.4	胎土ー含長石・砂粒多 焼成ー 色調ー	口縁部は直線的に開く。口縁端部は平らに仕上げている。器壁は薄い。	口縁 部上位横ハケ。胴部はハナデ。	口縁部から頸部にかけて横ナデ。胴部は横方向のケズリ後ナデ。	
43	Ⅳ区	壺	口径ー20.0	胎土ー 焼成　良 色調ー　　にぶい橙色	口縁部は内湾気 口縁端部を 部の張り　　い。	口縁部から頸部にかけて横ナデ。胴部はハケ後ナデ。	口縁部は横ナデ。胴部はハケ。	
44	Ⅳ区	蓋	口径ー25.8	胎 焼　ー良 にぶい　　・外面	脚部は外反気 たく仕上げる。	口縁部・胴部は横ナデ。下位はケズリ。くびれ部　指え痕。	脚部下位は横ナデ。下位はケズリ。底部内面はナデ。	弥生か
45	Ⅳ区	壺 脚部	底径ー10.2	胎土ー含角閃石・長石・砂粒 焼成ー 色調	脚部端部を丸 ２次焼成	脚部内外面ナデ。	底部粗いナデ。	弥生か
46	Ⅳ区	壺	口径ー22.2	胎 焼成ー良 色調	口縁部は大きく 部は 面２次焼成	口縁端部はケズリ後ナデ。口縁部から頸部にかけてハケ後ナデ。	口縁部は横ナデ。頸部からケズリ。	

第３節　中世の遺構と遺物

１　遺構

（１）Ⅳ区

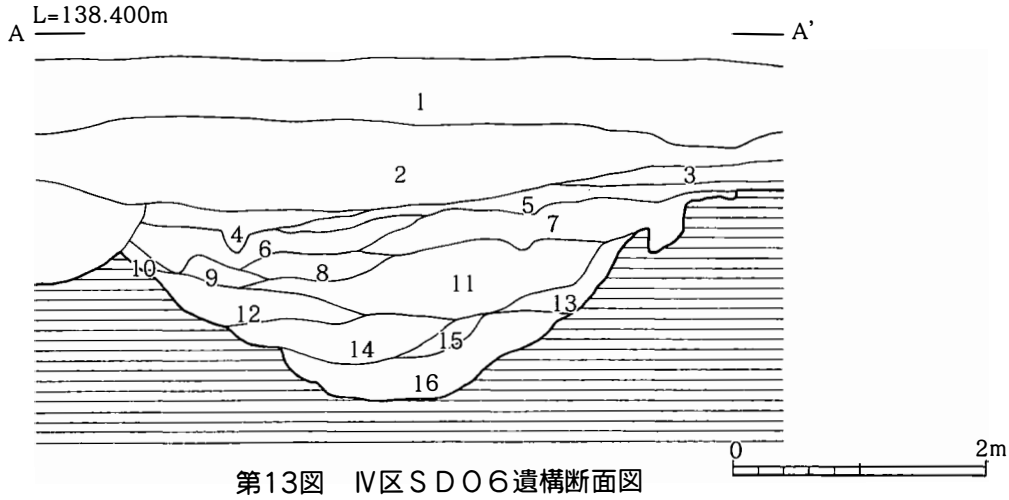
丘陵主軸尾根北斜面下の平坦部に設定した調査区である。曲輪状に人為的な平坦面を形成していたが、調査の結果、江戸後期の民家の土間跡や戦時中の陸軍の兵舎跡が確認されたことから、この平坦面の形成は近世以降の開削によるものである可能性が極めて高い。中世段階の地形は、南東側から北西に向かい比較的きつい傾斜で下って北側竪堀に至るものと思われる。

［ＳＤ０６］（第１３図）（第２２図）

調査区南東隅から弧を描きながら北西方向へ延びる堀跡である。断面形状は比較的緩やかなＶ字形で、堀下位の西側にテラス状の段を持つ。底は底幅1.0 m程の平底であり、数条の水流痕が確認された。堀底から多くの円礫も検出されている。底の傾斜は北西から屈曲部まで緩やかで、屈曲部から南東にかけて比較的急に上がる。比高差は1.60mであった。検出面からの深さは最も深いところで1.50 m程であるが、平坦面形成の段階で堀上部は攪乱を受けていることから、さらに深かったものと思われる。検出面における最大幅は屈曲部で5.5mであった。

遺物は堀底から土師質土器（49･50･53）、青磁碗（57･59･62）、天目茶碗（65･66）、須恵器(70)や「元豊通宝」(232)、「太平通宝」(224)、「元祐通宝」(234)等の銅銭が検出された。また、埋土の上層（シラス２次堆積土）中からは土師質土器（47･51･52･54･56）、青磁碗（58･60･63･64）、滑石製石鍋（67･68）、瓦質土器［火鉢］(71･72･73･74）、中国産染付皿(216･217)が検出された。その他、調査区北東際の窪み部にシラスがブロック状に混入する黒色土が一部残存していたが、そこから土師質土器(55)が検出された。この黒色土は中世の遺物包含層と思われる。また、表土中からも土師質土器（48）、青磁碗（61）、滑石製石鍋（69）、「崇寧通宝」(237）が検出され、その他に、中国産染付皿（210･211･212･215･219･220）も検出されている。

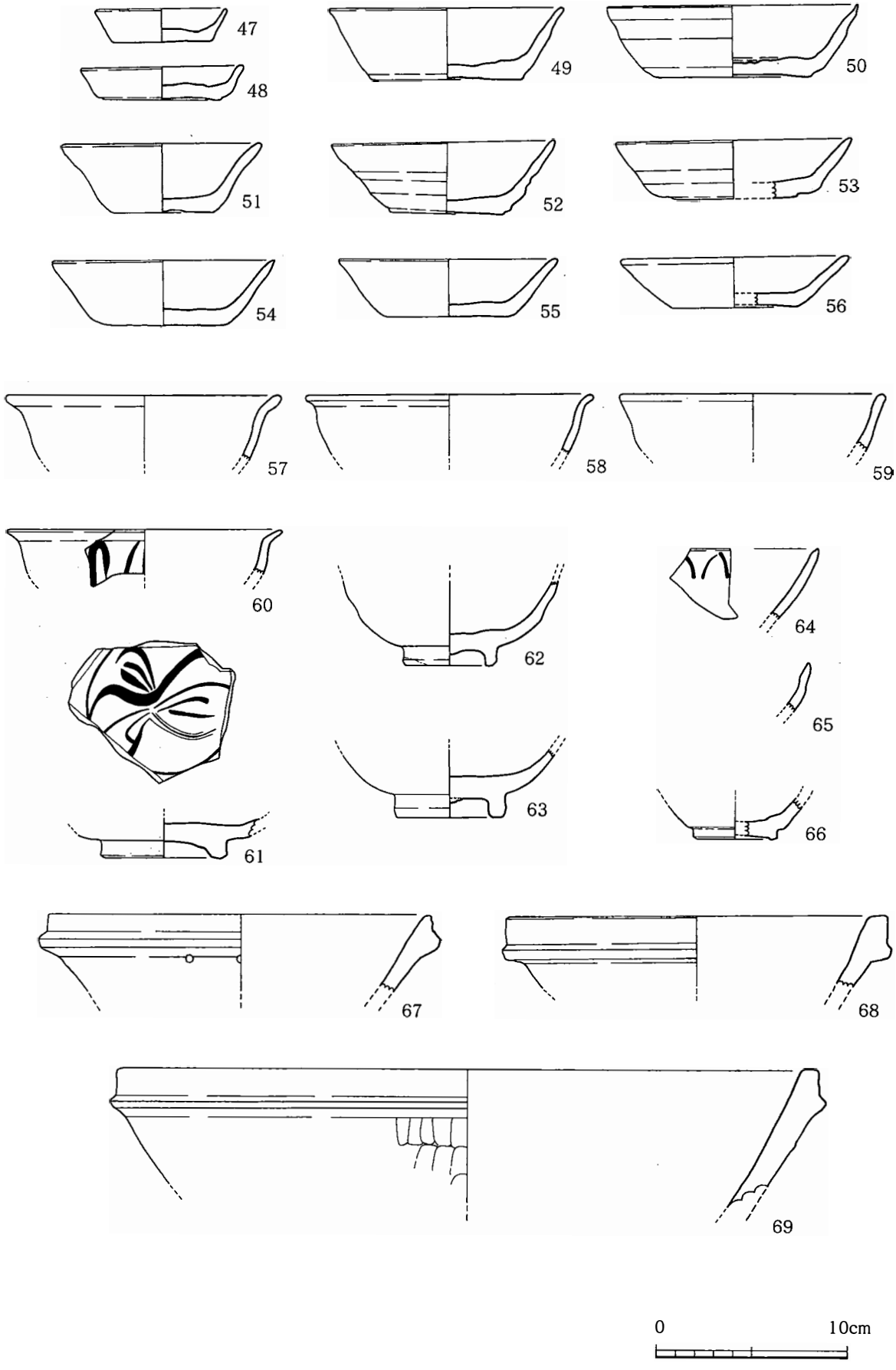
遺構は丘陵主軸に対して直行する竪堀と思われる。弧を描くのは、谷地形をうまく利用して掘削されたためであろう。この竪堀は主軸尾根上にあるⅧ区ＳＤＯ１に繋がる。



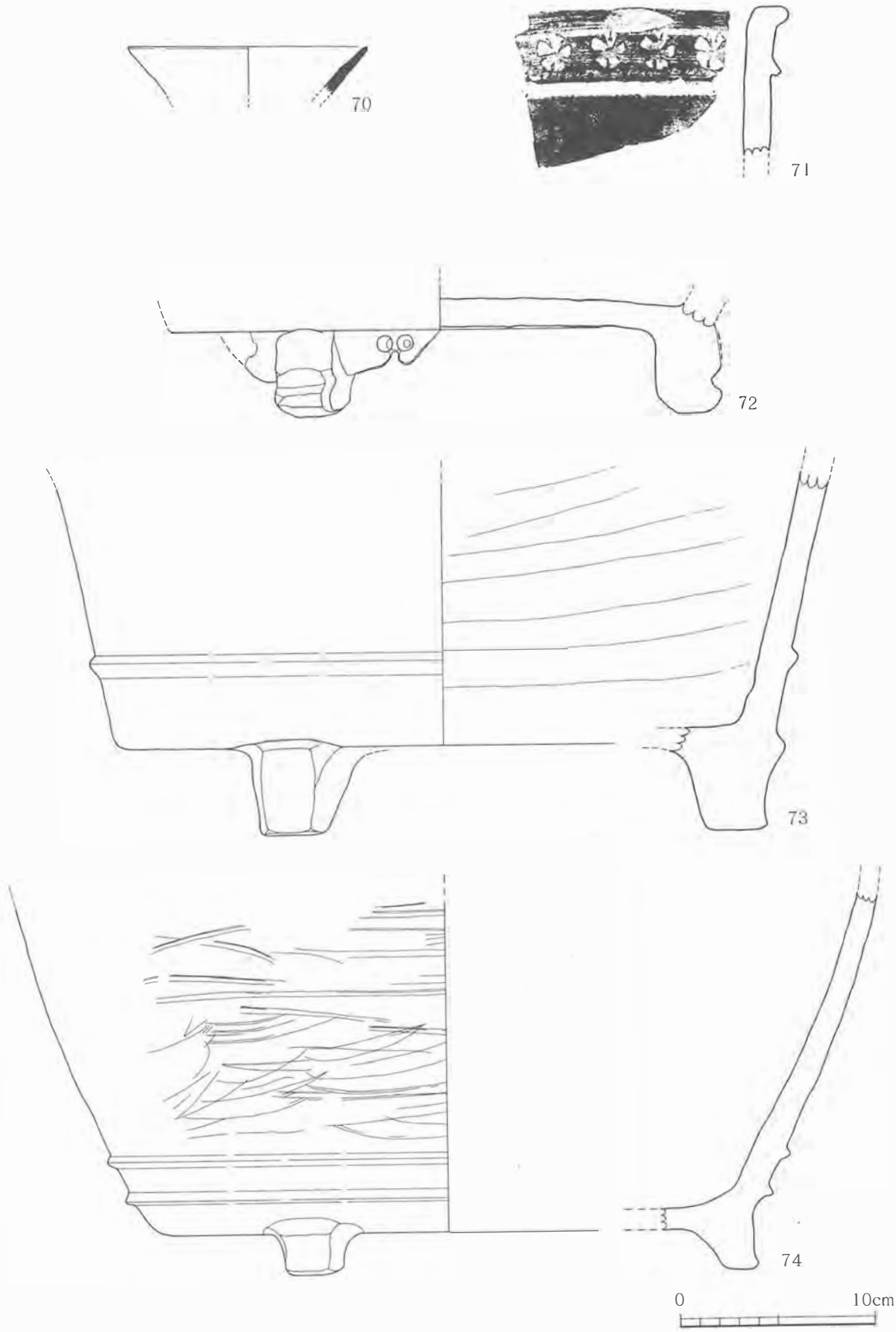
第13図　Ⅳ区ＳＤＯ６遺構断面図

第3表　Ⅳ区ＳＤＯ６土層観察表

1	灰白色土（サラサラ）	5	暗褐色土（アカホヤ、カーボン）	9	暗褐色土（少々粘質）	13	暗褐色土（カーボン少量）
2	灰白色土（大粒の軽石を含む）	6	灰白色土（しまりあり）	10	灰白色土（シラス）	14	暗褐色土（しまりが強い、層状）
3	黒褐色土（カーボン、アカホヤ）	7	黒褐色土（カーボンを含む）	11	灰白色土（サラサラ）	15	暗褐色土（粒が細かい）
4	灰白色土（しまりあり）	8	灰白色土（しまりあり、層状）	12	灰白色土（しまりあり）	16	暗褐色土（円礫、遺物を含む）



第14図　Ⅳ区出土遺物実測図（1）



第15図　Ⅳ区出土遺物実測図（2）

（２）Ⅷ区

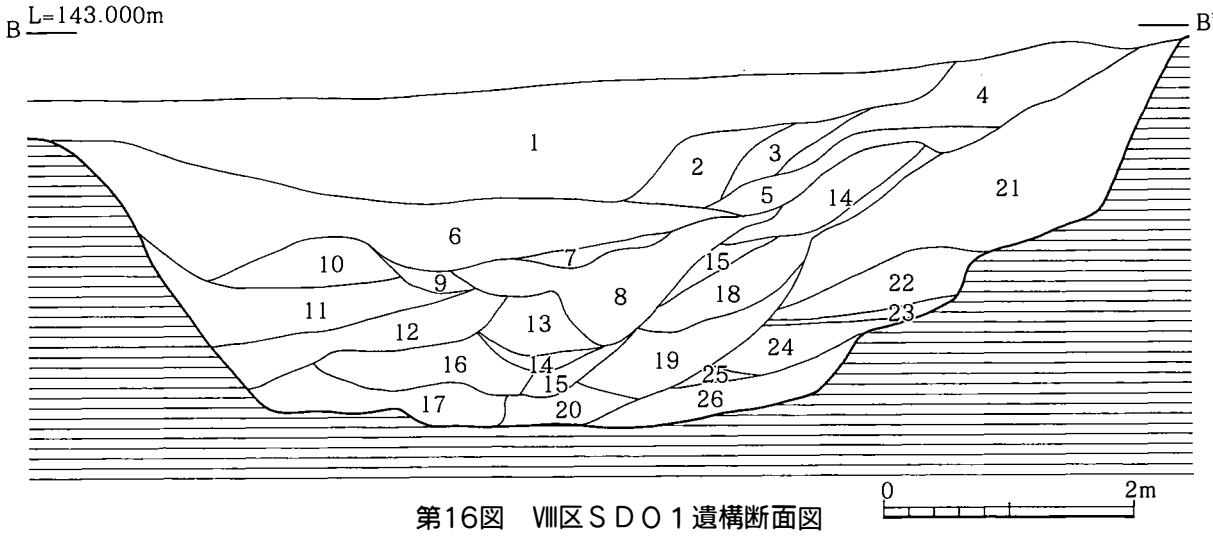
丘陵主軸尾根上の中央窪み部の平坦部に設定した調査区である。調査前は民家の敷地で、また、民家建築に伴う造成により生じた廃土（Ⅳ区南東隅黒褐色土）から江戸時代後期の陶磁器類が多数検出されていることから、近世後期の民家跡の存在も想定できる。よって、その平坦面の形成は近世以降の可能性が高い。中世段階の地形は、丘陵東側高台から急傾斜で下り、西に向かってなだらかに上っていたものと思われる。

［ＳＤＯ１］（第１６図）（第２２図）

調査区北西隅から弧を描きながら南に向きを変え、東側高台の裾部に添いながら南に延びる堀跡である。

断面形状は比較的緩やかな逆台形を呈し、堀下段にテラスを有する。テラス最大幅は屈曲部で1.50 mを測る。底幅は3.80mであった。堀底には水流痕があり、比較的大きな円礫が数点確認された。堀上部は攪乱を受けており、検出面における堀幅は7.10m、深さは3.20mであった。底の傾斜は北西から屈曲部までは比較的急傾斜で上るが、屈曲部から南は中央まで緩やかに上り、中央から南は緩やかに下るようである。

遺物は埋土中の黄褐色粘質土、赤褐色粘質土やシラスがブロック状に混入する暗褐色土中から土師質土器(75･76･77･78･83･84･85)、瓦質土器［壺］(94)、瓦質土器［火鉢］(92)、須恵器［壺］(91)、青磁碗(97･98･101･102)、天目茶碗(100)が検出された。この層は人為的な攪乱土と思われ、後世の平坦面造成の際に生じた土でⅧ区近辺の土を埋め戻したものと思われる。その上層からは土師質土器(80)が検出されている。また、南側トレンチの底近くの埋土（シラス）から土師質土器(82･86･87･89)、瓦質土器［鉢］(95)が検出されている。その他、Ⅷ区の表採遺物として青磁碗(96)、青磁皿(99)、中国産染付皿(213)が見つかっている。



第16図　Ⅷ区ＳＤＯ１遺構断面図

第4表　Ⅷ区ＳＤＯ１土層観察表

1	暗褐色土（整地層）	8	暗褐色土（褐色粘質土）	15	赤褐色土（粘質）	22	灰白色土（しまり強し）
2	灰白色土（柔らかい）	9	暗褐色土（柔らかい）	16	暗褐色土（黄褐色粘質土）	23	暗褐色土（しまり強し）
3	灰白色土（少々しまりあり）	10	灰白色土（しまりが強い）	17	暗褐色土（混入物が少ない）	24	灰白色土（しまり強し）
4	灰白色土（軽石、	11	灰白色土（柔らかい）	18	灰白色土（明褐色粘質土）	25	暗褐色土（しまり強し）
5	灰白色土（褐色粘質土）	12	灰白色土（黄褐色ブロック）	19	灰白色土（シラス）	26	暗褐色土（柔らかい）
6	灰白色土（柔らかい）	13	灰白色土（柔らかい）	20	灰白色土（明褐色粘質土）		
7	灰白色土（柔らかい）	14	黒褐色土（シラス、	21	灰白色土（シラス）		

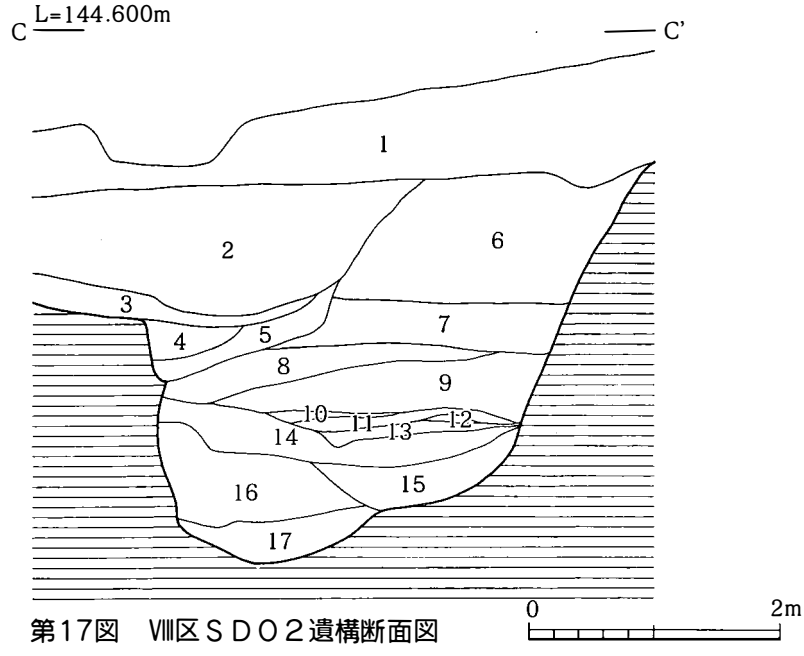
水道管が調査区中央に埋設されていた関係上全掘はできなかったが、主軸尾根を南北に分断する堀切と思われる。屈曲を伴うのは浅い谷という地形をうまく利用しての掘削だったからであろう。また、Ⅳ区ＳＤＯ６東端とＳＤＯ１西端がつながることから丘陵裾部からの竪堀であった可能性も考えられる。

［ＳＤＯ２］（第１７図）（第２２図）

調査区（Ⅷ区）北壁から南方向に延びる堀跡である。１ｍ程先でＳＤＯ１と繋がるが、残念ながら調査においてＳＤＯ１との切り合い関係は確認することができなかった。

断面形状は円筒形を呈し、底部は丸底である。堀下位に幅62.0cm程のテラスを有する。検出面からの深さは3.15ｍである。底の傾斜は南から北に緩やかに下っていたが、調査箇所が限られていたため確認できなかった。

錦町教委の調査においてＩ区北西下の竪堀状遺構がＳＤＯ２の北側で確認されていたが、隣接していることからその溝に繋がる可能性が高い。またＳＤＯ１とⅧ区で交差する同時期の堀である可能性もあり、ＳＤＯ１との繋がりから東側高台を区画する「堀切」の延長線上に捉えても良いだろう。



第17図　Ⅷ区ＳＤＯ２遺構断面図

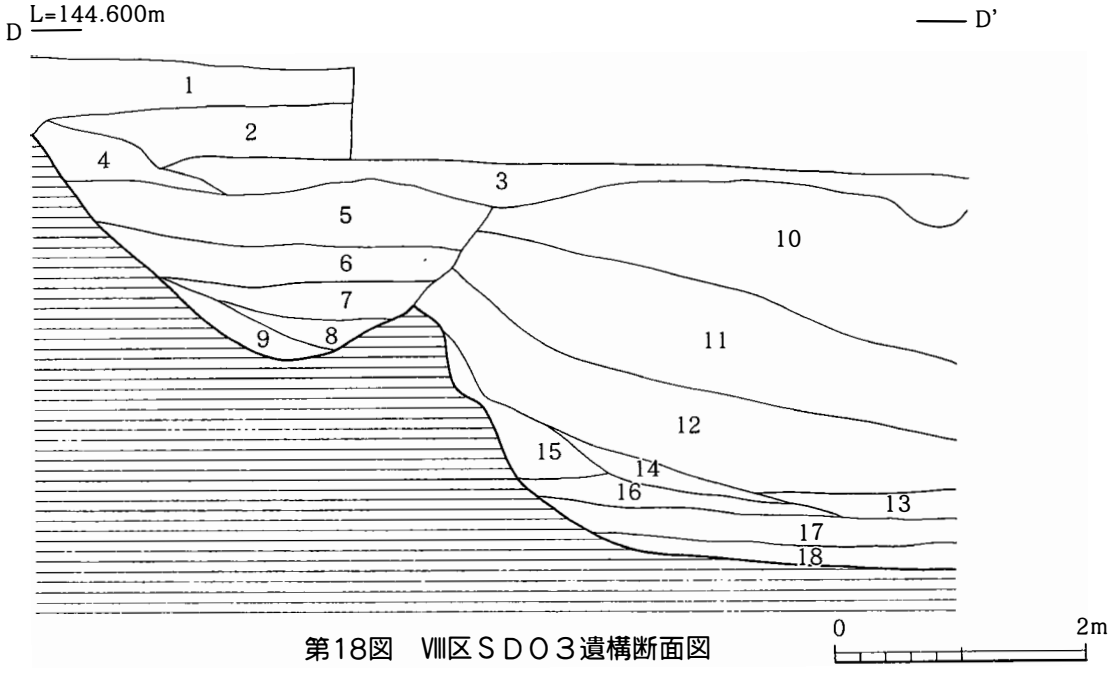
第5表　Ⅷ区ＳＤＯ２土層観察表

1	暗褐色土（表土）	6	灰白色土（柔らかい）	11	暗褐色土（粘質、カーボン）	16	灰白色土（柔らかい）
2	灰白色土（褐色ブロック）	7	黄褐色土（砂質、しまり強し）	12	明黄褐色土（砂質、しまり強し）	17	灰白色土（砂質、しまり強し）
3	黒色土（シラス、しまりあり）	8	淡黄褐色土（サラサラ）	13	暗褐色土（粘質、カーボン）		
4	暗褐色土（黄褐色粘質土）	9	明黄褐色土（砂質、しまり強し）	14	灰白色土（砂質、しまり強し）		
5	灰白色土（柔らかい）	10	灰白色土（柔らかい）	15	灰白色土（柔らかい）		

［ＳＤＯ３］（第１８図）（第２２図）

東側高台の南斜面裾部に拡がる帯状の平坦部（Ⅷ区東側）において、ＳＤＯ１の延びを確認するトレンチを南北に設定した際に検出された東西方向に延びる堀跡である。ただし、南側は急斜面となっており、下方に民家があったことから危険防止のため南側は掘り残して調査を進めた。

堀の断面形状は、検出面からの深さ4.30ｍの逆台形を呈する。ただし、北側の立ち上がりは攪乱を受け確認できなかった。底幅は先の理由により南側の立ち上がりを確認できなかったため不明であるが、少なくと



第18図　Ⅷ区ＳＤ０３遺構断面図

第6表　Ⅷ区ＳＤ０３土層観察表

1	黒褐色土（表土）	6	褐色土（層状をなす）	11	暗褐色土（黄褐色ブロック、カーボン）	16	黄褐色土（黄褐色ブロック）
2	暗褐色土（軽石）	7	褐色土（暗め）	12	暗褐色土（少々しまりあり）	17	暗褐色土（カーボン）
3	暗褐色土（軽石、カーボン）	8	茶褐色土（粘質）	13	灰白色土（黄褐色ブロック）	18	黒褐色土（カーボン多量）
4	淡黄褐色土（シラス）	9	灰白色土（シラス）	14	黒褐色土（カーボン）		
5	褐色土（湿っぽい）	10	明褐色土（黄褐色ブロック）	15	灰白色土（サラサラ）		

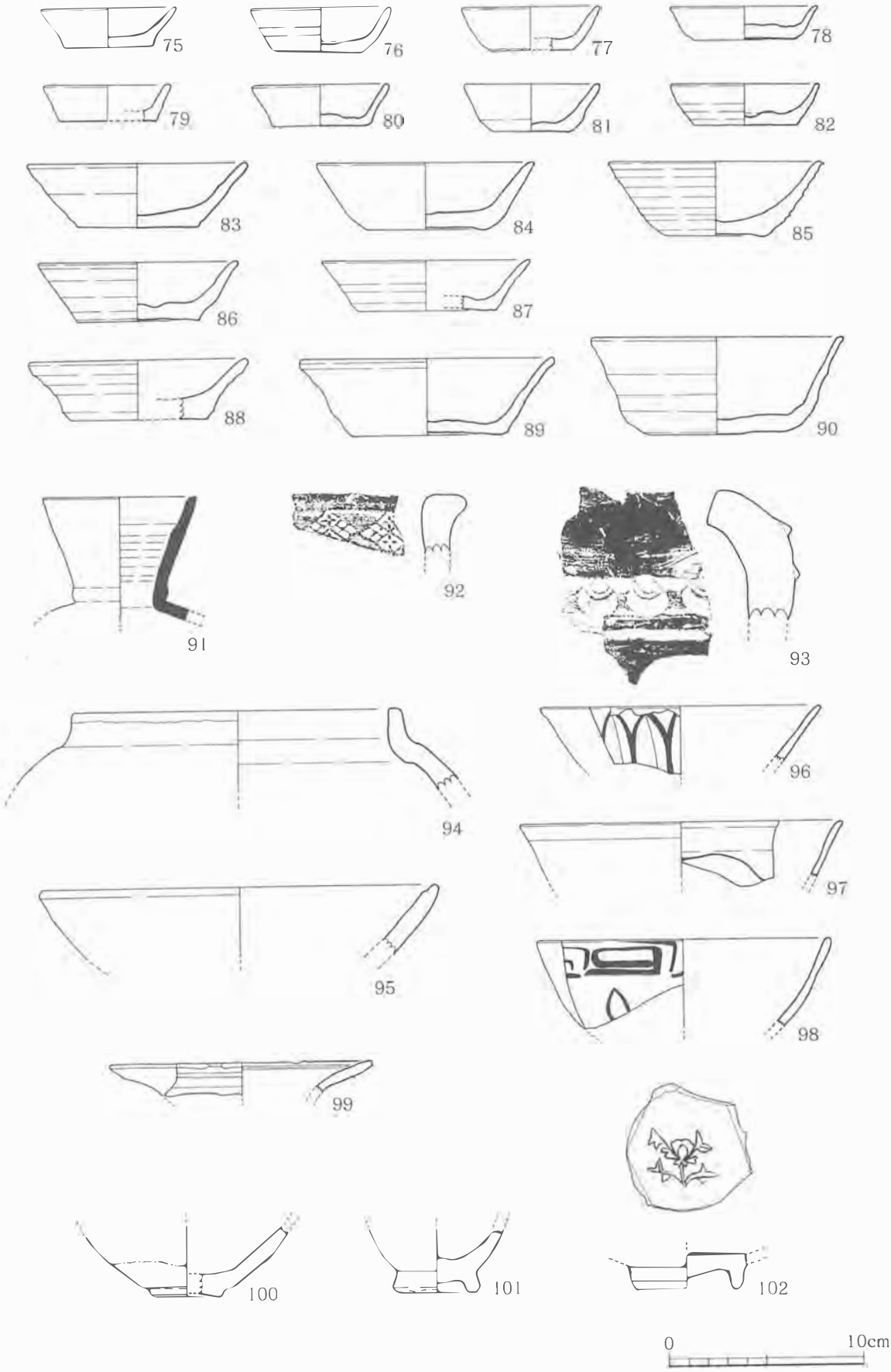
も2.56mまでは確認された。

遺物は底近くの黒褐色の埋土から土師質土器（79･81･88･90）、瓦質土器［火鉢］（93)が検出された。これらの遺物は北側からの流れ込みと思われる。

南斜面部が間近にあるため敢えて堀状に掘削せず、南斜面を利用したテラス状に削りだした遺構の可能性も考えられる。残念ながら、ＳＤＯ１との関連は確認できなかった。

その他、Ⅷ区東端に五輪塔３個体程の残欠がばらばらに３基積み上げられていた。これらは地元の方の話によれば丘陵東側高台における畑作業中掘り起こされたもので、地元の方によって祀られていた。梵字を四方に刻む凝灰岩製の精緻な作りのものと風化して粗雑のものの２つのタイプに分かれていた。

東側高台といえば蔵城丘陵の中でも西側高台と並んで最も高い箇所で、そこで五輪塔が出土しているという事実は非常に興味深い。東側高台が中世のある時期に墓所として利用されていたものと思われる。



第19図　Ⅷ区出土遺物実測図

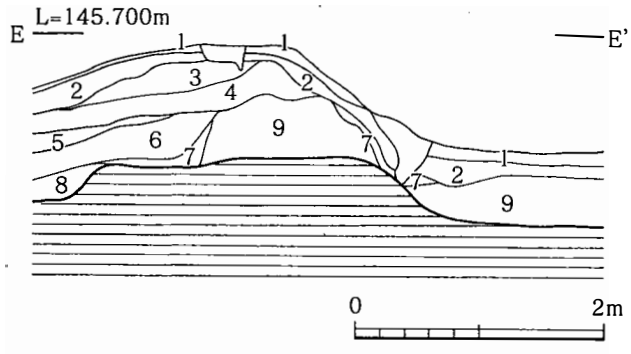
（３）南側土塁（第２０図）（第２２図）

丘陵主軸尾根上のⅧ区南際に位置する東西方向に延びる土塁である。これより北側にはⅧ区の平坦面造成の際に生じた落差のある段落ちがあり、Ⅷ区から眺めると大きな土塁に見えるが、この段落ちは近世以降の開削によるものである。

西側は高台（Ⅵ区）際で仕切られており、東側の延びは判然としなかったが、残存部における全長は21.70m程である。土塁の断面形状は、南に向けて比高差0.80mで緩やかに上り、幅１.30mの平坦面から緩やかに南側に下り、１.８０m先から急斜面へと移行する。盛土の堆積状況は、シラス地山をベースにしまりのある土を整然と積み上げていた。南側2.０m程下ったところに小面積の平坦面が形成されていたが、Ⅷ区平坦面の造成の際に生じた廃土により形成されていたことが調査の結果判明した。もともとの地形は丘陵裾部まで急斜面となる。

遺物は土塁付近の表土中から土師質土器（103）、青磁碗（104･105）が検出されたが、土塁の時期との関連は判然としない。

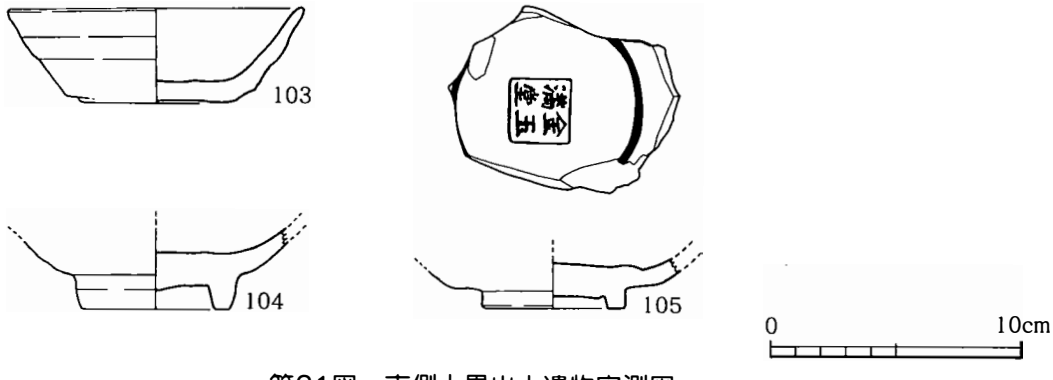
その他、北側平坦面残存部に石塔残欠と思われる石材で構成された集石が確認されたが、混入遺物から江戸後期の遺構と推定される。地元の住民は「山伏」さんの墓と呼んでいたが、墓壙は確認されなかった。



第20図　南側土塁遺構断面図

第7表　南側土塁土層観察表

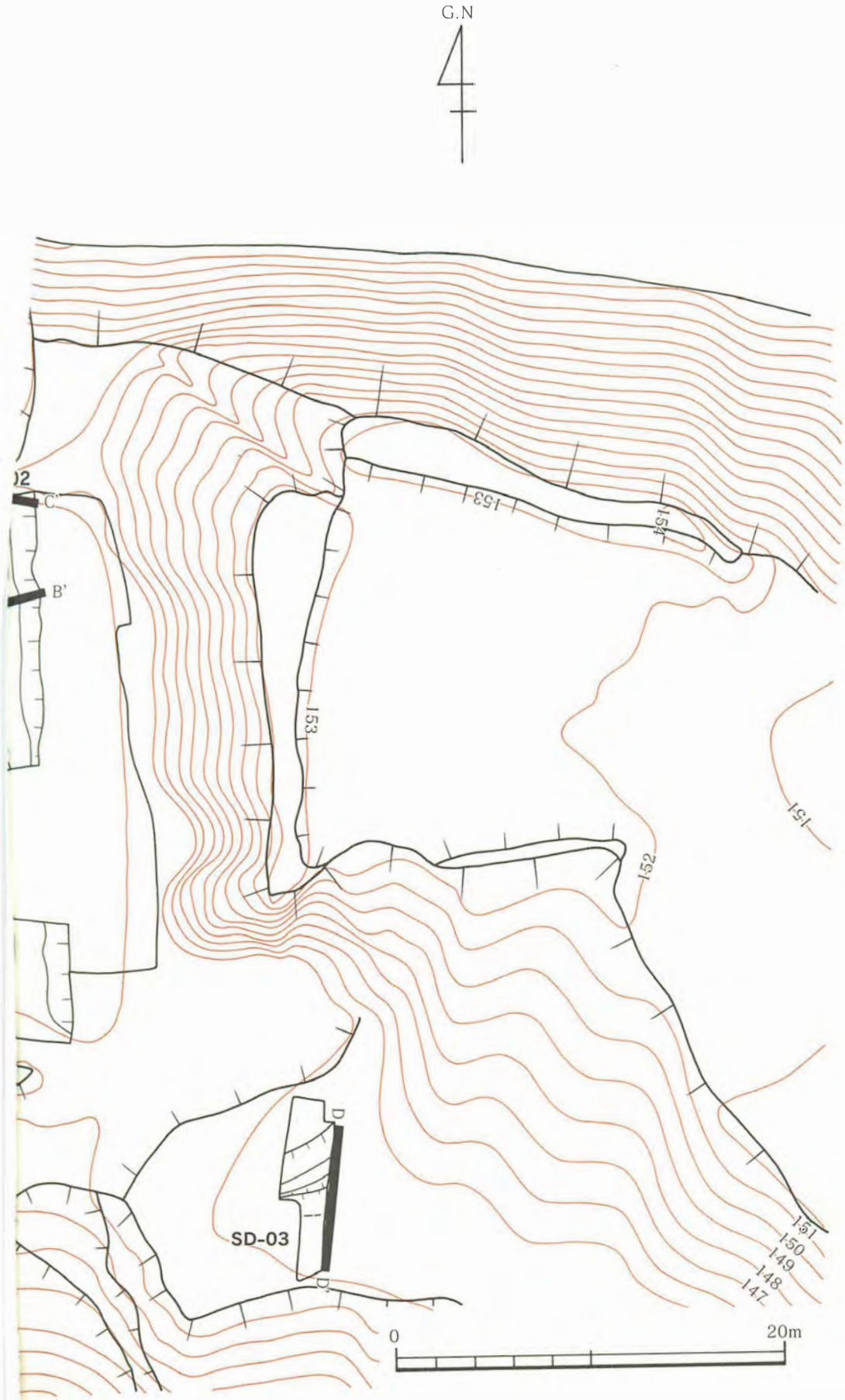
1	黒色土（表土）	4	暗黄褐色土（しまり強し）	7	暗褐色土（シラス）(地山)
2	暗黄褐色土（シラス）	5	灰白色土（黄褐色ブロック）	8	灰白色土（サラサラ）(地山)
3	黄褐色土（しまり強し）	6	暗褐色土（しまりあり）	9	灰白色土（地山）



第21図　南側土塁出土遺物実測図

IV区
SD-06
SD-01
VIII区
南側土塁
A
A'
B
C
E
E'
138
137
136
135
139
140
141
142
143
144
145
146
147

第22図



遺構配置図（1）

（4）Ⅶ区

丘陵主軸尾根上の西側高台（Ｖ区）東側裾部にある平坦部に設定した調査区である。中世の遺物包含層と思われる黒褐色土中にシラスが混入する層も谷部に一部残存していたが、民家に伴う整地層で攪乱を受けた状況にあった。この平坦面もまた近世以降の開削によるものである可能性が極めて高い。中世段階における地形は丘陵西側高台から急傾斜で東側に下り、そこから緩やかにⅧ区に移行していたものと思われる。

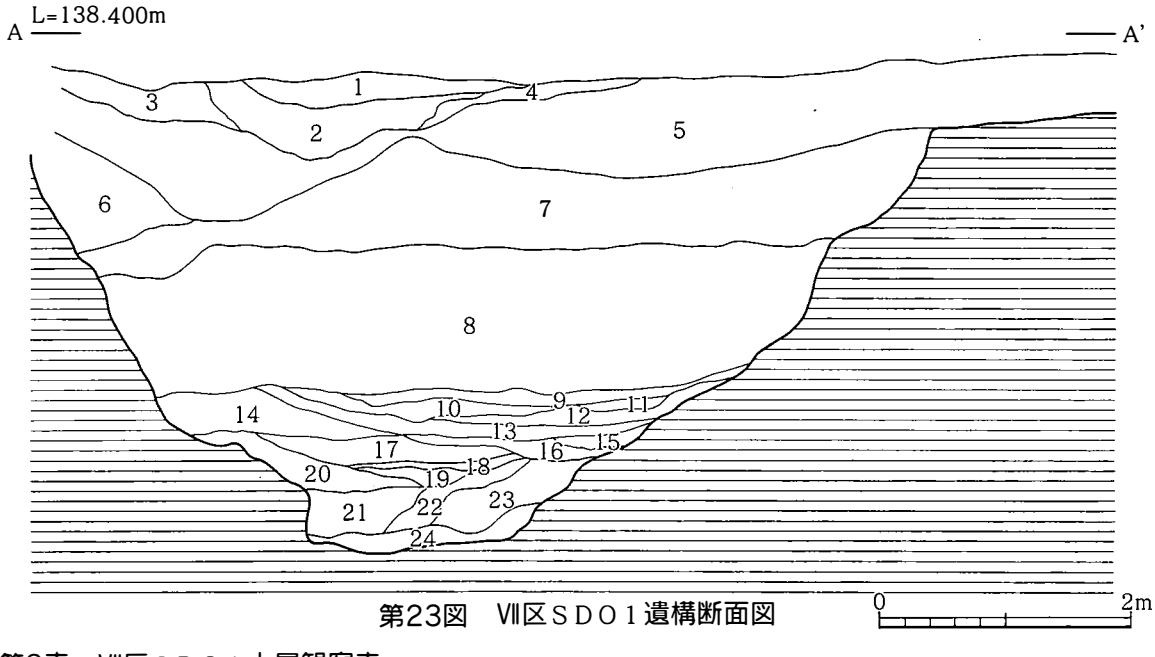
［ＳＤＯ１］（第２３図）（第２９図）

調査区の西端、丘陵西側高台（Ｖ区）東側裾部に添い、南から北に向かって下る堀跡である。北側の残存は良好であるが、南側は先述の開削の影響を受けて堀上部はかなり削られているものと思われる。

断面形状はなだらかなＶ字形を呈し、堀下位に最大幅3.80ｍのテラスを有した平底である。北側壁面で深さ3.78ｍ、底幅1.58ｍで、検出全長は13.50ｍを測る。また堀上端の検出面における最大幅は約11.0ｍと広い。堀底には水流の痕跡があり、比較的小さな円礫が数点検出された。

遺物は底から青銅製小碗、土師質土器（115･117･120･121）、須恵器［すり鉢］(126)、青磁碗（110）、「元祠通宝」(233)が検出された。その他、埋土上層（シラス）からは土師質土器（116･118･123･124）、須恵器［すり鉢］(125･128)、瓦質土器［火鉢］(129･130･132)［鍋］(131)、青磁碗（112･113）が検出された。また、西側高台から混入されたものと思われるが、西側の壁際からは土師質土器（119･122)、瓦質土器［すり鉢］(127)、青磁碗（111）が検出された。Ⅶ区表土中から検出された遺物として青磁大盤（114）、「開元通宝」(222)、中国産染付皿（218）がある。

この堀跡は主軸尾根に対して直行して北側に延びており、その始まりはⅦ区付近と思われることから、中世城における竪堀の機能を有していたものと思われる。また、青銅製の碗が検出された堀底付近には、獣骨と思われる骨片が散乱していたことも記しておく。



第23図　Ⅶ区ＳＤＯ１遺構断面図

第8表　Ⅶ区ＳＤＯ１土層観察表

1	黄褐色土（廃土）	7	灰白色土（少々しまりあり）	13	灰白色土（柔らかい）	19	灰白色土（柔らかい）
2	灰白色土（柔らかい）	8	灰白色土（明るめ）	14	灰白色土（サラサラ）	20	褐色土（しまりあり）
3	暗黄褐色土（柔らかい）	9	灰白色土（黄褐色ブロック）	15	灰白色土（しまりあり）	21	灰白色土（柔らかい）
4	灰白色土（暗め）	10	灰白色土（サラサラ）	16	灰白色土（少々粘質）	22	褐色土（しまりあり）
5	灰白色土（柔らかい、暗	11	黄褐色土（サラサラ）	17	灰白色土（小石）	23	灰白色土（柔らかい）
6	灰白色土（柔らかい）	12	灰白色土（黄褐色ブロック）	18	灰白色土（しまりあり）	24	灰白色土（円礫混入）

［ＳＫ０９］（第２４図）（第２９図）

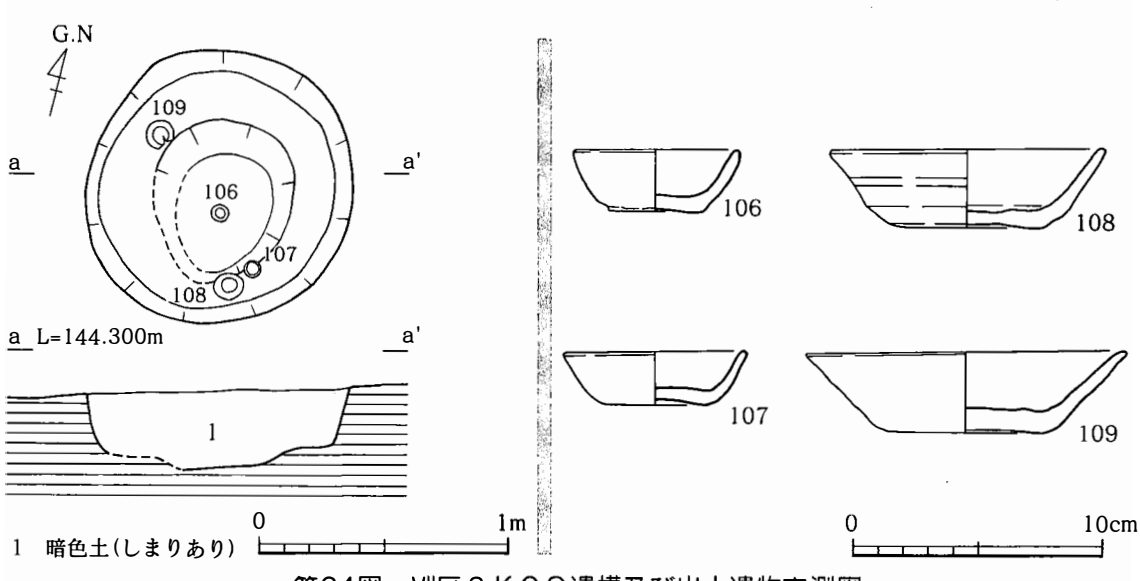
調査区ほぼ中央、ＳＤＯ１の東側に位置する。平坦面造成の影響を受け、削られている可能性があるが比較的良好な状態で検出された。地形的には東側に緩やかな傾斜面を持つ平坦面に位置していたと考えられる。

遺構の形状は、底部中央に浅い堀り込みを有する円形の土壙で、シラス土層に掘り込まれていた。検出面における径は1.05m、底径0.89m、深さ0.31mであった。２段目の掘り込みの径は0.56m、底径0.34mであった。埋土はシラス土の単一層であった。

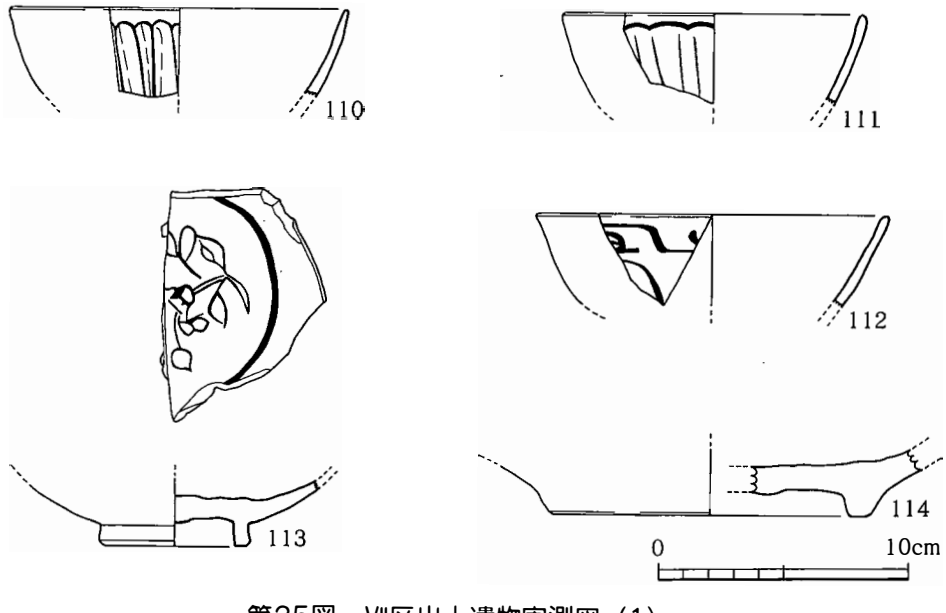
遺物は底近くから土師質土器（106･107･108･109）が検出された。

これらの遺物を副葬品と捉え、掘り返した土が埋土となっていることから、埋葬遺構の可能性が考えられる。ただし、骨等の検出は見られなかった。

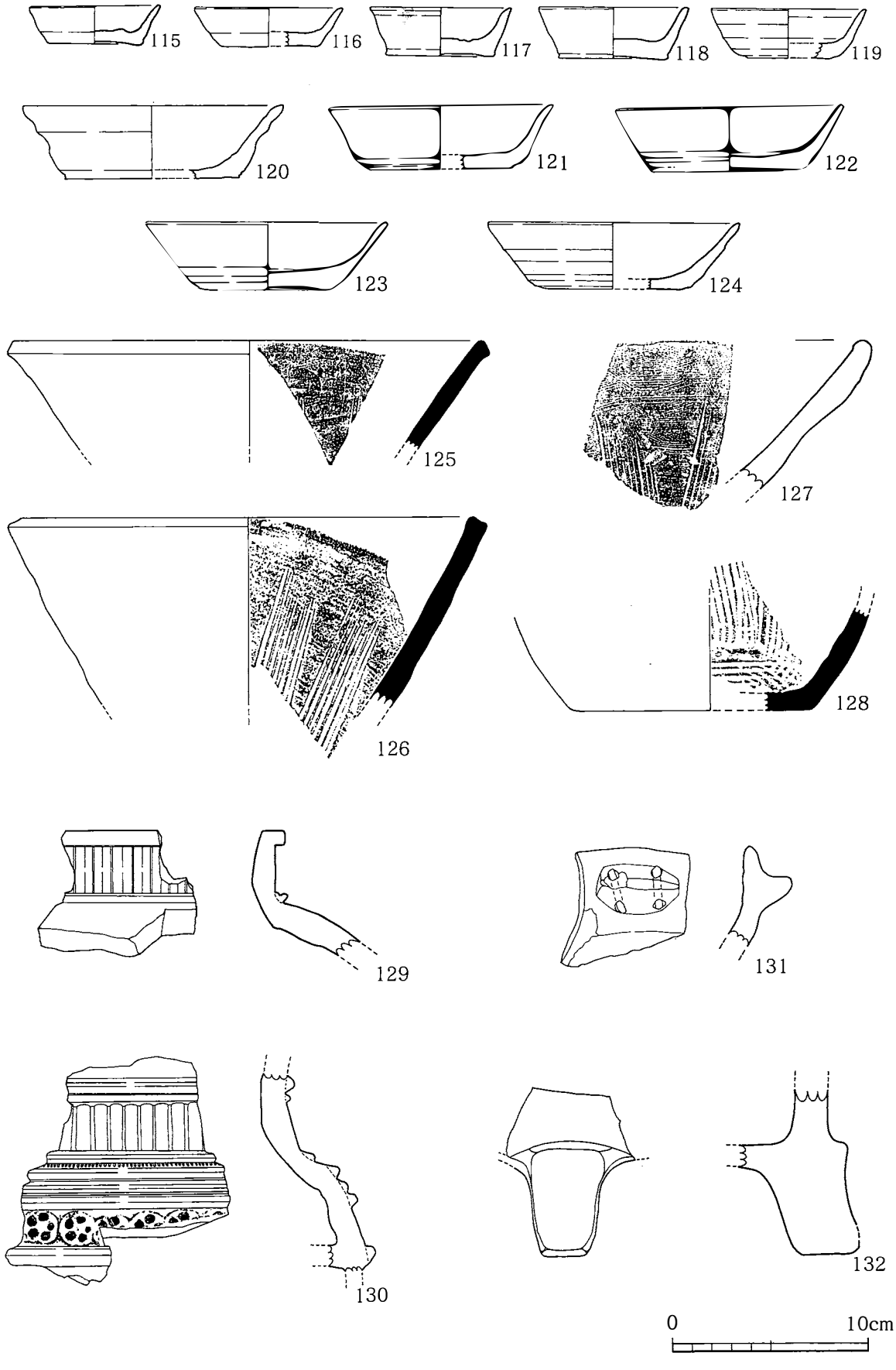
Ⅶ区のその他の遺構としては、調査区東側に土壙群が所在する。密集箇所においては幾重にも切り合っていたが、どれも埋土は黒褐色を呈し、新旧関係が判然としないような状況であった。樹痕の可能性もある。



第24図　Ⅶ区ＳＫ０９遺構及び出土遺物実測図



第25図　Ⅶ区出土遺物実測図（1）



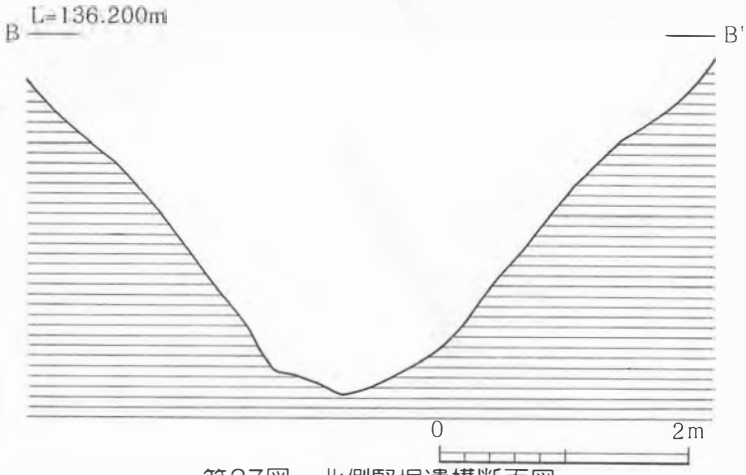
第26図　Ⅶ区出土遺物実測図（2）

（５）北側竪堀（第２７図）（第２９図）

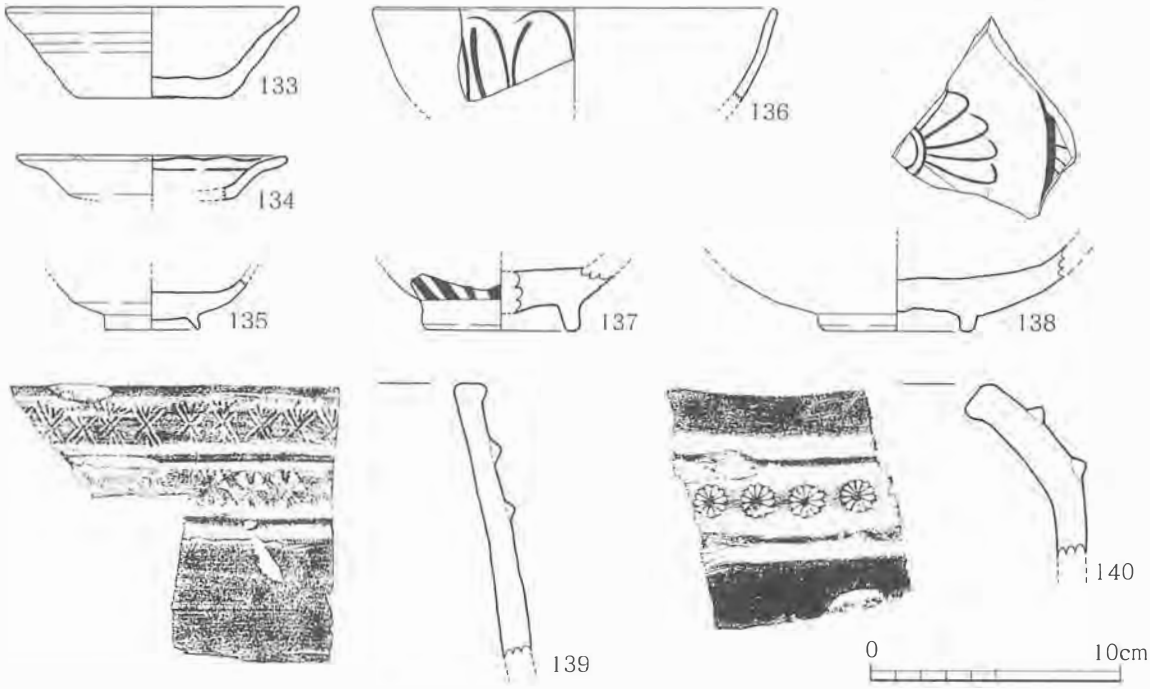
丘陵西側高台（Ⅴ区）の北東側斜面に位置する南北に延びる堀跡である。南側はⅦ区下から、北側は町道（旧県道）に向かって開口する。第２次世界大戦中この丘陵は軍の基地として利用されており、この堀跡から西側に向かって防空壕の出入口が２箇所、北側崩落壁側にも２箇所設けられていた。そのため、人の出入りが多かったらしく、当時にかなりの攪乱を受けたものと思われる。調査前から竪堀と認識できる程堀が深く、両壁が急斜面であったことから広範な調査はできず、北に１本、南に１本のトレンチ調査を行った。南トレンチにおいては防空壕の入口であったこともあり、攪乱を受けて復元不可能な状況であった。

現況の地形から判断して、全長は20.2ｍを測る。断面形状は、幅7.0 ～11.2ｍ、深さ6.50ｍのＶ字形を呈する。堀底は、南から北に向けてなだらかに傾斜していた。埋土は竪堀両壁からの崩落土であった。

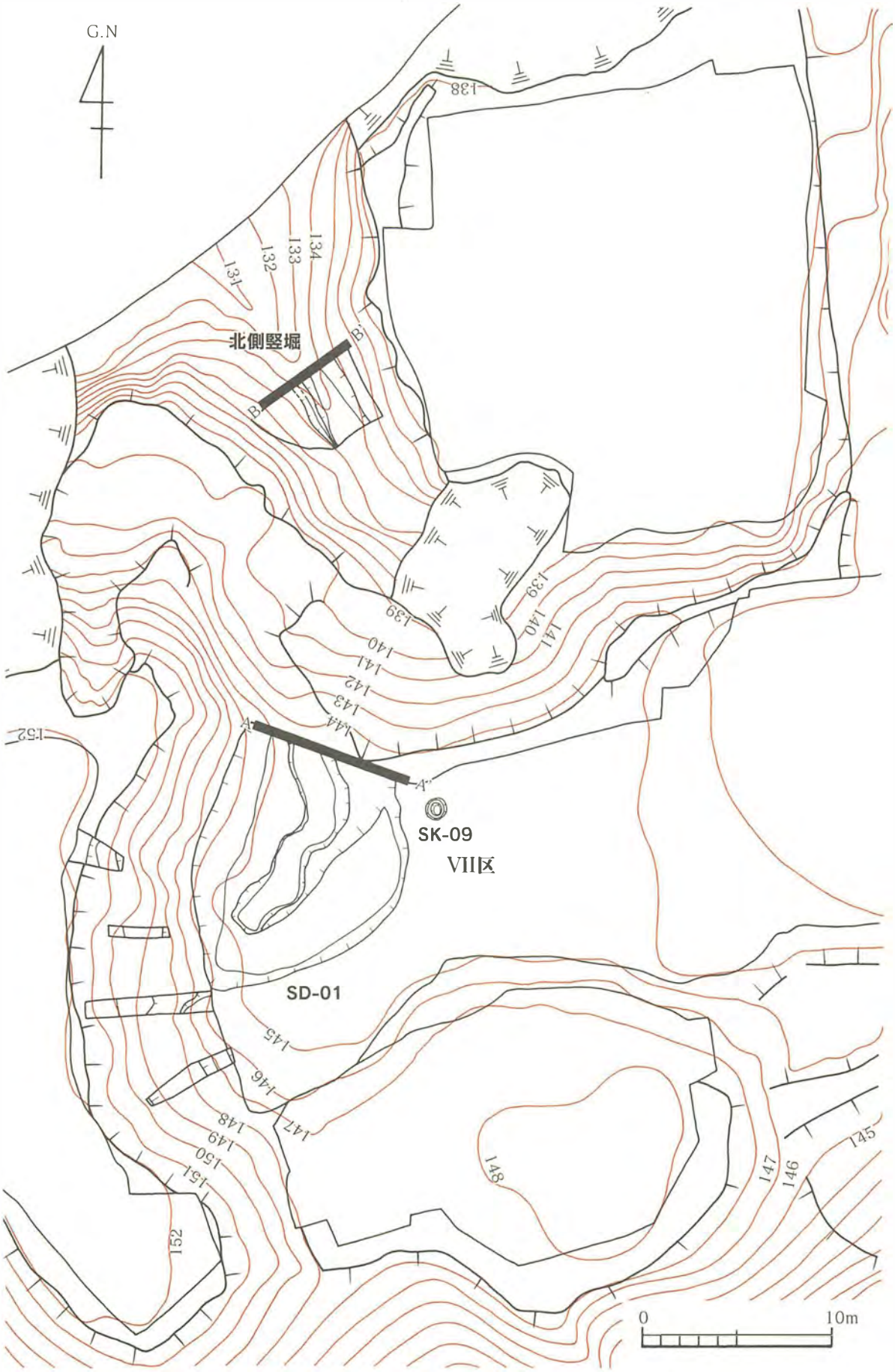
遺物は南側壁際に少し堆積していたシラス土から土師質土器（１３３）、青磁碗（136･137･138）、青磁皿（134）、白磁小碗（135）、瓦質土器［火鉢］(139･140）が検出された。



第27図　北側竪堀遺構断面図



第28図　北側竪堀出土遺物実測図



第29図　中世遺構配置図（2）

（６）Ⅵ区

丘陵西側高台（Ⅴ区）東斜面南側に位置する平坦部に設定した調査区である。丘陵南斜面のちょうど頂部に位置し、南側のⅦ区とは比高差２ｍ程の段丘を呈する。表土の腐植土中にはほとんど遺物が混入せず、調査区北側の傾斜部に中世の遺物包含層が少し残っていたことから、この平坦面の形成も近世以降に行われたものと思われる。

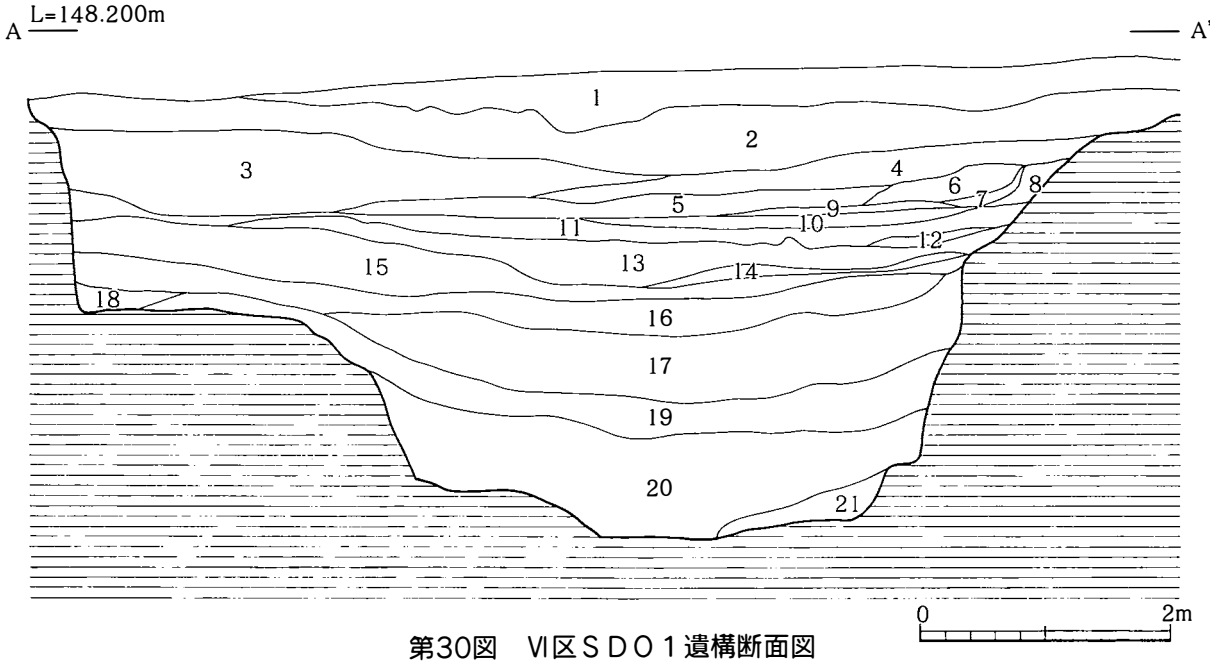
［ＳＤＯ１］（第３０図）（第３７図）

調査区の西際、丘陵西側高台の東斜面南裾部に添い、北から南に向かって延びる堀跡である。

シラスを切り込んだ比較的急な傾斜の堀跡で、検出全長は7.20ｍで底は北から西に向かい階段状の段差を有する。断面形状は逆台形を呈し、検出面における幅6.60ｍ、底幅3.50ｍの平底で深さは南際で4.0ｍを測る。東側は傾斜の違う２段掘り込みを有し、西側は堀中段にテラスを有する。

遺物は堀底からは土師質土器の細片ぐらいで遺物はほとんど見られなかった。埋土のうちカーボンを多量に含む黒褐色土及びその上層の暗褐色土から多量の遺物の検出があった。土師質土器（153･154･155･156･157･158･159･160･161･162）、青磁碗（145･146･147･149）、青磁香炉（148）、青磁大盤（150･151･152）、白磁碗（144）、白磁皿（142)、土錘（179･180)、「五銖銭」(221)、「天聖元宝」(228)が検出された。また、埋土上層の暗褐色土中の遺物集中箇所（掘り込み確認されず）からは土師質土器（164･165･166･168･169･170･171･172･173･174･175）、土錘（177･178）が検出された。この遺物集中箇所からは腐朽がすすみ原形をとどめない銅銭が多数検出された。遺構は確認できなかった。

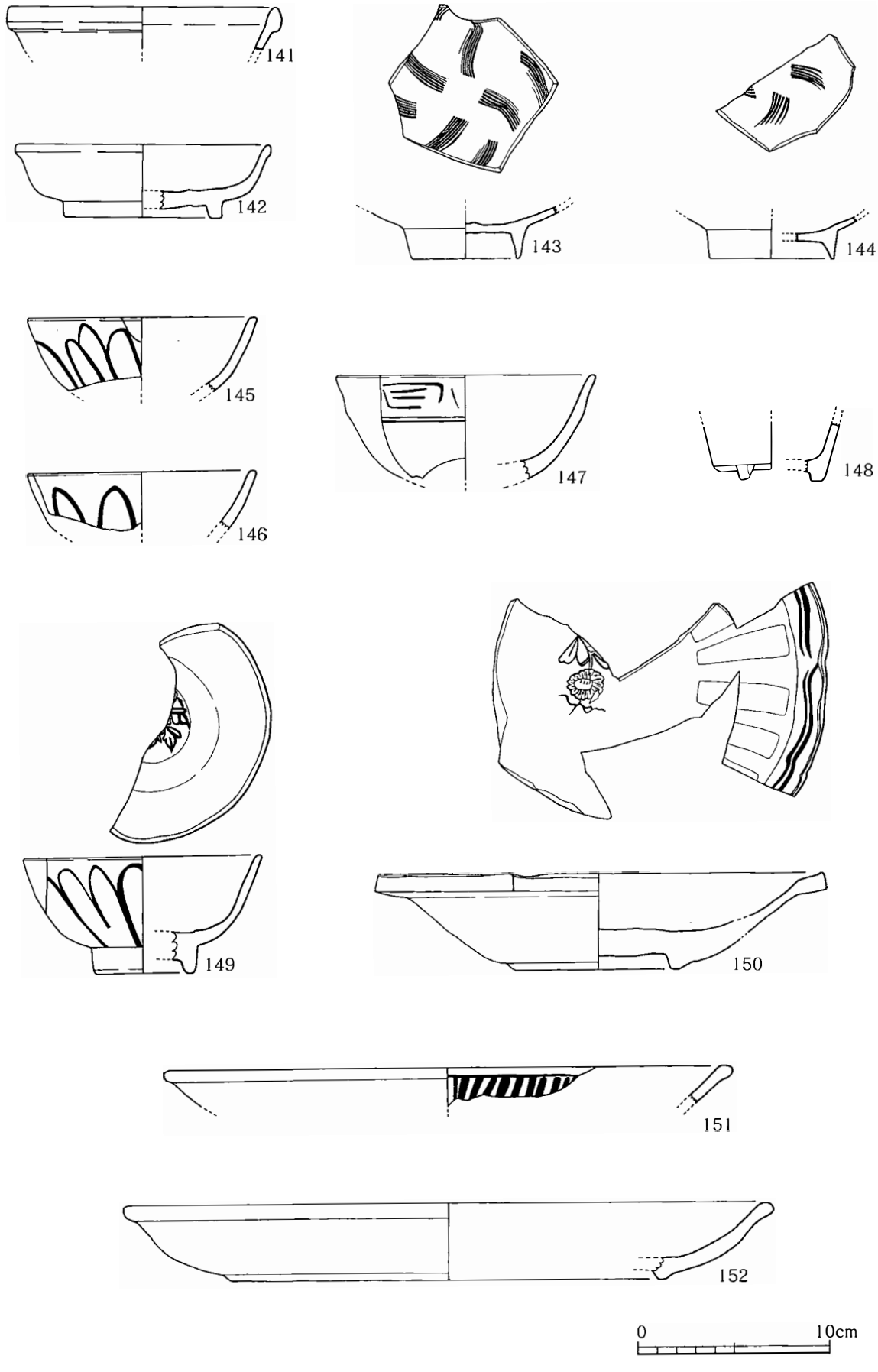
シラスを切り込んだ比較的大規模な竪堀である。Ⅶ区ＳＤＯ１と繋がる可能性もある。



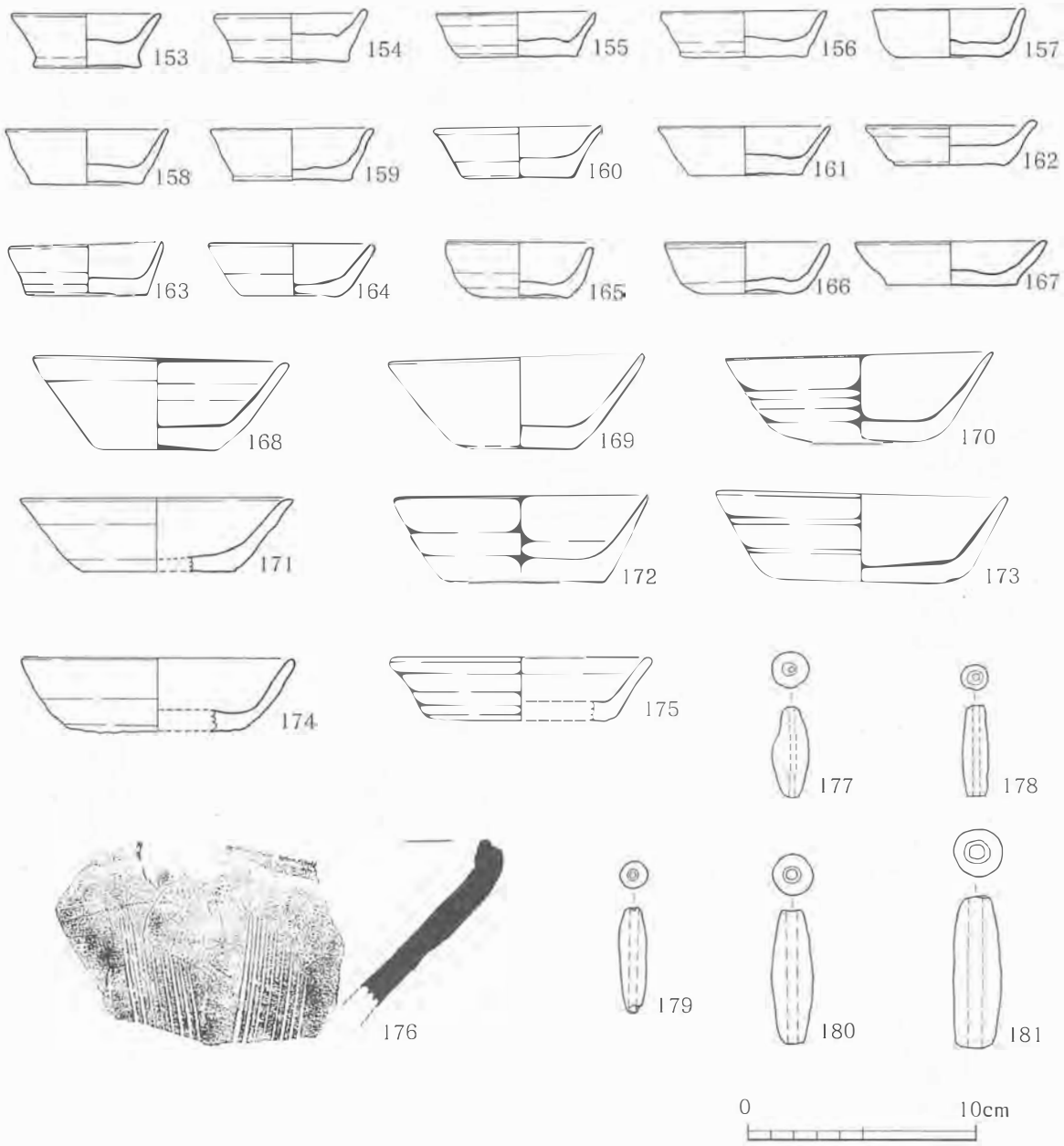
第30図　Ⅵ区ＳＤＯ１遺構断面図

第9表　Ⅵ区ＳＤＯ１土層観察表

1	暗褐色土（表土）	7	暗褐色土（サラサラ）	13	暗褐色土（黄褐色ブロック）	19	灰白色土（黄色が強い）
2	暗褐色土（黄褐色土）	8	暗褐色土（シラス、カーボン少量）	14	黒褐色土（褐色ブロック、しまる）	20	黄褐色土（砂質）
3	暗褐色土（カーボン少量）	9	暗黄褐色土（シラス、サラサラ）	15	灰白色土（シラス）	21	灰白色土（粒が粗い）
4	暗褐色土（カーボン、焼土）	10	灰白色土（カーボン、褐色ブロック）	16	灰白色土（粒が粗い）		
5	黒褐色土（カーボン、焼土）	11	暗褐色土（シラス、カーボン）	17	灰白色土		
6	黒色土（遺物を含む）	12	暗黄褐色土	18	灰白色土（黄色が強い）		



第31図　Ⅵ区出土遺物実測図（1）



第32図　Ⅵ区出土遺物実測図（2）

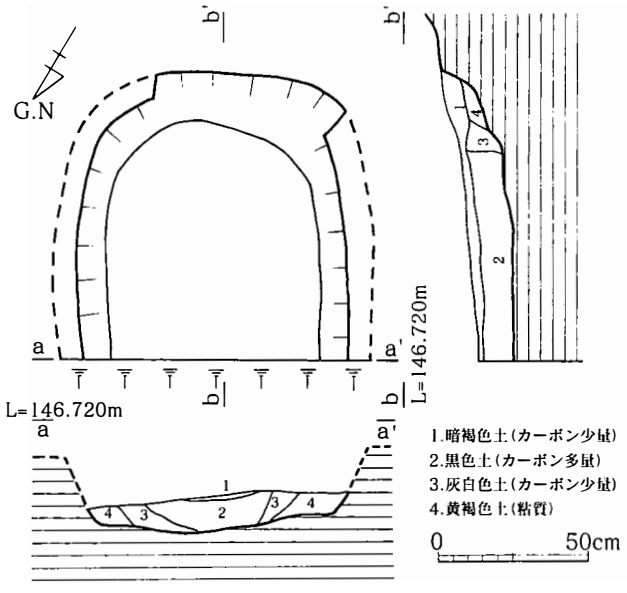
［ＳＸ０３］（第３３図）（第３７図）

ＳＤＯ１の北側際に位置する不明遺構である。ＳＤＯ１の掘削途中シラス地山の段階で検出されたため、上部は掘削中消失してしまった。また、遺構北側はⅦ区平坦面の造成で削られていたため、全体的な構造は判明できなかった。

残存部で推量すると隅丸方形を呈する土壙であったと思われる。検出面からの深さは２９.０cmで、底部は東西幅1.52ｍを測る。南に向かい少し傾斜するようである。遺構壁際から20.0～30.0cm程に黄褐色の粘質土を充填する。その内側の土層からは多量のカーボンが検出された。

遺物は検出面上からは土師質土器（163）、貼り土下から「永楽通宝」(239) ３枚が検出された。

多量のカーボンが検出されていることから「炉」の機能を有する施設と思われる。また、貼り土の下に銅銭を置いていたことは、一種の儀礼的な行為であろう。



第33図　Ⅵ区ＳＸＯ３遺構実測図

その他、
免れた中世の遺物包含層が一部残存していたが、
器［すり鉢］(176)、
宝」(223)が検出された。また、
中からは白磁椀（141)、土
通宝」(225)が検出された。

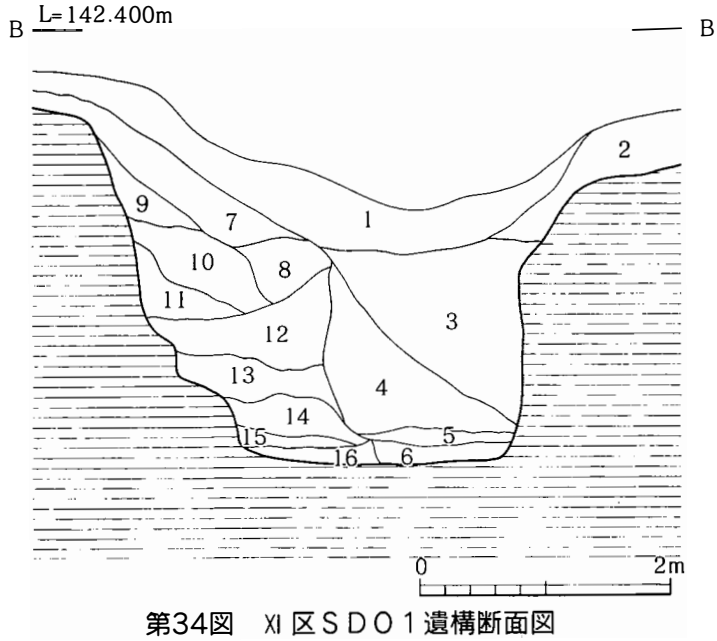
（7）Ⅺ区

丘陵主軸尾根南斜面下に設定した調査区である。人の出入りがほとんど無いためかなり良好な状態で残存していたものと思われるが、

［ＳＤＯ１］（第３４図）（第３７図）

北から南に向かい比較的傾斜のある堀跡である。断面形状は、逆
3.11m、
また、
遺物は埋土中から土師質土器(182)、そ
が検出された。

Ⅵ区ＳＤＯ１の南側に近接していること及び断面形状が近似していることからⅥ区ＳＤＯ１につながる堀跡と思われる。



第34図　Ⅺ区ＳＤＯ１遺構断面図

第10表　Ⅺ区ＳＤＯ１土層観察表

1	黒色土（表土）	5	淡黄褐色土（しまり強し）	9	暗褐色土（しまりあり）	13	暗褐色土
2	暗褐色土（柔らかい）	6	暗褐色土（遺物を含む）	10	淡黄褐色土	14	暗褐色土（しまりあり）
3	暗褐色土（黄褐色ブロック）	7	暗褐色土（柔らかい）	11	淡黄褐色土（柔らかい）	15	暗褐色土（しまりあり）
4	暗褐色土（しまりあり）	8	暗褐色土（少々しまりあり）	12	暗褐色土（円石を含む）	16	暗褐色土（しまり強し）

（８）XII区

丘陵西側高台の南斜面中段に位置する比較的小さな三角形状の平坦部に設定した調査区である。北側は切岸状に削られた急傾斜の壁を為し、南側は尾根づたいになだらかに下る。また、西側は切岸状の急斜面を形成し、丘陵裾部へと至る。地形的に人の手の加えにくい箇所であるため中世段階の景観が程良く残っていた。

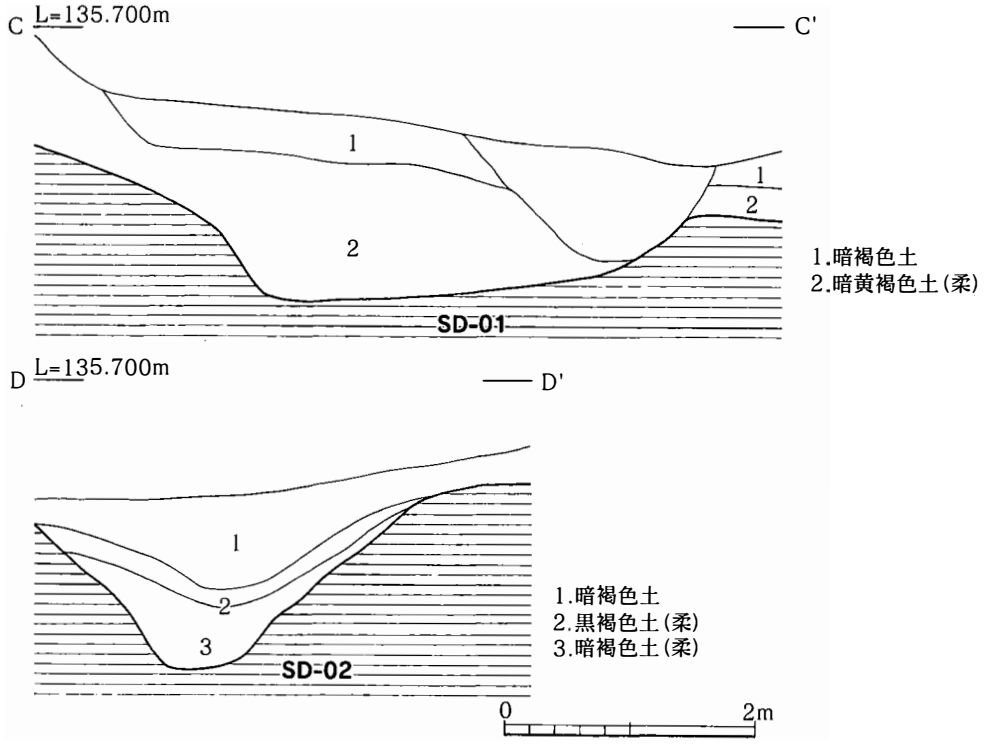
［ＳＤＯ１］（第３５図上）（第３７図）

調査区北東隅より弧を描きながら東側に延びる堀跡である。断面形状は逆台形を呈し、深さは0.67ｍと比較的浅く、底幅は2.79ｍの平底である。硬化面は確認されなかったが、底面を黄褐色の固い地山まで掘り下げられていた。傾斜は比較的きつい。遺物は埋土中から土師質土器（184）が検出された。

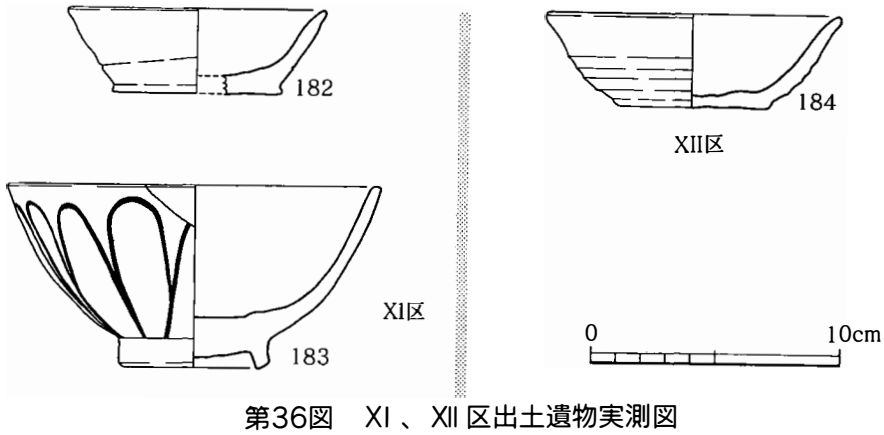
［ＳＤＯ２］（第３５図下）（第３７図）

調査区北西隅から東側に直線的に延びる堀跡である。断面形状はＶ字形を呈し、深さは比較的浅く1.37ｍで、底幅は0.67ｍである。底近くに20.0㎝大の円礫が検出されたが、遺物は検出されなかった。

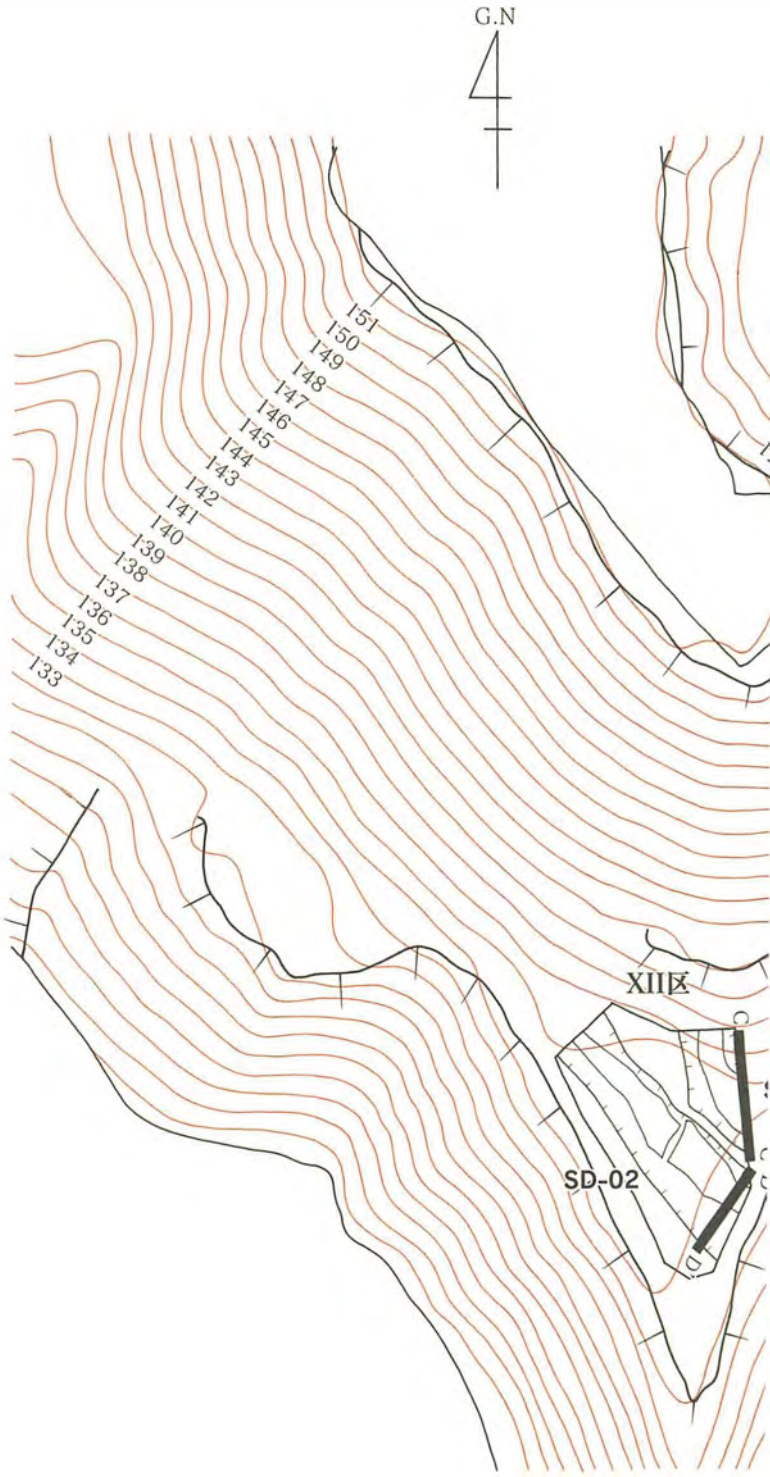
西側に土塁状の盛り上がりを見せることから土塁を削り出すために掘削された堀跡が考えられる。



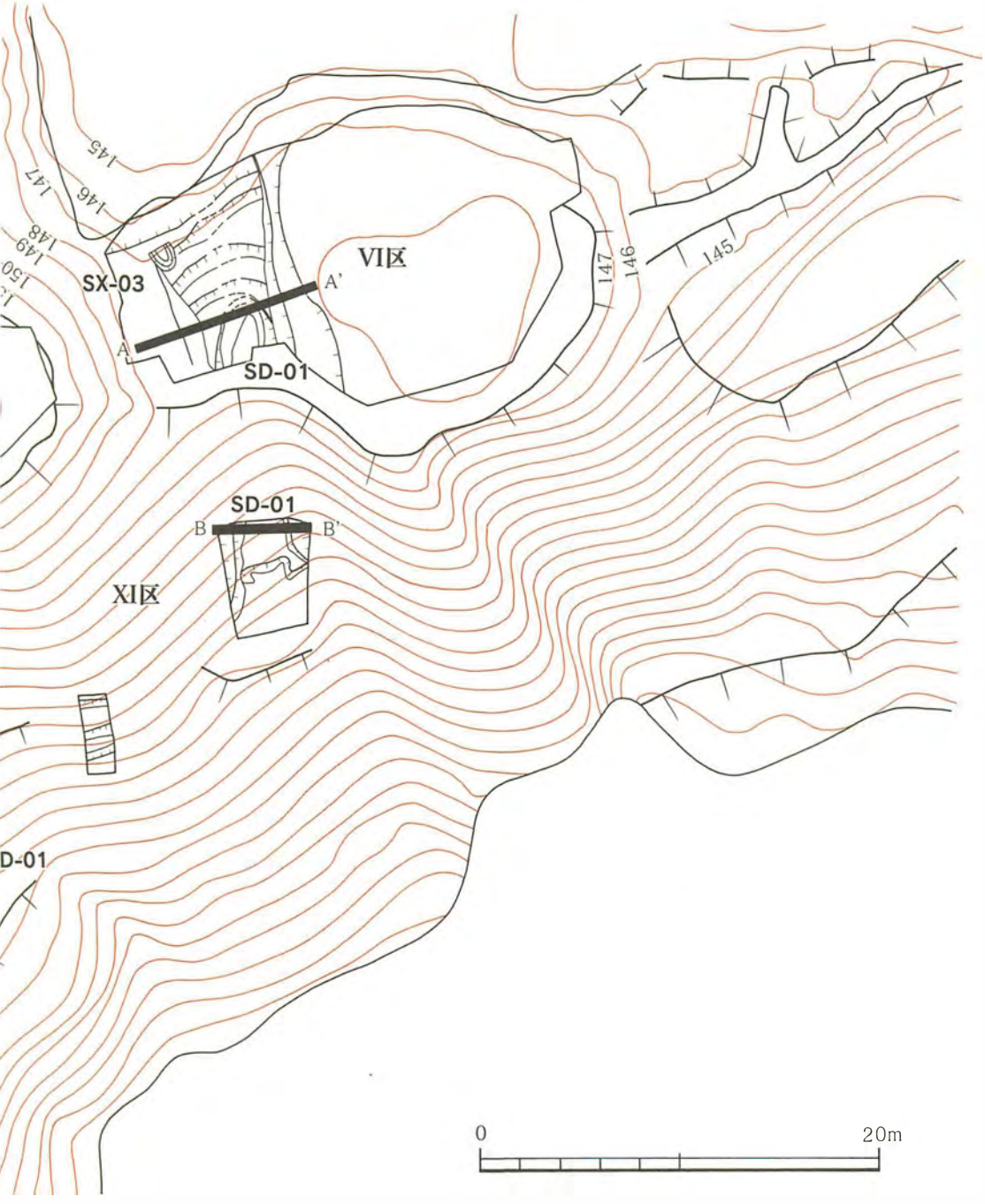
第35図　XII区ＳＤＯ１、Ｏ２遺構断面図



第36図　XI、XII区出土遺物実測図


G.N
151
150
149
148
147
146
145
144
143
142
141
140
139
138
137
136
135
134
133
XII区
SD-02

第37図　中


145
146
147
148
149
150
SX-03
A
A'
VI区
SD-01
147
146
145
SD-01
B
B'
XI区
D-01
0
20m

世遺構配置図（3）

(11) Ｖ区

丘陵主軸尾根上の西側高台に位置する平坦部に設定した調査区である。この調査区は南北に細長い平坦面で北側が広いひょうたん形を呈する。南北43.0m、東西最大幅20.0mを測る。高台の西斜面と東斜面は「切岸」を思わせるほどの急傾斜で裾部に至る。北側は土砂崩落により反り気味に下っている。南斜面も急傾斜を為す。平成3年に調査が終了しているⅠ、Ⅱ区とほぼ同じ高さで、Ⅶ区との比高差8.0mを測る。西側高台は「大土塁」を彷彿させる天然の要害と言える。

平坦地の土砂の堆積状況は表土直下にシラス地山が露出しており、中世遺物の包含層は消失している状況であった。シラス地山まで掘り込んだ畝が数条確認されたことや表土中に混入する遺物がいずれも細片であること、また、調査区南際から「寛永通宝」数枚が検出されたことから、近世段階で畑としての利用があったものと思われる。

この西側高台から中世の遺構として掘立柱建物跡２棟、ピット列（柵跡）２列、土壙１基が検出された。これら遺構の説明を以下に記す。

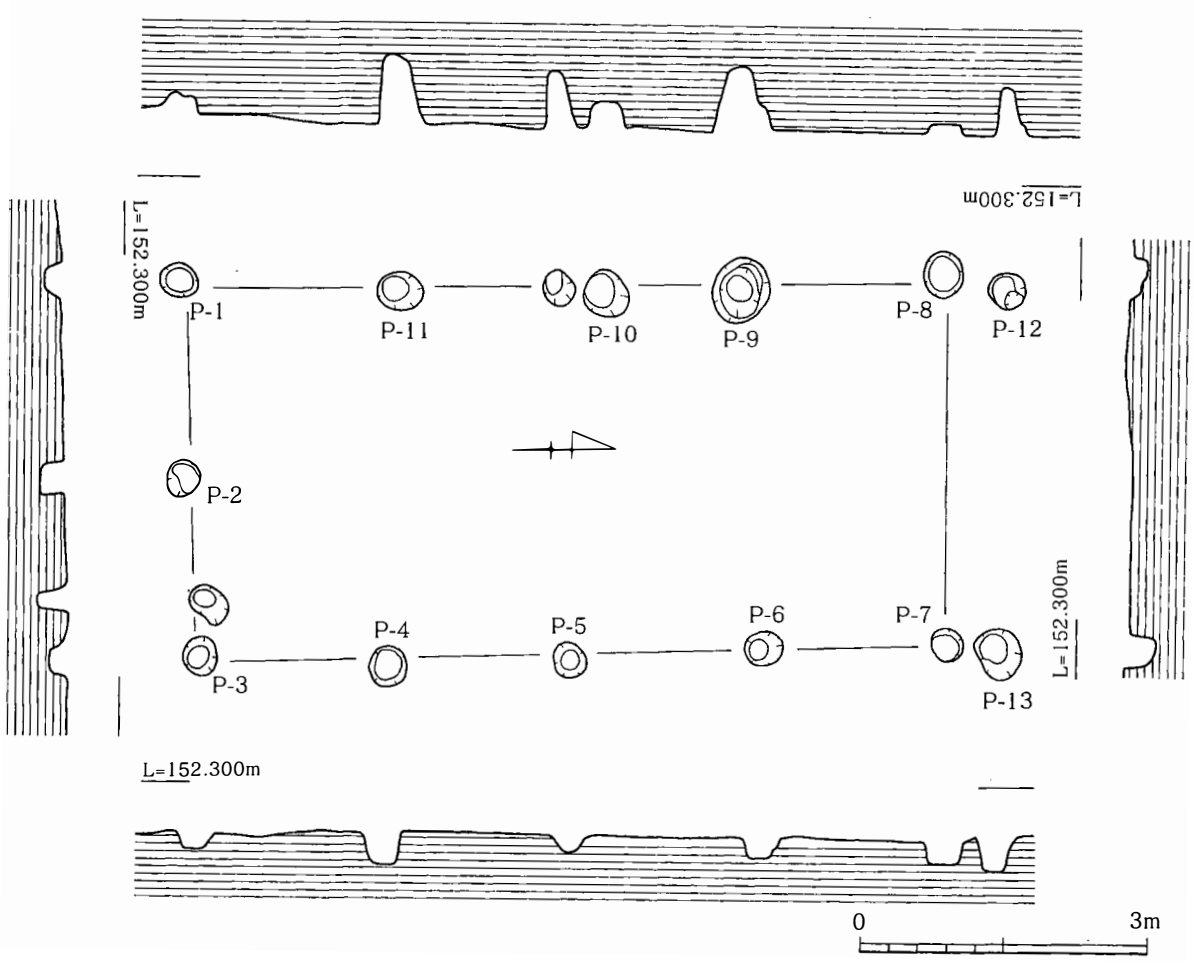
［ＳＢＯ１］（第３８図）（第４２図）

調査区（Ｖ区）北側部分に所在する掘立柱建物跡である。

梁行２間（3.80m）、桁行４間（7.90m）で南北に長い長方形を呈し、主軸はほぼ南北方向と一致する。

第11表　Ｖ区ＳＢＯ１ピット計測表

Pit No	直径(cm)	深さ(cm)	底形態	埋土	柱痕(cm)	備考
1	36.0	16.0	平底	暗褐色土	径13.0	底硬化
2	36.0	26.0	平底	暗褐色土	―	底硬化
3	38.0	17.0	丸底	暗褐色土	―	底硬化
4	39.0	31.0	平底	暗褐色土	径14.0	底硬化
5	36.0	17.0	丸底	暗褐色土	径13.0	底硬化
6	40.0	21.0	丸底	暗褐色土	―	底硬化
7	34.0	25.0	平底	暗褐色土	―	底硬化
8	41.0	19.0	平底	暗褐色土	径13.0	底硬化
9	59.0	21.0	平底	黄褐色土	―	底硬化
10	50.0	26.0	平底	暗褐色土	―	底硬化
11	48.0	34.0	平底	暗褐色土	径14.0	底硬化
12	29.0	49.0	丸底	暗褐色土	―	側面硬化
13	48.0	29.0	丸底	黄褐色土	―	底硬化



第38図　Ｖ区ＳＢＯ１遺構実測図

各ピット間の幅はほぼ一定の間隔を保ちながら並ぶ。ただ、北辺中央の柱穴のみ確認されなかった。検出面における各ピットの径は36.0～59.0㎝、深さは16.0～34.0㎝程で、埋土は暗褐色を呈する。柱痕跡は５ピットで確認された。いずれも径13.0～15.0㎝程で比較的小さいものであった。また、すべてのピット底で硬化が確認された。その他、建物北側に建物の施設の一部と思われるピット2基（P－12、P－13）が確認されている。両方とも底の硬化が確認されている。

建物跡に伴う遺物については包含層の消失により明らかにできないが、ＳＢＯ１が所在する上部の表土中に土師質土器（185･186･187･188）、青磁碗（190）、白磁小皿（189）、中国産染付皿（214）等の遺物の集中が見られた。　また、ピットの埋土中に遺物が混入しているものも見られたが、いずれも細片で儀礼的な埋納とは認めがたい。Ｐ－４から銅銭（細片）が検出されたが、これも細片で埋土上層に位置していることから、同様に儀礼的な埋納とは認めがたい。

この他、平坦面には比較的多くの銅銭が検出されており、「祥符通宝」(226)、「天福通宝」(227)、「紹聖元宝」(235・236)、「淳寧元宝」(231)、「天聖元宝」(229)、「景祐元宝」(230)が検出された。

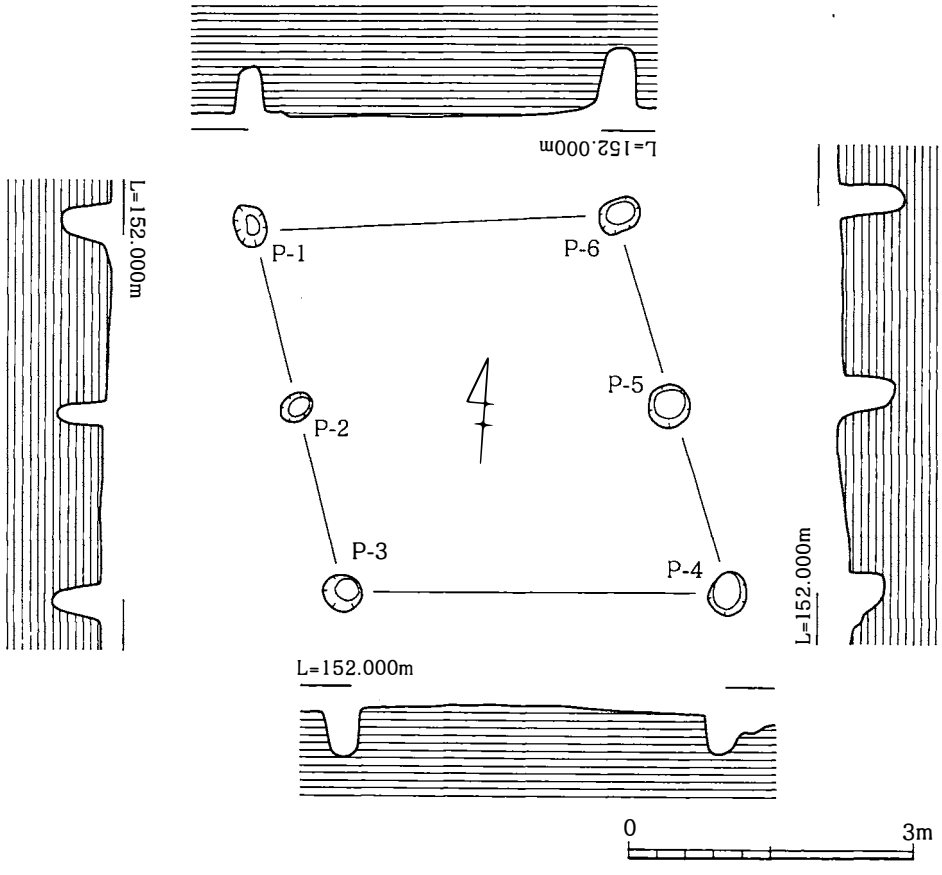
［ＳＢＯ２］（第３９図）（第４２図）

調査区（Ｖ区）南側部分に所在する掘立柱建物跡である。

梁行２間（4.00m）、桁行２間（3.90m）の平行四辺形という特異な形状を呈する。各ピット間はほぼ均一の幅で配されている。北辺中央及び南辺中央にピットは確認されなかった。検出面における各

第12表　Ｖ区ＳＢＯ２ピット計測表

Pit No	直径(cm)	深さ(cm)	底形態	埋土	柱痕(cm)	備考
1	44.0	51.0	丸底	暗褐色土	－	
2	28.0	43.0	平底	暗褐色土	－	
3	38.0	51.0	丸底	暗褐色土	－	
4	45.0	28.0	丸底	暗褐色土	－	
5	44.0	56.0	丸底	暗褐色土	－	
6	36.0	58.0	丸底	暗褐色土	－	



第39図　Ｖ区ＳＢＯ２遺構実測図

ピットの径は28.0～45.0㎝程で、深さ28.0～58.0㎝であった、柱痕跡はいずれのピットからも確認されず、ピット底の硬化も認められなかった。各ピットの埋土は暗褐色を呈していた。

ＳＢＯ２周辺での遺物の出土は見られなかった。平行四辺形という特異な形態を有していることからＳＢＯ１とは違う機能を有した建物跡であることが考えられる。

［ＳＸＯ３］（第４２図）

調査区（Ｖ区）東際に並ぶピット列である。ＳＢＯ１にほぼ平行して南北方向に延びる。計８基のピットが検出されている。

各ピット間の幅は約1.80ｍで等間隔に並び、全長13.2ｍに及ぶ。ピット径は35.0～52.0㎝、深さ25.0～55.0㎝で、すべてのピット底に硬化が認められる。柱痕跡は確認されなかった。調査段階で消失してしまったが、南方向に１間分延びることが、確認されている。

第13表　Ｖ区ＳＸＯ３ピット計測表

Pit No	直径(cm)	深さ(cm)	底形態	埋土	柱痕(cm)	備考
1	49.0	55.0	丸底	暗黄褐色土	―	底、
2	46.0	44.0	丸底	暗黄褐色土	―	底、
3	46.0	43.0	丸底	暗褐色土	―	底、
4	40.0	44.0	平底	暗褐色土	―	底、
5	52.0	43.0	平底	暗黄褐色土	―	底硬化
6	35.0	32.0	平底	暗黄褐色土	―	底硬化
7	35.0	35.0	平底	暗黄褐色土	―	底硬化
8	29.0	16.0	平底	暗黄褐色土	―	底硬化

ＳＢＯ１に伴うピット列と思われ、住居を囲う柵のような機能を有していたものと思われる。

［ＳＸＯ４］（第４２図）

調査区（Ｖ区）西に並ぶピット列である。ＳＢＯ１にほぼ平行して東西方向に延びる。計６基のピットが検出されている。

各ピット間の幅は1.80ｍを測り、全長は11.0ｍに及ぶ。ピット径は検出面において27.0～44.0㎝、深さは13.0～35.0㎝を測る。ＳＸＯ３と比べて小型である。柱痕跡はＰ－34、35、36で確認された。また、すべてのピット底で硬化が確認された。

第14表　Ｖ区ＳＸＯ４ピット計測表

Pit No	直径(cm)	深さ(cm)	底形態	埋土	柱痕(cm)	備考
1	27.0	13.0	平底	暗褐色土	―	底硬化
2	28.0	13.0	平底	暗褐色土	―	底硬化
3	(20.0)	31.0	平底	暗褐色土	―	底硬化
4	(27.0)	35.0	平底	暗褐色土	―	底硬化
5	(44.0)	30.0	平底	暗褐色土	―	底硬化
6	(36.0)	28.0	平底	暗褐色土	―	底硬化

ただし、ＳＸＯ４の場合、４基のピットの半分が土の堆積状況を確認するトレンチの影響を受け、消失して検出されており、また、約1.80ｍのピット幅で等間隔に並ぶことを考えた場合、ピット１基が完全に消失している可能性が強いこともあって、その全容は把握できなかった。

このピット列もＳＢＯ１に伴うものと思われ、住居を囲う柵の機能を有していたものと思われる。

［ＳＫＯ５］（第４０図）（第４２図）

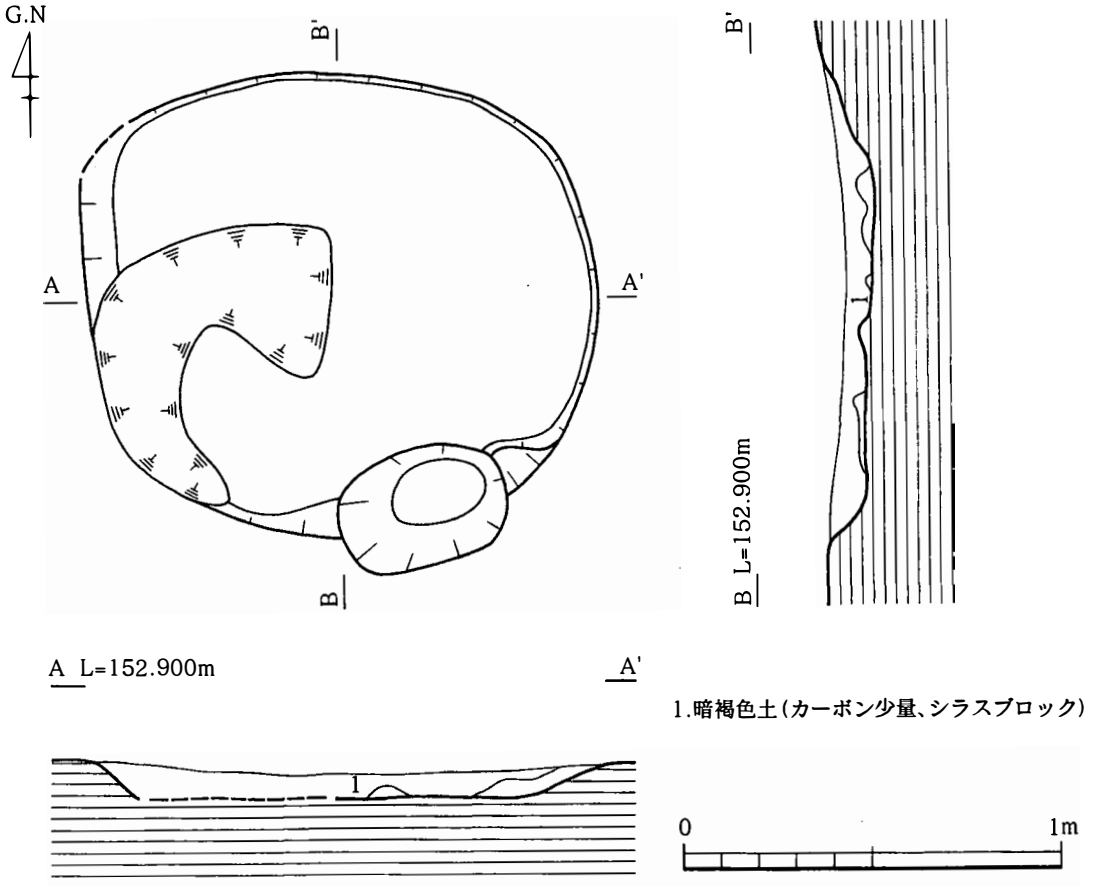
調査区（Ｖ区）のＳＢＯ１、ＳＸＯ３の間に位置する土壙である。土の差異が微妙であったため、調査の段階で上部を削った可能性がある。

検出面における土壙の形状は、東西幅1.32ｍ、南北幅1.22ｍの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは8.0㎝を測り、底部の東西幅1.04ｍ、南北幅0.91ｍの平底である。土壙西側は攪乱の影響を受けている。

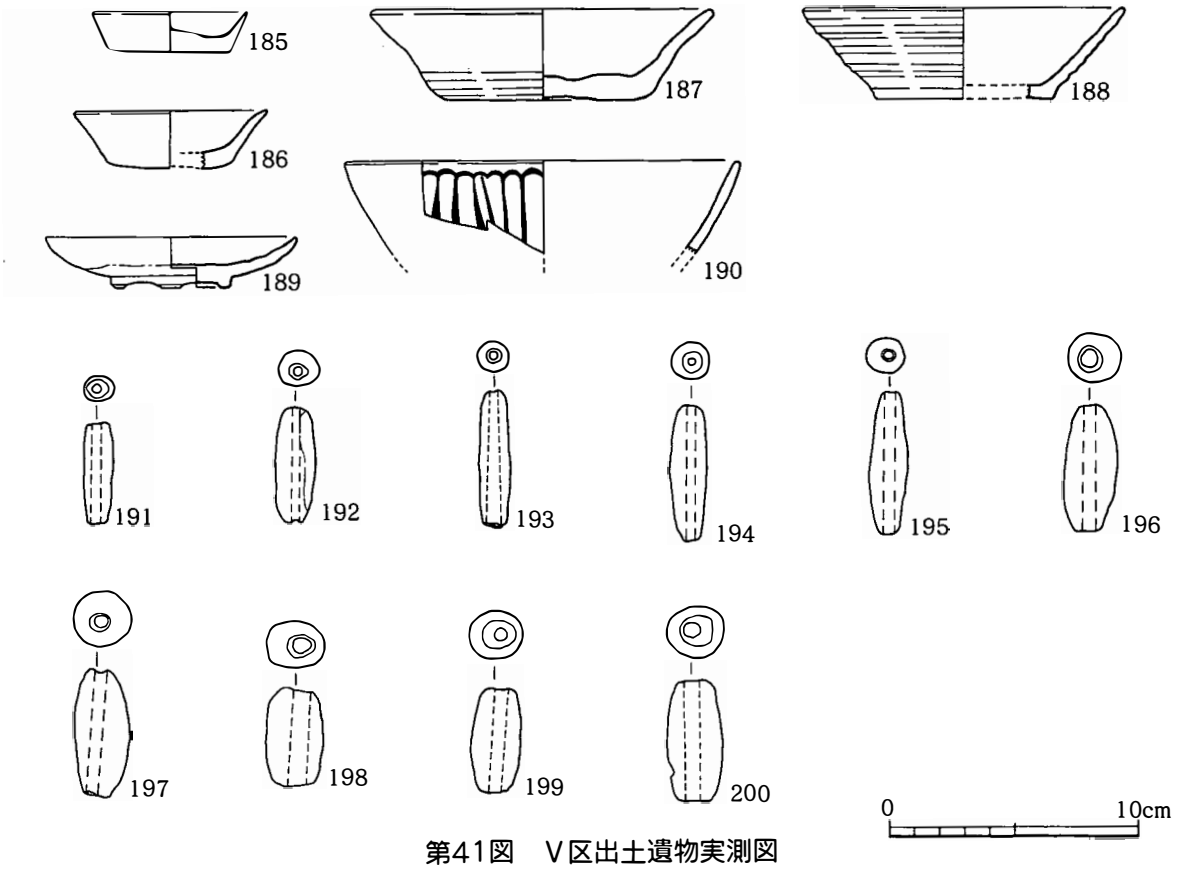
埋土は暗褐色を呈し、崩落土と思われるシラス土がブロック状に入る。カーボンを少量含む。

調査の途中、表土との土砂の差異が微妙で、遺構の埋土中かどうかは判断できないが、周辺からかなり多量の土錘(191･192･193･194･195･196･197･198･199･200)が集中して検出された。底からの遺物の検出は見られなかった。

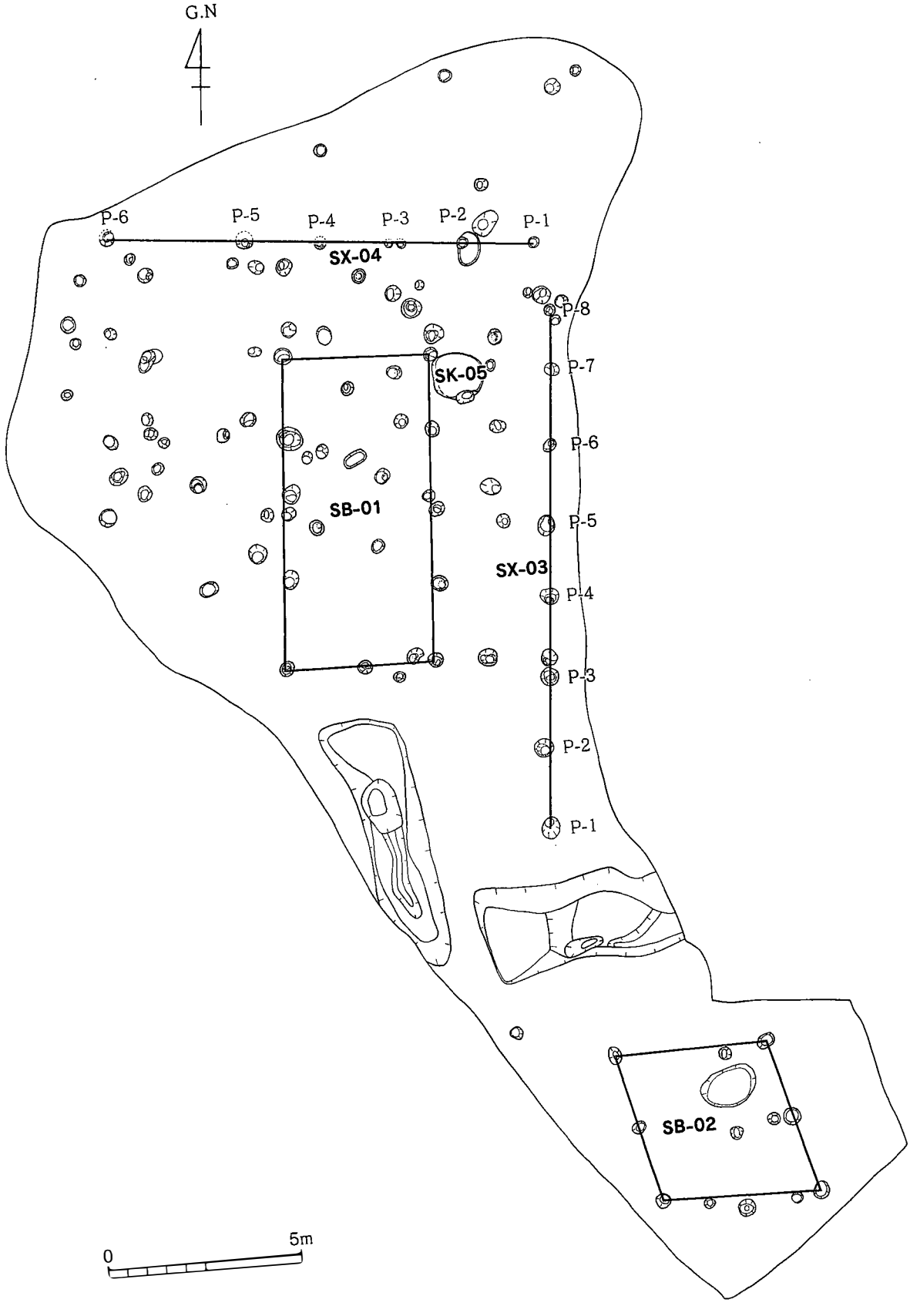
これらの遺構は西側高台（Ｖ区）という西側の眺望の開けた場所という地理的利点を生かした施設であったものと思われる。ＳＢＯ２も関連施設と断定することは難しいが、他の遺構に関しては密接に関連するものと思われる。また、土錘等が検出されていることから、ある程度一定期間定住生活を行っていたものと思われる。



第40図　Ｖ区ＳＫ０５遺構実測図



第41図　Ｖ区出土遺物実測図



第42図　V区遺構配置図

（9）Ⅸ区

丘陵南斜面にある道と思われる箇所に設定した調査区である。３箇所のトレンチ調査を行う。調査の結果、後世の形成であることが判明したが、Ⅷ区平坦面形成の際に生じた廃土と思われる土から遺物が検出された。

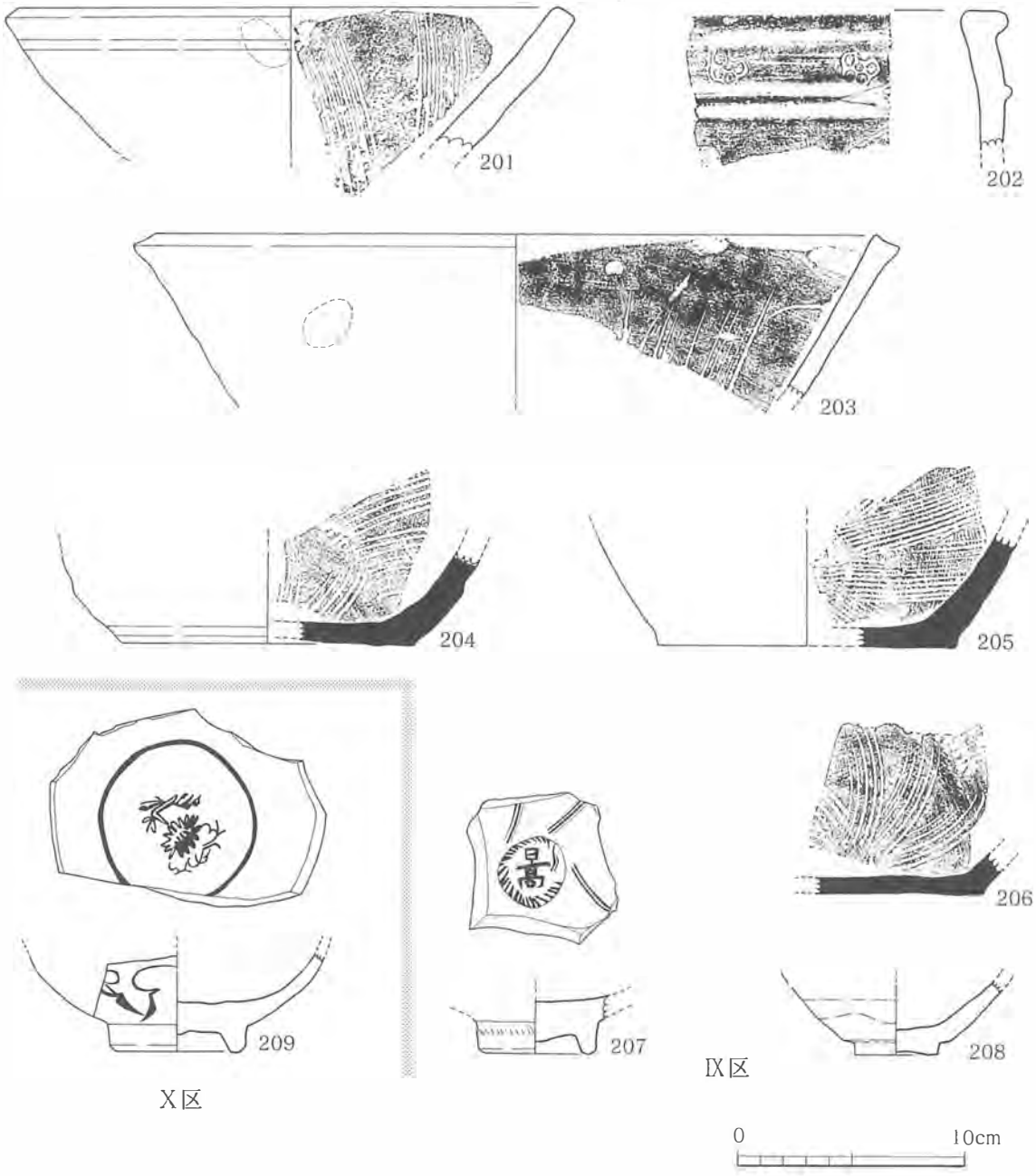
遺物は瓦質土器［すり鉢］(201･203）、瓦質土器［火鉢］(202）、須恵器［すり鉢］(204･205・206）、青磁碗（207）、天目茶碗（208）が検出された。

（10）Ｘ区

丘陵西側高台西斜面中段の平坦部に設定した調査区である。後述する近世墓群が所在する調査区である。東側斜面は切岸状に壁を形成している。

遺物は墓壙埋土中から青磁碗（209）、表土中から「洪武通宝」(238)が検出された。

これらの遺物から、この平坦面は近世墓群に先行して造成され、何らかの施設があったことが考えられる。



第43図　Ⅸ、Ⅹ区出土遺物実測図

第44図

中世遺構全体図

２　遺物

蔵城遺跡において検出された中世の遺物は、中世の山城という遺跡の性質上、数量的には少ない。それらの遺物が竪堀や堀切など遺構の埋土や表土中から検出されたことは先述したとおりである。遺物の中には層位的に確認できたものも少しはあるが、層位的に確認できないものが大半である。ここでは、それら出土遺物について、その概観を述べることにする。

（1）土師質土器

中世の遺物のうち最も出土量の多い器種である。底部切り離しはすべて糸切りであった。法量的に杯と小皿の２種に分類でき、さらにそれぞれを形態的な特徴から以下のとおり分類を行った。ただし、報告書掲載遺物すべてを分類してはいない。また、報告書に掲載できなかったものも含め土師質土器の法量に関しては、「土師質土器法量表」として以下に掲載した。

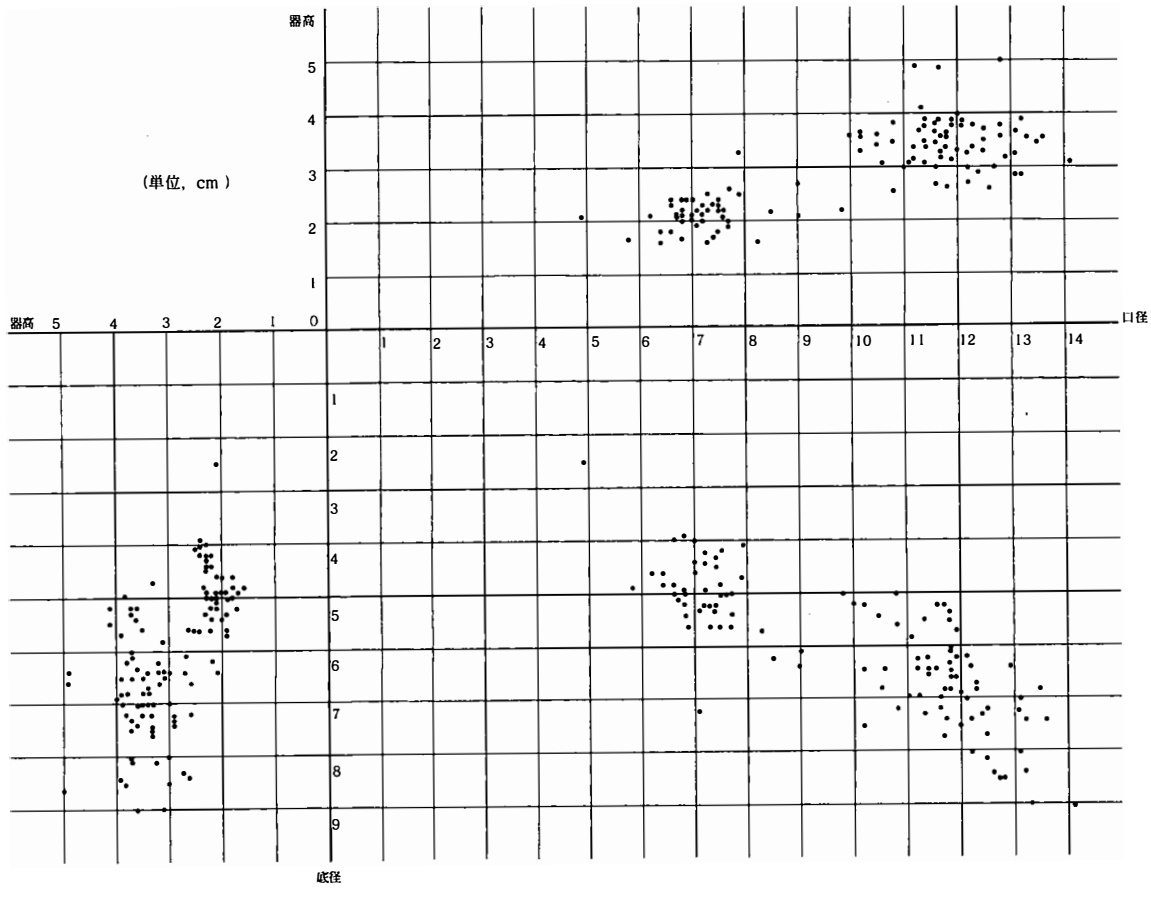
（杯 a類）底部径が比較的大きく、体部は外反気味あるいは直線的に立ち上がる。口縁端部を尖り気味、あるいは丸く仕上げる。体部外面に調整痕が残る。底部内面に凹凸が生じる。
(49･50･53･124･173)

（杯ｂ類）底部径が小さく、器高が比較的高い。体部は直線的あるいは外反しながら立ち上がる。口縁端部は尖り気味、あるいは丸く仕上げる。(51･52･85･103･133･168･169･170･184)

（杯ｃ類）杯ｂ類に比べ器高が比較的低い。体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は尖り気味、あるいは丸く仕上げる。底部切り離しは糸切り技法を用いる。(54･55･56･83･84･108･109･171)

（杯ｄ類）底部径は大きく、体部は直線的あるいは外反しながら立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げる。体部外面に細かい調整痕が残る。底部内面に凹凸がある。(89･120･187･188)

第15表　土師質土器法量表



（小皿 a類）底部径は大きく、器高は低い。体部は外反気味に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。(48･78･162)

（小皿ｂ類）底部径は小さく、体部は外反気味に立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げる。盃状を呈する。(153･154)

（小皿ｃ類）体部が直線的あるいは外反気味に立ち上がる。口縁端部は尖り気味あるいは丸く仕上げる。(115･117･118･155･156･158･159･160･161･163)

（小皿ｄ類）体部が内湾気味に立ち上がる。口縁端部を丸く仕上げる。(76･77･81･106･107･119･157･164･165･166)

（２）青磁・白磁

器種は碗、香炉、大盤が検出された。ここでは、青磁・白磁の中で最も多く検出された碗について形態的特徴及び文様構成から分類を行う。

（白磁碗 a類）玉縁状の口縁を有する。大宰府編年の白磁碗Ⅳ―１a類に比定される。11世紀後半から12世紀前半。(141)

（白磁碗ｂ類）口縁部の形態は残存部位が無いためわからない。高台を細く造り出し、端部は尖る。高台部を無釉とする。器壁は薄い。底部内面に櫛で花文を描いている。大宰府編年の白磁椀Ⅴ―４ｃ類。12世紀中頃から後半。(143･144)

（青磁碗 a類）口縁端部は尖り気味。体部に鎬蓮弁を施す。大宰府編年の龍泉窯系青磁碗Ⅰ―５ｂ類。13世紀初頭から前半。(96)

（青磁碗ｂ類）口縁端部を丸く仕上げる。体部は内湾気味に立ち上がる。高台は太く造り出し、高台内面は無釉。体部外面に片切彫りの蓮弁（粗雑）を施す。底部内面に蓮華の印花文を施すものがある。14世紀中頃から15世紀前半。(136･145･146･149･183)

（青磁碗ｃ類）口縁端部は丸く、体部外面上位に雷文を、下位にラマ式蓮弁を施す。14世紀中頃から15世紀前半。(98･112･147･209)

（青磁碗ｄ類）口縁端部を丸く仕上げる。体部外面に篦描きの細蓮弁文を施す。15世紀中葉。（190）

（３）瓦質土器

器種には、鍋、すり鉢、火鉢がある。火鉢の中には技巧を凝らした精緻な作りのもの（72･129･130）がある。14世紀後半から15世紀前半頃と思われる。

（４）須恵器

器種には、すり鉢等が検出された。すり鉢は口縁端部を平たく仕上げるもの（125･126）と上方につまみ上げるもの（176）とがある。

（５）石鍋

３点検出されたが、鍔が断面不等辺台形（67･68）、断面三角形（69）と退化傾向にある。14世紀後半から15世紀前半と思われる。

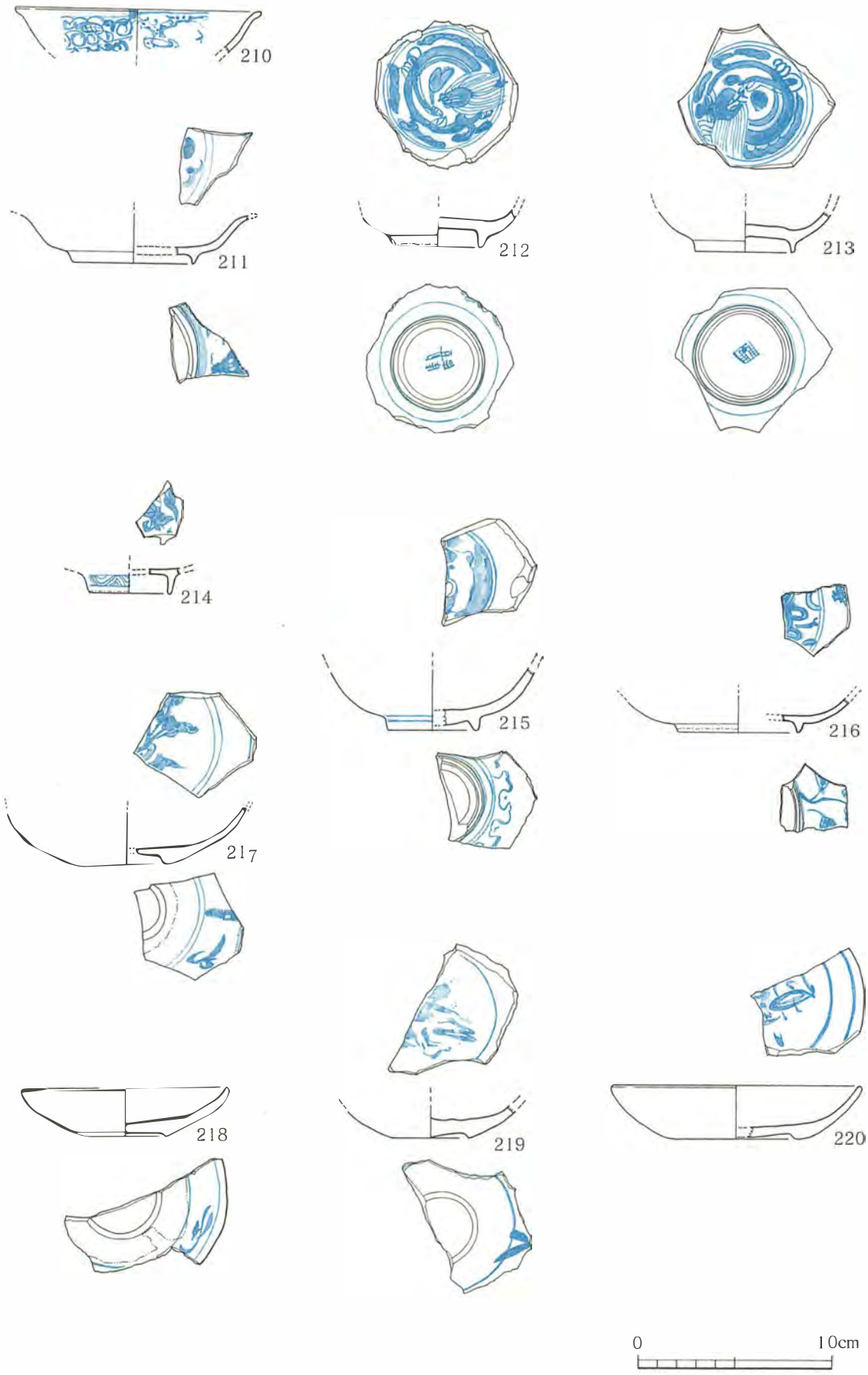
（６）染付

器種は碗と皿が検出された。中国景徳鎮産のものがほとんどであるが、中には中国福建省漳州窯産の碁笥底の小皿(218･219･220)が含まれる。いずれも16世紀代。

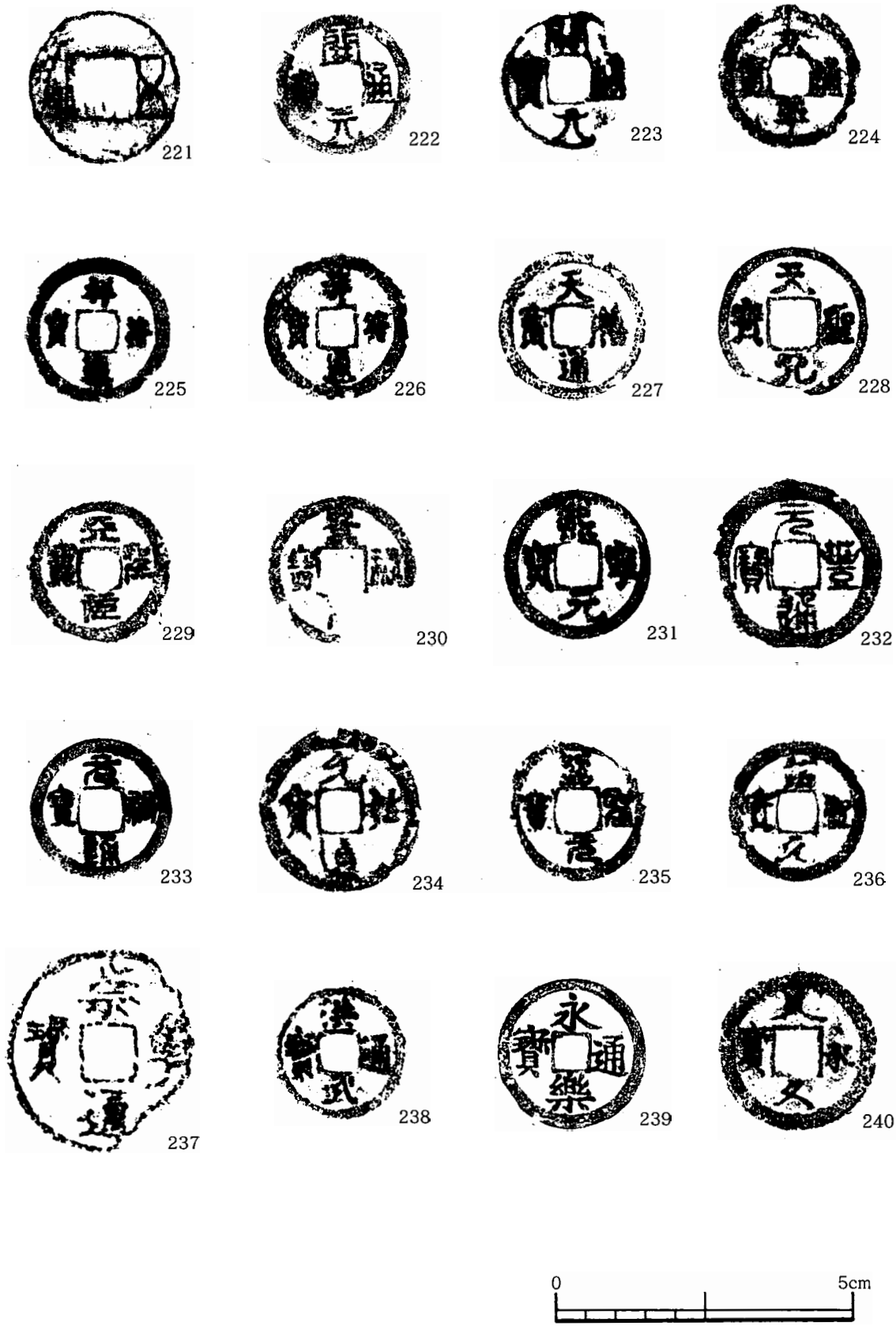
（７）銅銭

五銖銭（漢代）、開元通宝（唐代）のほか北宋銭と明銭が検出された。北宋銭のうち「元豊通宝」（折二銭）、「元祐通宝」（折二銭）、「崇寧通宝」（当十銭）も検出された。

以上、中世の遺物を概観してみた。その他の遺物として土錘があるが、各遺物の詳細な記述は「中世遺物観察表」として以下に掲載する。



第45図　陶磁器（染付）実測図


221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
0
5cm

第46図　銅銭拓影図

第16表　中世遺物観察表（１）

No	地点	種別	器種	法量(cm)	胎土・焼成・色調	形態の特徴	技法の特徴	備考
47	Ⅳ区 SD06	土師質 土器	小皿	口径－6.8 底径－5.2 器高－1.7	胎土－含長石・黒色粒 焼成－良 色調－内外面橙色	体部は直線的に延び、口縁端部は尖る。底部内面が肥厚する。器高は比較的低い。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
48	Ⅳ区	土師質 土器	小皿	口径－8.5 底径－6.2 器高－2.2	胎土－含石英・細砂粒 焼成－良 色調－内面橙色・外面浅黄橙色	体部はゆるやかに外反する。口縁端部は丸い。底部内面が円状に浮き出る。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部外面に指頭痕あり。底部外面縁仕上げが雑。	
49	Ⅳ区 SD06	土師質 土器	杯	口径－12.7 底径－8.1 器高－3.7	胎土－含長石 焼成－良 色調－内外面淡橙色	体部はわずかに外反する。口縁端部は丸い。底部内面に凹凸がある。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
50	Ⅳ区 SD06	土師質 土器	杯	口径－13.1 底径－8.0 器高－3.7	胎土－含長石 焼成－良 色調－外面灰白色内面淡黄色	体部は直線的。口縁端部は尖る。底部内面に凹凸、体部外面に段が生じる。	回転ナデ調整。底部は糸切り。体部外面に調整痕あり。	
51	Ⅳ区 SD06	土師質 土器	杯	口径－10.2 底径－5.2 器高－3.6	胎土－含石英・長石・細砂粒 焼成－良 色調－内外面橙色	体部は外反し、口縁端部は丸い。わずかに上げ底気味。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部内面に不整方向ナデ。	
52	Ⅷ区 SD01	土師質 土器	杯	口径－12.1 底径－6.2 器高－3.8	胎土－含石英・長石 焼成－良 色調－内外面赤褐色	体部は直線的。口縁端部は丸い。底部から体部下位にかけて歪みを持つ。体部外面に段が生じる。	回転ナデ調整。底部は糸切り。体部外面に調整痕。	
53	Ⅳ区 SD10	土師質 土器	杯	口径－12.2 底径－8.0 器高－3.0	胎土－含黒色粒少 焼成－良 色調－内外面灰白色	体部は直線的。口縁端部は尖る。底部の切り離し部分に段が生じる。器高が比較的低い。	回転ナデ調整。底部は糸切り。体部外面に調整痕。	
54	Ⅳ区 SD06	土師質 土器	杯	口径－11.8 底径－6.8 器高－3.4	胎土－含長石 焼成－良 色調－内外面浅黄橙色	体部は直線的に延び、口縁端部は尖る。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部内面に不整方向ナデ。	
55	Ⅳ区	土師質 土器	杯	口径－11.6 底径－6.4 器高－3.0	胎土－含長石 焼成－良 色調－内外面にぶい黄橙色	体部は直線的に開き、口縁端部は丸い。底部内面に渦巻状の凹凸がある。器高が比較的低い。	回転ナデ調整。比較的丁寧。底部は糸切り。	
56	Ⅳ区 SD06	土師質 土器	杯	口径－11.8 底径－6.6 器高－2.6	胎土－含黒色粒少 焼成－良 色調－内外面にぶい橙色	体部は直線的に開き、口縁端部は丸い。器高が比較的低い。外面全体に煤付着。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
57	Ⅳ区 SD06	瑠璃	碗	口径－14.2 底径－不明 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－緑瑠色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反する。口縁端部は丸く玉縁状を呈す。	口縁端部は釉が薄い。	14Ｃ後半～ 15Ｃ中葉
58	Ⅳ区 SD06	瑠璃	碗	口径－15.0 底径－不明 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－オリーブ灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反する。口縁端部は丸い。	口縁端部は釉が剥げている。	14Ｃ後半～ 15Ｃ中葉
59	Ⅳ区 SD06	瑠璃	碗	口径－13.6 底径－不明 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－緑灰色	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は直線的に延びる。口縁端部は丸く、玉縁状を呈す。	口縁端部は釉が薄い。	14Ｃ後半～ 15Ｃ中葉
60	Ⅳ区 SD06	瑠璃	碗	口径－14.2 底径－不明 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－オリーブ灰色	体部はやや内湾し、口縁部で外反する。口縁端部は尖り気味。	口縁部外面に片切彫りで蓮弁文を施す。	
61	Ⅵ区	瑠璃	碗	口径－不明 底径－6.0 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－オリーブ黄色	底部内面は肥厚する。高台は低く、肥厚。高台端部外面に面取りを施す。	底部端に片切彫りの一条円線、底部内面に片切彫りの劃花文を施す。高台端部は施釉。高台内面は露胎。	12Ｃ中葉～ 13Ｃ前半
62	Ⅳ区 SD10	瑠璃	碗	口径－不明 底径－4.6 器高－不明	胎土－密・黄橙色 焼成－良 色調－緑灰色・灰白色斑目	高台は短く底部内面中央は肥厚している。端部外面に面取りを施す。	高台端部・内面は部分的に露胎。高台内に砂付着。	
63	Ⅳ区 SD06	瑠璃	碗	口径－不明 底径－5.6 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－緑灰色・灰白色斑目	底部・高台は肥厚。高台端部外面に面取りを施す。	施釉に斑がある。高台内面は露胎。底部内面端円状に釉が変色。高台端部一部・高台内面に砂付着。	
64	Ⅳ区 SD05	瑠璃	碗	口径－不明 底径－不明 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－灰黄色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁端部は尖る。	体部外面に片切彫り蓮弁文を施す。簡略化。	
65	Ⅳ区 SD06	天目 茶碗	碗	口径－不明 底径－不明 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－黒色	口縁近くで外反する。口縁端部は尖る。	黒釉。口縁端部の釉は発色を変える。	
66	Ⅳ区 SD06	天目 茶碗	碗	口径－不明 底径－不明 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－黒色	体部はゆるやかに開く。高台内面はあまり削り出さない。	黒釉。体部外面下位以下露胎。	
67	Ⅳ区	石鍋	鍋	口径－20.0 底径－不明 器高－不明	石材－滑石 色調－外面黒褐色・内面灰色	体部は開き、口縁端部と鍔の間が短い。鍔断面は台形である。鍔下に２孔を穿つ。口縁端部は尖り気味。	全面研磨。	
68	Ⅳ区 SD06	石鍋	鍋	口径－20.0 底径－不明 器高－不明	石材－滑石 色調－外面黒色・内面黒褐色	体部は直立に近い。鍔は断面が台形である。鍔は上底に対し下底が広い。口縁端部は平ら。	全面研磨。	
69	Ⅳ区 SD06	石鍋	鍋	口径－18.3 底径－不明 器高－不明	石材－滑石 色調－外面黒色・内面黒褐色	体部はやや開き、鍔は矯小化が進み、断面は三角形で、高さが低くなる。	全面研磨。鍔部の下の体部外面に削り調整痕。	
70	Ⅳ区 SD06	須恵器	杯	口径－12.4 底径－不明 器高－不明	胎土－含黒色粒・細砂粒 焼成－良 色調－内外面灰色	口縁部は直線的。口縁端部は尖る。	回転ナデ調整。	
71	Ⅳ区 SD05	瓦質 土器	火鉢	口径－不明 底径－不明 器高－不明	胎土－含石英・砂粒 焼成－良 色調－内外面にぶい黄橙色	口縁部が外側に肥厚し、その下に一条の凸帯を巡らす。	口縁端部と凸帯の間に花文のスタンプを配す。外面ヘラミガキ、内面ナデ。	
72	Ⅳ区 SD06	瓦質 土器	火鉢	口径－不明 底径－不明 器高－不明	胎土－含砂粒 焼成－良 色調－内面浅黄橙色　外面橙色	底部及び脚部（１脚）残存。精緻な作りをしている。脚の両脇に２孔ずつ穿つ。	底部内面回転ナデ。脚部内側ハケ。凸帯は貼り付け。底部外面不整方向ナデ。	
73	Ⅳ区 SD05	瓦質 土器	火鉢	口径－不明 底径－不明 器高－不明	胎土－含細砂粒 焼成－良 色調－内外面浅黄橙色	胴部、脚部（１脚）残存。胴部下位に凸帯１条が巡る。直線的に立ち上がる。	外面丁寧なナデ。内面ナデ。凸帯貼り付け。凸帯上位ヘラミガキ。	
74	Ⅳ区 SD05	瓦質 土器	火鉢	口径－不明 底径－不明 器高－不明	胎土－含砂粒 焼成－良 色調－内外面浅黄橙色	脚部（１脚）残存。胴部下位に２条の凸帯が巡る。開き気味に立ち上がる。	外面不整方向のナデ。内面回転ナデ。凸帯貼り付け。底部不整方向ナデ。	
75	Ⅷ区 SD01	土師質 土器	小皿	口径－7.0 底径－4.6 器高－2.0	胎土－含石英・長石・砂粒 焼成－良 色調－外面浅黄橙色・内面橙色	体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸い。口縁端部の一部に煤付着。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部外面縁仕上げが雑。	
76	Ⅷ区 SD01	土師質 土器	小皿	口径－7.2 底径－4.4 器高－2.3	胎土－含石英・砂粒 焼成－良 色調－内外面橙色	体部はやや内湾気味にのび、口縁端部は丸い。全体的に肥厚。底部内面に段が生じる。口縁端部に煤付着。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
77	Ⅷ区 SD01	土師質 土器	小皿	口径－7.0 底径－4.4 器高－2.2	胎土－含砂粒・石英 焼成－良 色調－内外面橙色	体部下位で屈曲し、ゆるやかに内湾する。口縁端部は丸い。底部きり離し部分に段が生じる。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	

第17表　中世遺物観察表（2）

No	地点	種別	器種	法量(cm)	胎土	形態の特徴	技法の特徴	備考
78	Ⅷ区 SD01	土	小皿	口径－7.4 底径－5.2 器高－1.7	胎土 焼 色調　　橙色	体部は外反し、口縁端部は尖る。底部内面中央が肥厚。器高は比較的低い。	回転ナデ調 土	
79	Ⅷ区 SD01	土	小皿	口径－6.6 底径－5.0 器高－1.8	胎 焼 色	体部は直線的。口縁端部は丸い。	回転ナデ調整。底部外面縁仕上げが雑。 土	
80	Ⅷ区 SD01	土	小皿	口径－6.8 底径－5.0 器高－2.1	胎 焼	体部は外反する。口縁端部は丸い。底部内面が肥厚。底部内面に凹凸がある。	回転ナデ調 土	
81	Ⅷ区	土	小皿	口径－7.0 底径－4.0 器高－2.4	胎 焼 －　　浅黄	体部は直線的。口縁端部は丸い。体部下位に段が生じる。	回転ナデ調整。底部 土	
82	Ⅷ区 SD01	土	小皿	口径－7.4 底径－5.2 器高－2.1	胎 焼 色調　　橙色	体部は内湾 やや尖り気 る。口縁	回転ナデ調 土	
83	Ⅷ区 SD01	土	杯	口径－11.2 底径－6.2 器高－3.2	胎 焼 －　　橙色	体部は外反気	回転ナデ調整。底部は糸切り。口縁端部にヘラ状工具痕。 土	
84	Ⅷ区 SD01	土 土	杯	口径－11.4 底径－6.4 器高－3.4	胎 焼	体部は内 端部は	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部外面に指頭痕あり。	師質 器
85	Ⅷ区 SD01	土 土	杯	口径－10.8 底径－5.0 器高－3.8	胎 焼	体部は内湾気 端部は丸い 底部内面は	回転ナデ調整 面に細かい調	師質 器
86	Ⅷ区 SD01	土	杯	口径－10.2 底径－6.4 器高－3.1	胎 焼	体部はやや外反しな 口縁端部は丸い。底部内面　央に凹凸がある。	回転ナ 面に調 土	
87	Ⅷ区 SD01	土	杯	口径－10.8 底径－7.2 器高－2.6	胎　　石英・長石・砂粒 焼 外面にぶい橙色・内面橙色	体部は外 部内面中	回転ナデ調 面に調整痕。 土	
88	Ⅷ区 SD01	土 土	杯	口径－11.0 底径－7.0 器高－3.0	胎 焼	体部は外　　。 底部は肥　　。	回転ナ 面に調	師質 器
89	Ⅷ区 SD01	土	杯	口径－13.2 底径－8.4 器高－3.9	胎 焼 －　　浅黄橙色	体部は外反する。口縁端部は丸い。底部内面に凹凸がある。全体的に器壁が厚い。	回転ナデ調整。底部は糸切り。 土	
90	Ⅷ区 SD01	土	杯	口径－12.8 底径－8.6 器高－5.0	胎 焼	体部はゆるやかに外反しな 上がる。口縁端部は丸い。 に段が生じる。	回転ナデ調 面に調整 土	
91	Ⅷ区 SD01	須恵器	壺	口径－不明 底径－不明 器高－不明	胎 焼	頸部は直線的に立ち上がる。口縁端部は丸い。	回転ナデ調整。	
92	Ⅷ区 SD01	瓦 土	火鉢	口径－不明 底径－不明 器高－不明	胎 焼　－ 色調　　色・内面黄灰色	口縁端部が外側に肥厚	口縁 プを	質 器
93	Ⅷ区	瓦 土	火鉢	口径－不明 底径－不明 器高－不明	胎 焼	口縁部は内　　－ 条の凸帯	凸帯間にかぶら状のスタンプを 外面ヘラミガキ、内面ナデ。	質 器
94	Ⅷ区 SD01	瓦 土	壺	口径－17.0 底径－不明 器高－不明	胎土 焼 色調－　　黄灰色	短頸の壺で、口縁端部を げる。	外面ヘラミガキ。内面ナデ調整。	質 器
95	Ⅷ区 SD01	瓦 土	鉢	口径－20.4 底径－不明 器高－不明	胎 焼 色調－	体部は外傾する。内面一部に煤付着。	全面ナデ調整。	質 器
96	Ⅷ区	胥磁	碗	口径－14.4 底径－不明 器高－不明	胎 焼 色調	体部は直線的　　。 部外面がわず　　。	肉厚のある鎬蓮弁を	13C代
97	Ⅷ区 SD01	胥磁	碗	口径－16.4 底径－不明 器高－不明	胎 焼	口縁部 尖り気	体部内面に流線文を	
98	Ⅷ区 SD01	胥磁	碗	口径－15.0 底径－不明 器高－不明	胎土 焼	体部は内湾しな 縁端部は丸い。	口縁部外面上位に片切 し、その下に蓮弁文を配す。	14C後 15C中
99	Ⅷ区	胥磁	皿	口径－13.6 底径－不明 器高－不明	胎　　・ 焼 色調	口縁 稜を っている。	口縁部内面に三条の沈線、外面に削り痕。内外面に貫入が入る。	
100	Ⅷ区 SD01	天目 茶碗	碗	口径－不明 底径－3.8 器高－不明	胎 焼 －黒	体部はゆるや がる。高台内　は　り削り出さない。	鉄釉後、黒釉を施 下露胎。	
101	Ⅷ区 SD01	胥磁	碗	口径－不明 底径－4.0 器高－不明	胎 焼	体部は内湾気 高台端部外面	高台　　。 に巴　　。 胎土	
102	Ⅷ区 SD01	胥磁	碗	口径－不明 底径－5.2 器高－不明	胎 焼 －　オリーブ灰色	高台端 内面中	高台内面・端 薄く草花文を る。	
103	南側 土壁	土	杯	口径－11.9 底径－6.2 器高－3.8	胎 焼　－ －　　ぶい橙色・内面橙色	体部は直線的 部は尖る。2次　　り。	回転ナデ調整。底部は糸切り。体部外面に調整痕。 土	
104	南 土	胥磁	碗	口径－不明 底径－5.8 器高－不明	胎 焼 色調	底部・高台は肥 痕により屈曲 す。	高台内面は一部施釉。高台端部は側部釉が剥げる。底部内面端円状に沈線が入る。高台内面に砂付着。	
105	南 土	胥磁	碗	口径－不明 底径－5.4 器高－不明	胎 焼 色調－　オリーブ色	底 を　　する。	高台端部は　　側 底部内面中　　壁 プ。	
106	Ⅶ区 SK09	土	小皿	口径－6.8 底径－3.9 器高－2.4	胎 焼	体部は内 端部は 着。	回転ナデ調　　部は糸切り。底部外 面縁仕上　　底部外面に指頭痕あ り。 土	
107	Ⅶ区 SK09	土 土	小皿	口径－7.5 底径－4.2 器高－2.2	胎 焼	体部はやや内湾気味にのび、口縁端部を丸く仕上げる。底部は上げ底気味。	回転ナデ調 面に指頭	師質 器
108	Ⅶ区 SK09	土	杯	口径－11.1 底径－5.8 器高－3.1	胎 焼	体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は丸い。底部内面に渦巻状の凹凸がある。	回転ナ 面に調整痕。 土	

第18表　中世遺物観察表（3）

No	地点	種別	器種	法量(cm)	胎土・焼成・色調	形態の特徴	技法の特徴	備考
109	Ⅶ区 SK09	土師質 土器	杯	口径－12.9 底径－6.4 器高－3.2	胎土－含長石 焼成－良 色調－外面明褐灰色・内面橙色	体部は直線的に外傾する。口縁端部は丸い。口縁部内外面に煤付着。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
110	Ⅶ区 SD01	胴磁	碗	口径－13.6 底径－不明 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－灰オリーブ色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁端部は尖る。	体部外面に鎬細蓮弁文。内外面に貫入が入る。	13C中頃～ 14C初頭
111	Ⅶ区 SD01	胴磁	碗	口径－12.0 底径－不明 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－灰オリーブ色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。	口縁部外面に形骸化した線刻の蓮弁。内外面に貫入が入る。	15C後半～ 16C中葉
112	Ⅶ区 SD01	胴磁	碗	口径－14.2 底径－不明 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－緑灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸い。	体部外面上位に雷文。その下に蓮弁を施す。	14C後半～ 15C中葉
113	Ⅶ区 SD01	胴磁	碗	口径－不明 底径－5.6 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－灰オリーブ色	高台は細長い。高台端部外面に面取りを施す。高台内面中央が肥厚。	高台内面・端部無釉。底部内面中央に薄く草花文を配す。内外面に貫入が入る。	
114	Ⅶ区	胴磁	大盤	口径－不明 底径－13.0 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－緑灰色	底部・高台は肥厚。高台端部は丸い。	高台内面は円状に釉が剥げ、重ね積み痕を残す。高台内面に貫入が入る。	
115	Ⅶ区 SD01	土師質 土器	小皿	口径－6.8 底径－4.9 器高－2.0	胎土－含石英・砂粒 焼成－良 色調－内外面橙色	体部は外反気味に立ち上がる。口縁端部は丸い。底部内面に凹凸がある。体部内面及び口縁部に煤付着。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
116	Ⅶ区	土師質 土器	小皿	口径－7.2 底径－4.9 器高－1.9	胎土－含砂粒 焼成－良　　色調－外面橙色・内面にぶい橙色	体部は直線的に延びる。口縁端部は丸い。体部から口縁部にかけて歪みを持つ。	回転ナデ調整。底部は糸切り。体部外面に調整痕。	
117	Ⅶ区 SD01	土師質 土器	小皿	口径－7.3 底径－5.6 器高－2.5	胎土－含石英・長石 焼成－良 色調－内外面にぶい橙色	体部は直線的にのびる。口縁端部は尖る。底部内面に凹凸がある。少々上げ底。口縁部に煤付着。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部外面線仕上げが雑。	
118	Ⅶ区 SD01	土師質 土器	小皿	口径－7.7 底径－5.6 器高－2.6	胎土－含石英 焼成－良 色調－内外面橙色	体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は丸い。底部は肥厚。底部切り離し部分に段が生じる。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
119	Ⅶ区	土師質 土器	小皿	口径－7.9 底径－4.1 器高－2.5	胎土－含石英・砂粒 焼成－良　　色調－外面にぶい橙色・内面橙色	体部は内湾気味にのび、口縁端部は尖る。	回転ナデ調整。底部は糸切り。体部外面に調整痕。	
120	Ⅶ区 SD01	土師質 土器	杯	口径－13.3 底径－9.0 器高－3.6	胎土－含石英・砂粒 焼成－良　　色調－外面にぶい橙色・内面灰褐色	体部下位やや内湾気味にのび、その後外反する。口縁端部は丸い。体部外面に段が生じる。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部の仕上げが雑。体部外面に調整痕。内面に燃焼物付着。	
121	Ⅶ区 SD01	土師質 土器	杯	口径－11.7 底径－7.4 器高－3.3	胎土－含石英・砂粒 焼成－良 色調－外面橙色・内面灰褐色	体部は外反しながら立ち上がる。口縁端部は尖り気味。底部切り離し部分に段が生じる。体内面に煤付着。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
122	Ⅶ区	土師質 土器	杯	口径－11.7 底径－8.1 器高－3.2	胎土－含長石 焼成－良 色調－内外面橙色	体部は直線的に延びる。底部切り離し部分に段が生じる。底部内面に凹凸がある。やや上げ底。	回転ナデ調整。底部は糸切り。体部外面に調整痕。底部外面に指頭痕あり。	
123	Ⅶ区 SD01	土師質 土器	杯	口径－13.5 底径－6.8 器高－3.5	胎土－含長石 焼成－良 色調－内外面橙色	体部は内湾気味にのび、口縁部で外反する。底部内面中央は窪む。	回転ナデ調整。底部は糸切り。体部外面に調整痕。	
124	Ⅶ区 SD01	土師質 土器	杯	口径－13.3 底径－7.4 器高－3.3	胎土－含石英・長石 焼成－良 色調－内外面にぶい橙色	体部は直線的に延びる。口縁端部は丸い。	回転ナデ調整。底部は糸切り。体部外面に調整痕。	
125	Ⅶ区 SD01	須恵器	すり鉢	口径－24.2 底径－不明 器高－不明	胎土－含石英・砂粒 焼成－良 色調－外面黒色・内面灰色	口縁端部は平たく仕上げ、外側につまみ出す。すり目の一部が見られた。	ナデ調整。	
126	Ⅶ区 SD01	須恵器	すり鉢	口径－24.8 底径－不明 器高－不明	胎土－含石英・長石 焼成－良 色調－内外面灰白色	口縁端部を平たく仕上げる。７本単位のすり目が入る。	ナデ調整。体部外面にハケ目が僅かに見られる。	
127	Ⅶ区	瓦質 土器	すり鉢	口径－不明 底径－不明 器高－不明	胎土－含黒色粒・砂粒 焼成－良 色調－内外面淡黄色	口縁端部を内側に丸くとじる。10本単位のすり目が入る。	体部外面回転ナデ調整。内面に不整方向のハケ目調整。	
128	Ⅶ区 SD01	須恵器	すり鉢	口径－不明 底径－12.7 器高－不明	胎土－含石英・長石 焼成－良 色調－外面黄灰色・内面灰色	平底。7本単位の太いすり目が入る。	体部外面不整方向ナデ。底部外面回転ナデ。	
129	Ⅶ区 SD01	瓦質 土器	火鉢	口径－不明 底径－不明 器高－不明	胎土－含石英・砂粒 焼成－良　　色調－内外面にぶい橙色・脚部褐灰色	口縁部が角状を為す。口縁部の下に一条の凸帯を巡らす。口縁部と凸帯の間に格子状の装飾を施す。	外面はヘラミガキ、内面はケズリ後ナデ。	
130	Ⅶ区 SD01	瓦質 土器	火鉢	口径－不明 底径－不明 器高－不明	胎土－含石英・砂粒 焼成－良　　色調－外面にぶい黄橙色・内面明褐灰色	体部。複数の凸帯を巡らす。凸帯間に格子状の装飾や梅花文のスタンプを配す。	外面はヘラミガキ、内面はケズリ後、ナデ。	
131	Ⅶ区 SD01	瓦質 土器	鍋	口径－不明 底径－不明 器高－不明	胎土－含石英・砂粒 焼成－良 色調－外面灰色・内面黒色	肩部把手付近から口縁部の破片で、口縁部はやや内湾気味。把手は貼付で、二つの穴を穿つ。	全面ケズリ後、ナデ。	
132	Ⅶ区 SD01	瓦質 土器	火鉢	口径－不明 底径－不明 器高－不明	胎土－含石英・砂粒 焼成－良　　色調－外面にぶい黄橙色・内面明褐灰色	脚部。内外面に２次焼成痕あり。	全面ナデ調整。	
133	北側 竪堀	土師質 土器	杯	口径－11.8 底径－6.3 器高－3.6	胎土－含長石 焼成－良　　色調－外面にぶい橙色・内外面橙色	体部は直線的に立ち上がる。口縁端部はやや尖り気味。	回転ナデ調整。底部は糸切り。体部外面に僅かに調整痕。	
134	北側 竪堀	胴磁	皿	口径－10.8 底径－不明 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－明緑灰色	口縁部で外反する。口縁部は稜を巡らせ、花弁を表す稜花皿となっている。	口縁部内面に片切彫りで簡略化した花弁を持つ。内外面に貫入が入る。	
135	北側 竪堀	白磁	小碗	口径－不明 底径－3.8 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－灰白色	底部は肥厚。高台端部は尖る。体部下位で屈曲する。	わずかに内面に貫入が入る。高台内面に砂付着。	
136	北側 竪堀	胴磁	碗	口径－16.2 底径－不明 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－オリーブ灰色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸い。	外面に粗雑な片切彫り蓮弁文。	14C後半～ 15C中葉
137	北側 竪堀	胴磁	碗	口径－不明 底径－6.0 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－緑褐色	底部・高台は肥厚。高台端部は丸い。	体部外面に肉厚のある鎬蓮弁文を施す。高台内面に砂付着。	
138	北側 竪堀	胴磁	碗	口径－不明 底径－5.6 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－明緑灰色	底部は肥厚。高台は短い。高台端部外面に面取り。	高台端部は釉を剥ぐ。底部内面中央に花文。外面に貫入が入る。高台端部に砂付着。	
139	北側 竪堀	瓦質 土器	火鉢	口径－不明 底径－不明 器高－不明	胎土－含細砂粒・石英・長石 焼成－良　　色調－外面にぶい浅黄橙色・内面にぶい赤褐色	口縁端部は平らで、外側に肥厚する。下位に二条の凸帯を巡らす。	内外面ナデ調整。上段に蓮華花状文、下段に梅花文のスタンプを配す。	

第19表　中世遺物観察表（4）

No.	地点	種別	器種	法量(cm)	胎土・焼成・色調	形態の特徴	技法の特徴	備考
140	北側竪堀	瓦質土器	火鉢	口径―不明 底径―不明 器高―不明	胎土―含石英・黒色粒・砂粒 焼成―良 色調―内外面にぶい黄橙色	口縁部は内湾する。口縁部下位に二条の凸帯を巡らす。	凸帯間に菊花文のスタンプを施す。外面ヘラミガキ、内面ナデ。	
141	Ⅵ区	白磁	碗	口径―不明 底径―5.9 器高―不明	胎土―密・灰白色 焼成―良 色調―灰白色	口縁部は玉縁状を呈す。	口縁部外面に横位の調整痕。内外面に貫入が入る。	11C後半～12C前半
142	Ⅵ区 SD01	白磁	皿	口径―13.0 底径―8.2 器高―3.8	胎土―密・灰白色 焼成―良 色調―灰白色	体部はやや内湾し、口縁部でわずかに外反する。口縁端部はやや玉縁状。高台は肥厚。高台端部は丸い。	底部内面中央・高台内面中央は重ね積みにより円状に釉を剥ぐ。内外面に貫入に入る。	
143	Ⅳ区	白磁	碗	口径―不明 底径―5.6 器高―不明	胎土―密・灰白色 焼成―良 色調―灰オリーブ色	高台は高く削り出し、高台断面は三角形を呈す。高台内面は平ら。	高台外面は釉掛け流し、内面は露胎。底部内面に櫛描花文を施す。	12C中頃～13C前半
144	Ⅵ区 SD01	白磁	碗	口径―不明 底径―6.4 器高―不明	胎土―密・灰白色 焼成―良 色調―灰白色	高台は高く削り出し、高台断面は三角形を呈す。高台内面は平ら。	高台外面は釉垂れ、部分的に露胎。内面は露胎。底部内面に櫛描花文を施す。	12C中頃～13C前半
145	Ⅵ区 SD01	胴磁	碗	口径―11.8 底径―不明 器高―不明	胎土―密・灰白色 焼成―良 色調―オリーブ灰色	体部は内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸い。	外面に粗雑な片切彫り蓮弁。	14C後半～15C中葉
146	Ⅵ区 SD01	胴磁	碗	口径―11.8 底径―不明 器高―不明	胎土―密・灰白色 焼成―良 色調―オリーブ灰色	体部は内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸い。	外面に粗雑な片切彫り蓮弁。	14C後半～15C中葉
147	Ⅵ区 SD01	胴磁	碗	口径―13.6 底径―不明 器高―不明	胎土―密・灰白色 焼成―良 色調―緑青色	体部は内湾しながら立ち上がる。口縁端部は丸い。	体部上位外面に罰文。内外面に貫入が入る。	14C後半～15C中葉
148	Ⅵ区 SD01	胴磁	香炉	口径―不明 底径―5.8 器高―不明	胎土―密・灰白色 焼成―良 色調―灰オリーブ色	体部は直線的に立ち上がる。三方にのびる脚を持つ(一脚のみ残存)。	脚端部も施釉。体部内面下位及び底部内面は露胎。内面は釉掛け流し。	
149	Ⅵ区 SD01	胴磁	碗	口径―12.4 底径―5.0 器高―6.0	胎土―密・灰白色 焼成―良 色調―緑青色	体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸い。底部・高台は肥厚。高台端部外面に面取りを施す。	底部内面・高台端部及び内面は露胎。底部内面に草花文を配す。外面に粗雑な片切彫り蓮弁。内外面に貫入。	14C後半～15C中葉
150	Ⅵ区 SD01	胴磁	大盤	口径―23.2 底径―8.6 器高―5.0	胎土―密・灰白色 焼成―良 色調―緑青色	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反。口縁端部は平らで、稜を巡らせ花弁を表す稜花皿となっている。	底部内面に草花文、体部内面に簡略化した蓮弁を配す。口縁部内面に二条の波状文。内外面に貫入。底部内面に砂付着。	
151	Ⅵ区 SD01	胴磁	大盤	口径―29.0 底径―不明 器高―不明	胎土―密・灰白色 焼成―良 色調―緑青色	口縁部は外反し、口縁端部はやや玉縁状を呈す。	口縁部内面に簡略化した連弁を配す。	
152	Ⅵ区 SD01	胴磁	大盤	口径―33.4 底径―22.8 器高―4.0	胎土―密・灰白色 焼成―良 色調―暗オリーブ色	体部はやや内湾し、口縁部は外反する。口縁端部はやや玉縁状を呈す。高台は短い。	高台内面は釉掛け流しで、一部露胎。一部の内外面に貫入が入る。	
153	Ⅵ区 SD01	土師質土器	小皿	口径―6.6 底径―4.8 器高―2.3	胎土―含長石・細砂粒 焼成―良 色調―内外面橙色	体部下位で屈曲し、外反する。口縁端部は丸い。底部内面中央は肥厚。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部外面縁仕上げが雑。	
154	Ⅵ区 SD01	土師質土器	小皿	口径―6.7 底径―5.1 器高―2.1	胎土―含石英・長石 焼成―良 色調―内外面橙色	体部は下位で屈曲し、直線的に立ち上がる。口縁部は丸い。底部は肥厚。口縁部に歪みを持つ。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部内面中央、不整方向ナデ。	
155	Ⅵ区 SD01	土師質土器	小皿	口径―7.1 底径―5.3 器高―1.9	胎土―含石英・砂粒 焼成―良 色調―内外面橙色	体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は尖る。底部内面は肥厚。口縁端部に煤付着。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部内面中央、不整方向ナデ。	
156	Ⅵ区 SD01	土師質土器	小皿	口径―7.3 底径―5.6 器高―1.9	胎土―含石英・長石・砂粒 焼成―良 色調―外面にぶい橙色・内面橙色	体部は直線的にのび、口縁端部は尖り気味。底部内面中央は肥厚。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部内面中央、不整方向ナデ。	
157	Ⅵ区 SD01	土師質土器	小皿	口径―6.7 底径―4.9 器高―2.1	胎土―含石英・砂粒 焼成―良 色調―内外面橙色	体部は内湾気味に立ち上がる。口縁端部は尖る。底部内面中央は肥厚。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
158	Ⅵ区 SD01	土師質土器	小皿	口径―7.2 底径―4.9 器高―2.3	胎土―含石英 焼成―良 色調―外面にぶい橙色・内面橙色	体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は丸い。やや上げ底。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部外面縁仕上げが雑。底部内面中央、不整方向ナデ。	
159	Ⅵ区 SD01	土師質土器	小皿	口径―7.1 底径―5.2 器高―2.2	胎土―含長石 焼成―良 色調―外面にぶい黄橙色・内面黒色	体部はゆるやかに外反しながらのびる。口縁端部はつまみ出し、丸く仕上げる。内面に煤付着。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部外面縁仕上げが雑。	
160	Ⅵ区 SD01	土師質土器	小皿	口径―7.5 底径―5.0 器高―2.3	胎土―含石英・砂粒 焼成―良 色調―内外面にぶい黄橙色	体部で外反しながら立ち上がる。口縁端部は丸い。底部内面に煤付着。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
161	Ⅵ区 SD01	土師質土器	小皿	口径―7.6 底径―5.0 器高―2.1	胎土―含砂粒・石英・長石 焼成―良 色調―内外面にぶい橙色	体部は直線的にのび、口縁端部はやや尖り気味。やや上げ底。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部内面中央、不整方向ナデ。	
162	Ⅵ区 SD01	土師質土器	小皿	口径―7.5 底径―4.8 器高―1.8	胎土―含石英・長石 焼成―良 色調―内外面にぶい黄橙色	体部は外反しながら立ち上がる。口縁端部は丸い。器壁は肥厚。体部から口縁部にかけて歪みを持つ。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
163	Ⅵ区 SD01	土師質土器	小皿	口径―6.8 底径―5.4 器高―2.2	胎土―含石英 焼成―良 色調―内外面橙色	体部は直線的にのび、口縁端部は尖り気味。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部内面中央、不整方向ナデ。体部外面に調整痕。	
164	Ⅵ区 SD01	土師質土器	小皿	口径―7.4 底径―4.5 器高―2.3	胎土―含石英・砂粒 焼成―良 色調―内外面橙色	体部は直線的にのび、口縁端部は丸い。体部から口縁部にかけて歪みを持つ。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
165	Ⅵ区 SD01	土師質土器	小皿	口径―7.5 底径―4.2 器高―2.4	胎土―含長石・砂粒 焼成―良 色調―内外面浅黄橙色	体部は内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸い。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部外面縁仕上げが雑。	
166	Ⅵ区 SD01	土師質土器	小皿	口径―7.4 底径―4.3 器高―2.3	胎土―含石英・長石・砂粒 焼成―良 色調―内外面橙色	体部は内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸い。底部内面に凹凸がある。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部外面に指頭痕あり。	
167	Ⅵ区 SD01	土師質土器	小皿	口径―8.5 底径―5.7 器高―1.9	胎土―含砂粒 焼成―良 色調―内外面橙色	体部は直線的に外傾する。口縁端部は丸く仕上げる。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
168	Ⅵ区 SD01	土師質土器	杯	口径―11.3 底径―5.5 器高―4.1	胎土―含長石・細砂粒 焼成―良 色調―内外面橙色	体部は直線的にのびる。やや上げ底。器高が比較的高い。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部外面縁の仕上げが雑。体部外面に僅かに調整痕が見られる。	
169	Ⅳ区 SD01	土師質土器	杯	口径―11.7 底径―5.2 器高―4.1	胎土―含長石 焼成―良 色調―内外面橙色	体部は直線的に立ち上がり、口縁端部が丸い。器高が比較的高い。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部外面縁の仕上げが雑。	
170	Ⅵ区 SD01	土師質土器	杯	口径―11.9 底径―5.7 器高―3.9	胎土―含石英・長石 焼成―良 色調―外面にぶい赤褐色・内面橙色	体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は尖る。	回転ナデ調整。底部は糸切り。体部外面に調整痕。底部外面に指頭痕あり。	

第20表　中世遺物観察表（5）

No	地点	種別	器種	法量（cm）	胎土・焼成・色調	形態の特徴	技法の特徴	備考
171	Ⅵ区 SD01	土師質土器	杯	口径－11.9 底径－6.6 器高－3.2	胎土－含石英・砂粒 焼成－良 色調－内外面にぶい黄橙色	体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は丸い。	回転ナデ調整。底部の仕上げが丁寧。体部外面に調整痕。	
172	Ⅵ区 SD01	土師質土器	杯	口径－11.3 底径－7.3 器高－3.7	胎土－含石英・長石 焼成－良　色調－外面にぶい赤褐色・内面にぶい橙色	体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は丸い。	回転ナデ調整。底部は糸切り。体部外面に調整痕。	
173	Ⅵ区 SD01	土師質土器	杯	口径－12.8 底径－8.5 器高－3.8	胎土－含長石 焼成－良 色調－内外面灰黄色	体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は尖り気味。底部は歪みを持つ。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部外面縁の仕上げが雑。底部内面中央、不整方向ナデ。	
174	Ⅵ区 SD01	土師質土器	杯	口径－12.0 底径－7.5 器高－3.3	胎土－含石英・長石 焼成－良 色調－内外面浅黄橙色	体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は丸い。	回転ナデ調整。底部は糸切り。体部外面に調整痕。	
175	Ⅵ区 SD01	土師質土器	杯	口径－11.6 底径－5.2 器高－4.1	胎土－含砂粒 焼成－良 色調－内外面橙色	体部は外反気味に立ち上がる。口縁端部は厚く丸い。底部は肥厚。器高が低い。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
176	Ⅵ区 SX02	須恵器	すり鉢	口径－不明 底径－不明 器高－不明	胎土－含石英・長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面灰白色	口唇部を内側につまみ上げる。内面にナデ8本単位のすり目が入る。幅3.5cmの注口がある。	ナデ調整。体部外面に指押さえ痕。	
177	Ⅵ区 SD01	土製品	錘	全長－4.0 最大径－1.6 孔径－0.3	胎土－含長石・黒色粒 焼成－良 色調－暗褐色	迫物中央最大径部から両端に向かい極端に細くしぼむ。重量は8.4g。	ナデ調整。片端から穿孔。	
178	Ⅵ区 SD01	土製品	錘	全長－4.0 最大径－1.1 孔径－0.3	胎土－含黒色粒・砂粒 焼成－良 色調－暗褐色	迫物中央最大径部から両端に向かいややしぼむ。重量は5.5g。	ナデ調整。片端から穿孔。	
179	Ⅵ区 SD01	土製品	錘	全長－4.6 最大径－1.0 孔径－0.3	胎土－含黒色粒・砂粒 焼成－良 色調－褐色（一部煤付着）	迫物中央最大径部から両端に向かいややしぼむ。細長い。重量は6.7g。	ナデ調整。片端から穿孔。	
180	Ⅵ区	土製品	錘	全長－5.8 最大径－1.8 孔径－0.45	胎土－含長石・黒色粒 焼成－良 色調－明褐色（一部赤褐色）	迫物中央最大径部から両端に向かいややしぼむ。重量は16.4g。	ナデ調整。片端から穿孔。	
181	Ⅵ区 SD01	土製品	錘	全長－6.6 最大径－2.1 孔径－0.6	胎土－含黒色粒・砂粒 焼成－良 色調－明褐色	迫物中央最大径部から両端に向かいややしぼむ。大型である。重量は25.5g。	ナデ調整。片端から穿孔。	
182	Ⅺ区	土師質土器	杯	口径－10.5 底径－6.8 器高－3.4	胎土－含石英・長石 焼成－良 色調－内外面にぶい橙色	体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は丸い。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部外面縁は仕上げが雑。体部外面に調整痕が僅かに見られる。	
183	Ⅺ区	青磁	碗	口径－14.8 底径－5.4 器高－7.4	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－灰オリーブ色	体部は内湾しながら立ち上がる。底部は肥厚。高台端部外面に面取りを施す。	底部内面中央は円状に露胎。高台内面も露胎。外面に片切彫り蓮弁文をうすく彫る。内外面に貫入が入る。	14C後半～15C中葉
184	Ⅺ区	土師質土器	杯	口径－11.8 底径－6.0 器高－3.7	胎土－含石英・長石 焼成－良 色調－内外面橙色	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反する。口縁端部は丸い。底部内面は碗状を呈す。	回転ナデ調整。底部は糸切り。体部外面に調整痕。	
185	Ⅴ区	土師質土器	小皿	口径－6.4 底径－4.8 器高－1.6	胎土－含石英 焼成－良 色調－内外面橙色	体部は直線的に立ち上がる。底部内面中央は肥厚。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部外面縁仕上げが雑。	
186	Ⅴ区	土師質土器	小皿	口径－7.6 底径－5.0 器高－2.2	胎土－含石英・黒色粒・砂粒 焼成－良 色調－内外面橙色	体部は外反する。口縁端部は尖る。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
187	Ⅴ区	土師質土器	杯	口径－13.6 底径－7.4 器高－3.6	胎土－含石英・黒色粒・砂粒 焼成－良 色調－内外面橙色	体部は外反する。口縁端部は丸い。底部内面に凹凸がある。	回転ナデ調整。底部は糸切り。体部外面に細かい調整痕。底部外面に指頭痕あり。	
188	Ⅴ区	土師質土器	杯	口径－12.8 底径－7.0 器高－3.6	胎土－含石英・黒色粒 焼成－良 色調－内外面にぶい黄橙色	体部は直線的に延び、口縁端部は丸い。器壁が薄い。体部外面に細かい段が生じる。	回転ナデ調整。底部は糸切り。体部外面に細かい調整痕。	
189	Ⅴ区	白磁	小皿	口径－10.0 底径－2.6 器高－2.0	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－灰白色	体部は開き、口縁部でわずかに内湾する。口縁端部は丸い。切り高台である。	体部下位及び底部は露胎。	15C前半
190	Ⅴ区	青磁	碗	口径－15.8 底径－不明 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－緑青色	体部はやや内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸い。	外面に片切彫りの細蓮弁文。内外面に貫入が入る。	14C後半～15C中葉
191	Ⅴ区	土製品	錘	全長－4.0 最大径－1.2 孔径－0.4	胎土－含長石・黒色粒 焼成－良 色調－明褐色	迫物中央最大径部から両端に向かいややしぼむ。重量は4.8g。	ナデ調整。片端から穿孔。	
192	Ⅴ区	土製品	錘	全長－4.5 最大径－1.6 孔径－0.3	胎土－含長石・黒色粒 焼成－良 色調－明褐色	迫物中央最大径部から両端に向かいややしぼむ。重量は9.3g。	ナデ調整。片端から穿孔か。粗い調整痕が残る。	
193	Ⅴ区	土製品	錘	全長－5.4 最大径－1.3 孔径－0.45	胎土－含黒色粒・砂粒 焼成－良 色調－暗褐色	迫物中央最大径部から両端に向かいややしぼむ。重量は8.4g。	ナデ調整。片端から穿孔。	
194	Ⅴ区	土製品	錘	全長－5.3 最大径－1.5 孔径－0.35	胎土－含砂粒 焼成－良 色調－暗茶褐色	迫物中央最大径部から両端に向かい細くしぼむ。重量は11.0g。	ナデ調整。片端から穿孔。	
195	Ⅴ区	土製品	錘	全長－5.6 最大径－1.5 孔径－0.4	胎土－含黒色粒・砂粒 焼成－良 色調－暗褐色	迫物中央最大径部から両端に向かいややしぼむ。重量は10.5g。	ナデ調整。片端から穿孔。	
196	Ⅴ区	土製品	錘	全長－5.0 最大径－2.1 孔径－0.5	胎土－含黒色粒 焼成－良 色調－明褐色（一部黒褐色）	迫物中央最大径部から両端に向かい細くしぼむ。太い。重量は16.0g。	ナデ調整。片端から穿孔。	
197	Ⅴ区	土製品	錘	全長－5.2 最大径－2.2 孔径－0.5	胎土－含長石・黒色粒・砂粒 焼成－良 色調－明褐色（一部煤付着）	迫物中央最大径部から両端に向かい細くしぼむ。太い。重量は17.6g。	ナデ調整。片端から穿孔。	
198	Ⅴ区	土製品	錘	全長－4.0 最大径－2.3 孔径－0.75	胎土－含黒色粒・砂粒 焼成－良 色調－明褐色	迫物中央最大径部から両端に向かい細くしぼむ。太い。重量は16.5g。	ナデ調整。片端から穿孔。	
199	Ⅴ区	土製品	錘	全長－4.2 最大径－2.0 孔径－0.55	胎土－含黒色粒 焼成－良 色調－明褐色（一部煤付着）	迫物中央最大径部から両端に向かい細くしぼむ。太い。重量は14.3g。	ナデ調整。片端から穿孔。	
200	Ⅴ区	土製品	錘	全長－4.8 最大径－2.2 孔径－0.6	胎土－含長石・黒色粒 焼成－良 色調－明褐色（一部煤付着）	迫物中央最大径部から両端に向かい細くしぼむ。太い。歪みがある。重量は19.7g。	ナデ調整。片端から穿孔。	
201	Ⅸ区	瓦質土器	すり鉢	口径－24.0 底径－不明 器高－不明	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面褐灰色	7本単位のすり目が入る。口縁端部は平ら。	ナデ調整。	

第21表　中世遺物観察表（6）

No	地点	種別	器種	法量（cm）	胎土・焼成・色調	形態の特徴	技法の特徴	備考
202	Ⅸ区	瓦質土器	火鉢	口径―不明 底径―不明 器高―不明	胎土―含石英・黒色粒・砂粒 焼成―良 色調―内外面にぶい黄橙色	口縁部が外側に肥厚し、その下に一条の凸帯を巡らす。	口縁部と凸帯の間に梅花文のスタンプを配す。内外面ナデ調整。	
203	Ⅸ区	瓦質土器	すり鉢	口径―34.0 底径―不明 器高―不明	胎土―含長石・砂粒 焼成―良　　色調―外面にぶい黄橙色・内面明黄褐色	5本単位のすり目が入る。口縁端部は平らで、外側につまみ出す。	ナデ調整。	
204	Ⅸ区	須恵器	すり鉢	口径―不明 底径―12.8 器高―不明	胎土―含石英・長石・砂粒 焼成―良 色調―内外面灰色	底部は平底。５本単位のすり目が入る。	ナデ調整。	
205	Ⅸ区	須恵器	すり鉢	口径―不明 底径―13.3 器高―不明	胎土―含石英・長石・砂粒 焼成―良 色調―内外面灰色	底部は平底。12本単位のすり目が入る。	ナデ調整。体部内面ハケ。体部外面縦方向ハケ。	
206	Ⅸ区	須恵器	すり鉢	口径―不明 底径―不明 器高―不明	胎土―含長石 焼成―良 色調―外面浅黄色・内面灰黄色	底部は平底。5本単位のすり目が入る。	ナデ調整。	
207	Ⅸ区	肥前磁	碗	口径―不明 底径―4.6 器高―不明	胎土―密・灰白色 焼成―良 色調―灰オリーブ色	底部・高台は肥厚。高台端部外面に面取りを施す。	高台内面は円状に釉を剥ぐ。見込み部中央に「日高」。高台外面にヘラ刻目文を巡らす。高台内面に砂付着。	
208	Ⅸ区	天目茶碗	碗	口径―不明 底径―不明 器高―不明	胎土―密・灰白色 焼成―良 色調―オリーブ灰色	体部はゆるやかに開きながら立ち上がる。高台内面はあまり削り出さない。	施釉は二回。鉄釉の後、黒釉をかける。体部外面下位以下露胎。	
209	Ⅹ区 31号墓	肥前磁	碗	口径―不明 底径―5.4 器高―不明	胎土―含砂粒・灰白色 焼成―良 色調―黒色	体部は内湾しながら立ち上がる。高台は垂直にのびる。高台端部外面に面取り。	外面にラマ式連弁文、内面に草花文を配す。高台内は露胎。高台内面に砂付着。	

第22表　中国産染付一覧表

No	地点	種別	器種	法量(cm)	胎土・焼成・色調	形態の特徴	技法の特徴	備考
210	Ⅳ区	染付	小皿	口径－13.0 底径－不明 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－明緑灰色(呉須－藍色)	体部はゆるやかに内湾し、口縁部は鋭く外反する。口縁端部は丸い。	全面施釉。外面には呉須絵（唐草か）を連続させ、口縁部外面に二条の染付線を描く。口縁部内面に二条の染付線、体部内面に梅文を描く。	泉徳鎮 16c前半
211	Ⅳ区	染付	小皿	口径－不明 底径－6.5 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－明緑灰色(呉須－藍色)	体部はゆるやかに内湾し開き、口縁部で外反する。高台はやや内湾気味にのび、高台端部は平らで、砂が付着。	全面施釉。高台端部は釉を剥ぐ。外面には呉須絵を描き、体部下位に二条、高台外面に一条の染付線を描く。底部内面に二条の円の中に唐草文を描く。	泉徳鎮 16c前半
212	Ⅳ区	染付	碗	口径－不明 底径－5.2 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－灰白色(呉須－紺色)	体部はゆるやかに内湾し開く。饅頭心の底部を持つ。高台は短く、やや内湾気味にのびる。高台端部外面面取り。	高台端部露胎。体部下位に一条、高台外面に二条の染付線。底部内面に団竜文。高台内中央に「富貴佳器」を配す。	泉徳鎮 16c後半
213	表採	染付	碗	口径－不明 底径－5.1 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－灰白色(呉須－紺色)	体部はゆるやかに内湾し開く。饅頭心の底部を持つ。高台は短く、やや内湾気味にのびる。高台端部外面面取り。	高台端部露胎。体部下位に一条、高台外面に二条の染付線。底部内面に団竜文。高台中央部に「寿」字か。	泉徳鎮 16c後半
214	Ⅴ区	染付	小皿	口径－不明 底径－2.5 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－灰白色(呉須－濃藍色)	高台はやや内湾して薄くのびる。底部は薄く平たい。	全面施釉。底部内面に草花文を描く。高台外面に複合鋸歯文を描く。	泉徳鎮 16c代
215	Ⅳ区	染付	小皿	口径－不明 底径－5.0 器高－不明	胎土－密・明オリーブ色 焼成－良　　色調－ 明緑灰色(呉須－茸灰色)	体部は内湾気味に立ち上がる。高台はやや開き、内面中央はやや厚みを増す。高台端部は尖り、外面は面取り。	高台端部は釉を剥ぐ。外面に唐草状文を連続させ、体部下位に二条、高台外面に二条の染付線。底部内面に草状文。高台端部内側に砂付着。	福建省 漳州窯 16c代
216	Ⅳ区 SD06	染付	小皿	口径－不明 底径－6.5 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－灰白色(呉須－濃藍色)	体部は開く。高台は直立し、高台端部は短く尖る。	高台端部外面は釉を剥ぐ。体部外面に草花文を描き、底部内面には二条染付線の中に草花文を描き、高台外面に二条の染付線が巡っている。	泉徳鎮 16c代
217	Ⅳ区 SD06	染付	小皿	口径－不明 底径－4.9 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－灰白色(呉須－藍色)	体部は開く。底部は碁笥底。底部は薄い。	底部端部は露胎。体部下位に一部釉溜りと砂付着。体部外面に文様と下位に二条の染付線、口縁部内面に一条、体部内面に二条の染付線と草花文。	泉徳鎮 16c代
218	Ⅶ区	染付	小皿	口径－10.8 底径－4.4 器高－2.5	胎土－密・浅黄色 焼成－良　　色調－ オリーブ黄色(呉須－紺色)	体部はゆるやかに開く。口縁端部は丸い。底部は碁笥底。	体部釉を掛け流し。体部下位及び底部内外面は露胎。体部外面に草文とその上下に各々一条染付線、体部内面に一条の染付線。内外面に貫入。	福建省 漳州窯 16c代
219	Ⅳ区	染付	小皿	口径－不明 底径－4.0 器高－不明	胎土－密・浅黄色 焼成－良 色調－灰白色(呉須－紺色)	体部は開く。底部碁笥底。底部中央はやや厚い。	全面施釉。体部釉を掛け流し。体部外面に草文と下位に一条染付線、底部内面に一条の染付線と薄く草文を描く。内外面に貫入が入る。	福建省 漳州窯 16c代
220	Ⅳ区	染付	小皿	口径－13.0 底径－6.0 器高－2.8	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－浅黄色(呉須－紺色)	体部はゆるやかに内湾しつつ口縁部に至る。口縁端部は丸い。底部は碁笥底。	底部外面は露胎。体部上位に一条染付線、体部内面に二条の染付線と底部内面に呉須絵を描く。	福建省 漳州窯 16c代

第23表　銅銭一覧表

No	地点	種別	最大径(cm)	孔径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
221	Ⅵ区SD01	銅銭	2.6	1.1	1.1	2.5	「五銖」。初鋳造年はBC118年（漢）である。裏面記載なし。
222	Ⅶ区	銅銭	2.4	0.7	1.2	1.2	「開元通寶」。初鋳造年は621年（唐）である。裏面記載なし。
223	Ⅵ区	銅銭	2.3	0.7	1.1	破損	「開元通寶」。初鋳造年は621年（唐）である。裏面記載なし。
224	Ⅳ区SD06	銅銭	2.3	0.7	1.0	1.9	「太平通寶」。初鋳造年は976年（宋）である。裏面記載なし。
225	Ⅵ区	銅銭	2.4	0.7	1.0	2.6	「祥符通寶」。初鋳造年は1009年（宋）である。裏面記載なし。
226	Ⅴ区Pit29	銅銭	2.4	0.7	1.0	2.7	「祥符通寶」。初鋳造年は1009年（宋）である。裏面記載なし。
227	Ⅴ区Pit14	銅銭	2.5	0.7	1.2	2.7	「天福通寶」。初鋳造年は1017年（宋）である。裏面記載なし。
228	Ⅵ区SD01	銅銭	2.5	0.8	0.9	破損	「天聖元寶」。初鋳造年は1023年（宋）である。裏面記載なし。
229	Ⅴ区	銅銭	2.4	0.7	0.9	2.4	「天聖元寶」。初鋳造年は1023年（宋）である。裏面記載なし。
230	Ⅴ区	銅銭	2.5	0.8	1.2	破損	「皇祐元寶」。初鋳造年は1034年（宋）である。裏面記載なし。
231	Ⅴ区	銅銭	2.5	0.7	1.0	2.7	「熙寧通寶」。初鋳造年は1068年（宋）である。裏面記載なし。
232	Ⅳ区SD06	銅銭	2.8	0.8	1.5	4.3	「元豊通寶」（折二銭）。初鋳造年は1078年（宋）である。裏面記載なし。
233	Ⅶ区SD01	銅銭	2.4	0.7	1.0	2.2	「元祐通寶」。初鋳造年は1086年（宋）である。裏面記載なし。
234	Ⅳ区SD06	銅銭	2.7	0.7	1.3	5.6	「元祐通寶」（折二銭）。初鋳造年は1086年（宋）である。裏面記載なし。
235	Ⅴ区Pit33	銅銭	2.3	0.8	1.2	破損	「紹聖元寶」。初鋳造年は1094年（宋）である。裏面記載なし。
236	Ⅴ区	銅銭	2.4	0.7	1.2	2.4	「紹聖元寶」。初鋳造年は1094年.(宋）である。裏面記載なし。
237	Ⅳ区	銅銭	3.4	1.0	1.4	破損	「崇寧通寶」（当十銭）。初鋳造年は1103年（宋）である。裏面記載なし。
238	Ⅹ区	銅銭	2.3	0.7	1.0	1.8	「洪武通寶」。初鋳造年は1368年（明）である。裏面記載なし。
239	Ⅵ区SX03	銅銭	2.5	0.6	1.5	2.7	「永楽通寶」。鋳造年代は1408年（明）である。裏面記載なし。
240	Ⅶ区	銅銭	2.6	0.8	1.2	3.5	解読不能。「文久永寶」か。裏面記載なし。

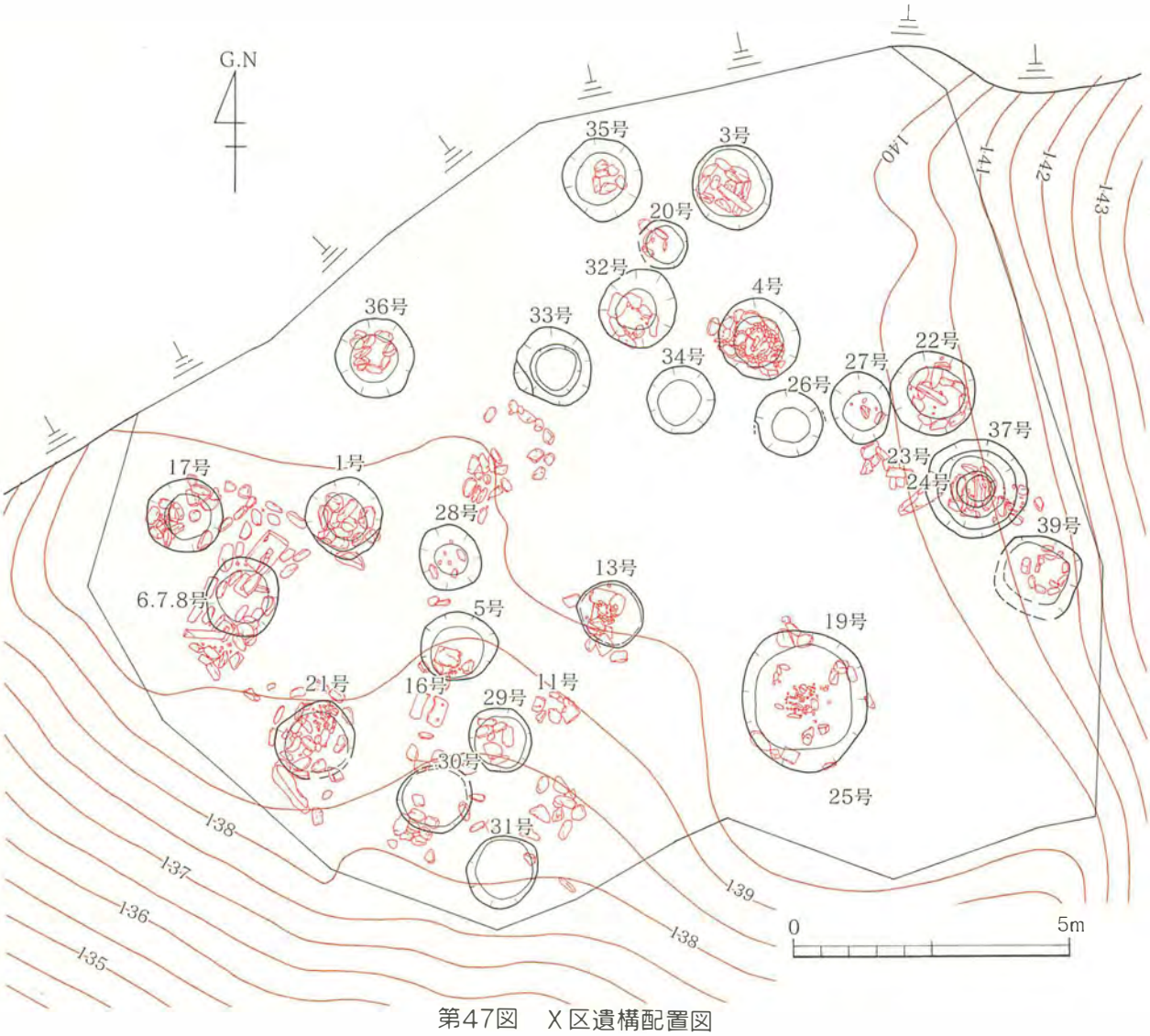
第４節　近世の遺構と遺物

１　遺構

丘陵西側高台からの急斜面を西側に下りた平坦部（Ｘ区）において近世墓群が検出された。丘陵主軸上の西端に位置している。北側はシラスの崩落により絶壁を為し、その下を町道（旧県道）が東西に延びる。西側もまた尾根づたいに急傾斜を為し、東側はＶ区からの急傾斜で絶壁を為す。調査区は西側が比較的下がるもののほぼ平坦面を形成していたが、調査区西南隅に１段低い区画があった。

調査前は雑木が生い茂り、東側からのシラスの崩落土によりほとんどの墓は埋没しており、４号、６号、７号の墓石のみが一部突き出たような状況であった。調査はそれら雑木を伐採除去し、表土及びシラスの崩落土を掘削することから始まり、遺構の検出を行った。検出された墓壙は計２４基である。墓壙はその密集度から北東側に１３基、南西側に１１基と２分割でき、調査区西南隅の段下がり部に３基の墓壙（２９号、３０号、３１号）が所在した。墓壙の平面形状は円形を呈し、そのほとんどが断面逆台形の平底であった。また、墓標の攪乱が著しく、墓標の残存状況は比較的悪い。そのうち墓標の残存状況が比較的良いのは３、４、６、２１、２２号墓の５基で、これらには紀年銘のある墓石が伴う。その他、墓標である囲石が見られる墓壙は１０基、残りの墓壙に関しては、墓標はすでに消失していた。

以下に、これらの検出された墓について詳述する。



第47図　Ｘ区遺構配置図

（1）１号墓（第４８図上）

南西側の墓群の西側に位置する。墓標の平面形状は比較的不明瞭で長軸123.0㎝、短軸112.0㎝の方形区画に円礫が寄せ集めたような状況で置かれていた。その中には石臼の破片も混じる。墓標の主軸（A－A'）はＮ－77°－Ｗである。

墓壙の形状は径133.0㎝、深123.0㎝の断面逆台形の平底で、底径は73.0㎝を測る。埋土は2.0～5.0㎝大の円礫が上層に混じる暗黄褐色土であった。木棺痕跡は認められなかったが、鉄釘１本が墓壙内から検出された。

遺物は底付近から土師質土器(241）、白磁小杯(242）、陶器碗(243)、「寛永通宝」１点が検出された。また、人骨は頭蓋骨、歯、四肢骨等残存状況は比較的良い状況で検出された。

（2）３号墓（第４８図下）（第５０図左）

北東側の墓群の北端に位置する。墓標は比較的良好な状況で残存しており、平面形状は長軸93.0㎝、短軸82.0㎝の方形区画を円礫８個で囲み、さらにその内側に円礫で小区画を設け、中央に墓石を立てる。ただし、検出時には墓石は仰向けに倒れていた。墓標の主軸（A－A'）はＮ－63°－Ｗである。墓石は全長71.8㎝、最大幅13.0㎝、厚さ2.4㎝と細身で、「貞亨元年（1684）十二月十七日」の年号と「月清禅定尼」の戒名が刻まれており、石材に安山岩を使用していた。

墓壙の形状は径147.0㎝、深105.0㎝の断面逆台形の平底で、底径は123.0㎝を測る。埋土は大きく分けて２層に分層できる。上層は黄褐色シラス土で2.0～5.0㎝大の円礫を上部に含む。下層は暗褐色の少ししまりのある土であった。木棺痕跡は確認できなかった。

遺物は上層から土師質土器（244）が検出された。人骨は検出されなかった。

（3）４号墓（第４９図上）（第５０図右）

北東側の墓群の中央に位置する。墓標は非常に良好な状況で残存していた。墓標の平面形状は東西124.0㎝、南北93.0㎝の楕円形区画を円礫８個で囲み、その内側に小石を充填し、その中央に凝灰岩製の菱形の台座を配置する。その台座の前には32.0㎝大の円礫が置かれていたが、献花台と思われる。墓標の主軸（A－A'）はＮ－70°－Ｗである。墓石は全長88.0㎝、最大幅28.0㎝、厚さ6.5㎝と比較的大きく、「貞亨三丙寅年（１６８６）十二月二十二日」の年号と「峯山妙雪信女」の戒名が刻まれていた。戒名の上部に日輪、下部に蓮弁を配す。

墓壙の形状は径140.0㎝、深168.0㎝の断面逆台形を呈し、底径は89.0㎝を測る。埋土は大別して２層に分層できる。上層は黄褐色のシラス土で、下層は暗褐色土で西側に側壁（シラス）の崩落土が含まれる。木棺痕跡は確認できなかった。

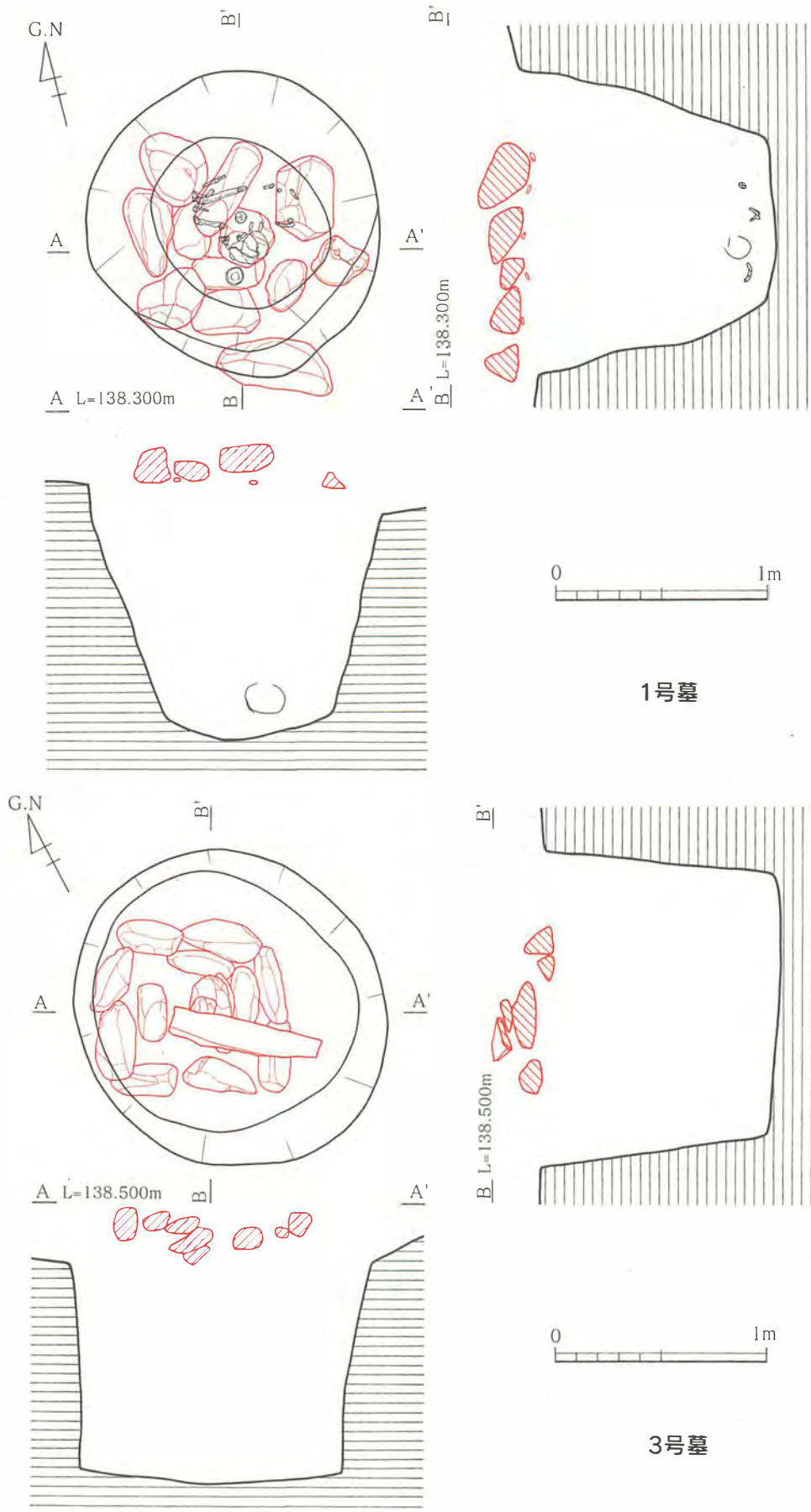
遺物は底近くから土師質土器(245)と残念ながら廃土中であったため出土地点は確認できなかったが、埋土中から景徳鎮産の染付小杯(246)が検出された。人骨は残りが悪く、頭蓋骨の１部のみの検出であった。

（4）５号墓（第４９図下）

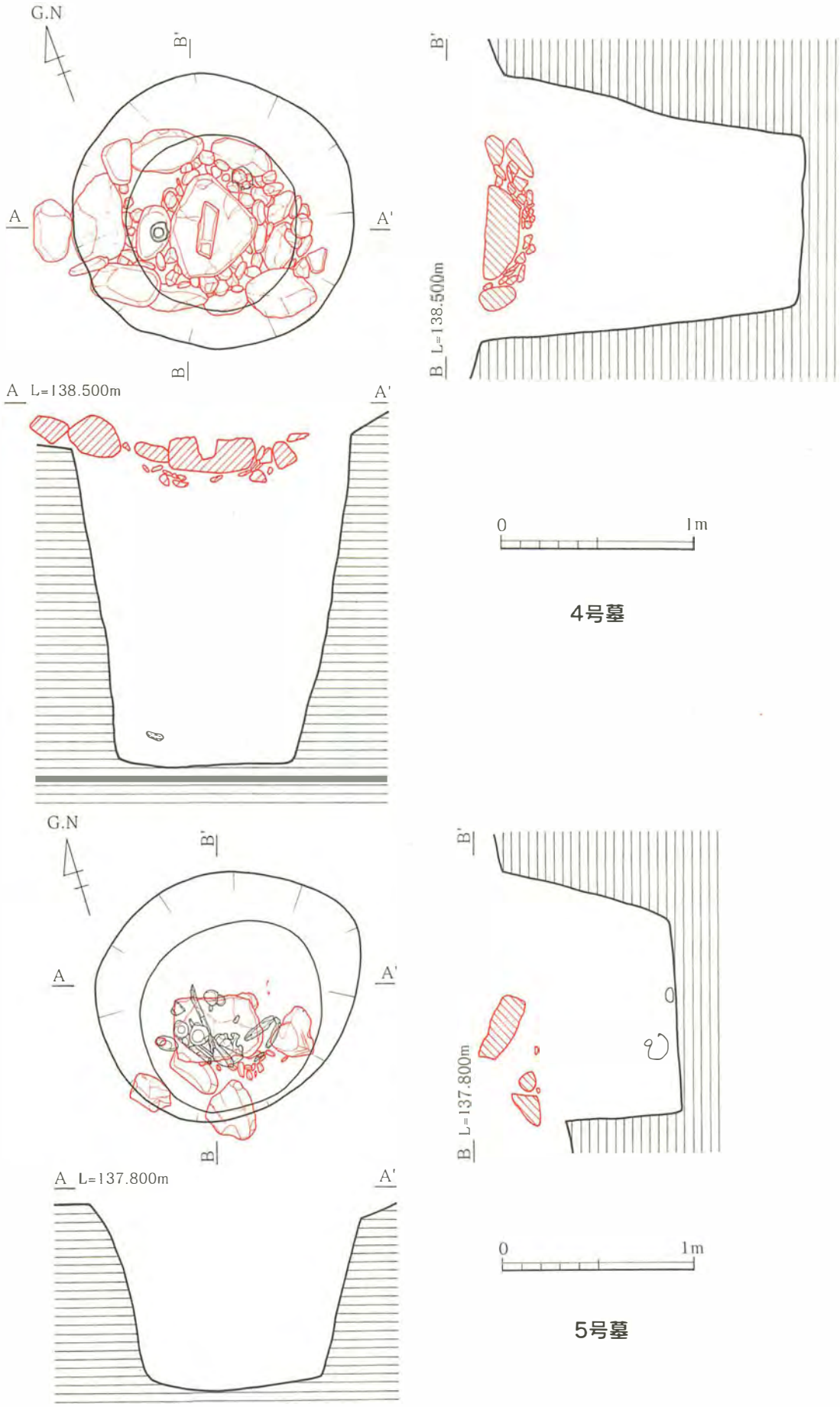
南西側の墓群の中央に位置する。墓標はかなり攪乱を受けており、区画に使用したと思われる円礫が散在した状況であった。台座に使用したと思われる方形に整形された凝灰岩（東西46.0ｃｍ、南北32.0ｃｍ）が破損した状況で残されていた。墓標の主軸は不明である。

墓壙の形状は径129.0㎝、深88.0㎝の断面逆台形を呈し、底径は91.0㎝を測る。埋土は２層に分層でき、上層の黄褐色土と下層の暗褐色土に分かれる。上層には14.0㎝大の円礫と小石が混じる。木棺痕跡は見当たらなかった。また、底近くからも小石が検出されたが上からの落ち込みであろう。

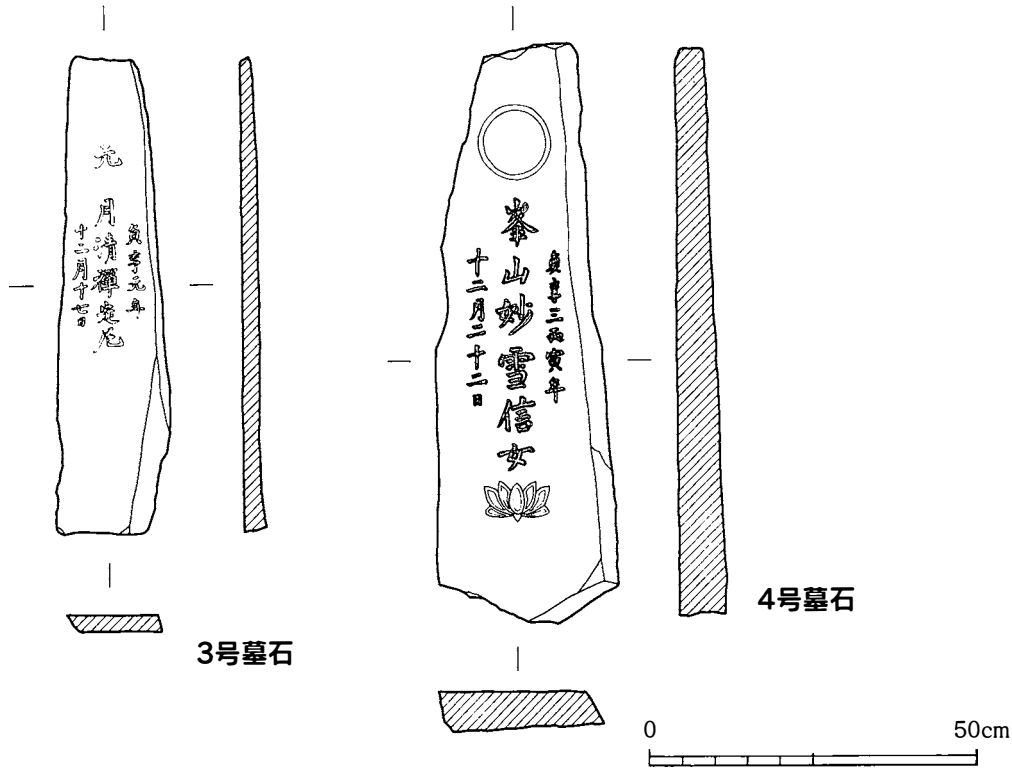
遺物は底近くから土師質土器（247･248･249・250)、白磁小杯１点（251）が底近くから検出された。また人骨は、頭蓋骨、四肢骨等比較的良好な状態で検出された。



第48図　1、3号墓実測図



第49図　4、5号墓実測図



第50図　3、4号墓石実測図

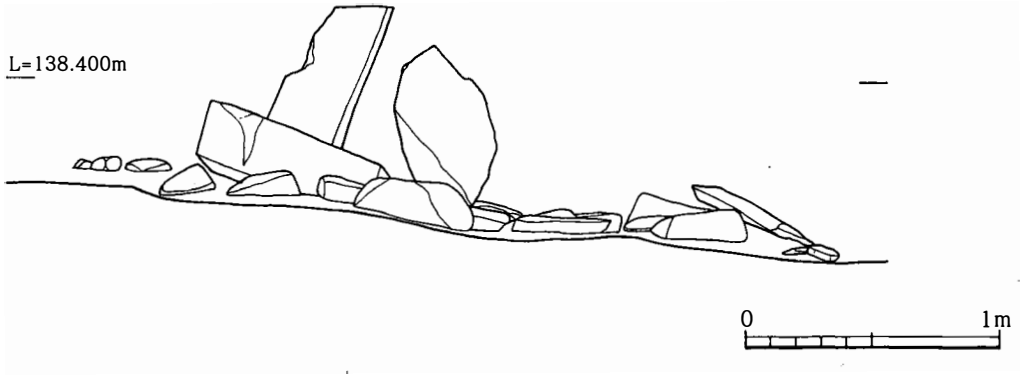
（５）６号、７号、８号墓（第５１図）（第５２図）（第５３図）

南西側の墓群の北西端近くに位置する。墓標の残存状況は非常に良好で、６号、７号は立ったままの状況で検出され、８号はうつ伏せに倒れた状況で検出された。平面形状は長軸315.0㎝、短軸126.0㎝と東西に長い大区画（円礫を使用）を設け、そのうちに土砂の浮き沈みで原位置から少し動いていると思われるが、３基がほぼ並列して設置されていた。墓標の主軸（C－C'）はN－58°－Wである。

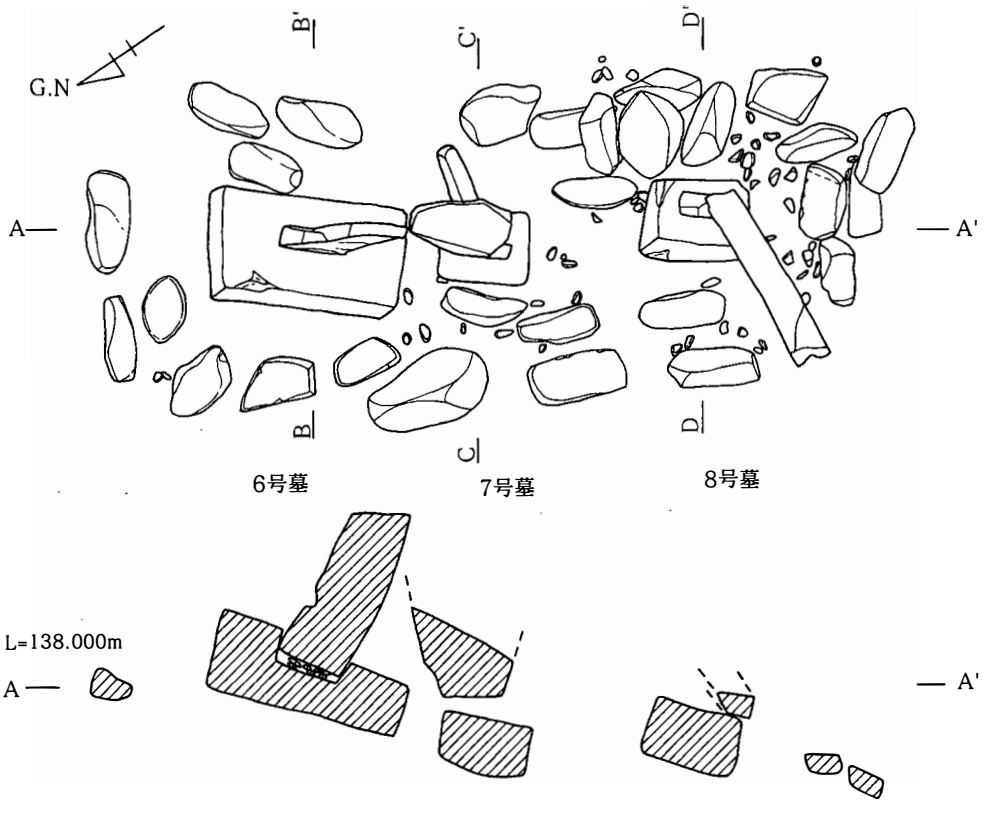
６号墓石は全長72.0㎝、最大幅32.0㎝、厚さ4.0㎝で、正面が内側に湾曲した長方形を呈し、厚味がある。「万治三庚子白（１６６０）十月十二日　小雲宗春禅定門　明暦二丙申白（１６５６）十二月八日花覚妙椿禅定尼　次松○右衛門祖父母」と２氏の戒名が並列して刻まれていた。石材は安山岩を使用している。台座は安山岩系の石材を使用した78.0㎝×38.0㎝×24.0㎝大の直方体の台座で、鑿痕跡も比較的しっかり残っていた。差込部分には小石を充填していた。７号墓石は、全長76.5㎝、最大幅35.0㎝、厚さ4.0㎝と尖り気味の頂部を持つ扁平の板状の石材を使用した形状で、「癸未十二月三日　玉宙明咬禅定尼　次松氏女婦」と刻む。年号部位はもともと無いものと思われる。石材は安山岩を使用している。台座は凝灰岩製の25.0㎝×33.0㎝×19.0㎝の直方体で差込部分は断面逆三角形でその底部に穴が開き、小石を充填していた。鑿痕跡は風化のため不明瞭であった。８号墓石は、全長80.5㎝、最大幅16.0㎝、厚さ6.5㎝と、細長く平坦な形状で、頂部付近が剥離して年号部位が一部欠落していた。「次松傳助尉　○岩如雪禅定門　○○八壬申白十一月十三日」と浅く刻む。石材は安山岩を使用している。台座は26.0㎝×37.0㎝×21.0㎝の直方体を為す。これも凝灰岩製で風化しており、鑿痕跡が不明瞭であった。

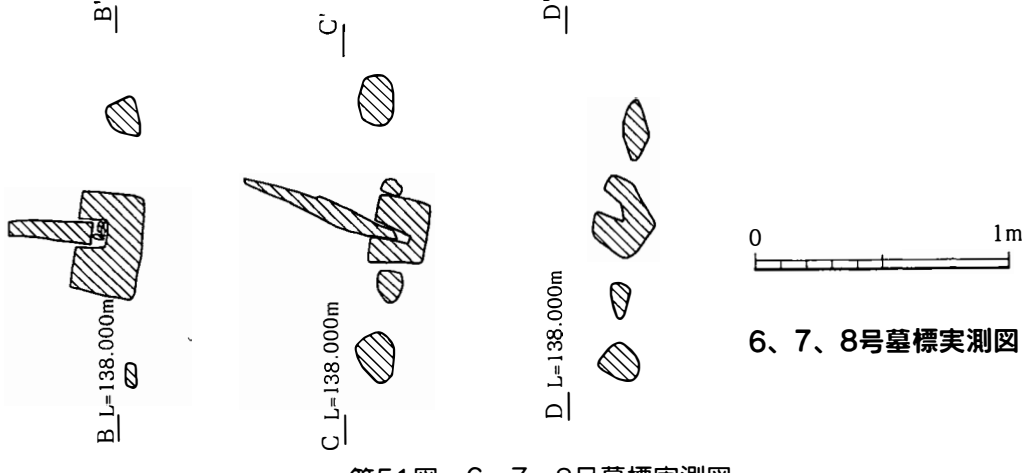
墓壙は３基の墓標が確認されているにもかかわらず、１基のみの検出となった。便宜上、６号墓壙とする。墓壙の形状は径126.0㎝、深105.0㎝の断面逆台形を呈し、底径は93.0㎝を測る。埋土は３層に分層でき、上層は赤褐色土中に2.0～5.0㎝大の円礫を含む。その下層に黄褐色のシラス土が入り、最下層に若干しまりのある暗褐色土になる。木棺痕跡は見当たらなかった。

遺物は暗褐色土中に、土師質土器（252）、青銅製のキセル（図版29.3）が１点検出された。人骨も比較的良好な状況で残っており、頭蓋骨、歯、四肢骨等が検出された。



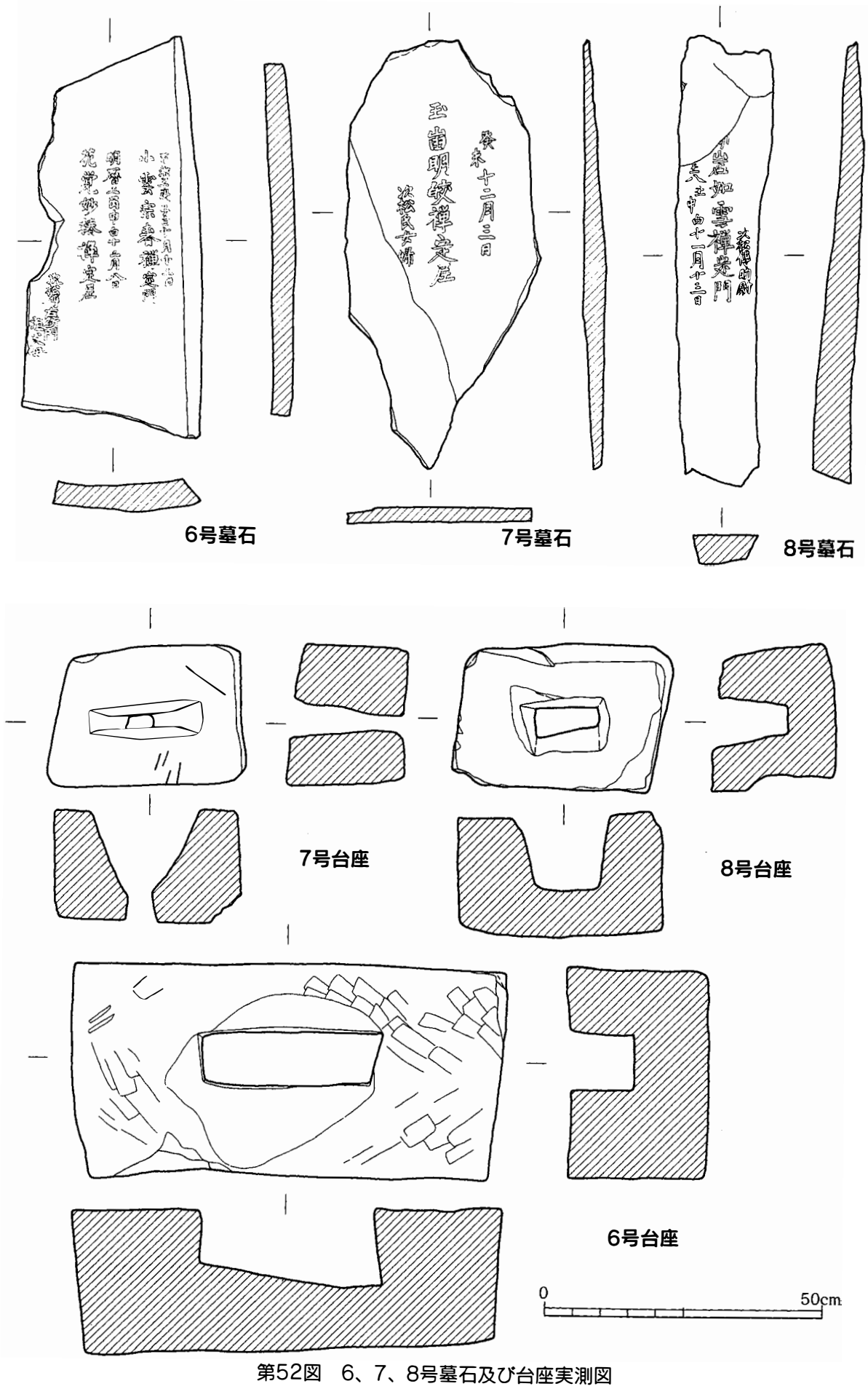
6、7、8号墓標景観図



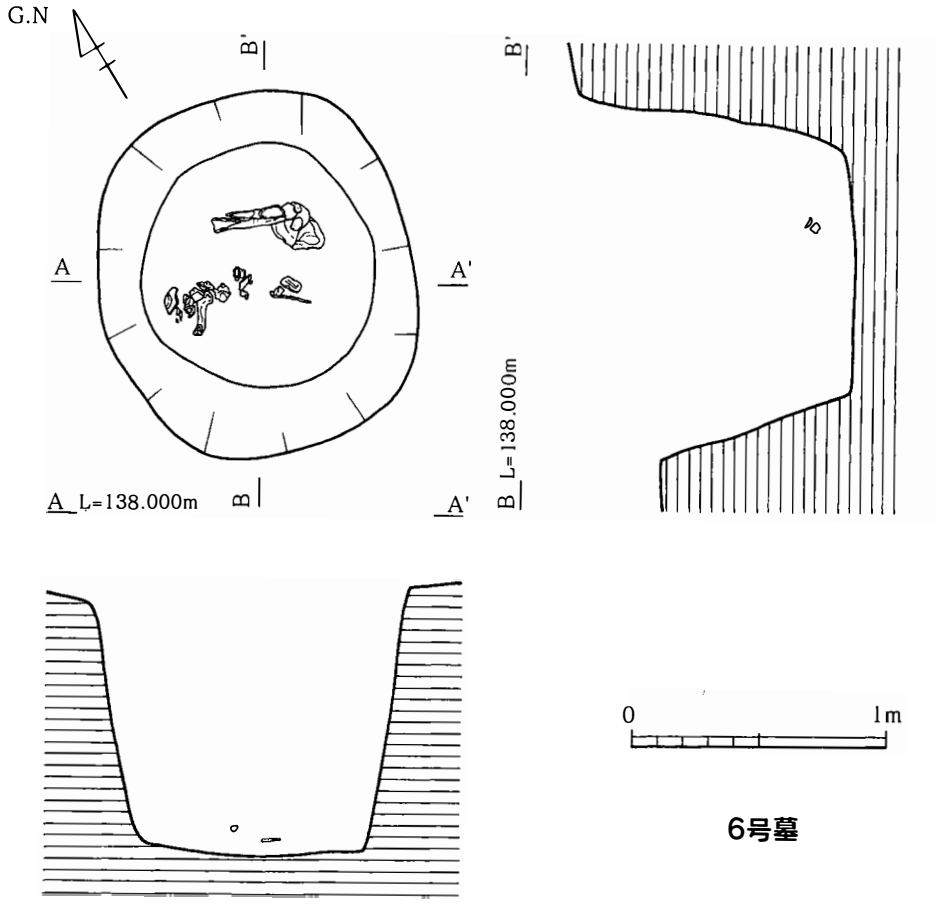


6、7、8号墓標実測図

第51図　6、7、8号墓標実測図



第52図　6、7、8号墓石及び台座実測図



第53図　6号墓壙実測図

（6）１１号台座（第５４図左）

南西側墓群の段落ち部分に位置する。本来の場所からは大きく動き破砕した状況で検出された。段落ち部で検出された墓壙のいずれかに伴うものと思われる。

台座の形状は破砕しているため不明であるが、厚さは14.0cmを測る。径4.0cm、深3.0cmの花受が一つ穿たれていた。石材は凝灰岩である。

（7）１６号台座（第５４図右）

南西側墓群の段落ち部に位置する。１１号台座と同様に、段落ち部で検出された墓壙のいずれかに伴うものと思われる。

２個体に分断されていたが、縦51.0cm、横51.0cm、高さ12.0cm程の大きさを有し、径4.0cmの花受を差込部前方に２つ穿つものと思われる。石材は凝灰岩である。

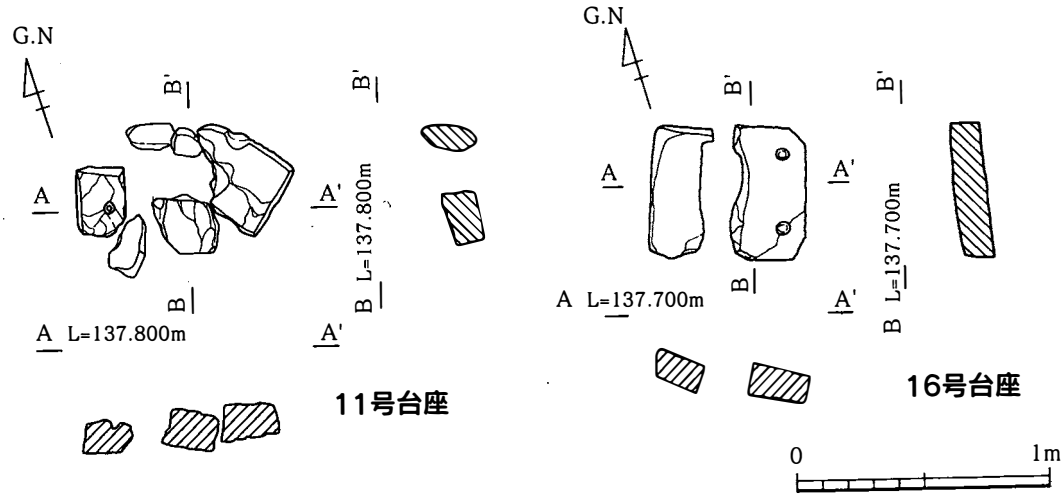
（8）１３号墓（第５５図上）

南西側の墓群の東側に位置する。墓標は樹根により南東方向に押されているものの比較的良好な状況で残っていた。平面形状は、円礫を四周に配置し、小石を中に充填する。残存部は長軸63.0cm、短軸84.0cmを測る。区画に使用された礫の中には砂岩質の石が１石だけ加わる。墓標の主軸（A－A'）はN－68°－Wである。また、墓標の脇に、台座と思われる凝灰岩片が確認された。

墓壙の形状は径111.0cm、深87.0cmの円筒形を呈す。他の墓壙に比べ、垂直に掘り込む。埋土は黄褐色シラス土の一括埋土であった。

遺物は底から20.0cm上に青銅製のつまみ付き蓋（図版29.2）のみ検出された。

（9）１７号墓（第５５図下）



第54図　11、16号台座実測図

南西側墓群の北西端に位置する。墓標の形状は円礫を配した大区画の中に東西72.0cm、南北71.0cmの方形を意識した小区画があり、その中を4.0～11.0cm大の円礫で充填していた。大区画は東側の１部しか残っていなかった。墓標の主軸（任意）はN－65°－Wである。

墓壙の形状は径130.0cm、深103.0cmの断面逆台形を呈し、底径は75.0cmを測る。北西側は２段に掘り込まれている。埋土は上層には13.0cm大の円礫を含む赤褐色土が被さった形で、径81.0cm、深70.0cmの円筒形に入り込んだ暗褐色土が中央に位置し、その周りを灰白色のシラス土が覆っている。鉄釘１２点が検出され、さらに青銅製の留め具が木片に打ち込まれた状況で検出された。

遺物は、底近くより土師質土器（253）が１点検出された。人骨は、頭蓋骨、四肢骨の１部が検出された。

（10）１９号墓（第５６図上）

南西側の墓群のうち東端にあり、他の墓から少し離れた箇所に位置する。墓標の配石は散在し、充填された小石のみ１部残存していた。周辺に散在した円礫は大きく最大で62.0cm大のものから小さくても20.0cm大の大きさであった。台座と思われる凝灰岩製の加工石も散在していた。墓標の主軸は不明。

墓壙の形状は径234.0cm、深167.0cmの断面逆台形を呈し、底径190.0cmと墓域中最大の規模である。埋土は木棺痕跡は認められないものの径89.0cm、深99.0cmの円筒形状に暗褐色土の堆積が見られる。円筒形土層の両脇は軽石が多く混じる黄褐色シラス土であった。その下部には側壁の崩落土と思われる灰白色のシラス土が堆積していた。その上部を黄褐色のシラス土が覆う。その上部には多数の小石が混じる。鉄釘４点が検出された。

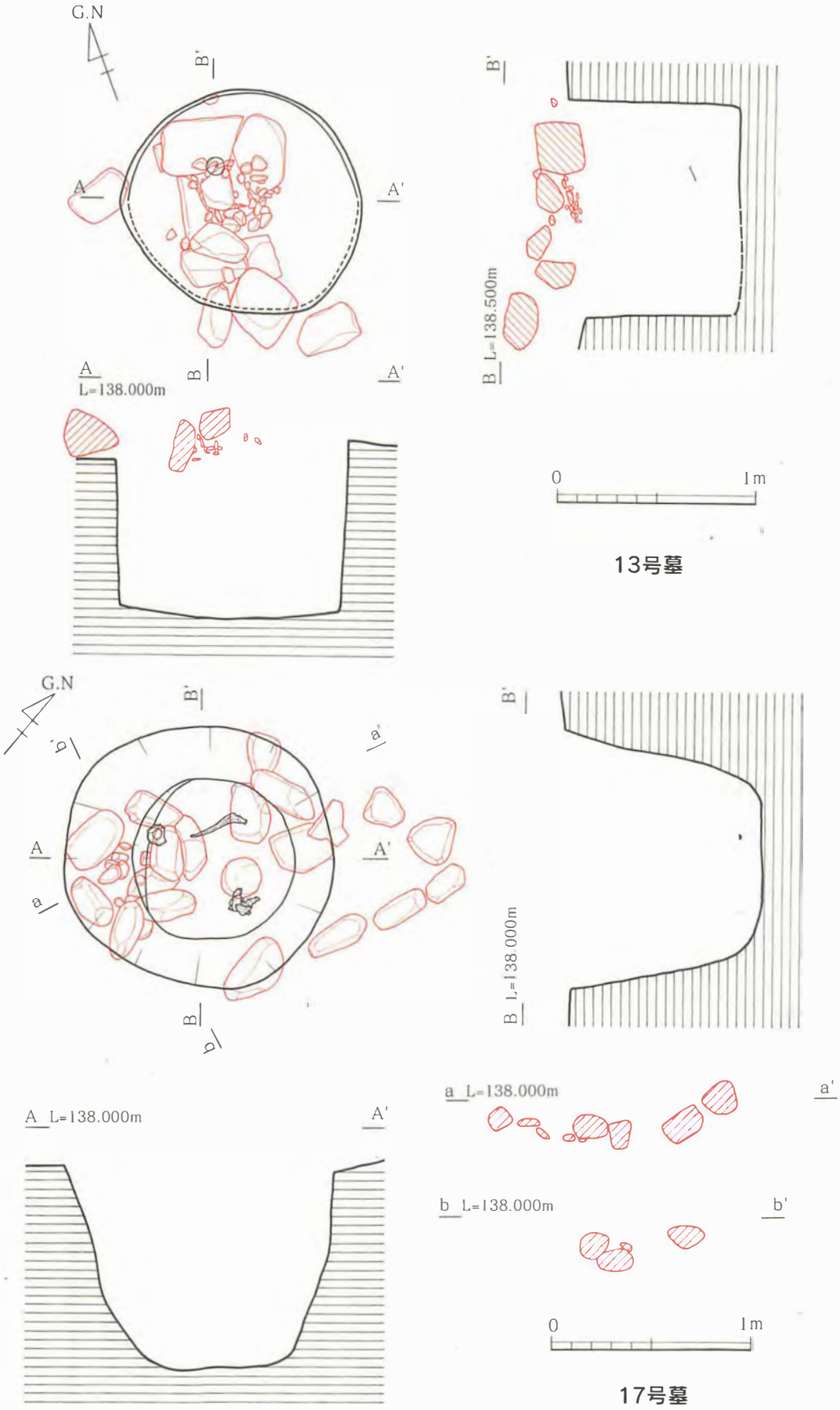
遺物は土師質土器（254･255･256･257･258･259･260･261）、陶器碗（262）、刀子（柄の部分が青銅製）(図版29.1）が底近くから検出された。遺物の検出量も他の墓壙に比べ、最も多い。人骨の残存状況はあまり良くなく、頭蓋骨、四肢骨の一部が検出された。

（11）２６号墓（第５６図下）

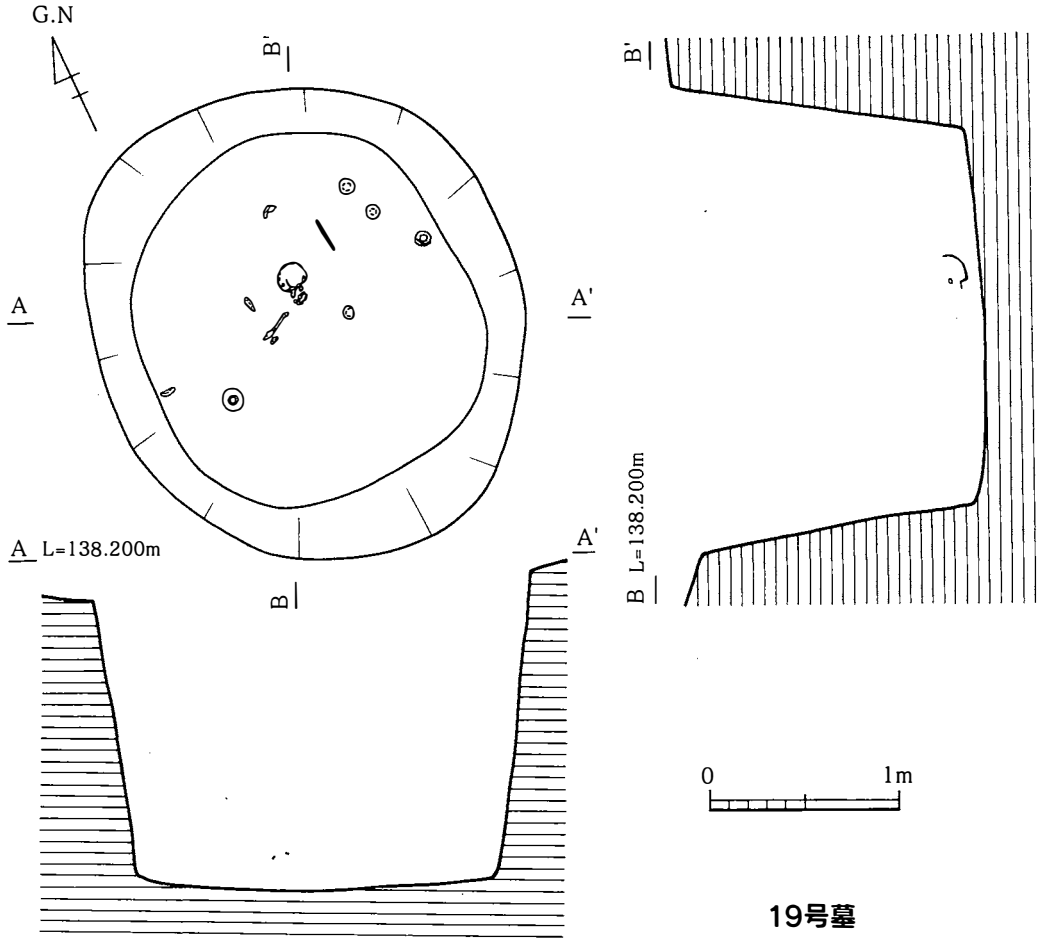
北東側の墓群の中央に位置する。墓標はすでに消失していた。また、調査の段階で上部南半分を消失。

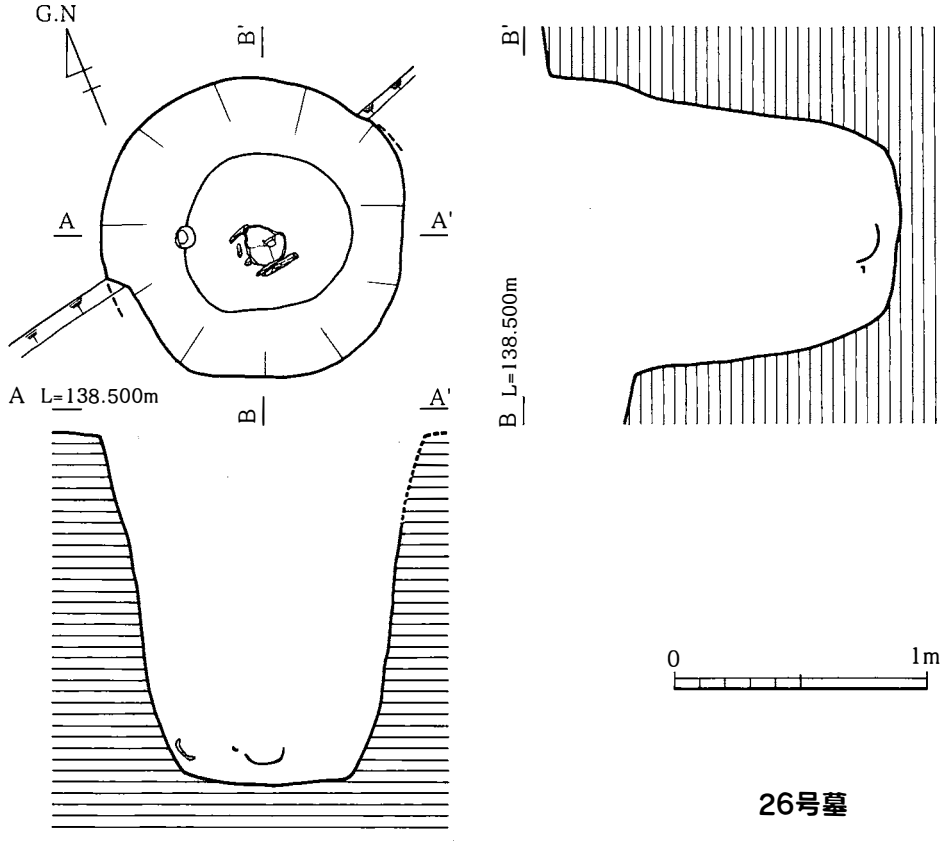
墓壙の形状は径119.0cm、深138.0cmの断面逆台形を呈し、底は少し丸底気味で、底径は61.0cmを測る。埋土は上部57.0cm程が暗褐色土で、下端に灰白色シラス土がブロック状に入る。その下に径80.0cmの円筒形状に暗褐色土の堆積がみられ、その脇は黄褐色シラス土が覆い、その下端に灰白色シラス土が入る。埋土中から鉄釘６本が検出された。

遺物は、底近くから土師質土器（272）のみであった。人骨の残存状況は悪く頭蓋骨、四肢骨等が少々検出された。

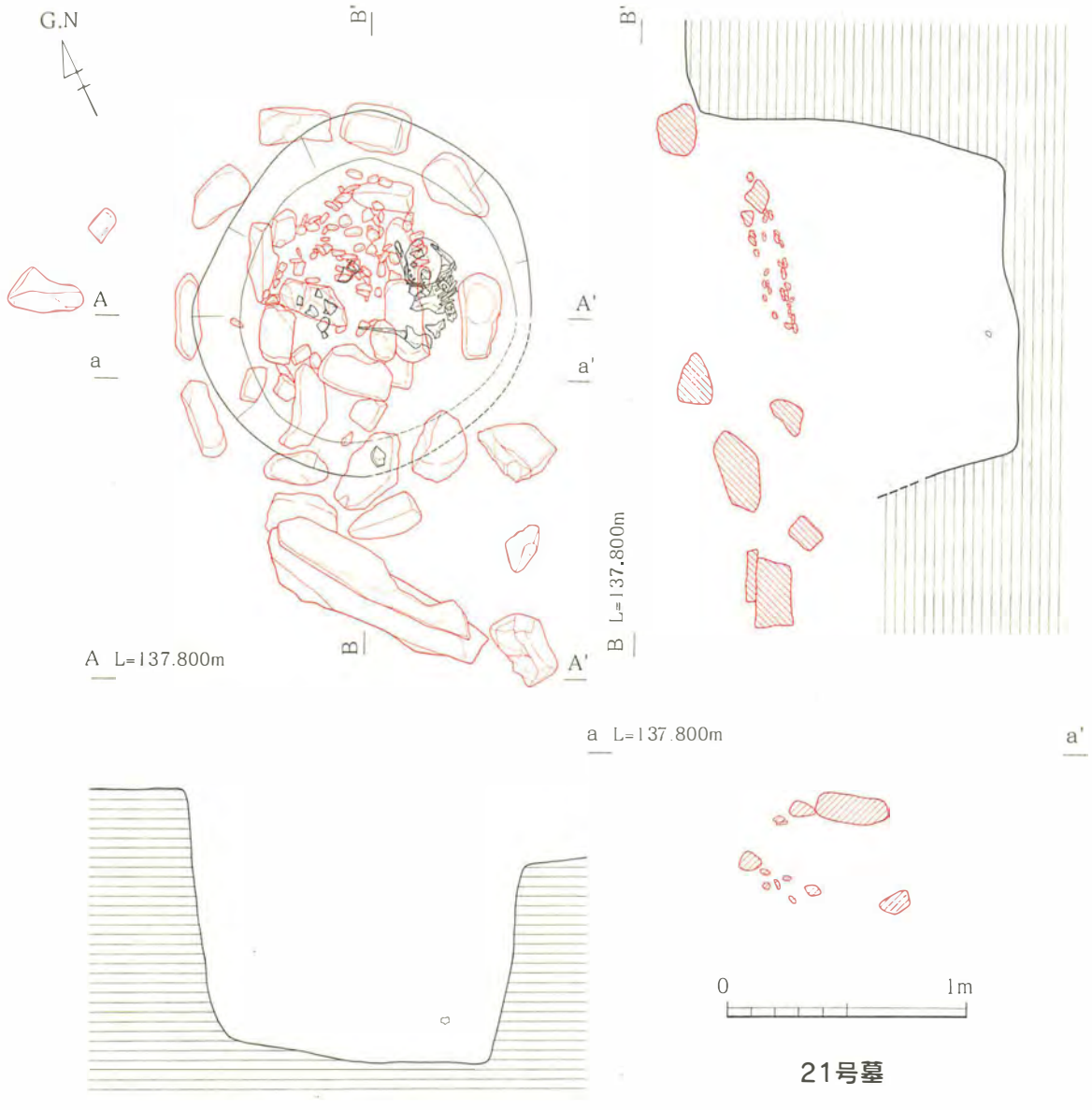


第55図　13、17号墓実測図





第56図　19、26号墓実測図



第57図　21号墓実測図

（12）２１号墓（第５７図）（第５９図上段左）

南西側の墓群の最西端に位置する。墓標の形状は29.0～36.0cm大の円礫１０個を使用した長軸138.0cm、短軸180.0cm強の楕円形の大区画を設け、その内側に東西73.0cm、南北91.0cmの方形を意識した小区画を設ける。その内側には小石を充填していた。墓標の主軸（A－A'）はN－63°－Wである。墓石は大区画の南にうつ伏せの状況で検出された。墓石は全長104.0cm、最大幅22.0cm、厚さ16.0cmと細長く厚みのある形状である。「天和四甲子（１６８４）正月　桃室常紅禅定門　延宝元辛酉（１６７３）三月十六日　春日紹紅禅定尼　霊位」を刻み、その上部に梵字、下部に蓮華を配す。左側面下位（スクリーントーン部分）にも彫字が見られるが不明瞭ではっきりしない。石材は安山岩を使用している。

墓壙の形状は径143.0cm、深135.0cmの断面逆台形を呈し、底径117.0cmを測る。埋土は暗褐色土である。

遺物は大区画に土師小皿の破片が散在していた他、墓壙内から土師質土器（263･264･265･266）、染付小杯（268･269･270）、陶器［香炉］(267）が検出された。人骨の残存状況は良好で、頭蓋骨、歯、四肢骨等が検出された。

(13) ２０号墓（第５８図上）

北東側の墓群の東側に位置する。墓標の形状は長軸51.0㎝、短軸43.0㎝の方形区画で19.0～29.0㎝大の円礫４個を四周に配置する。墓石は消失したか、あるいは元々無かったものと思われる。墓標の主軸(A－A')はＮ－53°－Ｗである。

墓壙の形状は径88.0㎝、深さ103.0㎝の断面逆台形を呈し、底径は65.0㎝を測る。埋土は２層に分層でき、上層は2.0～5.0㎝大の円礫が混じる黄褐色シラス土がレンズ状に入り、下層は若干しまりのある暗褐色土であった。

遺物は墓標配石の内側に土師質土器（294）のみの出土であった。埋土中からの遺物の検出は見られず、また人骨も検出されなかった。

(14) ２２号墓（第５８図下）（第５９図上段右）

北東側の墓群の南東側に位置する。墓標の残存状況は良く、平面形状は長軸99.0㎝、短軸89.0㎝の楕円形区画に27.0～33.0㎝大の円礫９個を配し、その内側に3.0～8.0㎝大の円礫を充填する。墓標正面に45.0×21.0㎝大の平石を置くが、献花台と思われる。墓標の主軸（A－A'）はＮ－61°－Ｗである。墓石は西側にうつ伏せに倒れており、上から20.0㎝程折れて検出された。尖った頂部を持つ長さ90.5㎝の細長い形状である。「宝永三戊〇年（１７０６）十二月十八日　函谷妙淵信女　㝵」と刻む。彫字内に朱が塗られていた。石材は安山岩を使用している。

墓壙の形状は径147.0㎝、深154.0㎝の断面逆台形を呈し、底径は88.5㎝を測る。埋土は上層が黄褐色シラス土で、その下に径98.0㎝の円筒形状に暗褐色土が入り、脇に若干しまりのある暗褐色土を充填した状況であった。また、鉄釘３本が検出された。

遺物は底近くから土師質土器（271）、「寛永通宝」３点が検出された。人骨の残存状況はあまり良くなく、頭蓋骨、四肢骨の一部等が検出された。

(15) ２３号墓石（第５９図下段左）

北東側墓群の東側に位置する。墓標の配石として使用されたと思われる円礫に混じって仰向けで検出された。

墓石は、全長49.5㎝、最大幅16.0㎝、厚さ4.0～7.5㎝を測る。比較的小さな墓石で「水泡童子次松氏」と浅く刻む。石材は安山岩を使用している。

墓石直下で墓壙の検出を行ったが、検出できなかった。

(16) ２４号墓石（第５９図下段中）

北東側墓群の東側に位置する。これも２３号墓石があった集石の南脇で検出され、南西方向にうつ伏せに倒れた状態で検出された。

墓石は、全長86.0㎝、最大幅27.0㎝、厚さ10.0～15.0㎝と肥厚しており、尖り気味の頂部を持つ比較的大きな形状である。「享保二丁酉年（１７１７）　五月二十七日　法雲浄空信女」と刻み、戒名の上部に日輪、下部に蓮弁を配す。石材は安山岩を使用している。

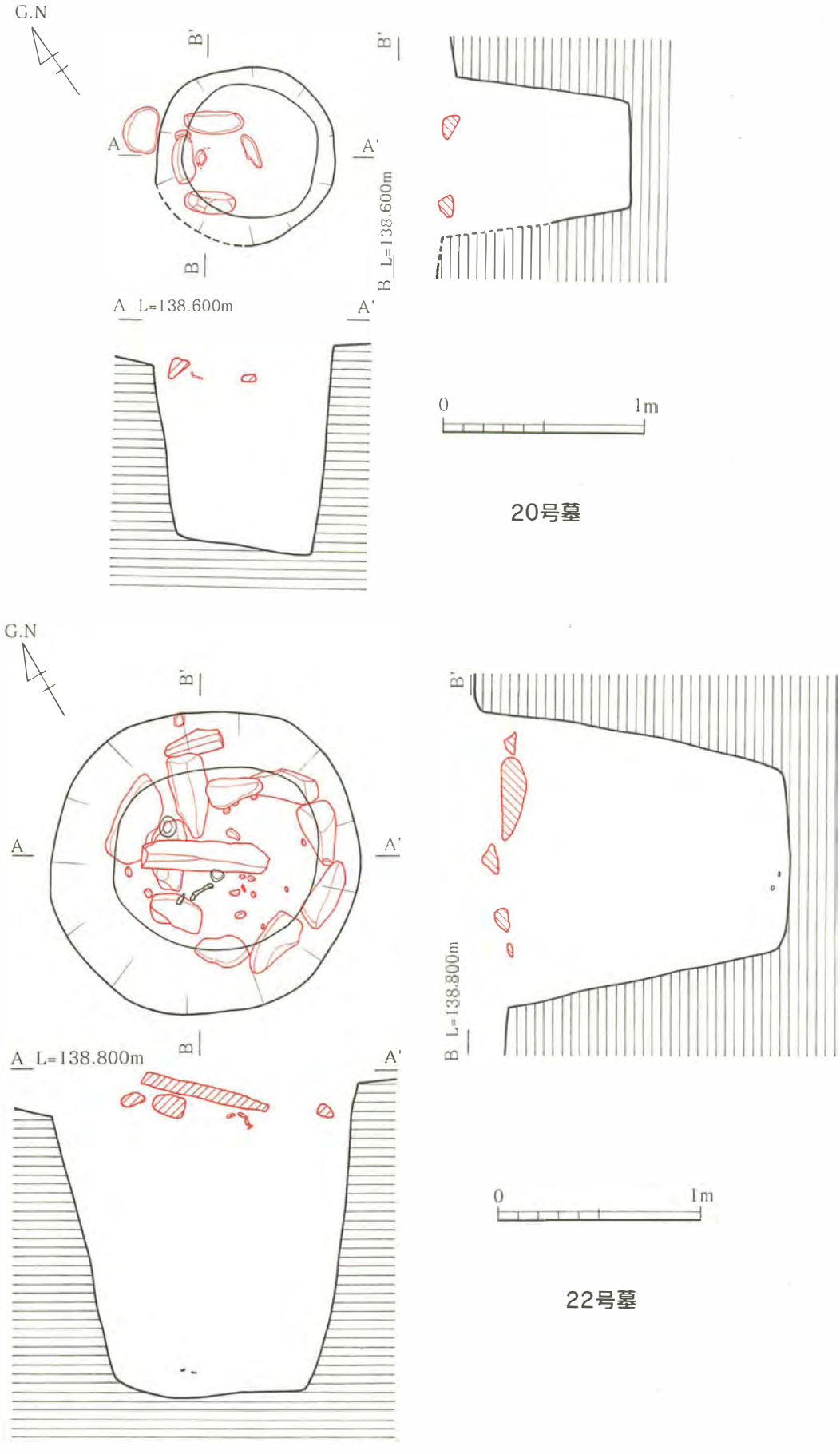
墓石直下で墓壙の検出を行ったが、検出できなかった。墓石基部が３７号墓のほうに向くので、３７号墓の墓石の可能性が考えられる。

(17) ２５号墓石（第５９図下段右）

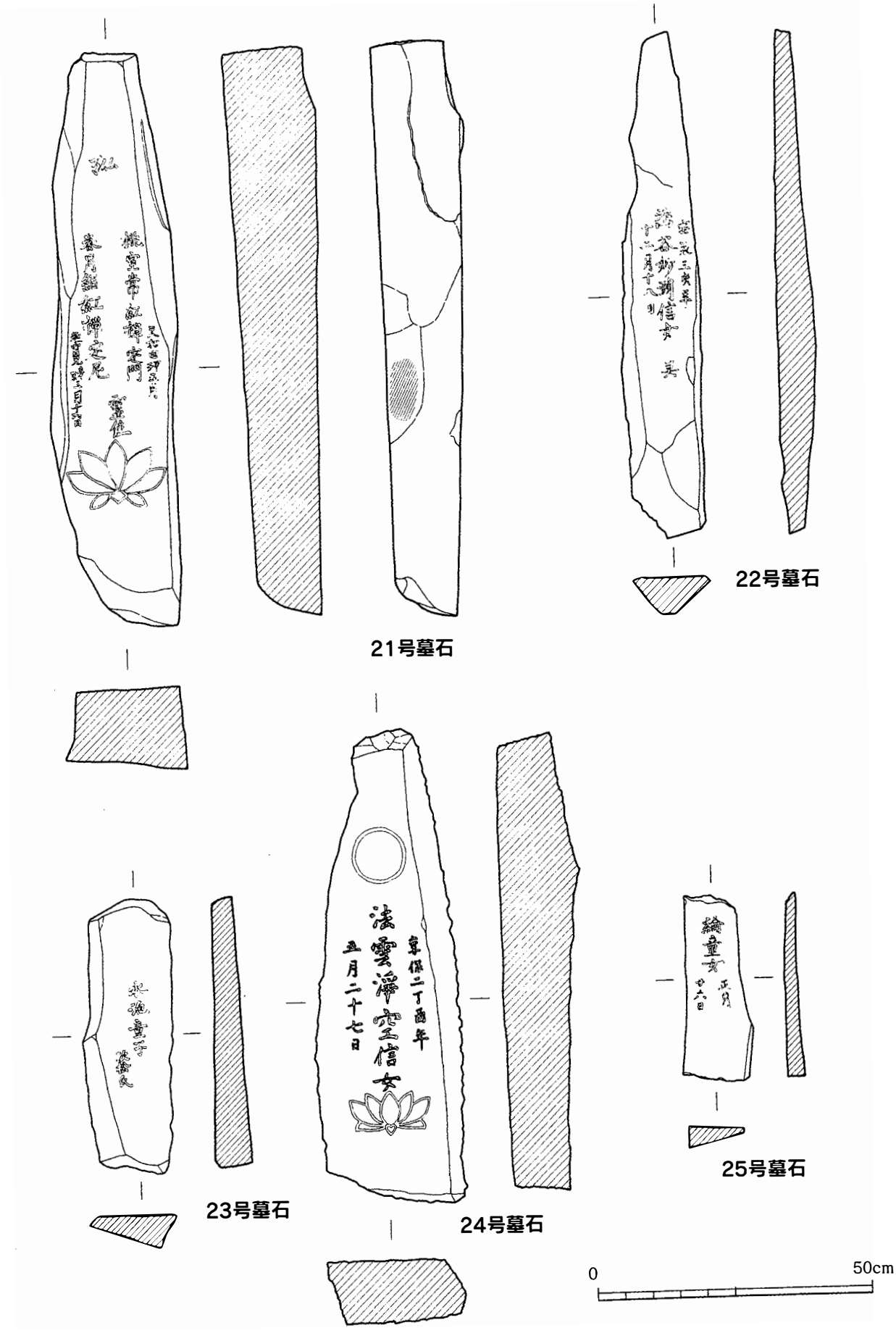
北東側墓群に位置する。１９号墓南脇にうつ伏せの状況で検出された。上半分は消失していた。

墓石は最大幅12.0㎝、厚さ3.0㎝と比較的薄い作りで、「正月甘六日　〇〇〇綸童女」とシャープに刻み、その中に朱塗りが施されてあった。石材は砂岩質の石材を使用している。

墓石直下で墓壙の検出を行ったが、検出できなかった。



第58図　20、22号墓実測図



第59図　21、22、23、24、25号墓石実測図

(18) ２７号墓（第６０図上）

北東側の墓群の中央に位置する。墓標はすでに消失していた。また、土層確認トレンチにより上部西側半分が消失してしまった。

墓壙の形状は径126.0㎝、深70.0㎝の断面逆台形を呈し、底径は67.0㎝を測る。埋土は２層に分層でき、上層は黄褐色シラス土、下端に灰白色シラス土がブロック状に入る。下層は若干しまりのある暗褐色土であった。

遺物は検出されなかった。骨も大腿骨と思われる骨片１点（獣骨）のみの検出であった。

(19) ２８号墓（第６０図下）

南西側の墓群の段下がり部に位置する。墓標の配石に使用したと思われる円礫が散在しており、台座に使用されたと思われる風化した凝灰岩の残欠が墓壙上に散っていた。墓標の主軸は不明である。

墓壙の形状は径114.0㎝、深95.0㎝の断面逆台形を呈し、底径は57.0㎝を測る。埋土は黄褐色シラス土の一括埋土であった。

遺物は検出されず、人骨は頭蓋骨、四肢骨等が検出された。比較的小振りであった。

(20) ２９号墓（第６１図上）

南西側の墓群の段下がり部に位置する。墓標の配石に使用したと思われる円礫が散在していた。墓標の主軸は不明である。

墓壙の形状は、径124.0㎝、深148.0㎝の断面逆台形を呈し、底径98.0㎝を測る。土層確認トレンチのため墓壙北西側は消失してしまった。埋土は暗褐色土で2.0～5.0㎜ほどのカーボンが少々含まれる。段落ちのため水の抜け道となっており湿り気味の土であった。

遺物は染付碗（273）、染付紅皿（274）、「寛永通宝」３枚、キセル１点を底近くで検出する。人骨は残存状況は非常に良くほぼ完全に残り、頭蓋骨は南東に向き、脚部が北西方向を向く。膝頭は南東側に向いていた。

(21) ３１号墓（第６１図下）

南西側墓群の段下がり部最南端に位置する。墓標はすでに消失していた。

墓壙の形状は径129.0㎝、深149.0㎝の断面逆台形を呈し、底径は104.0㎝を測る。埋土は2.0～5.0㎜程度の軽石を含む暗褐色砂質土であった。２９号墓と同様、湿り気があった。

遺物は土師質土器（277）、磁器碗１点が底近くから検出された。青磁片が２点埋土中から検出されたが、上部からの落ち込みと思われる。人骨の残存状況も非常に良く、ほぼ完全な状況で検出された。

(22) ３０号墓（第６２図上）

南西側墓群の段下がり部に位置する。墓標はすでに消失していた。また、土層確認トレンチのため墓壙上部の北東側が消失してしまった。

墓壙の形状は径135.0㎝、深144.0㎝の断面逆台形を呈し、底径109.0㎝を測る。底部北側が少々上がり気味であった。埋土は湿り気を帯びた暗褐色土であった。また、埋土中から鉄釘１本が検出された。

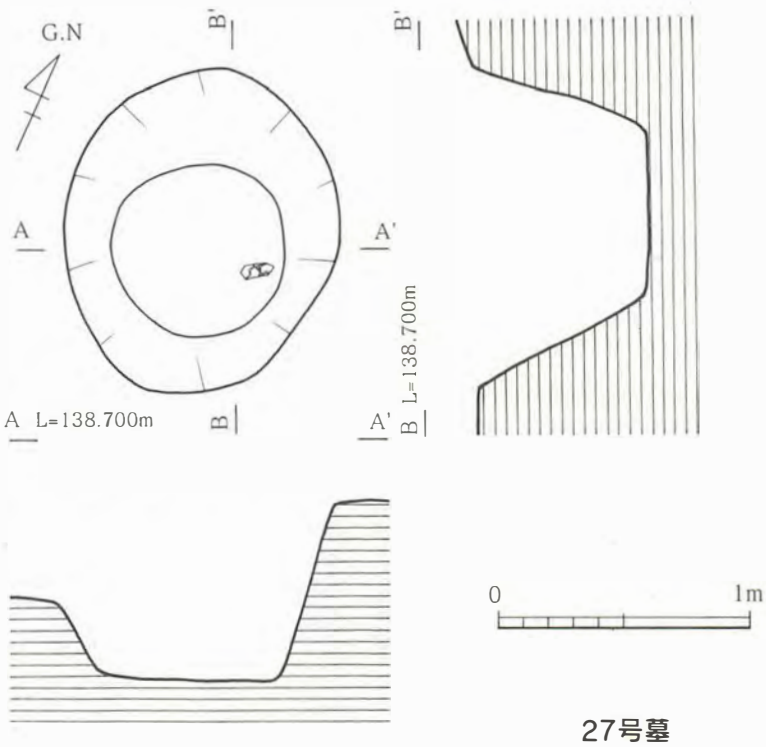
遺物は底近くから土師質土器（275）、染付小杯（276）、「寛永通宝」10枚、キセル１点が検出された。人骨は残存状況は比較的良好で、頭蓋骨、歯、四肢骨等が検出された。

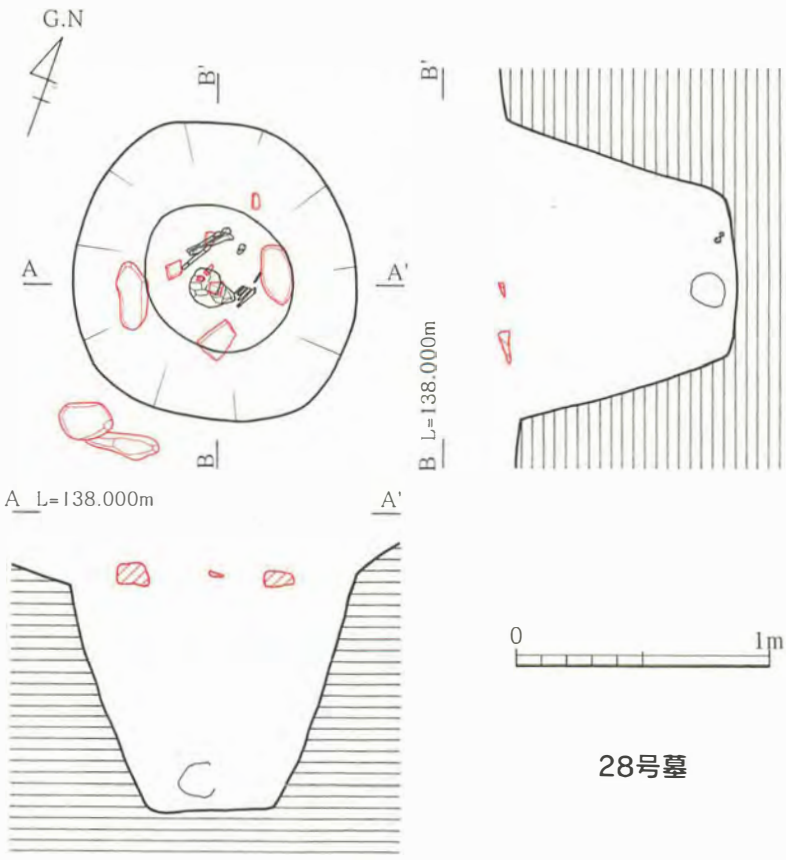
(23) ３４号墓（第６２図下）

北東側墓群の中央に位置する。墓標はすでに消失していた。

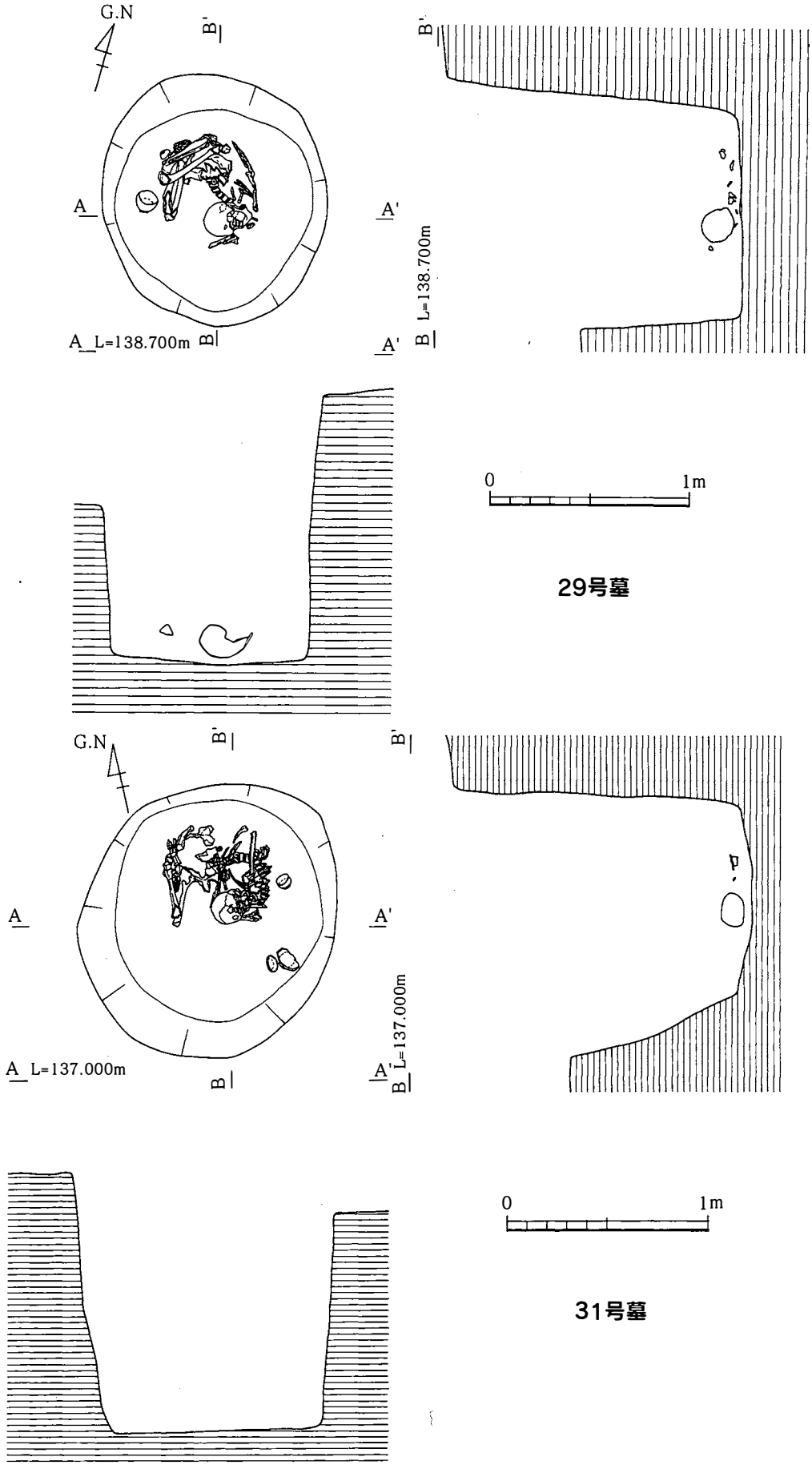
墓壙の形状は、径118.0㎝、深95.0㎝の断面逆台形を呈し、底径79.0㎝を測る。ただし、西側に向かって少々傾斜している。埋土は２層に分層できる。上層は黄褐色シラス土で、下層は少々しまりのある暗褐色土であった。

遺物の検出はなく、人骨も残りは悪く、頭蓋骨、四肢骨の１部等が検出された。

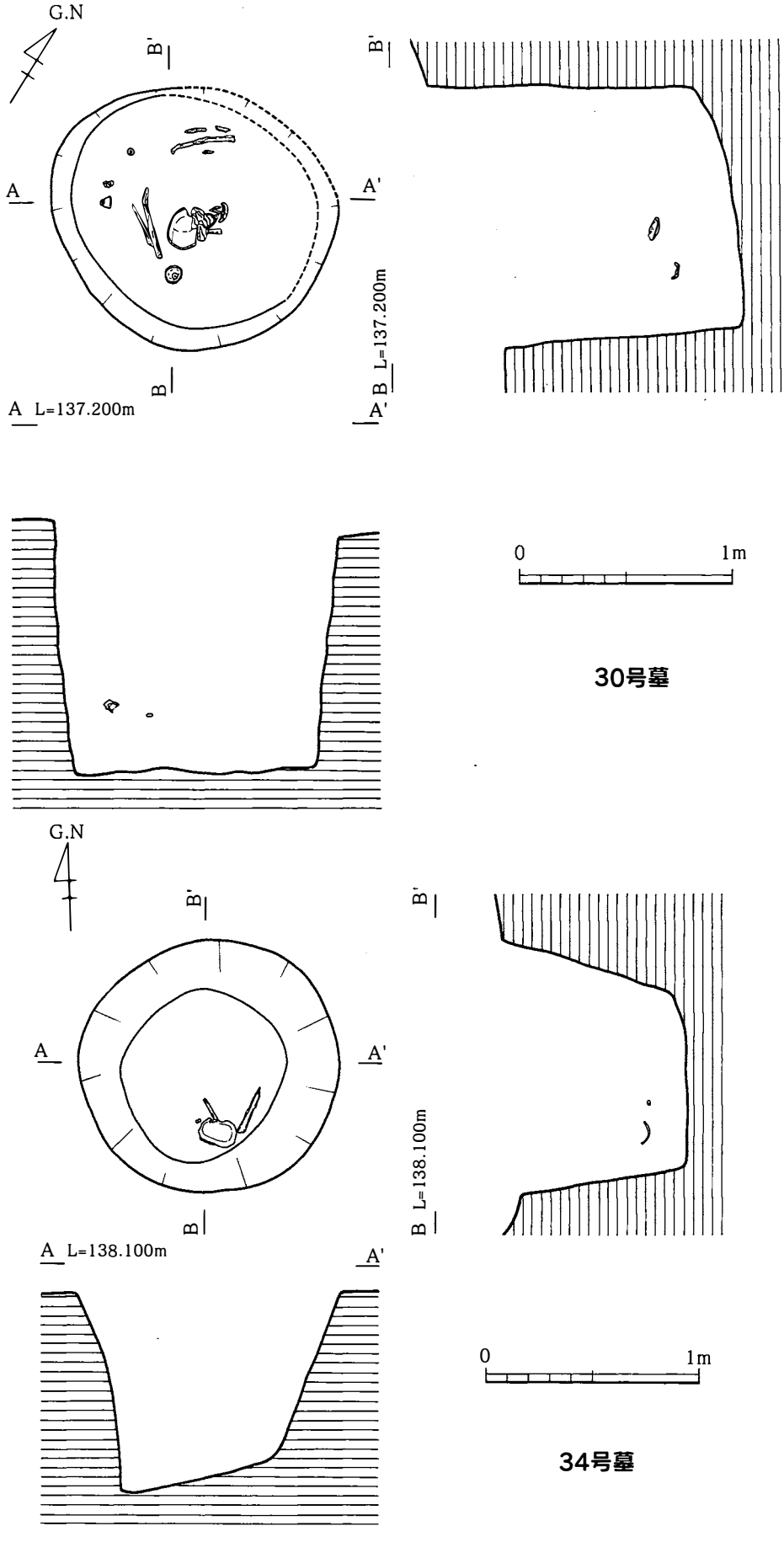




第60図　27、28号墓実測図



第61図　29、31号墓実測図



第62図　30、34号墓実測図

(24) ３２号墓（第６３図上）

北東側墓群の西側に位置する。墓標の平面形状は長軸105.0cm、短軸76.0cmの楕円形の区画に、東側の円礫が１個内側に入り込んでいたが、25.0～41.0cm大の河原石７個を配す。その内側に5.0～9.0cm大の円礫が散在していた。墓標の主軸（a－a'）はＮ－40°－Ｗである。

墓壙の形状は径135.0cm、深143.0cmの断面逆台形を呈し、底径73.0cmを測る。上端から90.0cmまでは傾斜が緩やかでそれから垂直に落ちる２段の掘り込みが僅かに認められる。埋土は２層に分けられる。上層は黄褐色シラス土で中央付近は赤みがあり、中央部には配石に使用したと思われる円礫が１点混入していた。下層は少々しまりのある暗褐色土を呈する。

遺物は混入遺物として埋土上層に磁器［香炉］(280) が検出され、底近くから土師質土器(278･279)が検出された。人骨の残存状況は極めて悪く、頭蓋骨、四肢骨の一部が、少々検出された。

(25) ３５号墓（第６３図下）

北東側墓群の北端に位置する。墓標の残存状況は悪く、配石に使用されたと思われる円礫が寄り集まった状況であった。６個の円礫は21.0～30.0cm大である。墓標の主軸は不明である。

墓壙の形状は径142.0cm、深143.0cmの断面逆台形を呈し、底径93.0cmを測る。底部中央が若干くぼんでいる。埋土は最上層に黄褐色シラス土、次に2.0～5.0cm大のシラスブロックを少量含む暗褐色土が入り、底から60.0cm程が若干しまりのある灰白色土であった。

遺物は土師質土器（281･282）、白磁小杯（284）、陶器碗（283）、「寛永通宝」１枚が底近くから検出された。人骨の残存状況は良くなく、頭蓋骨、四肢骨等の一部が検出された。

(26) ３３号墓（第６４図上）

北東側墓群の最西端に位置する。墓標はすでに消失していた。

墓壙の形状は径129.0cm、深112.0cmの断面逆台形を呈し、底径73.0cmを測る。２段の掘り込みを有しており、底から52.0cm上付近から垂直に落ちる。埋土は大きく２層に分かれる。上層は黄褐色シラス土で小粒の円礫を多く含む。下層は中央部に暗褐色土が径54.0cmの円筒形状に入り、その脇に灰白色シラス土を充填していた。

遺物の検出は無く、人骨の残存状況は比較的良く、頭蓋骨、四肢骨等が検出された。

(27) ３６号墓（第６５図上）

北東側墓群の西端に位置する。墓標は比較的良好な状況で残存していた。形状は東西53.0cm、南北75.0cmの方形区画に20.0～34.0cm大の円礫８個を配す。また、西側に２つの石を重ね、献花台として利用したと思われる石が置かれていた。石の大きさは20.0cm大である。墓標の主軸（A－A'）はＮ－67°－Ｗである。

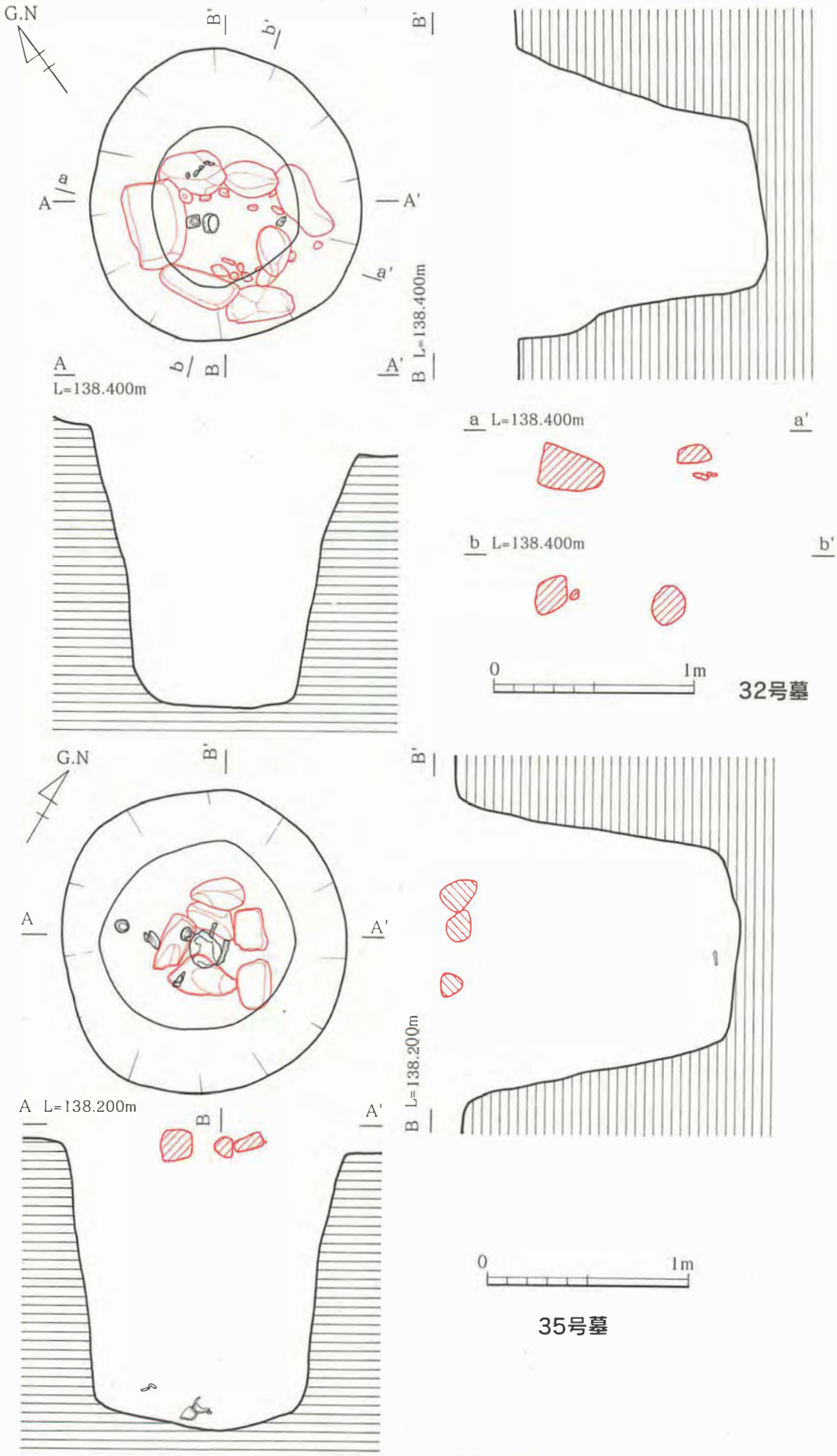
墓壙の形状は径138.0cm、深133.0cmの断面逆台形を呈し、底径80.0cmを測る。埋土は２層に分層できる。上層は暗褐色土で、下層は黄褐色シラス土で下端近くがしまっていた。また、埋土中から鉄釘が１本検出された。

遺物は底近くから土師質土器(285)、白磁小杯(286) が検出された。人骨の残存状況は非常に良く、頭蓋骨、歯、四肢骨等が検出された。

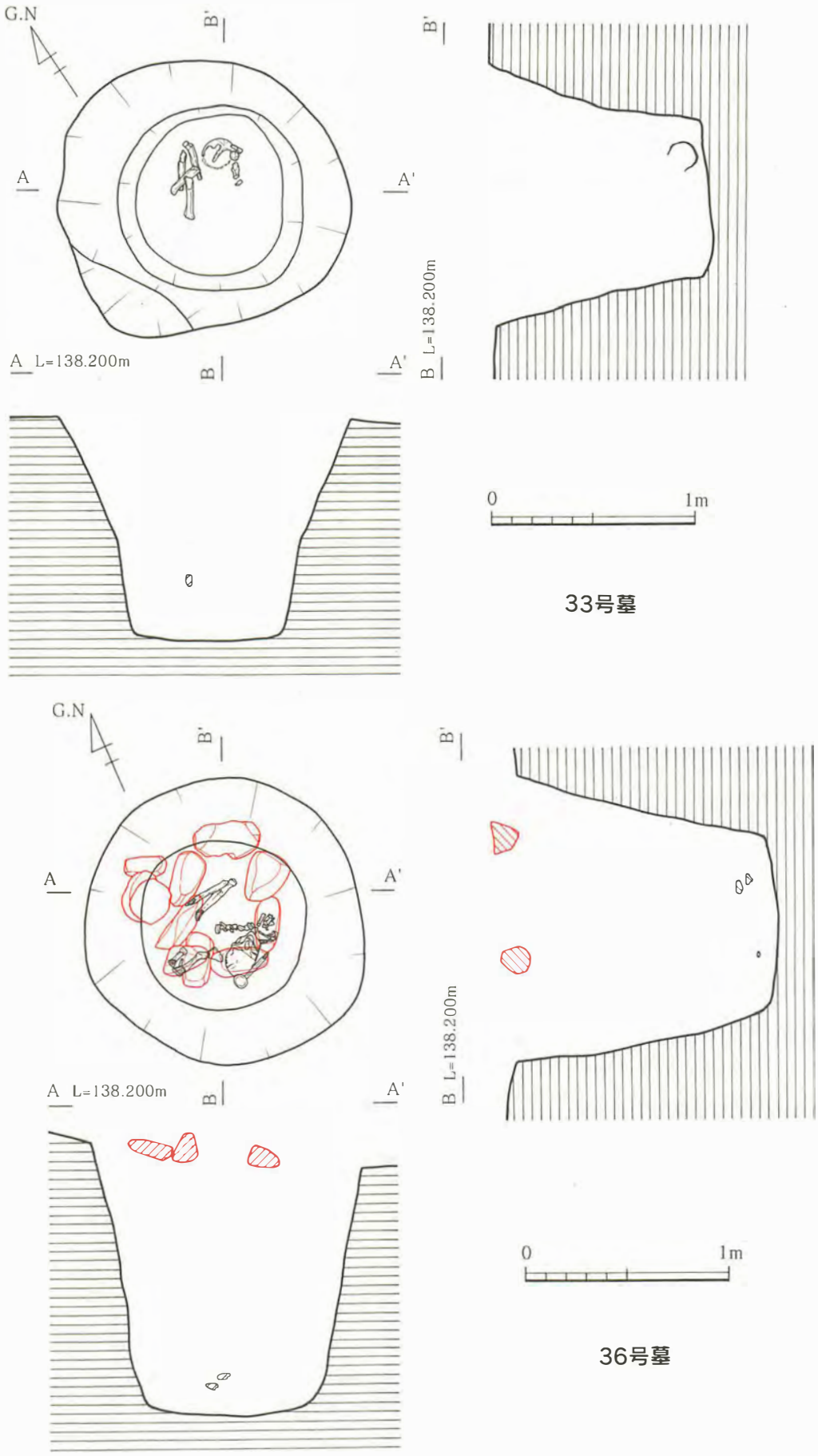
(28) ３７号墓（第６４図下）

北東側墓群の東端近くに位置する。墓標の残存状況は比較的良く、形状は長軸96.0cm、短軸84.0cmの隅丸方形の区画に、31.0～36.0cm大の円礫を配す。台座と思われる凝灰岩２個が囲石の中央部に所在した。墓石はすでに消失していた。墓標の主軸（A－A'）はＮ－69°－Ｗであった。

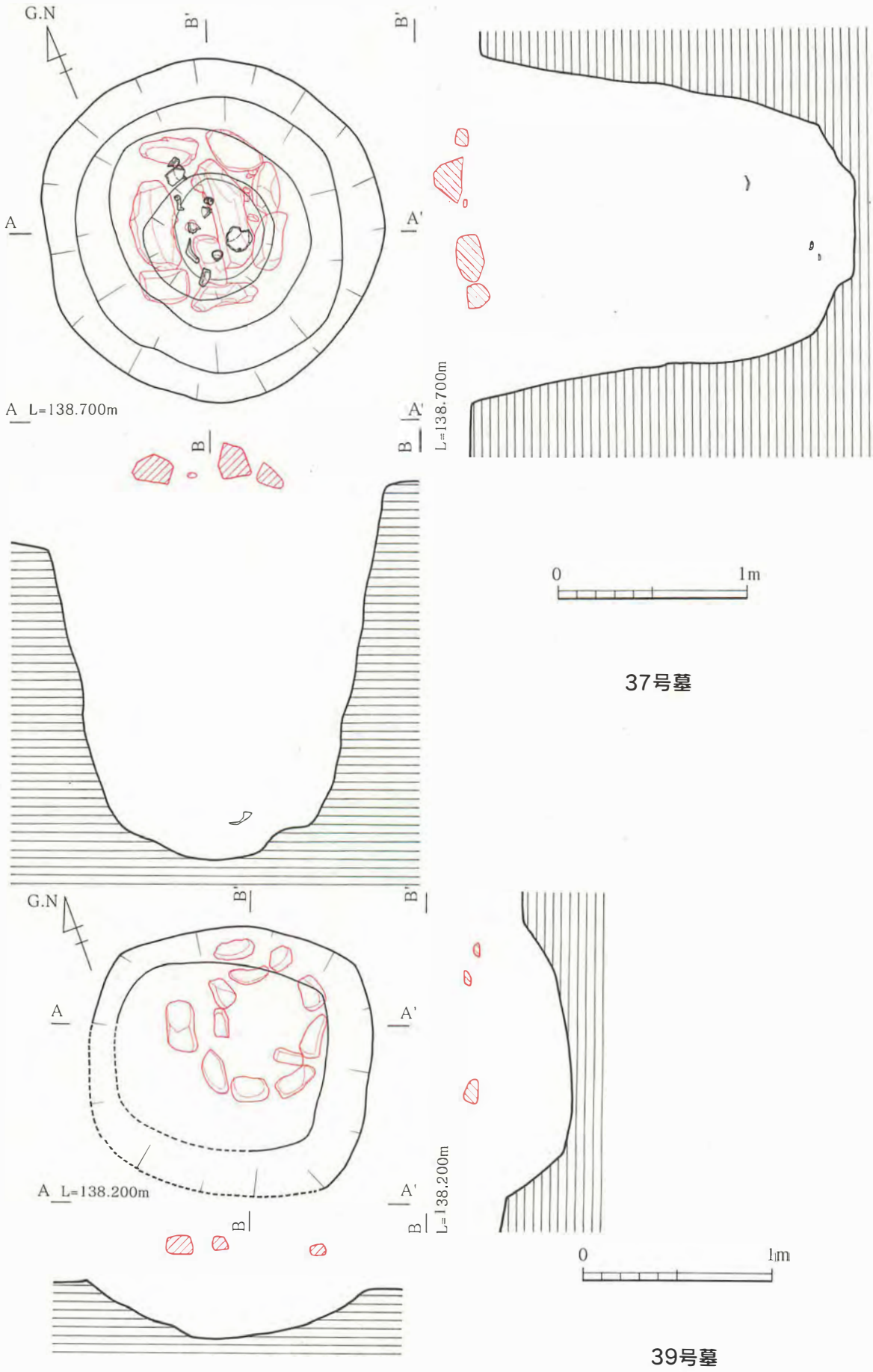
墓壙の形状は２段の掘り込みを有し、さらに中央部にくぼみが見られるといった特異な形状で、径180.0cm、深204.0cmで、底径103.0cmを測る。比較的深い墓壙である。埋土は大きく２層に分かれる。上層は黄



第63図　32、35号墓実測図



第64図　33、36号墓実測図



第65図　37、39号墓実測図

褐色土でしまりが強く、下層は暗褐色土でしまりがある。その中間層に灰白色シラスブロックを含む暗褐色土層が入る。また、鉄釘１４本が検出された。

遺物は底近くから土師質土器（287･288･289･290）、白磁小杯（292）、染付小杯（291）、「寛永通宝」６枚が検出された。人骨の残りは悪く、頭蓋骨、四肢骨等の一部が検出された。

(29) ３９号墓（第６５図下）

北東側墓群の東端に位置する。墓標の残存状況は比較的良好であった。形状は径86.0㎝のほぼ円形を呈する区画に、14.0～25.0㎝大の円礫を配す。墓標の主軸（A－A'）はＮ－71°－Ｗであった。

墓壙の形状は土層確認トレンチのため南西側を削ってしまったが、方形を呈するものと思われ、残存軸149.0㎝、深51.0㎝で、底幅112.0㎝を測る。比較的浅く、レンズ状に窪んだ底を持つ特異な形状を示す。埋土は暗褐色土であった。

遺物、人骨の検出は無かった。

２　遺物

表土あるいは墓壙中から墓地に伴う遺物が多数検出されたが、後世の攪乱をあまり受けていなかったため遺物の残存状況は比較的良好であった。墓壙における副葬品の構成については、全く無いものから「寛永通宝」を含めた多数の副葬品を納めた墓壙もあり、一概には言えない状況である。ここでは、表採資料も含め出土遺物の概観を述べることにする。

（1）土師質土器

法量的に杯と小皿の２種に分類できる。さらに形態的及び技法的な特徴から杯を２種に、小皿を３種に分類を行った。ただし、特殊な形態のものはここでは削除した。

（杯a 類）体部が直線的あるいは外反しながら立ち上がる。口縁端部は尖り気味あるいは丸く仕上げる。底部が肥厚する。底部切り離しは糸切りである。（245･252･271･275･287･288･296）

（杯ｂ類）体部が直線的あるいは外反しながら立ち上がる。口縁端部は尖り気味あるいは丸く仕上げる。杯a 類に比べ底部が薄い。底部切り離しは糸切りである。（248･249･250･253･266･272）

（小皿a 類）体部が直線的に立ち上がり、口縁端部でやや外反する。端部は尖り気味あるいは丸く仕上げる。底部切り離しは糸切りである。（254･255･256･257･258･259･260･264･285）

（小皿ｂ類）体部が直線的に立ち上がり、口縁端部を尖り気味に仕上げる。体部断面が三角形を呈する。底部切り離しは回転へら切り。（244･277･281･282･290･295）

（小皿ｃ類）底部から体部まで碗状に立ち上がる。器高は低い。底部切り離しは回転へら切り。（278･293･294）

（2）白磁

小杯がある。そのうち形態的及び技法的特徴から２種に分類できる。

（小杯a 類）体部は膨らみをもちながら内湾し、口縁端部で外反する。器高が低い。高台は肥厚し、底部外面中央が肥厚する。体部外面下位及び高台が露胎。（297･298）

（小杯ｂ類）体部は直線的に立ち上がり、口縁端部で外反する。平底。全面施釉。（242･251･284･292）

（3）染付

碗、小杯、紅皿が検出された。碗の高台内に粗雑化した「大明年製」の文字が入る。ほとんどが肥前産であるが、景徳鎮産の小杯（246）が１点だけ含まれる。

（4）その他

肥前産の陶器碗（262･283･304）、磁器と思われる香炉（280）や「寛永通寶」がある。

以上。各遺物の詳細な記述は「Ｘ区出土遺物（近世）観察表」として以下に掲載した。

第66図　Ｘ区出土遺物（近世）実測図（1）

第67図　Ｘ区出土遺物（近世）実測図（2）

第68図　Ｘ区出土遺物（近世）実測図（3）

第69図　X区出土遺物（近世）実測図（4）

第24表　Ｘ区出土遺物観察表（1）

No.	地点	種別	器種	法量（cm）	胎土・焼成・色調	形態の特徴	技法の特徴	備考
241	Ｘ区 １号墓	土師質 土器	杯	口径－10.8 底径－6.4 器高－3.4	胎土－含長石 焼成－良 色調－内外面橙色	体部は外反気味に立ち上がる。口縁端部は厚く、丸い。底部内面が円状に浮き出る。かなり歪みを持つ。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部外面に指頭痕あり。	
242	Ｘ区 １号墓	白磁	小杯	口径－7.2 底径－3.2 器高－4.5	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－灰白色	体部は直線的にのび、口縁部で外反する。口縁端部は尖る。高台は細く、端部は尖る。	全面施釉。外面は釉が薄い。高台内に砂付着。	肥前 17C後半
243	Ｘ区 １号墓	陶器	碗	口径－8.8 底径－不明 器高－不明	胎土－密・褐灰色 焼成－良 色調－オリーブ灰色	体部下位は屈曲しつつ立ち上がり、口縁部は直線的にのびる。口縁端部は尖る。	全面施釉。外面と内面一部釉切れ。内外面に貫入が入る。	肥前か。 18C前半
244	Ｘ区 ３号墓	土師質 土器	小皿	口径－7.4 底径－6.0 器高－1.7	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－にぶい黄橙色	体部は外反する。体部内面はゆるやかに傾斜し、底部内面積が狭い。	回転ナデ調整。底部は回転ヘラ切り後、ナデ調整。	
245	Ｘ区 ４号墓	土師質 土器	小皿	口径－10.2 底径－6.4 器高－2.4	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面橙色	体部は外反しながら立ち上がる。口縁端部は尖り気味。底部内面が肥厚。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
246	Ｘ区 ４号墓	染付	小杯	口径－7.4 底径－2.8 器高－3.9	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－明緑灰色（呉須－藍色）	体部下位で開き気味に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は尖る。高台はやや内傾し、端部は尖る。	高台端部は露胎。体部外面に草花文。口縁部内面に襷文。底部内面に山水文。高台内面に「大明成化年製」。	景徳鎮 16C後半
247	Ｘ区 ５号墓	土師質 土器	杯	口径－10.2 底径－5.3 器高－3.1	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－外面にぶい橙色・内面橙色	体部は直線的に延びる。口縁端部は丸い。底部内面に凹凸がある。口縁部に煤付着。	回転ナデ調整。底部は糸切り後、丁寧なナデ調整。	
248	Ｘ区 ５号墓	土師質 土器	小皿	口径－10.8 底径－7.6 器高－2.3	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面にぶい橙色	体部は外反気味。口縁端部は丸く仕上げる。底部内面に凹凸がある。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
249	Ｘ区 ５号墓	土師質 土器	杯	口径－10.6 底径－7.6 器高－2.6	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面にぶい橙色	体部は外反し、口縁端部は尖る。体部外面に段が生じる。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
250	Ｘ区 ５号墓	土師質 土器	杯	口径－10.6 底径－6.0 器高－2.9	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面橙色	体部は直線的に外傾する。体部内面下位が肥厚。底部内面に凹凸がある。	回転ナデ調整。底部は糸切り後、不整方向ナデ。底部外面線の仕上げが粗雑。	
251	Ｘ区 ５号墓	白磁	小杯	口径－7.0 底径－3.2 器高－4.8	胎土－密・灰黄色 焼成－良 色調－灰白色	体部は下位でゆるやかに屈曲し、口縁部は外反する。歪みを持つ。底部内面は平ら。高台は短く、垂直にのびる。	全面施釉。高台端部は釉が薄い。外面の釉は薄い。	肥前 17C後半～ 18C前半
252	Ｘ区 ６号墓	土師質 土器	杯	口径－10.6 底径－6.6 器高－2.7	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－にぶい橙色	体部は直線的に立ち上がる。体部外面に段が生じる。底部内面は肥厚。	回転ナデ調整。底部は糸切り。体部外面下位に調整痕。	
253	Ｘ区 17号墓	土師質 土器	杯	口径－10.8 底径－7.0 器高－2.5	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面にぶい橙色	体部下位で大きく外反する。口縁端部は尖る。わずかに上げ底気味。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
254	Ｘ区 19号墓	土師質 土器	小皿	口径－7.6 底径－4.8 器高－2.0	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－外面にぶい橙色・内面橙色	体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は丸い。底部内面に凹凸がある。わずかに上げ底気味。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
255	Ｘ区 19号墓	土師質 土器	小皿	口径－7.6 底径－5.0 器高－2.0	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面にぶい橙色	体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は丸い。底部内面に凹凸がある。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
256	Ｘ区 19号墓	土師質 土器	小皿	口径－10.2 底径－6.4 器高－2.4	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面にぶい橙色	体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は丸い。底部内面が円状に浮き出る。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
257	Ｘ区 19号墓	土師質 土器	小皿	口径－7.4 底径－5.0 器高－2.1	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－にぶい橙色	体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は丸い。底部内面に凹凸がある。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
258	Ｘ区 19号墓	土師質 土器	小皿	口径－7.2 底径－4.6 器高－2.0	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面橙色	体部は直線的に延びる。口縁端部は丸い。底部内面が円状に浮き出る。口縁部内面に煤付着。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
259	Ｘ区 19号墓	土師質 土器	小皿	口径－8.0 底径－4.8 器高－2.0	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面にぶい橙色	体部は直線的にのびる。口縁端部は丸い。底部内面が円状に浮き出る。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
260	Ｘ区 19号墓	土師質 土器	小皿	口径－6.2 底径－5.2 器高－1.6	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面橙色	体部はほぼ垂直。口縁端部は丸い。底部内面に凹凸がある。器高が低い。口縁部に煤付着。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
261	Ｘ区 19号墓	土師質 土器	小皿	口径－7.4 底径－4.8 器高－2.0	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面にぶい橙色	体部は直線的にのびる。口縁端部は丸い。体部内面はゆるやかに傾斜し、底部内面積が狭い。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
262	Ｘ区 19号墓	陶器	碗	口径－11.4 底径－4.5 器高－6.1	胎土－密・赤褐色 焼成－良 色調－黒褐色	体部下位はゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。口縁端部は丸い。高台は肥厚。端部は平ら。	鉄釉。体部下位及び高台無釉。釉掛け流し。内面一部露胎。外面釉溜り形成。外面に横位の調整痕。	肥前 17C前半
263	Ｘ区 21号墓	土師質 土器	杯	口径－12.2 底径－7.2 器高－3.5	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面橙色	体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は尖り気味。底部から体部にかけて肥厚。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
264	Ｘ区 21号墓	土師質 土器	小皿	口径－7.8 底径－5.2 器高－1.6	胎土－含長石 焼成－良 色調－内外面にぶい橙色	体部は外反気味にのびる。口縁端部は丸い。底部は肥厚。口縁部内面に煤付着。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
265	Ｘ区 21号墓	土師質 土器	碗	口径－10.6 底径－7.6 器高－5.4	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面橙色	体部下位がふくらみ、その後わずかに外反しながら立ち上がる。口縁端部は丸い。全体的に肥厚。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
266	Ｘ区 21号墓	土師質 土器	杯	口径－12.2 底径－7.1 器高－2.5	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面浅黄橙色	体部は外反気味に立ち上がる。口縁端部は尖り気味。体部はかなり歪みを持つ。底部内面に凹凸がある。	回転ナデ調整。底部はヘラ切り離し後、不整方向のナデ調整。体部外面に調整痕。	
267	Ｘ区 21号墓	陶器	香炉	口径－8.8 底径－不明 器高－不明	胎土－密・にぶい赤褐色 焼成－良 色調－浅黄色・灰白色	体部下位で屈曲し、一度窪んで垂直に立ち上がる。玉縁状口縁を持つ。	下釉は体部下位まで釉掛けし、釉をかき剥いで文様を施す。上釉は口縁部内外面から体部まで釉掛け流し。	肥前 17C後半～ 18C前半
268	Ｘ区 21号墓	染付	小杯	口径－6.9 底径－2.7 器高－4.1	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－明緑灰色（呉須－灰紺色）	体部下位でゆるやかに内湾し、口縁部で外反する。高台は内湾気味にのびる。高台端部はやや丸みを帯びる。	高台一部及び高台端部は露胎。体部外面には竹笹文を描く。高台端部に砂付着。	肥前 17C後半
269	Ｘ区 21号墓	染付	小杯	口径－6.9 底径－2.7 器高－4.1	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－明緑灰色（呉須－暗灰紺色）	体部はゆるやかに内湾し、口縁部で外反する。口縁端部は尖る。高台はやや内湾して短くのびる。高台端部は平ら。	高台端部釉はげ。外面には昆虫と草文を描く。高台端部に砂付着。	肥前 17C後半～ 18C前半
270	Ｘ区 21号墓	染付	小杯	口径－6.6 底径－3.1 器高－4.2	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－明緑灰色（呉須－背色、黒色）	体部下位でゆるやかに内湾し、口縁部で外反。口縁端部は尖る。高台とのくびれは浅く、高台は内傾してのびる。	高台端部は無釉。外面には草家文を二カ所に配す。高台内に巴状を呈す。高台端部に多孔の砂付着。	肥前 17C後半～ 18C前半
271	Ｘ区 22号墓	土師質 土器	小皿	口径－9.2 底径－6.4 器高－2.3	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－外面にぶい橙色・内面橙色	体部は直線的に外傾する。口縁端部は丸い。底部内面中央は肥厚。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	

第24表　Ｘ区出土遺物観察表（2）

No.	地点	種別	器種	法量(ｃｍ)	胎土・焼成・色調	形態の特徴	技法の特徴	備考
272	Ｘ区 26号墓	土師質 土器	杯	口径－10.8 底径－7.0 器高－2.6	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面にぶい橙色	体部は直線的に外傾する。口縁端部は尖る。やや上げ底。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部外面に指頭痕あり。	
273	Ｘ区 29号墓	染付	碗	口径－10.6 底径－4.5 器高－5.4	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－灰白色（呉須－紺色）	体部は内湾しながら立ち上がる。口縁端部は尖る。高台はほぼ垂直にのびる。高台端部はやや丸みを帯びる。	高台端部は釉をかき取る。体部外面に梅文と橋を描く。高台内に「大明年製」。高台内に少皿の砂付痕。	肥前 １８Ｃ中葉
274	Ｘ区 29号墓	染付	紅皿	口径－6.6 底径－3.0 器高－2.8	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－灰白色（呉須－紺色）	体部下位で開き、内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸みを帯びる。高台は内湾気味にのび、短い。	高台端部は釉を剥ぐ。外面には笹文を描く。高台端部に砂付痕。	肥前 １８Ｃ前半
275	Ｘ区 30号墓	土師質 土器	小皿	口径－8.8 底径－5.6 器高－2.4	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面にぶい橙色	体部は外反気味に立ち上がる。口縁端部は丸い。底部は肥厚。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
276	Ｘ区 30号墓	染付	小杯	口径－6.6 底径－3.0 器高－2.8	胎土－密・にぶい黄橙色 焼成－良 色調－灰白色（呉須－灰青色）	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は丸い。高台はやや内湾し、高台端部で細くなる。	高台端部外面一部露胎。体部外面に菖蒲文と反対に一点、体部内面にも一点を配す。高台端部に少皿の砂付痕。	肥前 17Ｃ末 ～18Ｃ前半
277	Ｘ区 31号墓	土師質 土器	小皿	口径－6.8 底径－5.4 器高－1.5	胎土－含砂粒 焼成－良 色調－内外面浅黄橙色	体部は直線的に立ち上がる。体部断面形は三角形を為す。口縁端部は尖る。底部内面中央はやや肥厚。	回転ナデ調整。底部は回転へら切り離し。底部外面中央は未調整。	
278	Ｘ区 32号墓	土師質 土器	小皿	口径－7.4 底径－5.6 器高－1.6	胎土－含長石・砂粒 焼成－良　　色調－外面 にぶい黄橙色・内面浅黄橙色	体部は直線的にのびる。口縁端部は尖る。底部はゆるやかな椀状を呈す。口縁部に煤付痕。	回転ナデ調整。底部は回転へら切り。底部外面中央は未調整。	
279	Ｘ区 32号墓	土師質 土器	碗	口径－9.6 底径－7.2 器高－5.0	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面浅黄橙色	体部は内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸い。全体的に肥厚。底部は平底。	全面多方向のナデ調整。底部は糸切り離し後、不整方向のナデ調整。	
280	Ｘ区 32号墓	磁器	香炉	口径－5.8 底径－4.8 器高－5.6	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－灰白色	体部は凹凸を繰り返しつつ立ち上がり、口縁部で外反する。口縁端部は尖る。高台は短く、やや開く。	体部内面部分的に露胎。高台内面まで施釉。高台端部籾痕。	肥前か。 17Ｃ第１四半期
281	Ｘ区 35号墓	土師質 土器	皿	口径－8.8 底径－6.8 器高－1.6	胎土－含砂粒 焼成－良 色調－内外面浅黄橙色	体部は直線的にのびる。口縁端部は丸い。底部は薄い。	回転ナデ調整。底部は回転へら切り離し。底部外面中央未調整。	
282	Ｘ区 35号墓	土師質 土器	小皿	口径－6.2 底径－4.8 器高－1.5	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面黒褐色	体部は直線的。体部断面形は三角形。底部中央はやや肥厚。体部外面に段を有する。内外面全域に煤付痕。	回転ナデ調整。底部は回転へら切り。	
283	Ｘ区 35号墓	陶器	碗	口径－9.8 底径－5.4 器高－7.4	胎土－密・浅黄橙色 焼成－良 色調－褐色	体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がる。口縁端部は尖り気味。高台は内傾する。端部は平ら。	全面施釉。内外面に貫入が入る。	肥前 17Ｃ末 ～18Ｃ前半
284	Ｘ区 35号墓	白磁	小杯	口径－6.8 底径－2.6 器高－2.6	胎土－密・灰黄色 焼成－良 色調－灰白色	体部は直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。口縁端部は尖る。高台は内傾する。端部は平ら。	高台端部は露胎。外面の釉は薄く、削り痕が浮き出る。高台端部に砂付痕。	肥前 17Ｃ中葉
285	Ｘ区 36号墓	土師質 土器	小皿	口径－6.6 底径－4.8 器高－2.2	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面橙色	体部は直線的に立ち上がり、口縁端部で外反。口縁端部は丸い。底部内面は椀状を呈す。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
286	Ｘ区 36号墓	白磁	小杯	口径－7.0 底径－3.2 器高－4.8	胎土－密・明緑灰色 焼成－良 色調－灰白色	体部は直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。高台は短く、やや内湾気味にのびる。端部は尖る。	体部下位から高台にかけて一部露胎。高台端部内面に砂付痕。	肥前 17Ｃ後半
287	Ｘ区 37号墓	土師質 土器	皿	口径－10.2 底径－5.8 器高－2.4	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面にぶい橙色	体部は外反気味にのびる。口縁端部は丸い。底部から体部下位にかけて肥厚。上げ底。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部外面に指頭痕あり。	
288	Ｘ区 37号墓	土師質 土器	皿	口径－10.6 底径－6.0 器高－2.7	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面橙色	体部は外反気味にのびる。口縁端部は丸い。底部は肥厚。やや上げ底。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
289	Ｘ区 37号墓	土師質 土器	小皿	口径－11.8 底径－9.2 器高－3.2	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面橙色	体部は直線的にのび、口縁部で外反する。体部下位、底部中央は肥厚。	回転ナデ調整。底部は糸切り。底部外面に指頭痕あり。	
290	Ｘ区 37号墓	土師質 土器	小皿	口径－6.8 底径－5.2 器高－1.6	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面にぶい橙色	体部は直線的にのびる。口縁端部は丸い。体部外面に段を持つ。底部中央はやや肥厚。	回転ナデ調整。底部は回転へら切り。	
291	Ｘ区 37号墓	染付	小杯	口径－6.6 底径－3.1 器高－4.4	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－灰白色（呉須－紺色）	体部は下位でゆるやかに屈曲し、口縁部は外反する。高台はやや外反してのびる。高台端部は平ら。	高台端部は釉かき取り。外面にコンニャク印判で紅葉を重ねる。高台端部外面に面取りを施す。	肥前 17Ｃ末 ～18Ｃ前半
292	Ｘ区 37号墓	白磁	小杯	口径－7.0 底径－3.2 器高－4.8	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－灰白色	体部はやや内湾し、口縁部は外反する。口縁端部は丸い。底部中央はやや厚い。高台は厚く、端部は丸い。	高台外面一部釉切れ。高台端部露胎。外面の釉は薄く、調整痕が浮き出る。高台端部に砂付痕。	肥前 17Ｃ後半 ～18Ｃ初
293	Ｘ区 表採	土師質 土器	小皿	口径－6.6 底径－4.6 器高－不明	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面にぶい橙色	体部は直線的に外傾する。口縁端部は尖る。	回転ナデ調整。底部は回転へら切り。	
294	Ｘ区 表採	土師質 土器	小皿	口径－7.2 底径－4.8 器高－1.7	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面にぶい橙色	体部は直線的に外傾する。口縁端部は尖る。底部内面に凹凸がある。口縁部に煤付痕。	回転ナデ調整。底部は回転へら切り離し。底部外面中央未調整。	
295	Ｘ区 表採	土師質 土器	小皿	口径－6.4 底径－4.4 器高－1.7	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面橙色	体部は直線的に外傾する。口縁端部は尖り気味。体部下位が肥厚。体部外面下位に段が生じる。	回転ナデ調整。底部は回転へら切り離し。底部外面中央未調整。	
296	Ｘ区 表採	土師質 土器	皿	口径－9.0 底径－6.6 器高－2.3	胎土－含長石・砂粒 焼成－良 色調－内外面にぶい橙色	体部は直線的にのびる。口縁端部は丸い。底部は肥厚。歪みがある。	回転ナデ調整。底部は糸切り。	
297	Ｘ区 表採	白磁	小杯	口径－6.6 底径－2.2 器高－3.6	胎土－密・灰オリーブ色 焼成－良 色調－灰白色	体部下位でゆるやかに内湾し、口縁部は外反する。口縁端部は丸い。高台は小さく、やや内湾する。端部は平ら。	体部下位及び高台は露胎。高台は削り出しである。	肥前 17Ｃ 第２四半期
298	Ｘ区 表採	白磁	小杯	口径－7.0 底径－2.8 器高－3.1	胎土－密・浅黄色 焼成－良 色調－灰白色	体部はやや内湾し、口縁部は外反する。口縁端部は丸い。高台は厚く、やや内湾する。端部は平ら。	体部下位及び高台は無釉。高台は削り出しである。内外面に貫入が入る。	肥前 17Ｃ 第２四半期
299	Ｘ区 表採	染付	小杯	口径－7.0 底径－3.3 器高－4.5	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－灰白色（呉須－暗灰紺色）	体部はゆるやかに内湾し、口縁部は外反する。高台はやや内湾気味にのび、短く、歪んでいる。高台端部は平ら。	全面施釉。外面には三方に松葉文を配す。	肥前 17Ｃ後半 ～18Ｃ前半
300	Ｘ区 表採	染付	小杯	口径－6.7 底径－3.0 器高－4.7	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－灰白色（呉須－紺色）	体部はゆるやかに内湾し、口縁部は外反する。口縁端部は尖る。高台は直立し、端部は平ら。	高台端部は露胎。体部外面に松をコンニャク印判で、笹を手書きで配す。高台部は釉を垂れ流す。	肥前 17Ｃ末 ～18Ｃ前半
301	Ｘ区 表採	染付	碗	口径－10.9 底径－不明 器高－不明	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－灰白色（呉須－群青色）	体部はゆるやかに内湾する。口縁端部は尖る。	全面施釉。外面には草花文を描く。	肥前 17Ｃ後半 ～18Ｃ前半
302	Ｘ区 表採	染付	碗	口径－11.1 底径－4.4 器高－6.4	胎土－密・灰白色 焼成－良 色調－灰白色（呉須－青色・黒色）	体部は内湾しながら立ち上がる。口縁端部は尖る。高台は直立してのび、端部を尖る。	高台端部は露胎。体部外面に竹と梅樹を配す。高台内に「大明年製」の文字を記す。	肥前 １８Ｃ前半 ～中葉

第26表　Ｘ区出土遺物観察表（3）

No.	地点	種別	器種	法量（ｃｍ）	胎土・焼成	形態の特徴	技法の特徴	備考
303	Ｘ区 表採	土製品	花差し	口径ー不明 底径ー8.2 器高ー不明	胎土ー密 焼成ー 色調	体部に沈線が横位に三本入る。器壁は厚い。	ナデ調整。	
304	Ｘ区 表採	陶器	碗	口径ー18.4 底径ー6.8 器高ー8.7	胎土ー密・灰白色 焼成ー良 色調	体部はゆるやかに内湾する。口縁端部は平ら。高台端部は平ら。器壁は薄い。	全面施釉。高台端部は釉が薄い。	肥前 １７C後半 ～18C前半

第３章　総　括

蔵城遺跡はシラス丘陵という地盤の性質上、遺跡の立地としては極めて悪い状況にあると言える。また、急傾斜の独立丘陵でもあり、人が生活を営むのに必要な平坦地が非常に少ない土地でもある。しかし、発掘調査の結果、古くは縄文時代から新しくは現代まで（調査前、民家があったことによる。）の時間軸の各所に人が生活を営んだ痕跡があることが判明した。この要因として、球磨川の北岸際という丘陵の立地が大きく影響していたものと考えられる。以下に、蔵城遺跡における各時代の様相を、丘陵の土地利用の変遷といった観点から述べていきたいと思う。

［縄文時代］

縄文時代の様相は、表採あるいは後世の遺構の埋土からといった遺物の検出状況から不透明な部分が多い。しかし、遺物の中には早期から後晩期にかけての土器片が少量ではあるが検出され、また、今回資料紹介できなかったが、磨製石斧、打製石斧等の伐採具、石鏃等の狩猟具および石匙の未製品等が丘陵上から採集されたことから、生活の痕跡は窺える。また、集石遺構（Ⅶ区ＳＸ１０）もそれを裏付ける証拠と言える。これらの状況から縄文時代を通じて何時期かは小規模な集落が営まれていた可能性が考えられる。

［古墳時代］

古墳時代の様相は、部分的に残存していた遺物包含層において比較的まとまって遺物が検出されたため、ある程度推測は可能である。

これらの遺物は谷部の堆積土からの検出であったため遺構は確認されなかったが、遺物の出土量及び甕、壺、高坏等の器種構成から小規模な集落が営まれていたと思われる。

集落が営まれた時期は、検出された土器がその形態的特徴から４世紀末から５世紀前半の時期に相当するものが大半と思われることから、当該時期としたい。更なる細分が可能と思われるが、谷部の堆積で層位的に検出できなかったため時間軸の中での明確な断定はできない。

また、南九州特有の成川式土器の系譜をもつ粗雑な作りの在地色の強い土器に混じって熊本県中央部からの搬入品と思われる薄手の精緻な作りをした土器が検出されており、蔵城丘陵に住んでいた古墳時代人の広範な活動が窺える。

［中世］

中世における蔵城遺跡では急傾斜という自然地形をうまく利用して中世の山城の造営が行われた。その際、防衛上堅固なものにするため蔵城丘陵の大規模な造成が行われている。各遺構あるいは表土から検出された遺物から、中世における蔵城丘陵の景観的変遷を述べることにする。

中国陶磁器の年代及び遺構からの遺物の出土状況から見て、大別して３時期に区分できる。第１期は１４世紀後半から１５世紀前半で、蔵城丘陵を「城」として機能させるため大規模な造成が行われた時期である。埋土中に１４世紀後半から１５世紀前半の遺物を含んだⅣ区ＳＤＯ６、Ⅵ区ＳＤＯ１、Ⅶ区ＳＤＯ１、Ⅷ区ＳＤＯ１など谷地形を利用した竪堀、堀切などの防衛施設が丘陵東側高台、西側高台を囲むような形で造成される。また、大規模な造成という観点から、「北側竪堀」、「南側土塁」あるいは丘陵西側高台斜面部やＸ区平坦面等も同じ時期に造成されたものと考えられる。第２期は１５世紀中葉から後半で、遺構としては丘陵西側高台に掘立柱建物跡２基（Ⅴ区ＳＢＯ１、Ｏ２）、それに伴う柵跡（Ⅴ区ＳＸＯ３、Ｏ４）が確認されている。第２期の段階ではまだ第１期の各遺構は残存していたものと考えられる。第３期は１６世紀代である。遺構は確認されなかったが、Ⅳ区とⅤ区で１６世紀代に比定できる中国産陶磁器が確認されているが、Ⅳ区の場合、Ⅷ区平坦面造成の際生じた廃土から検出されたもので、Ⅷ区平坦面に何らかの施設があっ

たものと考えられる。この時期に竪堀・堀切といった大規模な遺構の大部分は埋め戻しなどにより姿を消したものと思われる。

以上、蔵城丘陵における中世の景観を３期に分類し、その変遷を述べてみたが、そのうち第１期、つまり蔵城丘陵が「山城」として機能しはじめる開始期における遺跡の性格及びその歴史的背景について考えてみたいと思う。

蔵城遺跡に関連する中世の遺跡として南東に５００m程離れたところに岩城跡がある。この岩城跡も球磨川北岸の独立丘陵上に位置した中世城跡で、「相良家文書」にみる「木枝城」の比定地である。「木枝城」は永吉庄地頭平河氏の本拠地であった城で、文献資料には南北朝の動乱期に「木枝城」の攻防戦が行われていたとの記載も見られることから戦略上重要な拠点であったことが窺われる。また、近隣の字名には「覚井」や「馬場」など中世的景観を色濃く残す字名が見られる。この他、蔵城遺跡の北際を東西に旧道が走っているが、その道際に天文３年（１５３４）銘の庚申塔が建てられていることから、古くからの街道と思われる。

これら周辺地域を含め蔵城遺跡を概観した場合、「木枝城」との関連が重要である。蔵城遺跡が「覚井」集落を挟み込むような形で岩城跡と相対して立地していることや蔵城遺跡北際を街道が通り、その街道が「覚井」を抜け岩城跡の北側を通っていることから、蔵城遺跡を独立した城跡と見るのではなく、周辺地域を含め「木枝城」を中心とした有機的結合体の一部と見るのが妥当であろう。この観点から、「木枝城」を主城とすれば、中世における蔵城丘陵は「木枝城」の出城（西方警護）として機能していたものと思われる。第１期はちょうど南北朝の動乱期と期を同じくしており、「木枝城」周辺において何らかの緊張状態が生じた際に、城下を含めた「木枝城」警護のため堅固な防衛施設が蔵城丘陵に建てられたものと思われる。

[近世]

近世の初頭から中期にかけての時期、蔵城丘陵は居住域とされていなかったようである。この時期の遺構としては、丘陵西側高台西斜面に位置する平坦部に所在する墓所がある。時期は残存する墓石の紀年銘で明暦２（１６５６）年から享保２（１７１７）年までが見られることから１７世紀中頃から１８世紀前半にかけてのものと思われる。副葬品の肥前陶磁器の年代もおおよそ当該時期に当てはまるようである。また、副葬品に景徳鎮産染付小杯や肥前陶磁器を多用し、寛永通宝を入れた墓も見られることから当時の富裕農民あるいは武士といった特定階級の墓所であったことが窺える。

今回資料を紹介できなかったが、時代は下って、江戸後期の肥前陶磁器も攪乱土中ではあるが数多く確認されている。何らかの施設あるいは住居跡があったと考えて良い出土量であった。この頃、調査時の地形がほぼ確立したものと思われる。

以上、各時代の様相を見てきたが、昭和３０年頃蔵城丘陵東側が大幅に削平を受けたことや調査時においても民家が所在したことにつけても、後の時代になればなるほど地形の改変が進んでいったことがわかる。そのため、時代が古くなればなるほど判明しにくい部分が多くなるのが実情である。これら各時代の様相は蔵城遺跡周辺の遺跡が解明されることによって、より一層の理解が深まるものと思われる。中世における蔵城遺跡の位置付けも「岩城跡」の様相が解明されない限り推測の域を出ない。周辺地域を含めた今後の調査に期待したい。また、紙面と時間の都合上今回割愛した近世墓群の詳細な考察については別の機会に行うことにしたい。

参考文献一覧

磯野雄二　「御幸木部古屋敷遺跡　Ⅰ」熊本県文化財調査報告第１２９集　１９９３
木崎康弘・古城史雄　「堂園遺跡・中尾遺跡・別府遺跡」熊本県文化財調査報告第１５９集　１９９７
大田幸博　「山田城跡Ⅱ・Ⅲ」熊本県文化財調査報告第１１２集　１９９０
坂田和弘　「深水谷川遺跡」熊本県文化財調査報告第１４１集　１９９４
島津義昭・丸山伸治・濱田彰久　「大原天子遺跡」熊本県文化財調査報告第１３８集　１９９３
大田幸博　「城・馬場遺跡・高城跡Ⅶ郭」熊本県文化財調査報告第１１０集　１９９０
園村辰実　「夏女遺跡」熊本県文化財調査報告第１２８集　１９９３
松舟博満・大田幸博　「蔵城」錦町文化財調査報告第１集（錦町教育委員会）　１９９２
松舟博満　「火繰城跡」錦町文化財調査報告（錦町教育委員会）　１９９７
松本健郎・松本寿三郎ほか「蓮花寺跡・相良頼景館跡」熊本県文化財調査報告第２２集　１９７７
大田幸博　「高城跡」熊本県文化財調査報告第９５集　１９８８
大田幸博　「山田城跡」熊本県文化財調査報告第１０２集　１９８９
鶴嶋俊彦　「矢黒城跡」人吉市文化財調査報告書（人吉市教育委員会）　１９９２
椎葉文雄・松舟博満　「アンモン山遺跡」人吉市文化財調査報告書（人吉市教育委員会）　１９８５
大田幸博　「里の城遺跡・若宮城跡・瀬戸口横穴群調査報告書」熊本県文化財調査報告第５１集　１９８０
大橋康二　「古伊万里の文様」理工学社　１９９４
美濃口雅朗『熊本県における中世前期の土師器について』「中近世土器の基礎研究Ｘ」日本中世土器研究会　１９９４
中世土器研究会編　「概説　中世の土器・陶磁器」　真陽社　１９９５
永井久美男編　「中世の出土銭」兵庫埋蔵銭調査会　１９９４
森田勉　『九州の紀年銘資料共伴の出土陶磁器』「貿易陶磁研究」vol.6 日本貿易陶磁研究会　１９８６

(付論)

熊本県球磨郡錦町蔵城遺跡出土の近世人骨

松下孝幸*

【キーワード】：熊本県、近世人骨、長頭型、歯槽性突顎、低顔、低身長

はじめに

熊本県球磨郡錦町大字木上(きのえ)字蔵城(くらんじょう)に所在する蔵城遺跡の発掘調査が1998年におこなわれ、20基の墓坑が検出され、19体の人骨が出土した。

九州での近世人骨の発掘調査例はあまり多いものでなく、出土例数が多いものは北九州市ぐらいで、上清水(松下・他、1992)、宗玄寺(松下、1995)、普済院跡(松下、1996)、京町(未報告)から貴重な資料がえられており、福岡市の天福寺(中橋、1987)などとともに九州の近世人骨の貴重な例として活用されている。福岡県の例としてはこの他に北九州市の下到津(松下、1998)、犀川町の古川平原(松下、1997)などの例があるが、いずれも少数例である。

熊本県では牛深市の桑島(立志、1970・脇、1970)、八代市の川田京坪遺跡(松下・他、1980)、興善寺町の四郎丸遺跡(松下・他、1980)、頭地松本B遺跡(松下、1999)があるぐらいで、資料はかなり少ない。本例のなかにはほぼ完全なものもあり、熊本県南部での近世人の特徴の一端を知ることが可能であった。また興味ある所見も得られたので、性別、年齢および人骨の形質的特徴などを報告しておきたい。

資　料

本遺跡から今回出土した人骨は合計１９体で、表１に示すとおり、そのうち成人骨が１８体、小児骨が１体である。成人骨は男性骨が１０体、女性骨が６体で、残りの2体は保存状態が悪く性判別ができなかった。各人骨の性別・年令は表２のとおりである

表１　資料数 (Table 1.Number of materials)

成人			小児	合計
男性	女性	不明		
１０	６	２	１	１９

主な出土人骨の残存状態は省略したが、なかには保存状態が良好なものが存在する。

人骨は考古学的所見から、すべて17世紀後半から18世紀の近世に属する人骨と推定されている。

計測方法は、Martin－Saller(1957)によったが、脛骨の横径はオリビエの方法で計測し、鼻根部については鈴木(1963)と松下ら(1983)の方法で計測した。

なお、性判別については所見の項でそれぞれの個体ごとにその推定根拠を挙げた。年齢区分に関しては表３のとおりである。

表２　出土人骨一覧 (Table 2.List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	頭型(頭蓋長幅示数)	備　考
１号墓人骨	女性	壮年	長頭型	
４号墓人骨	不明	老年		保存不良
５号墓人骨	男性	熟年	長頭型	

*Takayuki MATSUSHITA
The Doigahama Site Anthropological Museum［土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム］

第１図　遺跡の位置（1/25,000）（Fig.1.Location of Kuranjo site, Nishiki Cho,Kumamoto Prefecture)

6号墓人骨	男性	老年	長頭型	
17号墓人骨	男性	壮年		保存不良
19号墓人骨	男性	熟年		
21号墓人骨	女性	壮年	過長頭型(68.72)	
22号墓人骨	女性	壮年		保存不良
26号墓人骨	男性	熟年		
27号墓人骨	—	—	獣骨	
28号墓人骨	—	小児(6歳)		
29号墓人骨	女性	老年	長頭型(73.63)	141.70cm(大腿骨から)
30号墓人骨	男性	壮年		
31号墓人骨	女性	熟年	中頭型(78.49)	141.34cm(脛骨から)
32号墓人骨	不明	不明		保存不良
33号墓人骨	男性	熟年		保存不良
34号墓人骨	男性	壮年		保存不良
35号墓人骨	女性	壮年		保存不良
36号墓人骨	男性	壮年	長頭型(74.59)	
37号墓人骨	男性	熟年		保存不良

表3　年齢区分　(Table 3.Division of age)

年齢区分		年齢	
未成人	乳児	1歳未満	
	幼児	1歳～ 5歳	(第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6歳～15歳	(第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年	16歳～20歳	(蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21歳～39歳	(40歳未満)
	熟年	40歳～59歳	(60歳未満)
	老年	60歳以上	

注）成年という用語については、土井ヶ浜遺跡第14次発掘報告書（松下、1996）を参照されたい。

所　見

1号墓人骨（女性、壮年）

1．頭蓋

(1) 脳頭蓋

右側1／3を欠損している。外後頭隆起はやや発達している程度で、乳様突起は中程度。縫合は、三主縫合のうち冠状縫合と矢状縫合の前部の内板は癒合しているが、ラムダ縫合と矢状縫合の後部の内板と三主縫合の外板はまだ開離している。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が184mmである。頭蓋最大幅とバジオン・ブレグマ高は計測できないが、幅径は狭く、頭型は長頭型である。

(2) 顔面頭蓋

眉上弓はやや隆起しているが、前頭結節の発達が良好で、前頭部は丸い。鼻根部は狭く、鼻骨は鼻骨間縫

合へ向けて隆起しており、鼻が高い。また、頬骨は外側へ張り出してはいない。

顔面頭蓋の計測値は、頬骨弓幅が〔65mm×2=130mm〕、中顔幅は〔48×2=96mm〕であるが、顔面の高径は計測できない。顔面は狭かったようである。

眼窩幅は42mm(左)、眼窩高は35mm(左)で、眼窩示数は83.33(左)となり、左側はmesokonch(中眼窩)に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が15mm、鼻根横弧長は20mm、鼻根彎曲示教は75.00となり、鼻根部は扁平ではない。

2．歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

／ ／ M_1 P_2 P_1 ／ I_2 ／	／ ○ C P_1 P_2 M_1 ／ ／
M_3 M_2 M_1 ○ P_1 C ○ ／	○ ／ ／ ／ P_2 M_1 ● ●

〔／：不明（破損）　○：歯槽開存　●：歯槽閉鎖〕以下同じ

咬耗度はBrocaの1度である。

3．四肢骨

（1）上肢骨

肩甲骨、鎖骨、上腕骨、橈骨、尺骨が残存していた。

①上腕骨

骨体は細いが、扁平で、三角筋粗面の発達は良好である。

計測値は、中央最大径が21mm(左)、中央最小径は14mm(左)で、骨体断面示数は66.67(左)となり、骨体はかなり扁平である。骨体最小周は51mm（左）、中央周は59mm（左）で、骨体は細い。

②橈骨

左側骨体が残存していた。骨体は細いが、骨間縁の発達は良好である。

③尺骨

尺骨も左側が残存していた。骨体は細い。

（2）下肢骨

寛骨、大腿骨、脛骨および腓骨が残存していた。

①寛骨

左側の腸骨が残っていたが、大坐骨切痕や恥骨下角は観察できない。

②大腿骨

左右の骨体が残存していた。骨体は細いが、粗線の発達は悪くないようで、骨体上部も扁平である。

計測値は、骨体中央矢状径は計測できないが、横径は22mm(右)、23mm(左)である。骨体中央周は72mm（左）で、骨体は細い。また、上骨体断面示数は66.67（左）となり、骨体上部は著しく扁平である。

③脛骨

骨体は細く、丸い。前線は鈍縁で、ヒラメ筋線の発達は良好である。骨体の断面形は左側はヘリチカのV型を呈している。

計測値は、中央最大径が23mm(左)、中央横径は18mm(左)で、中央断面示数は78.26(左)となり、骨体には扁平性は認められない。骨体周は66mm(左)、最小周は61mm(左)で、骨体は細い。

4．性別・年齢

性別は、前頭結節の発達が良好で、前頭部は丸く、四肢骨が細いことから、女性と推定した。年齢は、ラムダ縫合と矢状縫合の後部の内板が開離していることから、壮年と考えられる。

4号墓人骨（性別不明、老年）

ブレグマを中心とする前頭骨と頭頂骨が残存していた。骨壁は堅牢である。冠状縫合と矢状縫合は内外両板とも閉鎖しているようである。年齢はこのことから老年と推定されるが、性別は不明である。

5号墓人骨（男性、熟年）

残存していたのは頭蓋、上腕骨、大腿骨、脛骨および腓骨である。

1．頭蓋

頭蓋冠が残存していた。外後頭隆起の発達は良好である。縫合は、三主縫合とも内板は閉鎖しており、外板はまだ開離している。眉上弓の隆起は強い。鼻骨も鼻骨間縫合へ向けて隆起しており、鼻が高く、鼻根部の様態は1号墓人骨（女性）に酷似している。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が200mmで長い。頭蓋最大幅とバジオン・ブレグマ高は計測できないが、観察したところでは、頭型は長頭型である。

2．四肢骨

上腕骨、脛骨、腓骨は計測できないが、その径は大きい。

大腿骨体は男性としては細いが、矢状径は大きく、柱状形成がみられる。

3．性別・年齢

性別は、眉上弓の隆起が強く、上腕骨や腓骨などの径が大きいことから、男性とした。年齢は三主縫合の内板が閉鎖し、外板が開離していることから、熟年と推定した。

6号墓人骨（男性、老年）

1．頭蓋

（1）脳頭蓋

左側の一部を欠損している。外後頭隆起はやや隆起している。三主縫合の内板は癒合しており、外板にもかなり癒合が認められる。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が184mmである。頭蓋最大幅とバジオン・ブレグマ高は計測できないが、観察したところ、頭型は長頭型である。また、頭蓋水平周は514mm、横弧長は302mmである。

（2）顔面頭蓋

眉上弓はやや隆起しており、前頭結節の発達は弱い。鼻根部は狭く、扁平である。

顔面頭蓋の計測値は、中顔幅が〔51mm×2=102mm〕、上顔高は（57mm）であるが、頬骨弓幅、顔高は計測できない。観察したところ、顔の高径はかなり低い。上顔示数は〔55.88〕（V）となり、顔面には著しい低・広顔傾向が認められる。

眼窩は低眼窩に、鼻部は低鼻に属しており、鼻根部は扁平である。

2．歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

● ● ● ● ● C ● I_1	I_1 I_2 C ● ● ● ● ●
● ● ● ● P_1 C ○ ○	○ ● C P_1 ● ● ● ●

咬耗度はBrocaの3度である。

3．四肢骨

上腕骨の一部、寛骨、大腿骨、脛骨および腓骨が残存していた。

①寛骨

左側の寛骨臼部分が残っていたが、大坐骨切痕の角度、恥骨下角などは観察できない。

②大腿骨

長さは長くないようであるが、骨体は太い。

計測値は、骨体中央矢状径が27mm（左）、横径は30mm（左）で、骨体中央断面示教は90.00（左）となり、粗線や骨体両側面の後方への発達は悪い。骨体中央周は91mm（左）で、骨体は太い。また、上骨体断面示数は81.25（左）となり、骨体上部の扁平性は弱い。

③脛骨

計測はあまりできないが、骨体はやや太く、ヒラメ筋線の発達はいい方である。

④腓骨

径は大きく、稜の発達は良好で、溝も深い。

４．性別・年齢

性別は、外後頭隆起と眉上弓がやや隆起しており、四肢骨の径が大きいことから、男性と推定した。年齢は、三主縫合の外板にも癒合が進行していることから、老年と考えられる。

17号墓人骨（男性、壮年）

残存量は少なく、頭蓋、上腕骨および大腿骨のそれぞれ一部のみである。

下顎骨はオトガイが高く、径は大きい。

計測ができたのは左側上腕骨のみで、その計測値は、中央最大径が21mm（左）、中央最小径は17mm（左）で、骨体断面示数は80.95（左）となり、骨体は扁平ではないが、三角筋粗面の発達は悪くない。中央周は65mm（左）である。

性別は、下顎骨と上腕骨の径が大きいことから、男性とした。年齢は観察できたラムダ縫合が内外両板ともまだ開離していることから、壮年と思われる。

19号墓人骨（男性、熟年）

残存量は少ない。頭蓋、大腿骨、脛骨のみである。

１．頭蓋

外後頭隆起の観察はできない。眉上弓の隆起は弱い。鼻根部は狭く、鼻骨は鼻骨間縫合へ向けて隆起しており、鼻が高く、鼻根部は、1号墓人骨(女性)と5号墓人骨(男性)に酷似している。

三主縫合のうち、冠状縫合と矢状縫合の観察ができたが、内板は両者とも癒合しており、外板はまだ開離している。

２．四肢骨

左側脛骨が計測できた。計測値は、中央最大径が27mm（左）、中央横径は18mm（左）で、中央断面示数は66.67（左）となり、骨体はやや扁平である。骨体周は73mm（左）である。

３．性別・年齢

性別は、脛骨体の径が大きいことから、男性とした。年齢は、冠状縫合と矢状縫合の内板が両者とも癒合しており、外板はまだ開離していることから、熟年と思われる。

21号墓人骨（女性、壮年）

１．頭蓋

（1）脳頭蓋

外後頭隆起の発達は悪く、乳様突起も小さい。三主縫合の内板は、矢状縫合だけが癒合しており、外板は三主縫合すべてが開離している。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が179mm、頭蓋最大幅は123mm、バジオン・ブレグマ高は129mmである。頭蓋長幅示数は68.72、頭蓋長高示数は72.07、頭蓋幅高示数は104.88となり、頭型はhyperdolicho-, ortho-, akrokran（過長頭型、中頭型、尖頭型）に属している。また、頭蓋水平周は495mmである。

(2) 顔面頭蓋

眉上弓の隆起は認められない。前頭部は豊かに膨隆している。鼻根部は狭く、鼻骨は鼻骨間縫合へ向けて隆起しており、鼻が高く、鼻根部は、１号墓人骨（女性）、５　号墓人骨（男性）および19号墓人骨（男性）によく似ている。

顔面頭蓋の計測はほとんどできないが、観察したところ、顔の幅は狭く、高径もかなり低い。また、強い歯槽性突顎が観察される。

２．歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

／ $M_2M_1P_2$／ C I_2／	／ ／ C $P_1P_2M_1M_2M_3$
$M_3M_2M_1P_2P_1$○ I_2I_1	I_1I_2C P_1P_2○ M_2M_3

咬耗度はBrocaの1～2度である。

３．四肢骨

肩甲骨、鎖骨、上腕骨、橈骨、尺骨、寛骨および大腿骨が残存していた。

上腕骨、橈骨、尺骨の径は小さく、骨体は細いが、三角筋粗面や骨間縁の発達はきわめて良好で、上腕骨体は扁平である。

両側の寛骨が残っており、大坐骨切痕の角度は大きい。

大腿骨はほとんど計測できないが、径は小さい。

４．性別・年齢

性別は、外後頭隆起と眉上弓の発達が悪く、乳様突起も小さく、前頭部が膨隆していることから、女性と推定した。年齢は、冠状縫合とラムダ縫合の内板と三主縫合の外板が開離していることから、壮年と思われる。

22号墓人骨（女性、壮年）

残存量はきわめて少なく、前頭鱗片と左側大腿骨のみである。冠状縫合は完全に開離していたようである。左側大腿骨はかなり小さく細い。

性別は、大腿骨の径がかなり小さいことから、女性とした。年齢は、冠状縫合が完全に開離していたようなので、壮年と推定した。

26号墓人骨（男性、熟年）

残存量は少なく、残っていたのは頭蓋冠、大腿骨および脛骨のそれぞれ一部のみである。頭蓋の径はかなり大きい。縫合は三主縫合とも内板は癒合しており、外板は開離している。

大腿骨も脛骨も計測できないが、径は大きく、大腿骨は粗線も幅広く柱状性もみられる。

性別は、頭蓋や四肢骨の径が大きいことから、男性とした。年齢は、三主縫合の内板が癒合し、外板が開離していることから、熟年と思われる。

28号墓人骨（小児）

頭蓋と四肢骨とが残っていた。小児骨の割には保存状態はよい。年齢は、上下両顎の第一大臼歯が、萌出を完了はしていないが、すでに歯槽を破り、萌出を始めていることから6歳(±1歳)と推定した(表3参照)。

29号墓人骨（女性、老年）

1．頭蓋

(1) 脳頭蓋

保存状態は良好である。外後頭隆起の発達は悪く、乳様突起も小さい。三主縫合は内外両板とも癒合閉鎖している。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が182mm、頭蓋最大幅は134mmで、頭蓋長幅示数は73.63となり、頭型はdolichokran（長頭型）に属している。また、頭蓋水平周は511mm、横弧長は295mmである。

(2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋は完全である。眉上弓の隆起はきわめて弱く、鼻根部は扁平である。

顔面頭蓋の計測値は、頬骨弓幅が132mm、中顔幅は94mm、顔高は109mm、上顔高は64mmで、顔示数は82.58(K)、115.96(V)、上顔示数は48.48(K)、68.09(V)となり、顔面は低・広顔である。

眼窩幅は43mm(右)、42mm(左)、眼窩高は34mm(右)、34mm(左)で、眼窩示数は79.07(右)、80.92(左)となり、両側ともmesokonch（中眼窩）に属している。

鼻幅は27mm、鼻高は48mmで、鼻示数は56.25となり、chamaerrhin(低鼻)に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が17mm、鼻根横弧長は19mm、鼻根彎曲示数は89.47となり、鼻根部は扁平である。

側面角は、全側面角が82度、歯槽側面角は(68度)で、歯槽性突顎の傾向が認められる。

2．歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

／ $M_2M_1P_2P_1C\ \ I_2I_1$	$I_1I_2C\ \ P_1P_2M_1M_2$／
／ $M_2M_1P_2P_1C\ \ I_2I_1$	$I_1I_2C\ \ P_1P_2M_1$● ●

咬耗度はBrocaの1度である。また、歯の咬合形式は鋏状咬合である。

3．四肢骨

(1) 上肢骨

上腕骨、橈骨および尺骨の径は小さいが、三角筋粗面や骨間縁の発達は良好で、とくに橈骨の骨間縁は著しく発達している。

(2) 下肢骨

①寛骨

大坐骨切痕の角度と恥骨下角は大きい。また、耳状面前溝が認められる。

②大腿骨

長さは短く、骨体は細い。

計測値は、最大長が354mm（右）、骨体中央周は76mm（右）で、長厚示数は21.78（右）となり、骨体はやや頑丈である。骨体中央矢状径は23mm（右）、横径は25mm（右）で、骨体中央断面示教は92.00（右）となり、粗線や骨体両側面の後方への発達はきわめて悪い。また、上骨体断面示数は70.00（右）、72.41（左）となり、骨体上部は扁平である。

③脛骨

長さは短く、骨体も細い。ヒラメ筋線の発達も悪い。骨体の断面形は右側はヘリチカのⅣ型、左側はⅤ型を呈している。

計測値は、脛骨最大長が296mm(右)、292mm(左)、骨体周は72mm(右)、71mm(左)、最小周は65mm(右)、65mm(左)で、長厚示数は22.65(右)、22.57(左)である。中央最大径は26mm(右)、25mm(左)、中央横径は19mm(右)、20mm(左)で、中央断面示数は73.08(右)、80.00(左)となり、骨体には扁平性は認められない。

4．推定身長値

大腿骨最大長から、Pearsonおよび藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、それぞれ141.70cm(Pearson、右)、140.34cm(藤井、右)となり、低身長である。

5．性別・年齢

性別は、眉上弓の隆起が弱く、大坐骨切痕の角度が大きいことから、女性と推定した。年齢は、三主縫合が内外両板とも癒合閉鎖しているので、老年と考えられる。

30号墓人骨（男性、壮年）

1．頭蓋

(1) 脳頭蓋

外後頭隆起の観察はできない。眉上弓の隆起はやや強い。鼻根部は狭く、鼻骨は鼻骨間縫合へ向けて隆起しており、鼻が高く、鼻根部は、1号墓人骨(女性)、5号墓人骨(男性)、19号墓人骨(男性)および21号墓人骨(女性) によく似ている。冠状縫合と矢状縫合の観察ができたが、両者とも内外両板は開離している。頭蓋壁は薄い。

計測はほとんどできない。頭型は不明である。上顔高は59mmしかなく、かなりの低顔である。

また、上顎骨歯槽突起には強い歯槽性突顎の傾向が認められる。

2．歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

$M_3M_2M_1P_2P_1C\ \ I_2I_1$	$I_1I_2C\ \ P_1P_2M_1M_2$／
$M_3M_2M_1P_2P_1$／ I_2I_1	I_1I_2／ $P_1P_2M_1M_2M_3$

咬耗度はBrocaの1度である。また、第三大臼歯は歯根が完成しておらず、歯槽の状態からこれはまだ未萌出だったようである。

3．四肢骨

四肢骨は、上腕骨、大腿骨および脛骨が残っていたが、ほとんど計測できない。観察したところ、径はいずれも小さい。

4．性別・年齢

性別は、眉上弓の隆起がやや強いことから、男性とした。年齢は、冠状縫合と矢状縫合が内外両板とも開離し、第三大臼歯の歯根が未完成だったことから成年を疑ったが、蝶後頭軟骨結合が完全に癒合していることから、20歳を超えているものと思われたので、壮年とした。

31号墓人骨（女性、熟年）

1．頭蓋

(1) 脳頭蓋

外後頭隆起の発達は悪く、乳様突起も小さい。三主縫合は内板はすべて癒合閉鎖しており、外板はすべて開離している。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が172mm、頭蓋最大幅は135mm、バジオン・ブレグマ高は132mmである。頭蓋長幅示数は78.49、頭蓋長高示数は76.74、頭蓋幅高示数は97.78となり、頭型はmeso-, hypsi-, metriokran(中頭型、高頭型、中頭型）に属している。また、頭蓋水平周は496mm、横弧長は305mm、正中矢状弧長は360mmである。

（2）顔面頭蓋

眉上弓の隆起はきわめて弱く、鼻根部は広く、扁平である。

顔面頭蓋の計測値は、頬骨弓幅が〔64mm×2=128mm〕、中顔幅は〔46mm×2=92mm〕であるが、顔高と上顔高は、上顎骨歯槽突起が萎縮してしまっているので計測できないが、観察したところでは顔面の高径はかなり低く、著しい低・広顔傾向が認められる。

眼窩幅は40mm(右)、40mm(左)、眼窩高は31mm(右)、31mm(左)で、眼窩示数は77.50(右)、77.50(左)となり、両側ともmesokonch（中眼窩）に属している。

鼻幅は28mm、鼻高は48mmで、鼻示数は58.33となり、hyperchamaerrhin（過低鼻）に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が20mm、鼻根横弧長は23mm、鼻根彎曲示数は86.96となり、鼻根部は扁平である。

２．歯

上下両顎とも歯槽が閉鎖しており、歯はまったく存在しない。

３．四肢骨

（1）上肢骨

肩甲骨、鎖骨、上腕骨、橈骨、尺骨が残存していた。

①上腕骨

骨体は細いが、三角筋粗面の発達は良好で、扁平である。

計測値は、中央最大径が20mm(左)、中央最小径は14mm(左)で、骨体断面示数は70.00(左)となり、骨体には強い扁平性が認められる。骨体最小周は52mm(左)、中央周は57mm(左)で、骨体は細い。

②橈骨・尺骨

骨体は細いが、骨間縁の発達は良好である。

（2）下肢骨

寛骨、大腿骨、脛骨および腓骨が残存していた。

①寛骨

大坐骨切痕の角度は大きい。耳状面前溝の観察はできない。

②大腿骨

長さは短く、骨体は細い。また、粗線の発達も悪い。

計測値は、骨体中央矢状径が22mm（右）、23mm（左）、横径は22mm（右）、22mm（左）で、骨体中央断面示数は100.00（右）、104.55（左）となり、粗線や骨体両側面の後方への発達は比較的良好な方である。骨体中央周は70mm（右）、72mm（左）で、骨体は細い。また、上骨体断面示数は80.77（右）、80.77（左）となり、骨体上部の扁平性は弱い。

③脛骨

骨体は細いが、ヒラメ筋線の発達は良好である。骨体の断面形は両側ともヘリチカのII型を呈している。

計測値は、脛骨最大長が291mm（左）、骨体周は65mm（左）、最小周は59mm（右）、60mm（左）で、骨体は細く、長厚示数は21.20（左）である。中央最大径は23mm（左）、中央横径は18mm（右）、18mm（左）で、中央断面示数は78.26（左）となり、骨体には扁平性は認められない。

4．推定身長値

脛骨の全長と最大長から、Pearsonおよび藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、それぞれ141.34cm(Pearson、左)、141.85cm(藤井、左)となり、低身長である。

5．性別・年齢

性別は、眉上弓が弱く、大坐骨切痕の角度が大きいことから、女性と推定した。年齢は、三主縫合の内板がすべて癒合閉鎖しており、外板はまだ開離していることから、熟年と考えられる。

32号墓人骨（性別・年齢不明）

左側側頭骨片と左側大腿骨体片が残存していたにすぎない。性別、年齢ともに不明である。

33号墓人骨（男性・熟年）

頭蓋冠と上顎骨が残存していた。計測はできないが、径は大きい。頭型は観察によれば、長さが短いようなので、短頭型に傾いていたかもしれない。眉上弓の隆起はかなり弱く、鼻根部も扁平であるようである。縫合は冠状縫合と矢状縫合の観察ができたが、いずれも内板は癒合しており、外板は開離してる。

下顎歯が残存していた。歯式で示すと次のとおりである。

／ ／ ／ ／ ○ C I_2 ○	／ ○ ／ P_1 ／ ／ ／ ／

咬耗度はBrocaの3度である。

四肢骨は、上腕骨、大腿骨、脛骨および腓骨が残存していたが、ほとんど計測ができない。観察したところ、骨体の径はいずれも大きい。

性別は、頭蓋や四肢骨の径が大きいことから、男性とした。年齢は、冠状縫合と矢状縫合の内板が癒合し、外板は開離していることから熟年と推定した。

34号墓人骨（男性・壮年）

頭蓋冠、左側大腿骨、左側脛骨および左側膝蓋骨が残存していた。縫合は冠状縫合と矢状縫合の観察ができたが、いずれも内外両枝はまだ開離している。

遊離歯が残存していた。歯式で示すと次のとおりである。

／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／	／ ／ C ／ $P_2M_1M_2$ ／
／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／	／ ／ ／ ／ P_2M_1 ／ ／

咬耗度はBrocaの1度である。

大腿骨も脛骨も計測はできないが、観察したところ、骨体の径は大きい。

性別は、四肢骨の径が大きいことから、男性とした。年齢は、冠状縫合と矢状縫合が内外両板とも開離していることから、壮年と思われる。

35号墓人骨（女性・壮年）

頭蓋左側半分が残存していた。外後頭隆起の発達は悪く、乳様突起も小さい。冠状縫合とラムダ縫合の観察ができたが、両者とも内外両板は開離している。

四肢骨は、左側の橈骨、尺骨および大腿骨片が残っていたが、計測はいずれもできないが、橈骨の骨間縁はよく発達している。

性別は、外後頭隆起の発達は悪く、乳様突起も小さいことから、女性とした。年齢は、冠状縫合とラムダ縫合が内外両板とも開離していることから、壮年と推定した。

36号墓人骨（男性・壮年）

１．頭蓋

（1）脳頭蓋

外後頭隆起の発達はあまりよくはないようである。三主縫合のうち冠状縫合と矢状縫合の内板は開離しているが、ラムダ縫合の内板は癒合している。外板はすべて開離している。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が181mm、頭蓋最大幅は135mmで、頭蓋長幅示数は74.59となり、頭型はdolichokran（長頭型）に属している。また、頭蓋水平周は506mm、横弧長は312mmである。

（2）顔面頭蓋

眉上弓は強く隆起し、鼻根部は扁平である。

顔面頭蓋の計測値は、中顔幅が99mmで、他の幅径や高径は計測できないが、観察したところ、顔面の高径はかなり低い。

眼窩幅は44mm（左）、眼窩高は33mm（右）、32mm（左）で、眼窩示数は72.73（左）となり、左側はchamaekonch（低眼窩）に属している。

鼻幅は24mm、鼻高は48mmで、鼻示数は50.00となり、mesorrhin（中鼻）に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が15mm、鼻根横弧長は17mm、鼻根彎曲示数は88.24となり、鼻根部は扁平である。

２．歯

上下両顎とも歯槽が閉鎖しており、歯はまったく存在しない。

３．四肢骨

（1）上肢骨

鎖骨、上腕骨、橈骨、尺骨が残存していた。

計測はほとんどできない。骨体は細い。

（2）下肢骨

寛骨の一部、大腿骨、脛骨および腓骨が残存していた。

①大腿骨

骨体は細い。また、粗線の発達も悪いが、骨体上部は扁平である。

計測値は、骨体中央矢状径が25mm（左）、横径は25mm（右）、25mm（左）で、骨体中央断面示数は100.00（左）となり、粗線や骨体両側面の後方への発達はあまりよくない。骨体中央周は79mm（左）で、骨体は細い。また、上骨体断面示教は75.86（右）、72.41（左）となり、骨体上部は扁平である。

②脛骨

骨体は細いが、ヒラメ筋線の発達は良好である。骨体の断面形は左側はヘリチカのＶ型を呈している。

計測値は、中央最大径が25mm（左）、中央横径は19mm（左）で、中央断面示数は76.00（左）となり、骨体には扁平性は認められない。骨体周は72mm（左）、最小周は65mm（左）で、骨体は細い。

４．性別・年齢

性別は、眉上弓が隆起していることから、男性と推定した。年齢は、三主縫合のうち冠状縫合と矢状縫合の内板および三主縫合の外板が開離していることから、壮年と考えられる。

37号墓人骨（男性・熟年）

頭蓋片、橈骨片、大腿骨が残存していた。冠状縫合の左側部が観察できたが、内板は癒合し、外板にも癒合が進行しているようであるが、縫合線をまだ認めることができる。径は大きそうで、前頭部は傾斜している。

四肢骨は計測できない。大腿骨はかなり細いが、橈骨の骨間縁はよく発達している。

性別は、四肢骨は細いが、頭蓋の径が大きそうなことと、前頭鱗が後方へ傾斜していることから、男性とした。年齢は、冠状縫合の左側部の内板が癒合していることから、熱年と推定した。

考　　察

1．頭蓋

(1) 脳頭蓋

まず、頭型を検討してみたい。頭蓋長幅示教を算出することができたものは４体に過ぎないが、観察によって頭型を推測することができたものが他に３体あり、合計７体の頭型を知ることができた（表２）。頭蓋長幅示教が算出できた４体のうち、過長頭型が１体、長頭型が２体、中頭型が１体であるが、これに観察所見を加えると、過長頭型が１体、長頭型が５体、中頭型が１体となり、本近世人は男女とも長頭型に大きく傾いていることがわかる。

表４は男性の主要脳頭蓋の計測値の比較表である。頭蓋長幅示数を算出できた男性骨はわずか１体で、この示数値は桑島、白浜、上清水よりも大きいが、天福寺と宗玄寺よりは小さく、京町の平均値に一致する。表５は女性の主要脳頭蓋の計測値の比較表である。女性の３例の平均値はかなり小さく、上清水と大差ない。

頭型は中世で長頭性が極限状態になり、近世では次第に中頭型になっていくようであるが、その程度や中頭化への速度は地域や階層によって違っているようである。表４と表５では天福寺や宗玄寺など福岡市域や北九州市域の都市部の近世人は、頭蓋長幅示数がやや大きく、一方、桑島（熊本県の離島）、白浜（五島列島）、上清水（北九州の南部）などの離島や農村地域はまだ示数値がかなり小さい。本例も長頭性がかなり強いが、熊本県南部という地域性を示しているようである。

表４　脳頭蓋計測値（男性、mm）（Table 4. Comparison of male calvarial measurements and indices）

		蔵城 近世人 熊本県 (松下)		桑島 近世人 熊本県 (脇)		天福寺 近世人 福岡県 (中橋)		白浜 近世人 長崎県 (松下)		京町 近世人 福岡県 (松下)		宗玄寺 近世人 福岡県 (松下)		上清水 近世人 福岡県 (松下・他)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	頭蓋最大長	3	188.33	13	180.13	38	182.6	16	185.88	37	180.30	37	180.92	7	181.43
8.	頭蓋最大幅	1	135	13	131.02	38	138.6	16	134.69	30	135.23	45	140.49	6	132.50
17.	バジオン・ブレグマ高		−	11	135.88	33	139.2	14	136.57	14	136.93	32	141.03	3	134.33
8/1	頭蓋長幅示数	1	74.59	13	72.74	37	76.0	16	72.55	23	74.64	36	78.20	5	73.64
17/1	頭蓋長高示数		−	11	75.48	33	76.2	14	73.65	11	75.70	26	78.15	3	75.02
17/8	頭蓋幅高示数		−	11	104.62	33	100.8	14	101.38	12	101.81	29	100.51	3	100.35
23.	頭蓋水平周	2	510.00	12	507.75	38	519.1	16	519.94	22	508.55	31	518.61	3	507.00
24.	横弧長	2	307.00	13	307.80	37	313.8	16	308.88	27	308.04	36	321.25	3	304.33
25.	正中矢状弧長		−	8	371.97	33	380.6	14	380.50	14	370.71	24	380.00	1	372

表５　脳頭蓋計測値（女性、mm）（Table 5. Comparison of female calvarial measurements and indices）

		蔵城 近世人 熊本県 (松下)		桑島 近世人 熊本県 (脇)		天福寺 近世人 福岡県 (中橋)		白浜 近世人 長崎県 (松下)		京町 近世人 福岡県 (松下)		宗玄寺 近世人 福岡県 (松下)		上清水 近世人 福岡県 (松下・他)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	頭蓋最大長	4	179.25	4	172.60	38	174.7	12	178.83	24	172.08	35	172.71	7	176.57
8.	頭蓋最大幅	3	130.67	4	128.50	38	133.5	11	128.73	24	132.33	36	136.50	8	131.50
17.	バジオン・ブレグマ高	2	130.50	4	132.02	35	132.7	11	130.91	10	134.70	27	136.33	5	128.00
8/1	頭蓋長幅示数	3	73.61	4	74.42	38	76.5	11	72.24	22	77.01	33	79.40	4	73.50
17/1	頭蓋長高示数	2	74.41	4	76.48	35	76.1	11	73.43	10	77.79	25	78.48	4	74.53
17/8	頭蓋幅高示数	2	101.33	4	102.90	35	99.4	11	101.73	8	100.60	27	99.61	3	97.73
23.	頭蓋水平周	3	500.67	4	492.57	36	497.4	10	496.30	11	496.91	32	498.97	1	493
24.	横弧長	2	300.00	4	294.02	35	303.0	11	294.91	15	301.20	34	309.03	3	295.00
25.	正中矢状弧長	1	360	4	356.17	34	364.2	11	365.45	8	357.13	25	364.48	2	352.00

（2）顔面頭蓋

顔面頭蓋がほぼ完全なものでも歯槽の萎縮があって、顔の高さが計測できなかったが、観察したところ、顔の高径は男女ともかなり低い。高径が低い傾向は、眼窩や鼻部にも認められる。また、計測ができないものが多かった。歯槽性突顎の傾向はかなり強い。

表６、７は顔面頭蓋の比較表である。顔の高さを示す計測値は、男性では上顔高だけしか計測できなかったが、この平均値は表６では最小値である。女性でも顔高と上顔高は上清水に次いで小さく、顔示数も上顔示数も表７では最小値を示し、男女ともかなり低顔傾向であることがわかる。顔の高さも、地域や階層によって違っており、桑島、天福寺、京町、宗玄寺では高顔傾向がみられ、白浜、上清水では低顔傾向が認められる。本例も低顔であり、被葬者の特徴がよく現れている。

鼻根部は扁平なもの（男性：６号墓人骨、33号墓人骨、36号墓人骨、女性：29号墓人骨、31号墓人骨）と非扁平のもの（男性：５号墓人骨、19号墓人骨、30号墓人骨、女性：１号墓人骨、21号墓人骨）が認められたが、後者は鼻根部が狭く、鼻骨が鼻骨間縫合へ向けて隆起しており、鼻が高く、いわゆる鼻筋が通ったもので、近世人骨としては極めて珍しい。しかも非扁平なものが５体も認められたことは注目に値する。この非扁平な鼻根部は５体ともよく似ていたことから、おそらくこの５体の間にはなんらかの血縁関係があったものと思われる。近世人では一部の階層を除いてはこのように鼻が高い例はあまり認められない。この鼻が高い個体がかなり存在するというのも本近世人の特徴といってよい（表８，９）。

表６　顔面頭蓋計測値（男性、mm、度）（Table 6. Comparison of male facial measurements and indices）

		蔵城 近世人 熊本県 (松下)		桑島 近世人 熊本県 (脇)		天福寺 近世人 福岡県 (中橋)		白浜 近世人 長崎県 (松下)		京町 近世人 福岡県 (松下)		宗玄寺 近世人 福岡県 (松下)		上清水 近世人 福岡県 (松下・他)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
45.	頬骨弓幅		—	5	126.32	25	136.4	12	〔137.25〕	2	135.00	18	135.89	1	136
46.	中顔幅	1	99	7	101.14	24	101.8	14	〔100.36〕	24	98.13	31	98.97	3	101.00
47.	顔　高		—	4	122.40	14	126.9	10	119.00	14	125.00	18	128.94	2	115.00
48.	上顔高	2	(55.00)	7	70.54	18	74.5	11	(68.36)	19	70.32	17	73.29	3	66.33
47/45	顔示数(K)		—	2	93.65	13	93.2	9	87.35	1	93.28	10	93.31		—
48 45	上顔示数(K)		—	5	55.40	17	54.4	10	〔50.30〕	2	52.60	8	54.41		—
47 46	顔示数(V)		—	3	115.80	13	123.9	10	〔118.51〕	8	127.12	17	130.13	1	107.69
48 46	上顔示数(V)		—	7	70.15	17	73.1	11	〔68.32〕	12	70.24	16	73.51	2	66.14
51.	眼窩幅(左)	2	43.00	7	40.90	24	42.6	13	43.00	29	42.66	29	43.72	6	43.00
52.	眼窩高(左)	3	33.67	8	34.38	24	34.1	14	34.93	32	34.97	34	36.09	6	32.83
52/51	眼窩示数(左)	2	76.84	6	83.60	23	80.9	12	80.72	26	81.19	29	83.09	6	76.51
54.	鼻　幅	2	25.00	8	25.90	24	26.5	12	25.67	32	25.47	28	25.43	4	26.25
55.	鼻　高	3	47.67	8	50.52	24	52.9	14	(53.29)	32	52.41	31	55.45	4	48.50
54/55	鼻示数	2	51.00	8	51.34	24	50.1	12	(48.51)	28	49.21	28	45.86	4	54.19
72.	全側面角		—	7	80.41	16	83.2	10	86.00	13	81.92	12	83.00	2	81.50
73.	鼻側面角	2	82.50	6	86.36		—	11	88.27	19	86.42	27	86.85	3	83.33
74.	歯槽側面角		—	8	64.53	16	67.0	10	76.20	13	72.00	12	77.83	2	71.00

表7　顔面頭蓋計測値（女性、mm、度）　(Table 7. Comparison of female facial measurements and indices)

		蔵城 近世人 熊本県 (松下)		桑島 近世人 熊本県 (脇)		天福寺 近世人 (中橋) 福岡県		白浜 近世人 長崎県 (松下)		京町 近世人 福岡県 (松下)		宗玄寺 近世人 福岡県 (松下)		上清水 近世人 福岡県 (松下・他)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
45.	頬骨弓幅	1	132.00		—	30	126.5	8	〔125.63〕	1	132.00	16	125.19		—
46.	中顔幅	4	94.00	2	91.55	25	95.5	10	〔93.00〕	10	94.50	21	93.00	4	90.50
47.	顔　高	1	109.00	2	117.65	15	115.9	9	114.78	6	121.17	15	116.07	4	109.25
48.	上顔高	2	61.50	2	71.40	22	68.8	10	(65.20)	13	68.15	15	65.73	6	61.33
47/45	顔示数(K)	1	82.58		—	15	91.1	7	〔92.08〕	1	98.48	8	94.67		—
48/45	上顔示数(K)	1	48.48		—	22	54.3	8	52.64	1	57.58	10	53.47		—
47/46	顔示数(V)	1	115.96	2	128.58	15	120.9	9	〔122.41〕	4	123.50	12	126.75	4	120.90
48/46	上顔示数(V)	1	68.09	2	78.04	22	71.8	10	〔70.16〕	10	71.89	13	72.02	4	67.98
51.	眼窩幅(左)	4	41.25	2	39.75	30	40.5	9	40.67	13	40.38	27	41.74	6	41.00
52.	眼窩高(左)	4	33.25	2	34.70	30	34.3	7	34.43	10	34.50	27	35.22	6	32.33
52/51	眼窩示数(左)	4	80.56	2	87.29	29	84.8	7	84.59	10	84.57	26	84.31	6	78.87
54.	鼻　幅	2	27.50	2	24.15	26	25.3	10	24.30	15	24.53	26	24.46	5	25.60
55.	鼻　高	2	48.00	2	49.90	28	49.9	9	49.22	14	51.07	26	50.19	6	45.83
54/55	鼻示数	2	57.29	2	48.36	26	51.0	9	49.55	14	48.34	26	48.84	5	55.78
72.	全側面角	1	82	2	76.90	18	82.5	8	83.38	10	85.90	17	83.47	6	84.17
73.	鼻側面角		—	2	83.10		—	8	87.13	10	90.30	24	87.04	6	89.00
74.	歯槽側面角	1	(68)	2	63.70	17	65.0	8	71.75	10	73.70	16	72.63	6	68.83

表8　鼻根部計測値(男性、mm、度)　(Table 8. Comparison of male nasal root measurements and indices)

		蔵城 近世人 熊本県 (松下)		桑島 近世人 熊本県 (脇)		白浜 近世人 長崎県 (松下)		京町 近世人 福岡県 (松下)		宗玄寺 近世人 福岡県 (松下)		上清水 近世人 福岡県 (松下・他)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
50.	前眼窩間幅	2	16.00	6	20.48	14	16.64	32	17.16	26	17.62	7	17.71
50A.	鼻根横弧長	2	18.50		—	12	21.08	27	20.52	24	21.25	7	19.71
50A/50	鼻根彎曲示数	2	86.62		—	12	79.84	27	84.65	24	82.96	7	90.01
57.	鼻骨最小幅	2	3.00		—	14	8.21	29	7.72	26	7.38	8	7.00
44.	両眼窩幅		—	6	97.70	12	98.92	22	96.36	24	99.29	5	98.80
50/44	眼窩間示数		—	5	20.64	12	17.12	21	17.29	24	17.92	5	18.24
a.	前頭突起上幅(右)	2	13.00		—	13	10.54	26	9.38	21	9.43	8	10.13
	(左)	2	13.50		—	13	10.00	29	9.59	23	9.30	8	10.50
b.	前頭突起水平傾斜角	1	113		—	13	79.08	15	91.40	20	98.50	4	99.00
c.	G－N投影距離	1	3		—	15	2.67	16	2.06	21	2.33	4	2.75
d.	鼻根角		—		—	4	136.75	12	138.42	14	138.29	3	141.67
e.	G－R距離		—		—	4	34.25	12	33.33	14	34.36	3	28.33
f.	垂線高		—		—	4	6.25	12	5.75	13	5.85	3	4.67
f/e	鼻根陥凹示数		—		—	4	18.46	12	17.43	12	16.24	3	16.90
77.	鼻頬骨角		—		—	14	144.93	20	142.55	23	147.22		—
Fa	fmo間距離		—		—		—	21	95.24		—		—
Fh	垂線高		—		—		—	21	14.62		—		—
Fh/Fa	顔面扁平示数		—		—	12	14.94	21	15.38	23	14.64		—

表9　鼻根部計測値(男性、mm、度)　(Table 9. Comparison of male nasal root measurements and indices)

		蔵城 近世人 熊本県 (松下)		桑島 近世人 熊本県 (脇)		白浜 近世人 長崎県 (松下)		京町 近世人 福岡県 (松下)		宗玄寺 近世人 福岡県 (松下)		上清水 近世人 福岡県 (松下・他)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
50.	前眼窩間幅	3	17.33	2	17.95	10	17.30	15	16.53	26	16.12	7	15.71
50A.	鼻根横弧長	3	20.67		—	9	19.56	13	18.85	25	19.20	7	17.71
50A/50	鼻根彎曲示数	3	83.81		—	9	88.70	13	87.26	24	84.69	7	88.97
57.	鼻骨最小幅	4	8.50	2	6.95	9	8.56	13	7.08	24	7.29	8	7.50
44.	両眼窩幅	2	95.50	2	93.05	9	93.22	10	92.30	24	94.21	4	93.25
50/44	眼窩間示数	2	19.38	2	19.15	9	18.22	10	18.19	24	17.01	4	17.93
a.	前頭突起上幅(右)	2	9.00		—	9	9.44	14	9.07	26	9.23	7	8.86
	(左)	3	8.67		—	9	8.44	14	9.64	26	12.65	7	9.00
b.	前頭突起水平傾斜角	2	92.00		—	7	82.43	7	93.14	23	88.48	6	87.17
c.	G－N投影距離	2	1.00		—	9	2.00	7	1.86	25	1.28	6	1.17
d.	鼻根角	2	156.50		—	6	138.00	5	145.00	14	144.79	3	149.33
e.	G－R距離	2	34.00		—	5	33.60	5	32.40	13	35.08	3	28.67
f.	垂線高	2	3.50		—	5	3.80	5	4.80	13	4.54	3	3.33
f/e	鼻根陥凹示数	2	10.26		—	5	11.40	5	14.91	13	13.01	3	11.73
77.	鼻頬骨角	2	144.50		—	9	145.67	9	146.33	22	147.32		—
Fa	fmo間距離	2	95.00		—		—	9	91.67		—		—
Fh	垂線高	2	15.00		—		—	9	12.89		—		—
Fh/Fa	顔面扁平示数	2	15.79		—	9	15.03	9	14.06	22	13.98		—

3.四肢骨

男性では計測できたものは小さいが、計測できなかったものの中には径が大きなものも結構存在する。しかし、女性四肢骨はすべて細い。また、女性の上腕骨では三角筋粗面の発達が良好で、骨体は扁平である。

橈骨体も細いが、骨間縁の発達はきわめて良好で、鋭く突出しているものが多く認められる。女性は男性に比べて、また下肢と比較しても、上肢の筋の発達がかなりよかったことがうかがえる。

表１０、１１は上腕骨の計測値の比較表である。男性の中央周はかなり小さく、表１０では最小値であるが、女性では京町、宗玄寺、白浜および西北九州近・現代人に近く、必ずしも細いわけではない。

また、女性の骨体断面示数は表11のなかでも小さい方で、上腕骨体が扁平なことがわかる。

大腿骨は、男性の骨体中央周の平均値は頭地松本Ｂや桑島よりも大きいが、実態はかなり太いものと細いものの両方が存在する（表１２）。一方、女性大腿骨は長さが短く、骨体中央周は表13では最小値である。

脛骨は、男性の骨体周は表１４では頭地松本Ｂに次いで小さく、骨体は細い。女性脛骨は、長さがかなり短く、骨体周は普済院、宗玄寺に次いで小さく、京町の平均値に一致する。

推定身長が算出できたのは女性２例のみであった。１例は大腿骨からの推定値が141.70cm(29号墓人骨)、もう１例は脛骨からの推定値で、141.34cm(31号墓人骨)であり、いずれもかなりの低身長である。表15は推定身長値の比較表であるが、本例が最も小さな値を示しており、著しく低身長であった。

表10 上腕骨計測値（男性、右、mm） (Table 10. Comparison of measurements and indices of male right humeri)

		蔵城 近世人 熊本県 (松下)		桑島 近世人 熊本県 (立志)		京町 近世人 福岡県 (松下)		宗玄寺 近世人 福岡県 (松下)		上浜水 近世人 福岡県 (松下・他)		大河浜 近世人 山口県 (松下)		白浜 近世人 長崎県 (松下)		西北九州 近・現代人 (八木)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
5.	中央最大径	2	20.50(左)	16	22.00	112	22.56	57	22.05	11	22.91	4	23.25	18	22.28	72	23.56
6.	中央最小径	2	16.00(左)	16	16.69	112	16.96	57	17.16	11	17.00	4	18.25	18	17.39	72	17.68
7.	骨体最小周	1	56 (左)	15	66.22	89	62.13	49	61.84	8	61.25	4	65.50	18	63.00	72	65.53
7(a).	中央周	2	62.00(左)	15	71.28	112	66.34	57	65.74	11	66.91	4	69.00	18	66.89	72	68.78
6/5	骨体断面示数	2	77.98(左)	16	75.90	112	75.38	57	78.01	11	74.32	4	80.07	18	78.24	72	75.06

表11 上腕骨計測値（女性、右、mm） (Table 11. Comparison of measurements and indices of female right humeri)

		蔵城 近世人 熊本県 (松下)		桑島 近世人 熊本県 (立志)		京町 近世人 福岡県 (松下)		宗玄寺 近世人 福岡県 (松下)		上浜水 近世人 福岡県 (松下)		普済院 近世人 福岡県 (松下)		大河浜 近世人 山口県 (松下)		白浜 近世人 長崎県 (松下)		西北九州 近・現代人 (八木)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
5.	中央最大径	3	20.00(左)	6	18.5	46	19.43	44	19.80	14	20.93	1	18	3	22.00	11	20.64	44	20.20
6.	中央最小径	3	14.00(左)	6	14.4	46	14.65	44	14.66	14	14.71	1	14	3	15.67	11	14.73	44	14.91
7.	骨体最小周	3	51.33(左)	6	57.7	37	53.62	36	54.47	8	55.50	1	53	3	60.00	11	55.27	44	55.93
7(a).	中央周	3	57.33(左)	6	60.9	46	56.65	44	57.64	14	60.07	1	56	3	64.33	12	58.75	44	58.48
6/5	骨体断面示数	3	70.12(左)	6	78.27	6	75.71	44	74.27	14	70.49	1	77.78	3	71.31	11	71.52	44	73.84

表12 大腿骨計測値（男性、右、mm） (Table 12. Comparison of measurements and indices of male right femora)

		蔵城 近世人 熊本県 (松下)		頭地松本B 近世人 熊本県 (松下)		桑島 近世人 熊本県 (立志)		川田京坪 近世人 熊本県 (松下)		四郎丸 近世人 熊本県 (松下・他)		楼楷田 近世人 長崎県 (松下・他)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
6.	骨体中央矢状径	2	26.00(左)	1	25(左)	14	26.29	3	28.67	1	28	1	32(左)
7.	骨体中央横径	2	27.50(左)	1	25(左)	14	24.66	3	28.33	1	27	1	28(左)
8.	骨体中央周	2	85.00(左)	1	81(左)	14	80.61	3	89.67	1	87	1	98(左)
9.	骨体上横径	3	30.00(左)	1	31	14	29.58		—		—		—
10.	骨体上矢状径	3	23.33(左)	1	24	15	23.01		—		—		—
6/7	骨体中央断面示数	2	95.00(左)	1	100.00(左)	14	107.09	3	102.59	1	103.70	1	114.29(左)
10/9	上骨体断面示数	3	77.66(左)	1	77.42	14	77.60	3	83.75	1	77.42		—

表12 大腿骨計測値（続き） (Continued)

		田原 近世人 長崎県 (佐伯・他)		白浜 近世人 長崎県 (松下)		普済院跡 近世人 福岡県 (松下)		宗玄寺 近世人 福岡県 (松下)		上浜水 近世人 福岡県 (松下・他)		京町 近世人 福岡県 (松下)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
6.	骨体中央矢状径	1	28	16	27.50	3	26.67	45	26.78	8	26.63	162	26.56
7.	骨体中央横径	1	26	16	26.19	3	27.67	45	25.93	8	29.38	162	26.99
8.	骨体中央周	1	84	16	84.88	3	86.33	44	83.41	8	88.50	161	84.91
9.	骨体上横径	1	31	16	32.31	2	33.00	47	31.28	9	33.56	137	31.93
10.	骨体上矢状径	1	23	16	24.38	2	25.50	47	24.49	9	24.11	136	24.41
6/7	骨体中央断面示数	1	107.69	16	105.25	3	96.25	45	103.32	8	91.51	162	98.98
10/9	上骨体断面示数	1	74.19	16	75.53	2	78.06	47	78.57	9	72.65	136	76.94

表13　大腿骨計測値（女性、右、mm）（Table 13. Comparison of measurements and indices of male right femora）

		蔵城 近世人 熊本県 (松下)		桑島 近世人 熊本県 (立志)		白浜 近世人 長崎県 (松下)		普済院 近世人 福岡県 (松下)		宗玄寺 近世人 福岡県 (松下)		上清水 近世人 福岡県 (松下・他)		京町 近世人 福岡県 (松下)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	最大長	1	354	5	398.48	7	386.29		—	15	370.93	3	371.67	6	367.17
2.	自然位全長	1	349	5	393.98	7	383.14		—	14	367.64	1	362	5	368.80
6.	骨体中央矢状径	2	22.50	7	24.27	13	24.77	1	23	49	23.22	17	22.24	87	23.13
7.	骨体中央横径	4	23.50	7	22.79	13	22.77	1	25	49	23.86	17	25.76	87	23.52
8.	骨体中央周	2	73.00	7	76.59	13	75.00	1	74	49	74.18	17	76.88	87	73.48
9.	骨体上横径	3	27.67	6	27.02	12	28.50	1	29	51	27.88	17	29.59	73	27.86
10.	骨体上矢状径	3	21.00	6	21.37	12	21.83	1	20	50	21.36	17	20.76	73	21.03
8/2	長厚示数	1	21.78	5	19.70	7	19.90		—	6	20.54	1	19.89	5	19.61
6/7	骨体中央断面示数	2	96.00	7	107.13	13	108.99	1	92.00	49	97.57	17	86.56	87	98.85
10/9	上骨体断面示数	4	74.41(左)	6	78.97	12	76.74	1	100.00	50	77.34	17	70.42	73	75.67

表14　脛骨計測値（男性、右、mm）（Table 14. Comparison of measurements and indices of male right tibiae）

		蔵城 近世人 熊本県 (松下)		頭地松本B 近世人 熊本県 (松下)		桑島 近世人 熊本県 (立志)		川田京坪 近世人 熊本県 (松下・他)		四郎丸 近世人 熊本県 (松下・他)		白浜 近世人 長崎県 (松下)		普済院 近世人 福岡県 (松下)		宗玄寺 近世人 福岡県 (松下)		上清水 近世人 福岡県 (松下・他)		京町 近世人 福岡県 (松下)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
8.	中央最大径	3	27.33(左)	1	27	19	27.02	2	30.00	1	32	16	29.19	1	30	43	28.02	10	28.90	81	28.23
8a.	栄養孔位最大径	2	30.00(左)		—		—		—		—	15	33.07		—	41	32.00	7	32.71	55	32.36
9.	中央横径	4	20.25(左)	1	20	19	20.18	2	21.50	1	21	16	21.38	1	22	43	20.51	10	20.60	82	20.76
9a.	栄養孔位横径	3	22.00(左)		—		—		—		—	15	23.80		—	43	22.74	8	22.50	55	23.15
10.	骨体周	3	75.67(左)	1	75	19	80.36	2	82.50	1	85	16	79.81	1	84	43	77.02	10	79.40	81	77.07
10a.	栄養孔位周	2	82.50(左)		—	19	88.95		—		—	15	89.53		—	41	87.10	7	90.00	54	87.93
10b.	最小周	3	72.33(左)		—	18	73.47		—		—	15	72.73	1	76	43	70.00	7	70.71	58	70.19
9/8	中央断面示数	3	72.00(左)	1	74.07	19	74.89	2	71.58	1	65.63	16	73.29	1	73.33	43	73.31	10	71.49	81	73.83
9a/8a	栄養孔位断面示数	2	70.00(左)		—		—		—		—	15	72.40		—	41	71.44	7	70.11	55	71.71

表15　脛骨計測値（女性、右、mm）（Table 15. Comparison of measurements and indices of female right tibiae）

		蔵城 近世人 熊本県 (松下)		桑島 近世人 熊本県 (立志)		白浜 近世人 長崎県 (松下)		普済院 近世人 福岡県 (松下)		宗玄寺 近世人 福岡県 (松下)		上清水 近世人 福岡県 (松下・他)		京町 近世人 福岡県 (松下)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	脛骨全長	2	285.50	4	321.65	7	303.00		—	9	305.67	1	280	2	297.50
1a.	脛骨最大長	2	291.50	4	326.05	7	309.57		—	11	312.55	3	306.33	1	291
8.	中央最大径	3	23.67	5	25.66	2	26.17	1	22	34	24.03	2	24.50	37	24.35
8a.	栄養孔位最大径	2	27.00		—	1	29.27	1	26	32	27.81	1	28.55	23	27.52
9.	中央横径	3	18.67	5	18.54	2	19.67	1	20	34	17.68	2	18.42	37	17.97
9a.	栄養孔位横径	2	20.50		—	1	21.73	1	21	32	19.53	1	20.36	23	19.96
10.	骨体周	3	67.33	5	75.76	2	72.83	1	66	34	66.65	2	69.25	37	67.35
10a.	栄養孔位周	2	76.50	5	82.08	1	79.82	1	74	32	75.38	1	79.09	23	75.70
10b.	最小周	4	64.00	5	69.06	2	66.67	1	62	34	61.12	8	63.88	32	61.50
9/8	中央断面示数	3	78.84	5	72.50	2	75.61	1	90.91	34	73.69	2	75.19	37	74.13
9a/8a	栄養孔位断面示数	2	75.93		—	1	74.32	1	80.77	32	70.49	1	71.59	23	72.98
10b/1	長厚示数	2	21.89	4	21.79	7	22.17		—	8	20.11	1	21.79	2	19.80

表16　推定身長値（女性、cm）（Table 15. Comparison of estimated female statures）

		蔵城 近世人 熊本県 (松下)		京町 近世人 福岡県 (松下)		宗玄寺 近世人 福岡県 (松下)		上清水 近世人 福岡県 (松下・他)		天福寺 近世人 福岡県 (中橋)		大河浜 近世人 山口県 (松下)		白浜 近世人 長崎県 (松下)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
Pearsonの式	上腕骨		—	6	145.65	17	145.72	1	143.63		—	3	153.51	8	147.62
	橈骨		—	5	150.15	21	146.95				—	2	152.17	9	149.20
	大腿骨	1	141.70	10	145.82	19	145.22	4	145.15	20	146.5	4	156.74	10	148.12
	脛骨	2	141.81	4	145.10	13	146.22	2	143.45		—	3	152.88	7	146.04
藤井の式	上腕骨		—	6	145.48	17	145.58	1	143.66		—	3	153.13	8	147.19
	橈骨		—	5	147.71	21	144.77				—	2	149.70	9	146.65
	大腿骨	1	140.34	10	145.19	19	144.43	4	144.36		—	4	154.01	10	147.82
	脛骨	2	142.42	4	145.49	13	144.72	5	145.40		—	3	153.12	7	145.98

要　約

熊本県球磨郡錦町大字木上(きのえ)字蔵城(くらんじょう)にある蔵城遺跡の発掘調査で、近世人骨が19体出土した。保存状態が良好なものも存在し、熊本県南部地域での近世人特徴の一端を知ることができた。その結果は次のように要約できる。

1．今回の調査で出土した人骨は合計19体で、成人骨が18体(男性10体、女性６体、性別不明2体)、小児骨が１体であった。

2．出土人骨は17世紀後半から18世紀の近世に属する人骨と推定されている。

3．頭型は男女とも長頭型に傾いていた。

4．顔面には強い低顔傾向が認められた。また、眼窩や鼻部の高径も低い。

5．鼻根部は扁平なものと、鼻根部が狭く、鼻骨が鼻骨間縫合へ向けて高く隆起し、鼻筋が通っているものが複数例認められ、血縁関係が推測された。

6．かなり強い歯槽性突顎が認められた。

7．四肢骨は短く、骨体は細いが、上腕骨の三角筋粗面の発達は良好で、橈骨の骨間縁は鋭く突出している。大腿骨や脛骨も細いが、その程度は男性が著しく、女性ではそれほどではない。

8．女性の推定身長は、141.70cm(１例。Pearson式）で、著しい低身長値であった。

9．本近世人には、強い長頭性と歯槽性突顎や著しい低顔といった中世人的特徴が残っていた反面、鼻根部が扁平でなく、鼻筋がとおっているという非中世人的容貌を合わせ持っていたものが、観察できたもののうちの半数を占めていたことは注目に値する。中世人的特徴が強く残っているというのは熊本県南部という地理的特性が形質の近世化を遅らせたものと思われる。一方、鼻根部の非扁平性は、被葬者の階層性かその影響を受けた遺伝的な特徴かもしれない。四肢骨は短いが、上肢骨の様態から上肢の筋がよく発達していたことが想像される。とくに女性にはその傾向が強い。これらの特徴から、被葬者は一般庶民とは考えがたく、武家階層か庄屋、豪農など地域の有力者層が想像されるが、上肢の運動はかなりの量だったこともうかがえる。武家層の場合は宗玄寺や京町のように女性でも男性でも外後頭隆起が著しく突出するが、本例ではこのような特徴はみられなかった。また、被葬者の死亡年齢はかなり高く、年齢を推測できた成人骨17体のうち老年が３体、熟年が６体、壮年が８体で、老年と熟年の占める割合は53%にも達し、本近世人は高齢者集団であった。このような高齢者集団は宗玄寺など武家層にみられる特徴でもあるが、本例にも高齢者を認めた。この高齢化や形質的特徴などは被葬者の社会的階層、労働形態、生活様式などを探る手がかりになるかもしれない。

謝　辞

擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた熊本県教育庁文化課の諸先生方に感謝致します。

参考文献

1. Martin－Saller, 1957：Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. Gustav Fischer Verlag, Stuttugart：429－597.
2. 松下孝幸・他、1980a：熊本県川田京坪遺跡出土の近世人骨。車塚古墳・川田京坪遺跡・川田小筑遺跡・塩塚古墳（熊本県文化財調査報告46）付：1－17
3. 松下孝幸・他、1980b：熊本県興善寺四郎丸遺跡出土の近世人骨。興善寺II（熊本県文化財調査報告45）：61－68
4. 松下孝幸、1981：鹿児島県松之尾遺跡出土の人骨。松之尾遺跡（枕崎市松之尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書（1））：215－228.
5. 松下孝幸・他、1983a：成岡・西ノ平遺跡出土の中世・近世人骨。成岡・西ノ平・上ノ原遺跡（鹿児島県埋蔵文化財調査報告書28）：355－382.
6. 松下孝幸・他、1983b：宮崎学園都市堂地東通跡出土の近世人骨。宮崎学園都市埋蔵文化財調査概報（Ⅲ）：47－55.
7. 松下孝幸・他、1985：長崎県松浦市楼階田遺跡出土の近世人骨。楼階田遺跡一松浦火力発電所建設に伴う埋蔵文化財調査報告書（長崎県文化財調査報告書第76集）：191－196
8. 松下孝幸・他、1992b：北九州市上清水遺跡出土の近世人骨。上清水遺跡Ⅴ区(奈良時代以降編)(北九州市埋蔵文化財調査報告書第117集）：416－441.
9. 松下孝幸・他、1994：山口県豊北町大河浜遺跡出土の人骨。大河浜遺跡(山口県埋蔵文化財調査報告第165集）：11－21.
10. 松下孝幸、1995：北九州市宗玄寺跡出土の近世人骨。宗玄寺跡(北九州市埋蔵文化財調査報告書第172集)502－542.
11. 松下孝幸、1996a：北九州市普済院跡出土の近世人骨。折尾横穴群内普済院跡：95－121.
12. 松下孝幸、1996b：長崎県有川町頭ヶ島白浜遺跡出土の近世人骨。頭ヶ島白浜遺跡(有川町文化財調査報告書第1集)：67－87.
13. 松下孝幸、1997b：福岡県犀川町古川平原古墳出土の古墳時代・近世人骨。古川平原古墳群(犀川町文化財調査報告書第5集）：82－98.
14. 松下孝幸、1998：山口県豊北町堤迫・道祖ノ本遺跡出土の近世人骨。堤迫・道祖ノ本遺跡（山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第15集）：37－59.
15. 松下孝幸、1999：熊本県五木村頭地松本Ｂ遺跡出土の近世人骨。（印刷中）
16. 中橋孝博、1987：福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨。人類誌、95：89－106.
17. 佐伯和信・他、1991：長崎県松浦市田原遺跡出土の近世人骨。田原遺跡（竜尾川地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書）（松浦市文化財調査報告書第10集）：37－49. 70－71.
18. 立志悟朗、1970：熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人上腕骨の人類学的研究。熊本医学会雑誌、44：1137－1150.
19. 立志悟朗、1970：熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人下肢骨の人類学的研究。第1大腿骨について。熊本医学会雑誌、44：1092－1115.
20. 立志悟朗、1970：熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人下肢骨の人類学的研究。第2下腿骨について。熊本医学会雑誌、44：1116－1129.
21. 脇達也、1970：熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人頭骨の研究。熊本医学会雑誌、44：1031－1091.
22. 八木治、1970：西北九州人上腕骨の人類学的研究。長崎医学会雑誌45巻1号：22－33.

表17 脳頭蓋計測値 (mm) (Calvaria)

		蔵城 5号墓 男性	蔵城 6号墓 男性	蔵城 33号墓 男性	蔵城 36号墓 男性	蔵城 平均 男性 n	M
1.	頭蓋最大長	200	184	—	181	3	188.33
8.	頭蓋最大幅	—	—	—	135	1	135
17.	バジオン・ブレグマ高	—	—	—	—		—
8/1	頭蓋長幅示数	—	—	—	74.59	1	74.59
17/1	頭蓋長高示数	—	—	—	—		—
17/8	頭蓋幅高示数	—	—	—	—		—
1+8+17/3	頭蓋モズルス	—	—	—	—		—
5.	頭蓋底長	—	—	—	—		—
9.	最小前頭幅	—	—	87	82	2	84.50
10	最大前頭幅	—	—	116	109	2	112.50
11.	両 耳 幅	—	121	—	124	2	122.50
12.	最大後頭幅	—	100	—	—	1	100
13.	乳 突 幅	—	—	—	—		—
7.	大後頭孔長	—	—	—	—		—
16.	大後頭孔幅	—	—	—	—		—
16/7	大後頭示数	—	—	—	—		—
23.	頭蓋水平周	—	514	—	506	2	510.00
24.	横 弧 長	—	302	—	312	2	307.00
25.	正中矢状弧長	—	—	—	—		—
26.	正中矢状前頭弧長	136	131	133	133	4	133.25
27.	正中矢状頭頂弧長	—	139	—	133	2	136.00
28.	正中矢状後頭弧長	—	—	—	—		—
29.	正中矢状前頭弦長	122	114	117	113	4	116.50
30.	正中矢状頭頂弦長	—	122	—	116	2	119.00
31.	正中矢状後頭弦長	—	—	—	—		—
29/26	矢状前頭示数	89.71	87.02	87.97	84.96	4	87.42
30/27	矢状頭頂示数	—	87.77	—	87.22	2	87.50
31/28	矢状後頭示数	—	—	—	—		—

表18 脳頭蓋計測値 (mm) (Calvaria)

		蔵城 1号墓 女性	蔵城 21号墓 女性	蔵城 29号墓 女性	蔵城 31号墓 女性	蔵城 平均 女性 n	M	蔵城 28号墓 6才
1.	頭蓋最大長	184	179	182	172	4	179.25	(163)
8.	頭蓋最大幅	—	123	134	135	3	130.67	—
17.	バジオン・ブレグマ高	—	129	—	132	2	130.50	—
8/1	頭蓋長幅示数	—	68.72	73.63	78.49	3	73.61	—
17/1	頭蓋長高示数	—	72.07	—	76.74	2	74.41	—
17/8	頭蓋幅高示数	—	104.88	—	97.78	2	101.33	—
1+8+17/3	頭蓋モズルス	—	143.67	—	146.33	2	145.00	—
5.	頭蓋底長	—	98	—	95	2	96.50	—
9.	最小前頭幅	89	91	90	93	4	90.75	86
10	最大前頭幅	—	105	106	112	3	107.67	100
11.	両 耳 幅	—	—	127	123	2	125.00	—
12.	最大後頭幅	—	100	110	106	3	105.33	—
13.	乳 突 幅	—	—	—	—		—	—
7.	大後頭孔長	—	—	—	35	1	35	—
16.	大後頭孔幅	—	—	—	28	1	28	—
16/7	大後頭示数	—	—	—	80.00	1	80.00	—
23.	頭蓋水平周	—	495	511	496	3	500.67	—
24.	横 弧 長	—	—	295	305	2	300.00	—
25.	正中矢状弧長	—	—	—	360	1	360	—
26.	正中矢状前頭弧長	130	124	120	124	4	124.50	116
27.	正中矢状頭頂弧長	—	125	131	127	3	127.67	—
28.	正中矢状後頭弧長	—	—	—	109	1	109	—
29.	正中矢状前頭弦長	112	106	108	109	4	108.75	100
30.	正中矢状頭頂弦長	—	113	118	116	3	115.67	—
31.	正中矢状後頭弦長	—	—	—	92	1	92	—
29/26	矢状前頭示数	86.15	85.48	90.00	87.90	4	87.38	86.21
30/27	矢状頭頂示数	—	90.40	90.08	91.34	3	90.61	—
31/28	矢状後頭示数	—	—	—	84.40	1	84.40	—

表19　顔面頭蓋計測値（mm、度）（Facial skeleton）

		蔵城 5号墓 男性	蔵城 6号墓 男性	蔵城 30号墓 男性	蔵城 36号墓 男性	蔵城 平均 男性 n	M
40.	顔　長	—	—	—	—		—
41.	側顔長	—	—	—	72	1	72
42.	下顔長	—	—	—	—		—
43.	上顔幅	—	—	—	—		—
45.	頬骨弓幅	—	—	—	—		—
46.	中顔幅	—	〔102〕	—	99	2	〔100.50〕
47.	顔　高	—	—	—	—		—
48.	上顔高	—	(57)	59	—	2	(58.00)
47/45	顔示数（K）	—	—	—	—		—
48/45	上顔示数（K）	—	—	—	—		—
47/46	顔示数（V）	—	〔55.88〕	—	—	1	〔55.88〕
48/46	上顔示数（V）	—	—	—	—		—
40+45+47/3	顔面モズルス	—	—	—	—		—
50.	前眼窩間幅	—	17	—	15	2	16.00
44.	両眼窩幅	—	—	—	—		—
50/44	眼窩間示数	—	—	—	—		—
51.	眼窩幅（右）	—	44	—	—	1	44
	（左）	—	—	42	44	2	43.00
52.	眼窩高（右）	—	33	—	33	2	33.00
	（左）	35	—	34	32	3	33.67
52/51	眼窩示数（右）	—	75.00	—	—	1	75.00
	（左）	—	—	80.95	72.73	2	76.84
54.	鼻　幅	—	26	—	24	2	25.00
55.	鼻　高	—	50	45	48	3	47.67
54/55	鼻示数	—	52.00	—	50.00	2	51.00
55(1).	梨状口高	—	—	—	—		—
56.	鼻骨長	—	—	—	—		—
57.	鼻骨最小幅	—	2	9	4	3	5.00
57(1).	鼻骨最大幅	—	—	—	—		—
60.	上顎歯槽長	—	—	—	—		—
61.	上顎歯槽幅	—	—	56	—	1	56
62.	口蓋長	—	—	—	—		—
63.	口蓋幅	—	—	—	—		—
64.	口蓋高	—	—	—	—		—
61/60	上顎歯槽示数	—	—	—	—		—
63/62	口蓋示数	—	—	—	—		—
64/63	口蓋高示数	—	—	—	—		—
72.	全側面角	—	—	—	—		—
73.	鼻側面角	—	83	—	82	2	82.50
74.	歯槽側面角	—	—	—	—		—

表20 顔面頭蓋計測値（mm、度）（Facial skeleton）

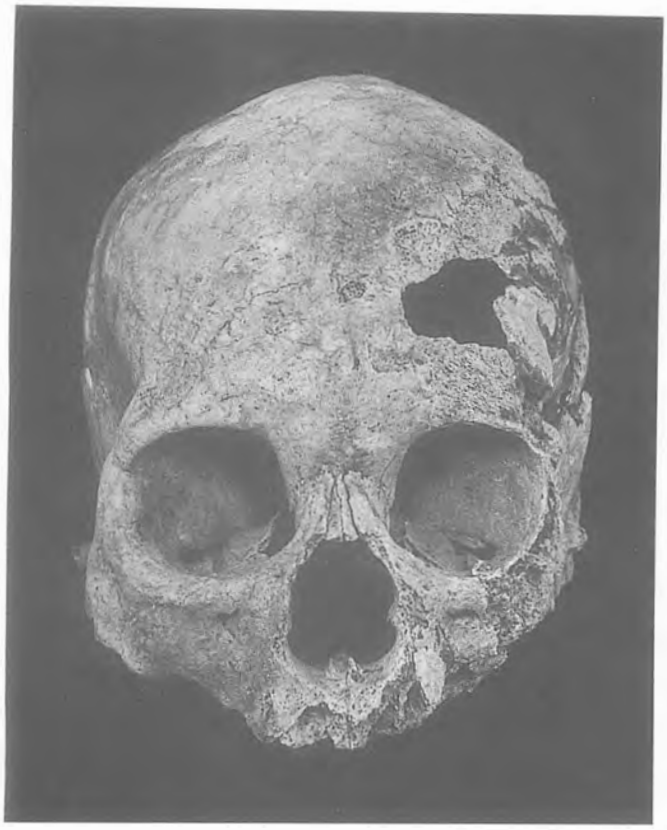
		蔵城 1号墓 女性	蔵城 21号墓 女性	蔵城 29号墓 女性	蔵城 31号墓 女性	蔵城 平均 女性 n	M		蔵城 28号墓 6才
40.	顔 長	—	—	—	—		—		—
41.	側顔長	69	72	76	69	4	71.50		—
42.	下顔長	—	—	—	—		—		—
43.	上顔幅	—	—	101	102	2	101.50		—
45.	頬骨弓幅	〔130〕	—	132	〔128〕	1	132.00	〔2 129.00〕	—
46.	中顔幅	〔96〕	—	94	〔92〕	4	94.00	〔2 94.00〕	〔78〕
47.	顔 高	—	—	109	—	1	109.00		91
48.	上顔高	59	—	64	—	2	61.50		(50)
47/45	顔示数(K)	—	—	82.58	—	1	82.58		—
48/45	上顔示数(K)	—	—	48.48	—	1	48.48		—
47/46	顔示数(V)	—	—	115.96	—	1	115.96		〔116.67〕
48/46	上顔示数(V)	—	—	68.09	—	1	68.09		〔64.10〕
40+45+47/3	顔面モズルス	—	—	—	—		—		—
50.	前眼窩間幅	15	—	17	20	3	17.33		15
44.	両眼窩幅	—	—	96	95	2	95.50		—
50/44	眼窩間示数	—	—	17.71	21.05	2	19.38		—
51.	眼窩幅(右)	—	—	43	40	2	41.50		39
	(左)	42	41	42	40	4	41.25		—
52.	眼窩高(右)	—	—	34	31	2	32.50		33
	(左)	35	33	34	31	4	33.25		—
52/51	眼窩示数(右)	—	—	79.07	77.50	2	78.29		84.62
	(左)	83.33	80.49	80.92	77.50	4	80.56		—
54.	鼻 幅	—	—	27	28	2	27.50		23
55.	鼻 高	45	—	48	48	2	48.00		39
54/55	鼻示数	—	—	56.25	58.33	2	57.29		58.97
55(1).	梨状口高	—	—	28	29	2	28.50		—
56.	鼻骨長	—	—	21	20	2	20.50		—
57.	鼻骨最小幅	7	7	7	13	4	8.50		7
57(1).	鼻骨最大幅	—	—	—	20	1	20		—
60.	上顎歯槽長	—	—	58	—	1	58		—
61.	上顎歯槽幅	—	—	64	—	1	64		—
62.	口蓋長	—	—	50	—	1	50		—
63.	口蓋幅	—	—	38	—	1	38		—
64.	口蓋高	—	—	8	—	1	8		—
61/60	上顎歯槽示数	—	—	110.34	—	1	110.34		—
63/62	口蓋示数	—	—	76.00	—	1	76.00		—
64/63	口蓋高示数	—	—	21.05	—	1	21.05		—
72.	全側面角	—	—	82	—	1	82		—
73.	鼻側面角	—	—	—	—		—		—
74.	歯槽側面角	—	—	(68)	—	1	(68)		—

表21　鼻根部計測値(mm、度)　(Nasal root)

		蔵城 6号墓 男性	蔵城 36号墓 男性	蔵城 平均 男性 n	M
50.	前眼窩間幅	17	15	2	16.00
50A.	鼻根横弧長	20	17	2	18.50
50/50A	鼻根彎曲示数	85.00	88.24	2	86.62
57.	鼻骨最小幅	2	4	2	3.00
44.	両眼窩幅	—	—		—
50/44	眼窩間示数	—	—		—
a.	前頭突起上幅(右)	16	10	2	13.00
	(左)	16	11	2	13.50
b.	前頭突起水平傾斜角	95	113	1	113
c.	G－N投影距離	4	3	1	3
d.	鼻根角	—	—		—
e.	G－R距離	—	—		—
f.	垂線高	—	—		—
f/e	鼻根陥凹示数	—	—		—
77.	鼻頬骨角	—	—		—
Fa	fmo間距離	—	—		—
Fh	垂高線	—	—		—
Fh/Fa	顔面偏平示数	—	—		—

表22　鼻根部計測値(mm、度)　(Nasal root)

		蔵城 1号墓 女性	蔵城 21号墓 女性	蔵城 29号墓 女性	蔵城 31号墓 女性	蔵城 平均 女性 n	M	蔵城 28号墓 6才
50.	前眼窩間幅	15	—	17	20	3	17.33	15
50A.	鼻根横弧長	20	—	19	23	3	20.67	17
50/50A	鼻根彎曲示数	75.00	—	89.47	86.96	3	83.81	88.24
57.	鼻骨最小幅	7	7	7	13	4	8.50	7
44.	両眼窩幅	—	—	96	95	2	95.50	—
50/44	眼窩間示数	—	—	17.71	21.05	2	19.38	—
a.	前頭突起上幅(右)	—	—	10	8	2	9.00	10
	(左)	—	7	12	7	3	8.67	10
b.	前頭突起水平傾斜角	—	—	93	91	2	92.00	—
c.	G－N投影距離	—	—	1	1	2	1.00	—
d.	鼻根角	—	—	152	161	2	156.50	—
e.	G－R距離	—	—	35	33	2	34.00	—
f.	垂線高	—	—	4	3	2	3.50	—
f/e	鼻根陥凹示数	—	—	11.43	9.09	2	10.26	—
77.	鼻頬骨角	—	—	144	145	2	144.50	—
Fa	fmo間距離	—	—	95	95	2	95.00	—
Fh	垂高線	—	—	15	15	2	15.00	—
Fh/Fa	顔面偏平示数	—	—	15.79	15.79	2	15.79	—

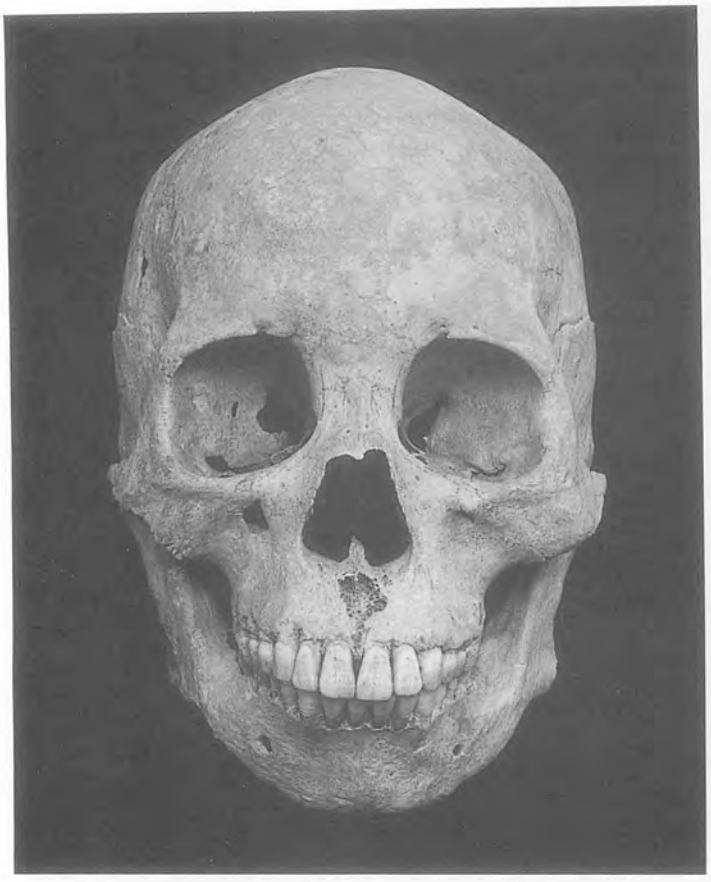


頭蓋前面(Frontal view of the skull)

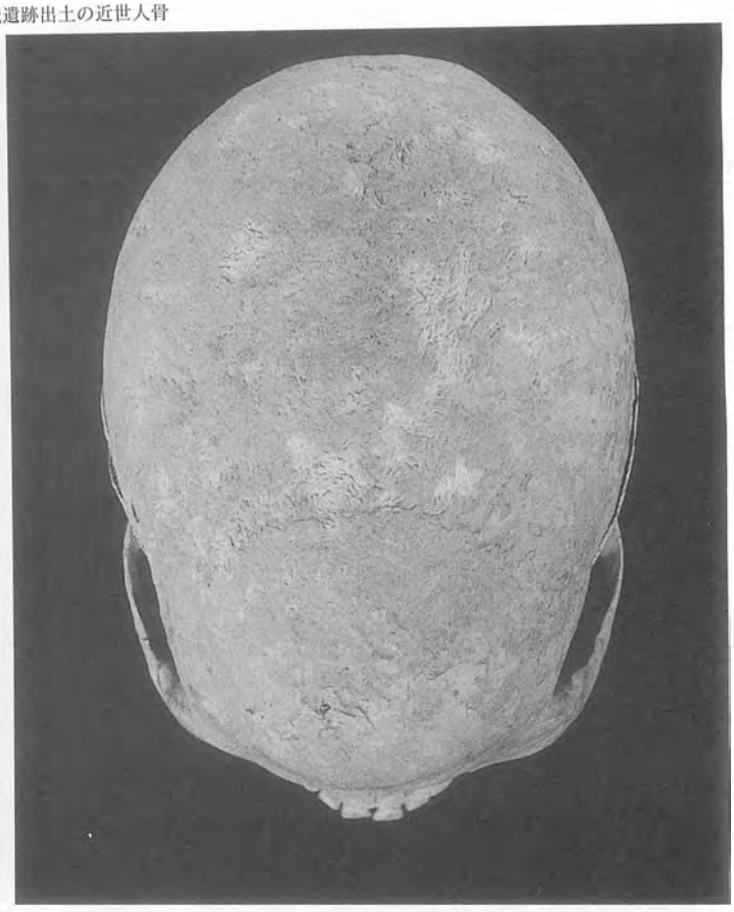
頭蓋上面(Superior view of the skull)

頭蓋側面(Lateral view of the skull)

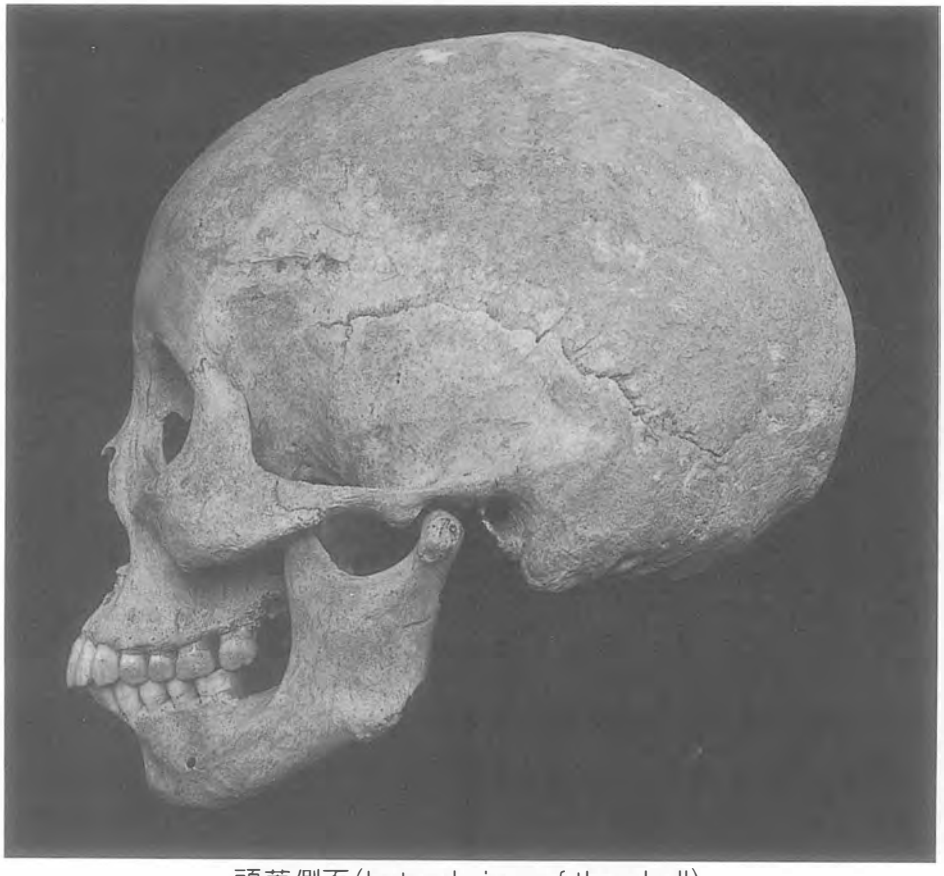
蔵城6号人骨（男性、老年）
(Kuranjo,6,senile male)



頭蓋前面(Frontal view of the skull)

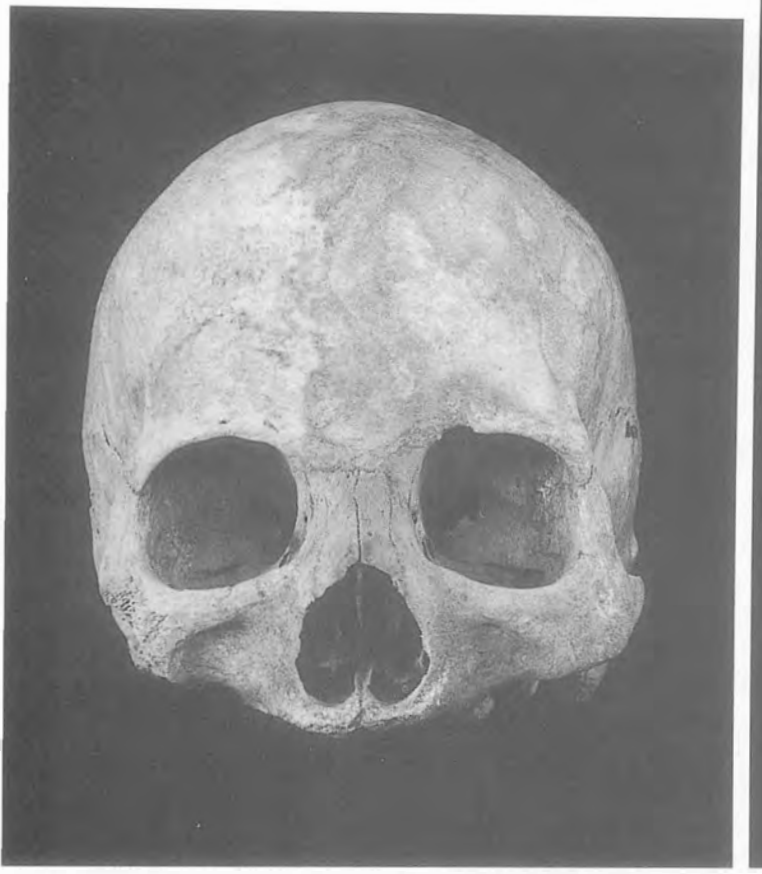


頭蓋上面(Superior view of the skull)

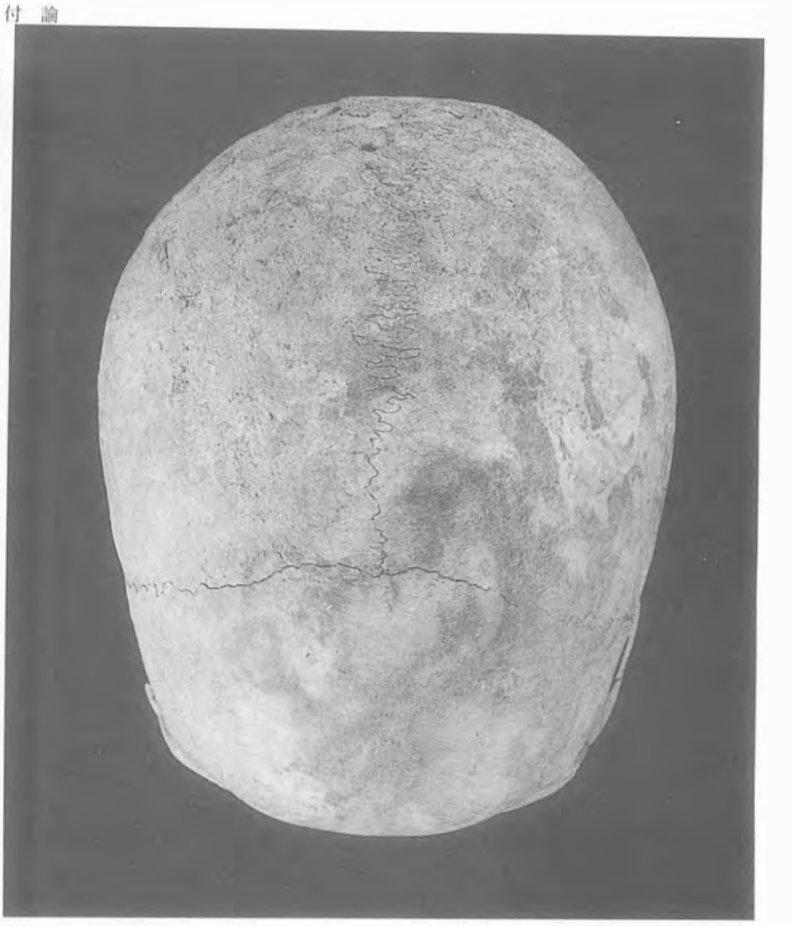


頭蓋側面(Lateral view of the skull)

蔵城29号人骨（女性、老年）
(Kuranjo,29,senile female)



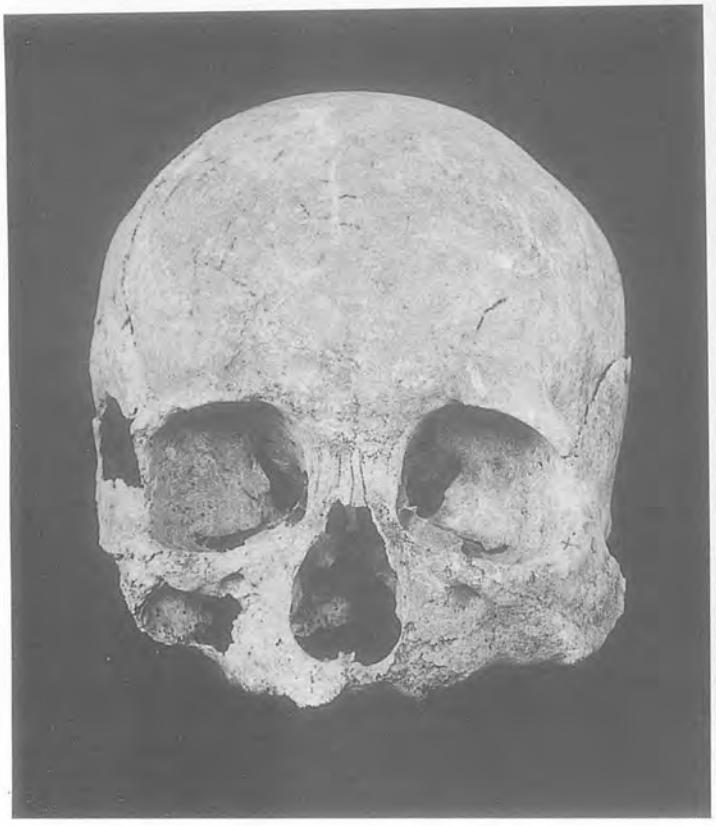
頭蓋前面(Frontal view of the skull)



頭蓋上面(Superior view of the skull)

頭蓋側面(Lateral view of the skull)

蔵城31号人骨（女性、熟年）
(Kuranjo,31,mature female)



頭蓋前面(Frontal view of the skull)

頭蓋上面(Superior view of the skull)

頭蓋側面(Lateral view of the skull)

蔵城36号人骨（男性、壮年）
(Kuranjo,36,mature young adult male)

下肢骨(Bones of the lower limb)

頭蓋前面(Bones of the upper limb)

蔵城29号人骨（女性、老年）
(Kuranjo 29,senile female)

写　真　図　版

図版1

遺跡遠景（南から）

図版2

丘陵全景（南西から）

図版3

Ⅳ区SD06（東から）

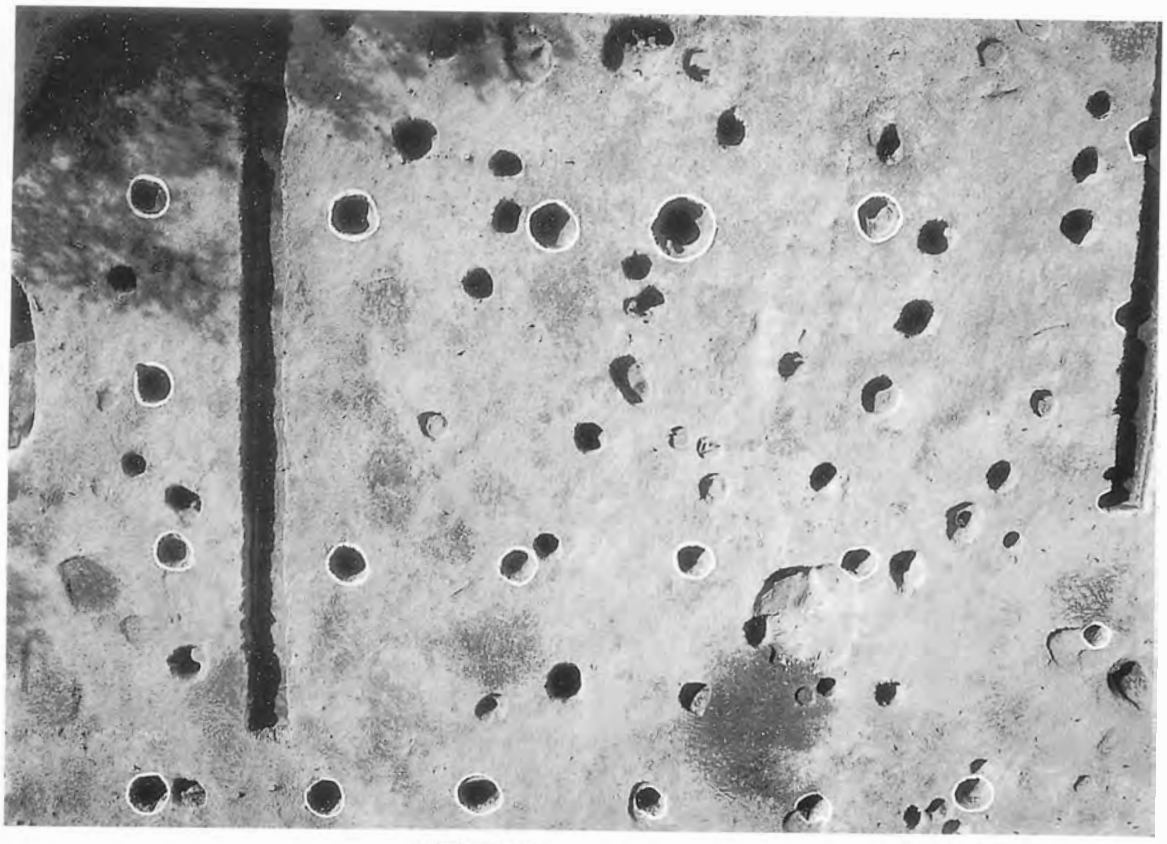
図版4

Ⅳ区SD06底（東から）

図版5

V区全景（真上から）

図版6



V区SB01（真上から）

図版7

Ⅵ区SD01（北から）

図版8

Ⅵ区SD01遺物集中箇所（真上から）

図版9

Ⅶ区SD01（南から）

図版10

Ⅷ区SD01（南から）

図版11

南側土塁（西から）

図版12

北側竪堀（北から）

図版13

X区全景（真上から）

図版14

3号墓標（西から）

図版15

4号墓標（西から）

図版16

6.7.8号墓標（北から）

図版17

22号墓標（北から）

図版18

32号墓標（西から）

図版19

37.39号墓標（西から）

図版20

1号墓壙（東から）

図版21

5号墓壙（北東から）

図版22

13号墓壙（東から）

図版23

19号墓壙（南から）

図版24

29号墓壙（西から）

図版25

32号墓壙（西から）

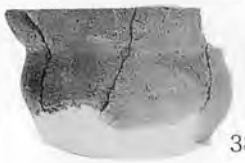
図版26

縄文時代の石器

1、2	石　鏃
3、4	石匙未製品
5～8、12	打製石斧
9～11	磨製石斧

図版27

16


38

29

39

17

22

42

43

19

25

44

35

34

古墳時代土器

図版28

300

276

246

269

274

302

273

297

262

280

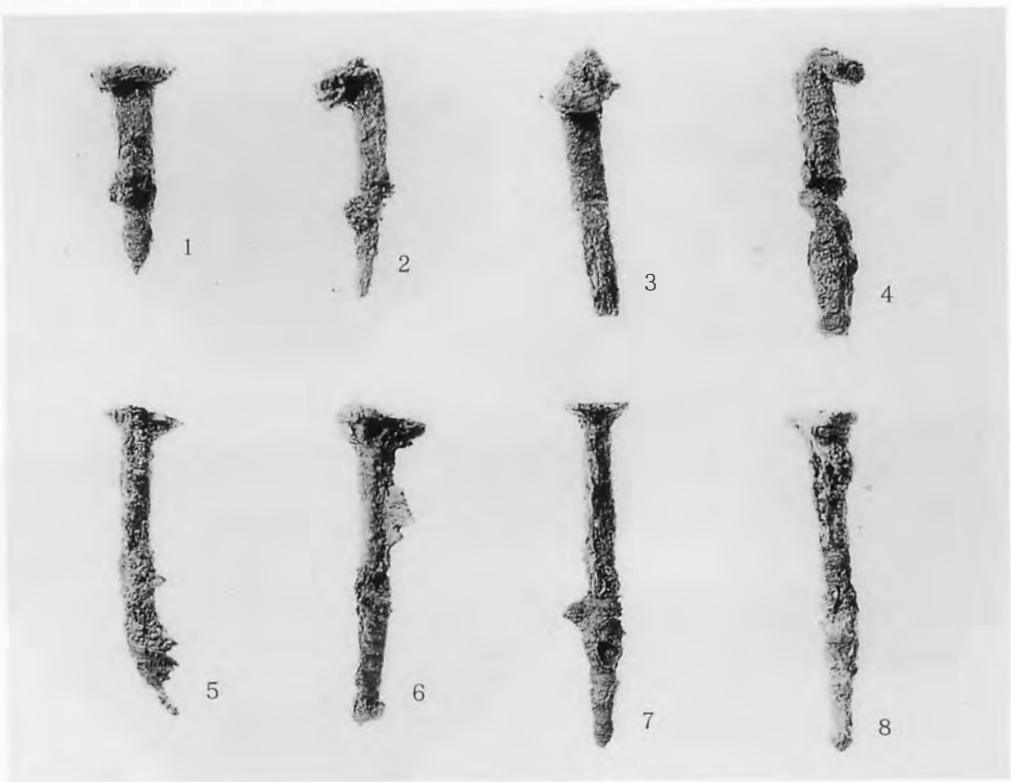
304

X区出土陶磁器

図版29

X区墓壙出土青銅製品　1.　19号墓　2.　13号墓
3.　6号墓

図版30



X区墓壙出土角釘　1～4.　26号墓
5～8.　37号墓

報告書抄録

ふりがな	
書　　名	蔵城遺跡
副書名	錦町迫地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻　　次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第１７２集
編著者名	矢野裕介
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	熊本市水前寺６丁目１８－１
発行年月日	１９９９（平成１１）年３月３１日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くらんじょういせき 蔵城遺跡	くまもとけんくまぐんにしきまち 熊本県球磨郡錦町 きのえ 木上	43501	026	32度 13分 23秒	130度 50分 29秒	（自） 19960206 （至） 19980329	6,000	錦町迫地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う本調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主　な　遺　構	主　な　遺　物	特　記　事　項
蔵城遺跡	包含層 中世城 墓地	縄文時代 古墳時代 中世 近世	集石　1基 包含層 掘立柱建物　2棟 柵跡　2列 竪堀　4条 墓　20基	縄文土器、石鏃、磨製石斧、打製石斧、古墳時代土師器、中世土師器、須恵器、瓦質土器、北宋銭、明銭、青磁、白磁、中国産染付、肥前陶磁器、「寛永通宝」	14世紀中頃から16世紀にかけての中世城跡を確認。近隣に所在する「木枝城」の出城か。 17世紀後半から18世紀前半にかけての武士階級の墓地跡を確認。肥前陶磁が多数検出された。

あ と が き

発掘調査開始から整理作業まで足掛け４年にも及ぶ「蔵城遺跡」の報告書がようやく刊行される運びとなった。紙面及び時間の都合並びに私の力不足により、本遺跡の調査成果を十分言い尽くせなかった面が多分にあるが、その分は別の機会に恵まれれば是非発表していきたい。

また、本報告書が刊行できるのも、３年に及ぶ発掘調査並びに１年間の整理作業における作業員の方々の御協力があったからこそである。ここに、作業員の方々の御芳名を記すことにより、感謝の意を表したい。

（発掘作業）

荒毛八重子　生田 親　一川正憲　岩崎アイ　岩崎さとみ　犬童英治　上田千代子
上田ヒトエ　上田久子　上田 真　碓井 亮　大瀬幸江　尾方久女　岡村久香
木崎進一　桑原栄子　桑原十郎　桑原縫子　桑原ミサ子　桑原守之　神瀬 功
五嶋マツミ　坂田安信　迫田 静　城崎ミチエ　須恵見義　高尾輝子　田中セキ
鶴崎厚子　中竹 牟　中竹ケイ　福島敬証　堀内ミサ子　前田きよみ　前田有香
毎床英樹　松村栄子　松山ヒサ子　宮田三郎　元田初子　山本勝美　和田良子
和田レイ　重永照代　吉田律子　村山紀子　宇野玲子　池辺雅子

（整理作業）

塩田貴美子　徳永みどり　宇野玲子　白井美恵子　瀬口絹代　津留富美枝

熊本県文化財調査報告第１７２集

蔵　城　遺　跡

発行年月日　平成１１年３月３１日

発　　行　熊本県教育委員会
〒862-8570熊本市水前寺６-１８-１

印　　刷　株式会社　秀　巧　社
〒861-2234上益城郡益城町古閑106

10 教 教文
② 004

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 172 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：蔵城遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/